HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
2

HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

2

――【残り68人】

葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）
十 一 番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
十 二 番　緒方　英二　（おがた・えいじ）
十 三 番　緒方　理奈　（おがた・りな）
十 四 番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）
十 五 番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）
十 六 番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）
十 七 番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
十 八 番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）
十 九 番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二 十 番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三 十 番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）
三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四 十 番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五 十 番　スフィー　（すふぃー）

五十一番　住井　護　（すみい・まもる）
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
六 十 番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）
六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
七 十 番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）
七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）
七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）
七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）
七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）
八 十 番　牧村　南　（まきむら・みなみ）
八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）
八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
九 十 番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）
九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）
九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）
百　　番　リアン　（りあん）

葉鍵ロワイアル
舞台　地形図

地図制作：JOYH-TV

カバー、挿し絵：みさき樹里
http://misakichi.eek.jp/

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）
板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の
表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するに
あたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせて
いただきました。

166　汝、何を望むか

（ボウガン持ちに、ライフル持ち！）
山腹、森の中での遭遇に、弥生は元来た方へと飛びすさる。
他の二者――石原麗子（六番）と深山雪見（九十六番）だ――との間合いを取りつつ、その手に持つ散弾銃をしっかりと構え直す。
意外なほど自然に戦闘へと順応していく自らの身体に、軽い驚きを覚える弥生。
しかし思考は未だ、しばし前の時間を旅していた。
この森の中での、ある出会いの記憶が弥生を縛っていた。別れてからも何度か他のことを思考の波に浮かべてはみたが、それは、弥生の脳裏から離れようとしない。
……今すぐ思考を切り換えねばまずい。
そう思いながらも、弥生の記憶はフラッシュバックをやめなかった――。

弥生は喫茶店を後にし、森の中を歩いていた。
（由綺さん、一体何処に……）
結局のところ、大した手がかりはつかめていなかった。気ばかりが焦っていた。明確な手がかりのないまま彷徨う以上、あまり目立つ平地は歩きたくなかった。相手を発見するのも難しいが、逆もまた真だ。秋子の言った、それらしい建物を見つけるまではこのような行動をとるのが得策だろう。
由綺達に会うまで、死ぬわけにはいかない。
その思いのみが弥生を縛りつけていた。
（しかし、由綺さんと共に居るという大切な人とは？　……やはり藤井さんだろうか。彼と一緒なのだろうか……）
音楽祭の開催と共に終わるはずだった弥生と冬弥との契約。毎週水曜の密会。それが未だに続いてい

ることが問題だった。弥生は冬弥をコマとしてみることが出来なくなっていた。それどころか……。とにかく、三人で一所にはあまり居たくなかった。いつまで平静でいられるものか、正直自信がなかった。
……そして。
もしもこの島を脱出する方法が、本当に最後の一人まで殺し合うこと以外に無かったとき、どうすればいいのか。それも弥生には分からなかった。
(藤井さんと由綺さん以外の人間を殺しつくし、その上で自らの命を絶つ？　……そして、あの二人に殺し合いをさせるというの？)
頭を振る弥生。
(それとも、私自身の手でどちらかを殺すのか。……果たして、どちらを？)
再び頭を振る弥生。
自分が二人のうちどちらかを手にかけるなど、想像でさえもしたくもなかった。
不意に、弥生は思索を止めざるを得なくなった。
前方に何かが見えた。
「由綺さん！　……ではありませんね」
森の奥に一瞬だけ見えた長い黒髪にその背丈。後ろ姿とはいえ、あまりに由綺に似たシルエットだったため、弥生は呼びかけてしまっていた。
しかし、記憶を冷静にたどれば、身につけているものが異なっている。それはつまり、由綺が誰かの衣服を奪うなどしていなければ、別人ということだ。
錯覚で声をかけてしまったことに舌打ちしたい気分だったが、弥生は次の瞬間には、気持ちを切り換え終える。
そして、つい一瞬前の動揺などおくびにも出さず言ってのけた。
「こちらの得物は散弾銃です。妙な動きをしたら躊躇いなく撃ちます。しかし、おとなしく手を挙げ、出てきてさえいただければ、こちらも撃つ気はありません。聞きたいことがあります」
弥生は慎重かつ足早に間を詰めながら、森の奥に

声を放る。走り出した様子はない。まだ付近に相手はいるはずだった。
間もなく、正面の木の陰から、一人の白い女が両手を挙げて現れた。
（似てはいるが、やはり由綺さんではない……）
分かっていたことながら、内心落胆する。
しかも……。
白い薄絹を身につけた女はひどく儚げで、由綺の醸し出す雰囲気とは大きく異なっていた。肌も病的に白い。髪もまた、その若さに似合わぬ白だった。
……黒髪に見えたのは、森の木々が落した影だったのだろうか。
とにかく、今にも消え入りそうな浮世離れした外見だったが、それらに長く気を取られるような弥生ではない。慎重に散弾銃を構えたまま、さらに間合いを詰める。
女はこの状況にも関わらず、脅えた様子を見せてはいなかった。
「私は篠塚弥生と申します」
弥生は女の様子をいぶかりつつも、つとめて冷静に名乗った。
「質問に答えていただけますね？」
コクリ。
女は静かにうなずいた。日本人形のような、と例えようか。
（年は自分よりも下だろうか？）
少女と大人の女との微妙なバランスが、今にも消え入りそうな弱々しい雰囲気をさらに危うく感じさせる。
しかし、その表情は変わらずに怯えがないのだった。
弥生は相手の様子を不思議に思いつつも、現実を優先させた。
「伺いたいのは……」
由綺の、そして冬弥の消息を知りたかった。由綺の名を出し、相手がそれを知らないと分かれば、二

人の外見を詳細に話し、改めて出会わなかったかと尋ねる。
「申し訳ありませんが、私（わたくし）……まだ、どなたともお会いしておりませんので……」
（またしても、迂闊だった）
　島に来てからの自分はどうかしている、と弥生は内心思う。
　最初から誰かに会わなかったかを尋ねれば、時間を無駄にすることなどなかったのだ。
「その二人を、愛していらっしゃるんですね……」
　気ばかり急っている弥生に、女が初めて自分から話しかけた。
「な、なにを……」
　声がわずかに上ずる。
「そんな、そんなことは……」
（確かに二人のことを説明する声には力が入っていたかも知れない。けれども、初対面の人間にそれを読まれるなんて……）

　自分の感情を読みとられて動揺する弥生に、女は言葉を続けた。
「二つのものを追っては何も手に入れることは出来ませんよ？　私が悟さんと蝉丸さんを同じく大切に思ったときの様に……。ましてや——」
「それ以上は言わないで下さい」
　あくまで弥生は冷静なふりで女の言葉を遮った。
「それ以上は言わなくていい……」
　その弥生の表情には、しかし隠しきれぬ動揺が映し出されていた。
　滅多に崩れぬ弥生のビスクドールのような容貌は今、脆くも崩れ去っていた。弥生のそれは、いわゆる人間的な苦悩に塗り固められていた。
「繰り言（くごと）になりますが…… 一度に多くのものは望み得ないものです。どうか、私と同じ過ちを繰り返さぬよう……」
（一度に多くのものを望む？　私が？　私の望みは由綺さんを必ずやトップアイドルにして差し上げる、

ということ。それが私の至上目的。
だから、由綺さんには必ずこの遊戯に生き延びて貰わなければならない。それさえ叶うのであれば利用できるものは何でも利用する。緒方プロの人間を始め、藤井さん……そう、藤井さんだって。
でも……藤井さんの由綺さんを思う気持ちは本物だ。自分の身を捨ててでも彼女を守ろうとするに違いない。だから、ギリギリまで彼の存在は認めるべきで……。
いや、そんな彼の存在は諸刃の剣でもある。彼が由綺さんにしようとすることは、逆に由綺さんが彼にしようとしかねない……。
ならば、二人の間はやはり裂くべきなのだろうか。例えば、藤井さんを殺す？　私が？　……愛しているのに？）
再びねじ曲がり始めた弥生の思考は止まるところを知らず、本来整った顔のその眉間に苦悩のしわを寄せて彼女は何かを呟き続けていた。ずっと長い間、

一人で。

……一人で？
そう、一人で。
弥生が自我を取り戻したとき、そこに白い女はもういなかった。
女は、弥生の迷いが生んだ幻想だったのか？
……いや。
女は確かにいたのだ。弥生が知るのはまたしばらく後のことだが、名は杜若きよみ（十五番）という。
そのきよみは、苦悩する弥生を尻目に歩き去った。
一度は死んだような身とはいえ、あたら命を捨てるつもりもないということか。
ただ、去り際に一度だけ振り返り、憂いを込めた視線を弥生へと投げかけた。哀れむように、慈しむように……。

醒めても、弥生の頭からはきよみとの出会いが離れることはなかった。
忘れえぬ記憶と格闘しつつ、そして由綺達の身を案じながら森を彷徨っていた、そんな弥生の目前に現れたのは、既に幾人かをその手にかけてきたと思われる殺人者達であった。
（ふふ……）
心のどこかで、自嘲。
（殺人者達？）
彼女等と自分、何処が違うというのか。
既に自分とて、一人の命を奪っているではないか？
自分は正しくて、彼女達は悪だとでもいうのか？
いや、この際、善悪などどうでも良い。
……分かった。
今、一番大事なのは目の前の事実だけだ。
あとのことは今を切り抜けてから考えれば良い。
今はこの、目の前の障害を切り抜けることこそが最優先事項だ。
弥生の頭脳は再び現在(いま)を走り始めた。
自らのダメージを最少に抑えつつ愛する二人と合流する、その為に……。

167 Lost Joker

資材置き場で理緒を殺害した浩之は、住宅街の民家の一つで食料を探していた。
というのも彼が出発時に支給された食料はここまでの戦闘で痛んでしまい食べられる状態ではなかったからだ。
民家に侵入して冷蔵庫を漁ってみたもののめぼしいものはなく、ここではペットボトルの水と何種類かの生野菜を口にしただけだった（料理をしなかったのは匂いで居場所を知られないためだ）。
――殺した奴から奪うか。

浩之はそう考えた。
あのとき理緒のバッグを回収しなかったことが悔やまれる。
——今から資材置き場に戻るか。
一瞬そう考えて浩之は頭を振った。あの時の銃声で誰か来ているかもしれない、危険だ。今の自分は武器があっても、まだ体力が完全に回復していない。あそこに戻るより他の場所で奪うほうがいい。
そうと決まれば移動しよう、と思ったとき浩之はこちらに近づいてくる足音に気づいた。他の音がしない分よく響く。
——早速獲物が来た。
浩之は電動釘打ち器を構えると玄関の隙間から様子をうかがった。そこに現れたのは理緒のバッグからCDを回収した月島瑠璃子（六十番）であった。
——知らない顔だ。
浩之はそう思った。しかし存在感を感じさせないその少女はまるで人形の様だ。
——そういえば先輩に感じが似ている。いや、先輩よりセリオか……
そこまで考えて浩之は本来の目的を思い出した。
——玄関前を通り過ぎたら背後から撃つ！
CDの回収と理緒と千紗を殺したことで浮かれていたのか、瑠璃子は浩之の気配には気づくことなく民家の前を通り過ぎた。
——今だ!!
浩之は玄関を飛び出すと瑠璃子の背に五寸釘を発射した。
バスバスバスバスバスッ！！！
その音に瑠璃子が振り向くのと五寸釘が彼女の両の眼窩と額を貫いたのはほぼ同時であった。浩之はまるでこうなることがわかっていたかの様に表情一つ変えず、断末魔の痙攣をつづける瑠璃子の心臓に五寸釘を発射した。
バスッ！
見る見るうちに血溜まりが拡がっていく。

『ジョーカー』は任務を果たすことなく狩られた。
浩之は瑠璃子の死体とバッグを民家に運び込むと中身の確認を始めた。
――これじゃまるで盗賊だな。
浩之は自分の行動に苦笑しながらバッグの中から目当ての食料を手に入れた。
――まだ何かないか？
そう思って浩之がバッグを探ると中からＣＤを見つけた。
「なんだこりゃ？　まあいいか持っていよう」
浩之はＣＤを自分のバッグに放り込むと今度は瑠璃子の身ぐるみをはがし始めた。
「大したものは持っていないな。ん、これは？」
浩之は液体の入った小瓶を瑠璃子の服から見つけた。
「これも持っておこう」
その後、釘打ち器に五寸釘を装填した浩之は民家を後にした。

六十番　月島瑠璃子　死亡
【残り67人】

168　やわらかい月

「二十六番河島はるか。三十二番霧島聖、五十四番高倉みどり。七十二番氷上シュン――」
赤い屋根の下、彰の頭からすればこの瞬間の情報処理は驚くほどに高く、その放送の意味を理解するのにも時間を要さない。
「はるか、」
声が漏れる。自分の声だとは信じられないくらい掠れた声が、確かに自分の喉の奥から漏れ出している。暗闇にも似た気持ちが胸を覆い隠す。感情の波をコントロール出来ない。
――河島はるかは親友だった。
親友だった、と堂々と恥ずかしげもなく断言する事が出来るともだちだったのだ。やる気がなさそう

な顔で毎日を過ごしているけれど、時折見せる優しい笑顔は眩しかった。落ち込んでばかりだった自分をいつも励ましてくれた。無理矢理外に連れ出しては一緒に運動をしたり日向ぼっこをしたりした。女を感じさせず自分を引っ張りまわした、ともだち。
「はるかぁ……っ」
良い奴だった。優しくて、可愛い奴だった。死ななければならない理由なんて一匙の砂糖ほどもなかったんだ。自分はどうしてはるかにさよならさえも言わせてもらえなかったのだ。こんなところで死んでしまってはいけなかったのに。
壁に拳を叩きつける。鈍い音と皮の擦れる嫌な音がして、拳の先に小さな痛みが走る。血が壁を伝ってゆく。ふと痛みが失せてゆく。黒いものが痛みも悲しみも苦しみも奪ってゆく。
「彰お兄ちゃんっ!?」
――外から戻ってきて、怪訝な顔をして自分に不安の視線を向ける初音にさえ彰は一瞬怒りを抱く。
黙っていてくれ、一人にしてくれ、頼むから、
「……ごめんね、初音ちゃん。驚かせちゃったね」
彰の理性は、しかし、それでもまだ、正常だった。
ううん、と初音は慌てて首を横に振る。自分が世界で一番悪い人間なのだ、とでも思っているかのような悲壮な顔で、何度も何度も首を振る。
「――ごめんなさい」
それ以上は初音は何も言わない。自分の顔を見て、何が起こったのかを理解する事が出来たのだろう。
「初音ちゃん、僕の方こそ、ごめんね」
その黒いものを吐き出すように、出来うる限りのしっかりとした口調で、彰はそう言う。冷静になろうとする意志が、黒い怒りの熱を冷ましてゆく。
――彰は初音を軽く抱き寄せる。
「うん、もう大丈夫だ」
「大丈夫じゃないよ、お兄ちゃん……っ」
初音が自分の胸の中で何か言っている。
「無理しないでよ……っ、彰、お兄ちゃん、ねえ、」

「大丈夫だって言ったら大丈夫なんだ」
それ以上は何も言えない。彰は初音を必死に抱きしめて、人の温もりをしっかりと感じながら、目から溢れそうになる激情を必死に抑え付ける。
「お兄ちゃん、」
「大丈夫なんだから」

——未来なんてどうなるか解らない。だけど、君と冬弥と僕は、何十年経っても、きっとともだちでいられたに違いない。僕は君のことが最後まで解らなかったし、君もきっと僕のことが解ってなかったと思う。でも、それでよかったんだよね。僕には君の笑顔があった。声のない場所で通じ合う事が出来た。

——こんな言い方は、すごく身勝手かもしれないけど、必ず生き残るから。君が好きだった藤井冬弥も一緒に、君が好きだった由綺も、美咲さんも、みんな一緒に、

彰の心が挫ける。初音の温もりに耐え切れず、唸り声のような慟哭が部屋に満ちる。大好きだったはるかはもういないのだという耐えようのない喪失感に七瀬彰は哭いた。

「みっともないとこ、見せちゃったね」
彰は初音から離れると苦笑いしながらそう言う。申し訳なさそうな顔で彰の顔を見つめる初音の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「大丈夫。へいきだよ」
そう言ってもまだ心配そうな表情を浮かべる初音に、彰は、真っ赤に腫らした目じゃ無理か、などと思って苦笑するしかなかった。
「——それで、機械の修理は終わったの？」
話題を変えるつもりで言ったが、初音の悲しい顔は失せない。どうしたら良いんだろうか。この子の笑顔を曇らせていたくはないのに。
「——うん。ロボット自体はもう動かないけど、武

器だけはなんとか」
「そっか。護身にはなりそうかな。流石にフォークとかハリセンとか本とかだけじゃ大変だろうしね」
冗談めかして言っても初音の顔は晴れない。彰は途方に暮れて、弱い姿を見せてしまった自分に後悔の念を抱く。どうすればこの娘の悲しい顔を晴れやかにすることが出来るだろう。
「あのね、」
初音が小さな声で囁く、
「わたしは、お兄ちゃんのために、何も、してあげられないけど、」
「初音ちゃん？」
俯いたままの顔から、声が聞こえる。
「お兄ちゃんが、悲しんでいるのだけは、わかる」
「――」
「一緒に悲しむなんてこと、できないけど、」
心からの自責に駆られた声だ、彼女には何にも責任がないのに。そんな風な台詞を搾り出すように吐く彼女に、堪らない苦しさを覚えた彰は思わず叫ぶ。
「初音ちゃん、君に出来る事はあるよ」
「え？」
「お願いだから、笑っていて。君が笑顔なら、まだ少しは気が晴れるんだ」
彰は、初音の肩を抱いて、心からの声を吐く。
安らかな沈黙が二人のわずかな距離を包む。
「――――うん」
小さく頷く初音を優しく抱きしめて、二人は温かな力を分かち合う。

簡単に食事をすると、二人は出発の準備を始める。
持ち物は清涼院の小説型鈍器と、――その後、洗面所の裏で見つけたジッポライター。何の役に立つかも判らないが、一応持っていく事にする。
「取り敢えず、君のお姉さんを見つけなくちゃね」
頷く初音の手を取って、彰は家の外に出て、二人は再び森の中へと足を踏み入れる。はるかのことを

考えると美咲さんも危険なことになっているのかもしれない。無性に気にかかるが、だからと言って何か出来るかといわれれば何も出来ないと答えるしかない。取り敢えずこの娘を早くお姉さんに逢わせてやろう。美咲さんを探すのはそれから後でも充分だと思うし、その間に美咲さんに会う事もある。

そう考えて森の中をしばらく歩いていたが、しかしまるで誰とも遭遇する様子がない。なかなか大きな島だし、他人と遭遇する確率なんてひどく低いに決まっている。気長にいかなければいけないだろう。美咲さんは大丈夫だろうか。大丈夫。美咲さんは頭が良いから、簡単に人に殺されたりなんてするものか。彰はあくまで気楽に考える。

——そうしてもう一時間ばかりは歩いているのだが、しかしまったく遭遇する様子がない。町を中心に歩き回っていると行動範囲が交わらないのだろうか。少し遠出してみるべきなのかもしれない。

「この辺にはどうもいないみたいだ……少し遠出、」

初音の方に振り返り、初音の顔を見て、あまりに自分の注意力がいかれていたことを実感する。

「え、？　なに、お兄ちゃん？」

漸く彰はひどい顔をしている初音に気づく。天使の顔が形無しだ。汗が額からだらだらと溢れている。尋常ではない様子に彰は狼狽する。

「どうしたの、初音ちゃんっ!?」

ううん、だいじょうぶ、へいき、初音は言いながら辛そうに首を振る。無理な笑顔が痛々しい。

「町に戻ろっか？」

「だいじょうぶ、へいき！　本当に少し頭痛いだけだから。過保護にしないで」

「でも、」

初音はもう彰の話など聞いてない。作り笑顔を見せて、彰の手を取ってずんずん前に行く。

だが、先を行っていた初音の歩む速度はみるみる遅くなり、いつの間にか最初のように彰が初音の手を引く形に戻っている。その細い身体を曲げながら、

慌ただしい息を休みなく吐き続ける。お腹を抱え、冷や汗をだらだらと流す。真っ青になった顔には苦しみが充ちている。
「大丈夫？　お腹も痛いの⁉」
「大丈夫、大丈夫だよ……っ、……少しだけ休めば、大丈夫、だから、」
青を遥か昔に通り越して、真っ白な顔だった。血の気がないというのはこのような顔をいうのか。彰は考える。さっきまで元気だった人間がこのようにひどい顔つきになるような状況など存在するのだろうか。……まさか、初音は熱病か何かにでもかかったのだろうか。ここがどんな島だかも知らないが、もしかしたら悪い熱病のウイルスがいるのかも。
「大丈夫なもんか！　一旦、街に戻ろう‼」
「でも、」
初音の話など聞かない。無理矢理背中に乗せると、全速力で彰は街に再び戻る。勿論町はすぐ近くにあった、さっきまで休んでいたあの赤い屋根の家に駆け込み、さっきまで一緒に眠っていたベッドに寝かせる。水道から水を汲み、洗面器一杯に入った水を枕元におくと、初音の鞄の中からタオルを拝借する。冷たい水に浸して絞り、ベッドの上で息を荒くしている初音の頭の上に置く。
「大丈夫？」
「うん、ごめん。お兄ちゃん、足手まといで、」
「黙って寝てた方がいい」
冷たいタオルが初音の身体から熱を奪い、多少は楽になったのだろう。乱れた息は次第に治まって、顔色も少しずつ戻ってくる。しかしそれでも顔は青い。
「薬があればいいんだけどな。ちょっと町の中に薬局がないか探してくるよ」
彰は家を飛び出す。先のキッチンを見れば解るが生活に必要な品はあまり無い。果たして薬局を見つけたとしてそこに初音を救う薬が充分にあるかは解らない。だが、それでも立ち止まって何もしていな

いよりは余程マシだ。
彰は走る。初音の苦しみが生理によるものなんてことは、当然彰にわかるはずもない。

もし、に意味がないことを認めた上で言う。
もし、彰が初音を助けることなく最初から美咲を探していたならば、彰は美咲と合流できた可能性はあった。そうでなくても、せめて最期の言葉を聞くことくらいできたかもしれない。
けれど、彰は初音を助けた。大切な人を探すよりも、目の前の女の子と一緒に居ることを選んだ。
その選択で失われてしまった物を、まだ彰は知らない。彰の恋は終わってしまっていた。別れの言葉も、ずっと心に秘めていた言葉も、どちらも伝えられないまま。

169　接触

気が付くとリアンは上下の感覚もない空間を漂っていた。
（何とか接触には成功したみたいですね、まずは神奈さんの本体を探さなきゃ。前になつみさんのココロを探したときのように集中して……）
空間にはいろいろな感情が満ちていた、小さな想い、憎悪、苦しみ、そして大きな悲しみ。想いに直接晒されているリアンは魔力だけでなく精神そのものも打ち砕かれるように感じた。想いに押し流されないようにしながら必死に集中を続ける、そしてようやく数多くの負の感情の中に一筋の切れ目を見つけたリアンはその中に飛び込んでいった。
切れ目の中にいたのは小さな女の子だった。リアンから離れたところでうずくまっている。
（あなたが神奈ちゃん？）

（近づかないで。もういや、誰も傷つけたくない、こないで）
（どうしたの、私は何もしないよ、大丈夫。あなたは何故ここにいるの？）
（……私は大きな私から切り離されてここに連れてこられたの、そのときに少しだけ私は変えられてしまった。空に帰りたい、誰も傷つけたくない。悲しい記憶を増やしたくない）
（帰りたいの？）
（帰りたい、鳥たちといっしょにどこまでも空を飛び回りたい）
　何か大きな力の一部を分離させてここの結界の礎としているのだろう、切り離された人格の一部にこれだけの自我があるということは本体はすさまじい力があるに違いない。
　だが、人格があるということは協力を仰ぐことができるということだ。彼女の人格と変化された力を切り離すことができれば、結界は力を失うだろう。

（私も空を飛ぶのは大好き、こっちの世界に来てからはあまり出来ないけどグエンディーナにいた頃はよくホウキに乗って空を飛んでた）
（お姉ちゃんも空を飛べるの？）
（飛べるよ、風が頬にあたる感じが気持ちよくっていつまでも飛んでいたいくらいだった）
（でももう私は飛べない、私の一部がここから私を出してくれない）
（私が協力するよ、大好きなお空に帰ろう）
（ほんと？　本当に帰れるの？）
（約束する、私もがんばるから神奈ちゃんもがんばって）
（ありがとう、じゃあいやな私のところに案内するね）

170　惑い

硝煙が燻った。俺が放った二発目の弾丸によるも

のだ。それで彼女――澤倉美咲――は完全に事切れた。
喉が痛かった。無性に渇いてしょうがなかった。
引き金を引く時には感じていなかった感覚だった。
それがほんの少し時間を置いたことで、まるで金縛りを解いたかのように現れた。
着弾したのは心臓の付近だった。二発目はそのさらに外側だった。一瞬でも苦しみを取り除いてやりたかった。だが、そんなことは偽善でしかない。それは、俺が一番良くわかっている。俺は早く殺したかったんだ。生と死の狭間でもがいているその人間の姿が、まるで俺を襲ってくるような……。違う、それだけじゃない。その姿はまるで今の俺……そして未来の俺の死に様のような気がしたからだ。だから早く殺してしまいたかったに違いない。
せめて楽にしてやろう。なんと都合の良いセリフだろうか。その思考のおかげで、俺は自分を冷酷な殺人者だと偽りながら、自分の恐怖を拭うことが出来たのだ。そうでなければ、二発目の引き金を引けるわけがなかった。
……なんだ。楽になりたかったのは、俺自身じゃないか。
二発目の銃弾が放たれた。どこを撃たれたか判別の付かないような銃弾の貫通の仕方だったが、……ほんの少し自分の服に飛び散った。……撃ち込んだ拍子に、口からあふれた血の飛沫だ。
いっそ顔面を砕いてしまえばよかっただろうか。
思ったよりは、胸の弾痕は派手なものではなかった。どくどくと、まだかすかに血が流れつつある。
――綺麗な顔だ。だが、それは人間らしすぎて不快だった。死体は単なる肉塊だ、もはや人間ではない。
だというのに、未だその物体は俺のことを見つめてくる。
……彼女の目は開いていた。
まだ、完全に事切れていないうちに銃撃したから

だ。そのときのショックで、瞼は落ちることを忘れていた。
それは色を失った瞳だった。まるで、さも自分は生きているとでも訴えかけてくるような。

――俺は、もう一度彼女に銃を向けた。

俺は苦悩していた。人を殺す、そのこと自体に対しての惰性的な慣れが生じることを恐れていた。そもそもＦＡＲＧＯ自体がそういう組織なのだから、いまさら、『僕は人を殺すのが嫌いです、どうしてみんな仲良くできない？』などというような偽善を吐くことはできない。……いや、もはや自分の行動など、その全てが偽善と嘲られてもしかるべきものだった。だが、その殺人という行為によって、俺が今ここに生者の側でいられることもまた紛れも無い事実。それを否定することも出来ない。
だから、狩るものと狩られるものがいるのだとしたら、俺は狩る側に回らなければいけない。そうしなければ生きていけない。この上なくエゴイスティックな思考回路だが、果たして誰が、この判断を責めることが出来ようか。
……あるいは、晴香なら。
俺を連れ出すだけのために、単身でＦＡＲＧＯに乗り込んできた、あの娘なら。
今この瞬間も、俺と同じ戦場で戦っている、あのたった一人の妹なら。
この俺の体たらくを見て、嘆き、そして恫喝するのかもしれない。
だが妹よ。
俺はお前以外の人間なら、護るために、自分のために、きっと殺すことができるだろう。
……だから、生きる。泥を啜ってでも、這い蹲ってでも、まず生き残る。
それが、俺の復讐の始まり。
晴香は……まだ生き残っているようだ。だが俺に

は、表立ってあいつを守ることは出来ない。
もう、このゲームが始まった瞬間どころか、その遥か昔に俺は妹を捨てたのだから……。
「…………あ」
――意識が、復帰する。
目の前に広がる惨状。胸からおびただしい量の血を流し事切れている女性の亡骸。色を失いながらもまごうことなくこちらを見つめてくる瞳。

――俺が、殺した。

その事実が、胸に鋭く突き刺さった。黒い銃身。ワルサーP38。銃は俺を癒してはくれない。
だがその刻印の入った銃に、俺は今自分の命を託さなければならない。銃は諸刃の剣だ。今は目の前の哀れな彼女の命を、この世界から消し去った。だが、その次の狙いが、果たして自分ではないなどという保障は無い。それでも、俺はこれにすがらなければならない。それは俺の弱さではあったかもしれないが、……決意でもあった。

――結局、三発目を撃つことはなかった。

高槻を殺す。そうしければ、ゲームは終わらない。それまで……俺は生き残らなければならない。
辺りを見回す。そこには誰の気配も無い。先ほどの銀髪の男には手傷を負わせた。だが深追いは避けたほうがいいだろう。追い詰められた人間は、最後に全力の報復をする。今のように虚を突かねば……俺の命と取引するようなものだ。
あるいは、心の隙を突く。このゲーム、他人を信じたものが敗北する。俺はもう覚悟を決めた。この銃、そして俺自身。それだけあれば十分だ。闘える。ああ、闘える。
そうして良祐は立ち去った。苦い思いは、それを無かったことに……あるいは乗り越えたことにして。

良祐は走る……、次なるところへと走る。誰にも平等に訪れる死。それに抗うかのように……。今は、まだ何も見えない。状況はどこまでも、まるで深い霧に包まれたように混沌として、頑としてその先を見通すことを許さなかった。

残されたのは、物言わぬ一人の女性の影。
その瞳は、既に閉じられていた。

——そして、住井護がそこに再び辿りつくのは、それからたったの数分後のことである。

171　惑い

……ミズアビデスカ？　……ふぐ。こんなとこで水浴びしてんのかあの人。うわ。漫画みたいだぞこの展開、ありえねえ、ごくり、こんなに熱い唾を飲むのは初めてだ。な、なんて無防備なんだうひょう。つーか今見えた見えた見えたっ見えたあっ!!　薄くて控え目な綺麗なピンク色だったぞちくしょう!!　あうう、すげえ、半端じゃねえ長森とか七瀬とかの比じゃねえ!!　あんな人がいていいのかっ!?

俗な言い方をすると覗きである。
単身水汲みに向かった筈の折原浩平は、その目的も果たせぬまま、女性が水浴びをしているのを覗き見ている。結果として覗き魔ちっくになっているだけだと自分の心の中で浩平は飽くまで主張しているが、鼻を伸ばした顔ではどうにも説得力に欠けている。だが、断言するがそんな事実はないのだ。
——こんないやらしい顔をしているが、浩平だってまともな知性の持ち主だ。置いてきた二人の元に早く帰るべきだと解っている。二人を危険に晒している場合じゃあないと思う。それではなんで浩平が全く動けない（動かないではない）でいるのかと言うと。

問いたい。浩平の立場に置かれたまともな感覚の成年男子が、果たして覗きを続けるのをきっぱり止めて帰れるか。女の子が警戒心なく水浴びをしているその様を最後まで見届けないで帰れるか。無理に決まってる。たとえそれが七瀬の裸でも、自分は最後まで覗きたいと思ってしまう。ましてあんな素敵な人だ、最後まで見届けないで帰れるか。

うわ!!　今ちらっとだけど見えた見えた見えた絶対見えた！　ひゃっほう!!　生きてて良かったぜこんちくしょう!!　覗きばんざい!!　覗きばんざい!!

ばんざいしたら手が木の枝に当たる。ちょいと自然発生するには不自然過ぎる音が自分の腕で奏でられる。がさがさがさ、木の葉と枝と我が腕ののアルペジオ。しまった。アホかオレは、

「誰っ!?」

案の定だ。裸の女の人は気付いてこちらを見遣る。ってめっちゃ可愛い！　あんな身体にアンバランスだ！　ってそんな場合ではない。まずい、隠れなければいかん。覗きの醍醐味は如何に見つからないで覗き続けるかってとこにもあるのだ。

そんな浩平の気配消去の開始と殆ど同時に、男の太い大きな声が遠くから聞こえてくる。

「郁未ちゃん、どうしたっ！」

「だ、誰かが覗いてたの……っ」

浩平はその太い声の主と川の中に肩まで浸かってしまったお姉さんの顔を見る。ああ畜生、なんて不注意なんだオレ。もうあの人の裸は一生見ることが出来ないのか!!　ばかなオレ、ってそんな場合ではない。男が現れている。えらく逞しい。貧弱な自分とは大違いだ。優しそうな顔もしているし、きっと女にもモテモテだろう。あんな恰好じゃなければ。

「おいっ、覗き魔っ!!　出てこいっ!!」

何なんだあれ。恰好やばすぎないか？　男だろ？　あんな短いスカートって何なんだ。いやオレだって差別主義者じゃない、そういう趣味もあるんだなあって認めてるさ。だがミニスカに上半身裸、みたい

な恰好は有り得ない。ありゃただの変態だ、
——そこで、ふと浩平は、その女性の名前であろう三文字に気を取られる。
いくみ？
——それは、確か、鹿沼葉子が捜していた女の名前ではなかっただろうか？

172　静かなる格闘

夜明け。
スフィー（五十番）の格闘はまだ続いていた。たかが魔術書かもしれないが、スフィーが必死になるのには訳があった。
魔力の流出が止まらないのだ。
スフィーの腕にはリングがはまっている。これと同じリングを宮田健太郎（九十五番、既に死亡）もはめている。このリングは本来、スフィーから健太郎に魔力を供給する役目を持っている。健太郎が死んだ今となってはもう役立たずになるはずなのに、今でも少しずつ魔力が流出しているのだ。
そこで、失われる魔力を補給しなければならないのだが、かつて健太郎と共に過ごした五月雨堂の中のような『気』が、この島には全く感じられなかった。魔力の流出の結果、スフィーの体は少しずつ縮んでいく。現に今着ている服も肩周りがゆるくなってきている。
「こんな状態で、マジカルサンダーなんて使おうものなら……とにかく、魔力の補充が最優先ね」
スフィーの格闘は、まだ終わりそうにない。

173　死ぬまでセイギ？

（体が……。熱い……）
太田香奈子（十番）に道案内をさせ始めてからしばらくして、松原葵（八十一番）の体に変調が現れ

た。
（胸が苦しい……）
毒はこんなにも強力だったのか。
彼女は腕をしばることである程度処置したつもりだったが、それはほんの少し……。そう、ほんの少し寿命をのばすにとどまった。

「うう……、あ……」
ひざが折れ、その場に座り込んでしまう。
前を歩いていた香奈子がゆっくりと振り返る。
「あはは、やっぱりだめよね？」
歩み寄ってくる香奈子に、葵は視線を向けることしかできない。
「さっきの女を殺せば、解毒剤をもらえるのよ？ちょっと胸に鋏を突き立てるだけ。簡単よオ」
「『殺す』なんて駄目です……。みんなで協力し合って帰る……ん……です……」

——ガッ！——
葵が仰向けに押し倒される。
「それがあなたの正義？　正義せいぎセイギセイギセイギ!!??　そんなものここじゃ意味無いのよ!!　そんなものがあるなら瑞穂は殺されなかったはずでしょぉオ!!」
「うあ……あ……あ……」
葵の体の中を恐怖が走りぬけた。
——ビリビリビリッ！！！——
制服が無残に裂かれ、白い肌が露になる。
体を重ねてくる香奈子。
抵抗したい。なんとか跳ね除けたいという葵の心とは裏腹に、身体は動こうとはしない。
「可愛いわね。うふふふふ……。でもね、瑞穂はもっと可愛かったワ……」
香奈子の舌が葵の首筋をなぞる。
死の恐怖による戦慄が恍惚感に化けつつある。

「ひゃ、あ……ふあっ……やめ……て……」
舌が這うたびに無意識に体が跳ねた。
押しのけたいけど力が入らない。
(毒のせい……だ)
「たのしイよ？　人を襲うの」
葵の肌の上に香奈子の爪がたてられる。
力をこめ、引いた。
「うあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁっ!!!!」
白とは対照の赤が散る。
「あははハハ……。イイ声。気持ちイいよ。どうしてあなたはガマンできるの？　殺してもいいんだよ。ココでは。聞けるヨ。声。たくさん」

香奈子は自分の頬に両手の爪を当てる。
同じように、引いた。
六つの爪あとが頬に刻印される。
——ポタポタ……——
(狂ってるよ。狂ってるよ。怖い怖い怖い怖い怖い怖い!!!!)
無意識に動かしていた手に硬いものが当たった。
『鋏』

174　サイコメトラー楓

爆発の跡地。
「何があったんだろう、ここで……」
楓は複雑な思いでそこを見つめていた。
一箇所だけ寂れた荒野となったそこは、一人の人間の悲しみ——だけど、それでも何かをやりとげた男の最後の場所だった。
「……」
玲子もまた何も言えず視線をそらす。
「……あれ、あれは何？」
黒く光る金属片。
玲子の目に何故か異質に映るそれは、
「鉄の——爪？」

玲子がそれを拾い上げた。
形状からして右手用……
「爪――ですか」
楓が何時の間にか背後までやってきていた。
「う、うん」
「……」
複雑な思いでそれを玲子から受け取る。
(姉さん……)
鬼の爪。否が応にも千鶴を連想させる。
「無事で……いて」
「楓ちゃん、なにか分かったの?」
「いえ、何も……」
「ずっと爪とにらめっこしてたから。サイコメトリーみたいな能力を持ってるのかと思っちゃった」
「……違います」

175 Rose Bus

牧部なつみ(七十九番)は支配空間を作り『贄』を狩るための場所を探すため歩き回っていた。幸いなことに動いている人間に遭遇することは無かった。
ふとなつみが足を止める。
「人の……死体ね」
背丈はそれほど高くない、黒い制服を着た男子。なつみは知らないが、それは佐藤雅史(四十二番)だった。雅史は目を見開いて事切れていた。片腕が切断されて背中には無数の針が刺さっている。余りにも酷い殺され方に、なつみは戦慄を覚えた。
いくらなんでも、こんなことって……
店長さんも……この人のように殺されたの?
憎い……憎い……
店長さんを、この人を殺した人が……

このゲ・ー・ム・を楽しんでいる人が……

なつみは中に錠剤が入った瓶をみつけた。ラベルは無くて何の効果があるのかはわからない。どうやら、幾らか中身は減っているようだ。

(何の薬か分からないけど、贅に試してみよう)

他に役に立ちそうな物が無いと分かると、なつみは静かに立ち去った。

時間も大分過ぎ、日が暮れかかった頃にようやくアジトにするべき場所についた。孤島にある割には大きめの、四階建てで鉄筋で出来た……学校。

此処も矢張り人の気配は無かった。とはいえ用心するに越したことは無い。外回り、各教室、屋上などを調べまわることにした。

(……‼)

一番最初に目に付いたのが黒髪の少女。腕や腰がへしゃげ、胸に矢が刺さり、大量出血していることからも彼女もまた誰かにやられたのだ。故意か偶然か、高い所……屋上からだろうか、から転落させて。

又一方で。

今度は大量出血した跡を見た。場所は保健室のベッド。寝ている無防備な人を攻撃したのだろう。その少女は殺された後誰かに供養してもらったのか、布団がかぶせてあった。

(参加者に優しい人もいたんだね……私には、この人のように供養することは出来ないよ。この人たちをこんな目に合わせた人と同じようなことを、これからするのだから……)

二人の死者を看取るうちに完全に日は暮れてしまった。電気はスイッチを入れてもつかない。仕方なく月明かりを頼りに行動する。罠を張る場所を『1―A』との標札が出ている教室に決めた。正面玄関から入って直ぐ右にある場所。直感的に最初に入りそうな所だ。教室の中にあるのは教壇、黒板、数十個の机など……ごく一般的な教室だった。

なつみはどの椅子、机にも座らず教室の隅で膝を

抱える。丸一日歩き、三人もの死体を見て、肉体、精神共にかなり疲れているのだろう。
「怖い、やっぱり怖いよ。いつ襲ってくるか分からない相手なんて……。もし、目の前に武器を向けられたりなんかしたら、店長さん——健太郎さんの敵なんて……」
『ふふふっ、だいじょうぶよ』
突然声をかけられた。自分の中のもう一人の私……ココロに。
『健太郎さんに会えなくても……心の中に健太郎さんはいる。それに、一度きりとはいえスフィーの魔法を打ち消したこともある。……ここに自分だけの支配領域を作れば負けるようなことは無いよ』
「でも……鉄砲なんかを撃ってくるのよ」
『鉄砲なんてバリアを張れば防げるわ。支配領域内なら……あなたは、いや私達はそれが出来る筈よ』
「……身も知らぬ人を贄にするなんて……」
『じゃあ、知ってる人なら殺してもいいの？　健太郎さんは殺された。今日三人も死体を見つけた。余りにも残酷じゃない？』
「でも……」
『いい、健太郎さんは死んだの。復活させるのも無理。健太郎さんを探して下手に動き回っていては逆に殺されるだけよ。だったら、せめて健太郎さんの敵を……そう決めたじゃない』
「……うん……」
『結界が張ってあると、これだけでも疲れるわね……じゃあ寝るわ。おやすみ、なつみ……』
「おやすみ、ココロ」
こうして夜がふけてゆく……。

176　目覚め

『おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな？』
江藤結花と長谷部彩の浅い眠りを打ち砕いたのは、どこか遠くから聞こえてくる声だった。

そして次の瞬間、二人の眠気は吹っ飛んでしまった。
『七番　猪名川由宇』
『五十四番　高倉みどり』
二人はただうつむいたまま、放送を聞いていた。
『では諸君。俺様にそんなことを言わせなくても済むよう頑張って殺しあってくれたまえハハハハ』
辺りに静寂が訪れてから数分後、ようやく結花が重い口を開いた。
「また、またひとり死んじゃった」
「結花さんも……ですか」
「えっ？　……そうね。でもなんというか、感じ方が違うんだ。健太郎が死んだと知った時は、悲しくてたまらなかったのに」
「……」
「でも、でもね……」
結花の口調が激しさを増す。
「どうして、みんな殺し合うの？　そんな事しても、何にもならないじゃない」
「ゲームって、言ってました……」
「こんなゲームってある？　殺して、殺されて、それから、それから……！」
「結花さん……落ち着いて下さい」
「……あっ、ご、ごめんね」
体にまとわりつくような悲しみを払いのけるように、結花が言う。
「さ、とにかく行こう。そうしなきゃ何も始まらないわ」
「はい……」
彩は立ち上がると、脇に置いてあった銃を拾い上げた。夜中、雪見との戦いの時に拾ったあの銃を。
「トカレフ……ですね」
「彩さん、解るの？」
「はい。……以前、同人誌の題材に使ったんです。その時に、図書館とかでいろいろ調べて……」
「トカレフって……あっ、ニュースで見たことある。

確か暴力団とかが使ってる銃でしょ？」
「そうです。……あと、この銃は他の人が使った物なので、弾丸はそんなに残っていないと思います」
二人はパタパタと、お互いの服に付いた砂をはたき合った。
「で、どうする？　この先に進むとかなりキツそうだけど」
結花が指さした先、川上の方からは激しい水の音が聞こえてくる。
「……戻りましょう」
彩の声に結花はきびすを返し、元来た道、いや河原を歩き出した。

177　四人目

（リアンちゃんは疲労が濃くなっている。舞さんは大丈夫そうだけど、姉さんは体力がないからそろそろキツイわね）
リアンが祈るような格好で神奈とのリンクをはじめてから、数分、綾香は状況を把握しようと周囲を観察する。だが、決して目の前にいる翼を持つ少女からは視線を外さなかった。
と、少女のフォルムが変化をはじめる。まるで、苦痛に歪み、自分の中からなにかを押し出すように。
「あの子の中で二つのものが戦ってる」
「そろそろクライマックスみたいね」
もはや少女の面影など見えず、禍禍しい輝きをたたえ始めた光はいくつかに分裂し怒り狂ったように辺りを飛びまわり始めた。
『きゃあっ！』
佐祐理と南の悲鳴が重なり、二人は吹き飛ばされる。自分たちだけが狙われていると思っていた三人の心に戸惑いが浮かぶ。
「佐祐理！」
「だめよ、飛び出しちゃ！　リアンちゃんが何とかしてくれるまで耐えるのよ」

しかし、舞の動揺は押さえきれないようだ、今までのような動きが出来ていない。その隙を縫うように荒れ狂う光は舞に襲いかかる。舞が崩れ落ちるように倒れる。直撃を受けた舞は起きあがれないだろう。

一気に防御が薄くなったリアンへ向けて光が狙いを向けた。綾香と芹香は二人でリアンと光との間に身を割り込ませ、襲い来る光をなんとか防いだが二人とも弾き飛ばされてしまった。もうリアンを守る壁はない。光が一斉にリアンに牙を向ける！

その場にいた誰もが、光に飲み込まれるリアンを想像したその瞬間、薄い赤色の壁がリアンの前に現れ、牙をむく光をはじいた。

「妹がピンチのときに駆けつけない姉なんていないのよ」

地面から吹き飛ばされ、天地が逆になった綾香の視界が捕らえたものは鮮やかなピンクの髪と触覚のように飛び出た癖っ毛をもつ女性だった。

178　闇に踊る狂気、光に舞う天使。

怖い怖い怖いこわいこわいこわいこわいこわい……！

毒がその身体を蝕み、更には意識までをも喰らい尽くそうという中で、松原葵は眼前に迫る狂気と、じわじわと忍び寄る死への恐怖から必死に逃れようと足掻いていた。

ふと、その手が硬いものにぶつかる。彼女はそれを掴むと、無我夢中で目の前に突き出した。

『鋏』。

それは、香奈子から奪った毒付きの鋏だった。

危機を回避するための本能からか、葵はその鋏を香奈子の方へ向けようとする。

「……あ……くぅ……」

――が、葵の手に力は入らない。ぶるぶると震えた指先に掴まれた鋏は、力無く地面に落ちた。

「……うふふ、残念」

それを見ていた香奈子は、けらけらと笑いながらその鋏を拾い上げる。
「せっかくの武器を落としちゃったね。これはね、こうやって使うのよ？」
ひゅん。
香奈子は鋏を葵の首筋へ薙ぐ。すれすれを掠める鋏に、葵はひゅ、と思わず息を呑む。
「うふ。いい顔。……それじゃあ、今度は」
どん。
「……！」
びくん、と葵の身体が跳ねる。その右手には鋏が突き立っていた。
「……次はぁ」
恍惚の表情を浮かべ、香奈子は鋏を引き抜いた。
——月明かりに照らされた舞台にはふたつの影。
赤く染まった鋏を振り回し踊り続ける少女と。
赤い衣装に身を包み、ぴくりとも動かぬ少女。

二人は近づき、絡み合い、離れてを繰り返す。
その度に聞こえてくるのは、肉を断つ鈍い音と、弱々しい悲鳴と、笑い声。
観客のいない滑稽な劇は悲鳴が消えるまで続き、ようやく幕を下ろす。
「……」
徹底的に嬲られ、葵の五感は失われつつあった。悲鳴を上げる力も残ってない彼女は、為すが侭にその状況を虚ろな目で見るしかない。
香奈子はその様子を見て、不満気に顔を歪める。
「つまんないな」
ぽつりとそう呟くと、いきなり鋏を振り下ろす。
「もっと泣きなよ。もっと叫びなよ。もっと怯えなよ。もっと怒りなよ。もっと、もっともっともっともっともっともっともっともっとぉ……っ‼」
二度、三度。ざくざくと葵を切り刻む。
——が、葵はもう反応しなかった。
「つまんないよ」

香奈子はもう一度そう言うと、全身を血に濡らす葵にそっと身を寄せて囁く。
「他の人を探すわ。――じゃあね」
そして身を離そうとして――留まり、再び彼女の耳元に香奈子は微笑みを浮かべてそっと囁いた。
「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？
――セイギノミカタ、さん？」
微笑みは爆笑となり、狂ったように笑い声を上げながら、香奈子はどこへともなく去っていった。
残ったのは、まるで人形のように動かない葵。
その口を開いて何か言おうとしたが、唇は動いてくれなかった。
その手を伸ばそうとしたが、ぴくりとも動かせず何も掴めなかった。
ただ頬を伝う涙だけが、彼女がまだ生きてることを教えてくれた。
……もっと強くなりたかった。
……どこかの学校にいる、電話帳を手で引き裂く格闘家と戦ってみたかった。
……綾香さんともう一度手合わせをしたかった。
……先輩にもう一度励まして欲しかった。
『大丈夫、葵ちゃんは間違ってねぇよ』って。
……もっと強くなりたかった。
自分の正義を、貫けるぐらいに。
――でもそれは、もう無理。
遠くの方で音が聞こえる。朝の定時放送だ。
だが、その内容はもう葵の耳には届かない。
朝日が昇り、暖かな光が彼女を照らす。
だが、その温もりも彼女にはもう感じられない。
五感が、急速に失われていく。

混濁する意識をそのままにまかせ、葵はぼんやりと親しかった人たちのことを考える。
綾香さん。先輩。そして皆さん。どうか、生きて帰ってください。
私はここで、皆さんの無事を願ってます。
……ねぇ、先輩。
私は、一人も、殺しませんでしたよ。
——誉めて、くれますか?

でも。
しぬのはこわい。しぬのはいたい。
しにたくないしにたくないしにたくない。
たすけて。
たすけてあやかさん。
たすけてせんぱい。
たすけてだれか。
だれか……たすけて。

意識が恐怖に飲みこまれていく中で、その濁った瞳が何かを捉えた気がした。
——朝日の中から、黄金色の髪の少女がゆっくりと舞い降りてくる。
その背中に、純白の翼を生やした少女が。
——それはあるいは死の間際の幻覚だったのかもしれない。
だが葵には、確かにそう見えた。

てんしみたい。ああ、ないてる。
わたしのためにないてくれてるのかな。
だったらちょっとだけ、うれしいな。

——そして、松原葵の思考は閉じられた。

八十一番　松原葵　死亡
【残り66人】

179　一つの終焉

めきめきっ……！
また一つの木がなぎ倒され、麗子の姿が露になる。
弥生が再び散弾銃を麗子に向ける。
ドン！
別方向からライフルが火を吹く。そして同時に鋭い風の音――弥生は木の陰から顔を出すことすらできなかった。
「……」
弥生は短時間の激闘にてかなり疲弊していた。まだ、生死をやりとりした戦闘は二回目。さらに今度は本格的、しかも相手は二人だ。
幸い相手も素人なのか、未だに被弾はない。次弾装填しながら、深呼吸。クールだった彼女の顔にはいつもでは考えられないほどの感情が浮かんでいた。
それは由綺でさえも知ることはない。

「なんでこんなっ……！」
ボウガンに次の矢を装填。ストック残り一本。今のを入れて二本だ。麗子には信じられなかった。そう、最初に眼鏡の女を仕留められなかったときから感じていた小さな違和感。
(狙ったはずの矢が…当たらない！)
再び向こうの木々の暗い闇からライフルの光――。
「――っう」
柔らかい斜面を転がる。今の衝撃で、木の破片が麗子の横腹の柔らかいところに突き刺さる。
「この私が、なんてこと…」
最初に気付くべきだった。この島の結界とやらは、麗子の身体を確実に蝕んでいた。
(私の身体に干渉してくるなんて……バカだわ)
舌打ちしながら深山雪見がいるであろう方向に身体を回転させる。斜面を転がりながら、そのまま、一連の動作を一呼吸で終える。
(ラスト……一発！)

再び横から爆音の嵐――
（やばっ！）
散弾銃が麗子の足をかすめ、あたりに血を撒き散らした。

180　後戻り

俺は何故ここまできたのだろう。昔はこんな奴じゃなかったと思う……。どこで俺は変わった？　屋上で初めて人を殺したとき？　人を殺せる武器を手にしたとき？
……違う、『ゲーム』が始まったときから俺は変わり、狂っていったんだ。絶対俺が生き残る、手段は選ばない……はははっ、あかりはどう思うだろうな、俺はもう殺したんだ、人を何人も。
そして……俺自身も……。
「よし、いくか……」
浩之は立ち上がり歩き出した、次の獲物を求めて……もう後戻りはできない。

181　再会

死亡者報告に確かに彼女の名はあった。月代はどうしても聞きたくなかった。聞こえないように耳をふさいでいたが、はっきりと聞こえてしまった。
――桑島高子
月代はその場で突っ伏してしまった。
「(・∀・)高子さんも……死んじゃったのか」
ふいに、夕霧や高子と過ごした楽しかった思い出がフラッシュバックする。目頭が熱くなる。
「(・∀・)寂しいよぉ……夕ちゃん……高子さん……」
孤独感で胸がつぶれそうになる。少女には酷な環境であった。
味方がいない……
命を狙われる……
死んでいく大切な人達……

涙がこぼれそうになる……
しかし、涙はこぼれない。お面があるからだ。ふいに月代は今の自分の顔を想像してしまった。
「(·∀·)ぷっ！　……フフ、ははははっ」
笑みがもれる。
「(·∀·)こんなヘンテコなお面つけて何で泣いてるんだろ、私……おっかしい～」
何故か元気がわいてきた。これがお面の効果なのか？
「(·∀·)蝉丸なら何とかしてくれる！　だって、いつもそうだったもん！」
彼女の心の支えになっているのはただ一人の男……坂神蝉丸であった。
月代は再び歩き出した。

蝉丸は焦っていた。
先程の高子死亡の放送以来、ずっと走りっぱなしだ。
『……月代も聞いていたに違いない。一刻も早く月代の元へ……』
「無事でいてくれ、月代！」
彼の願いが天に届いたのだろうか。見慣れた後姿……間違い無い。三井寺月代だ。
「月代！　無事だったか!?」
「(·∀·)!!　……蝉丸！」
「む」
無事ではなかった。

182　死者と、罪、罰、誤解

どのくらいの時間、こうしていたのだろう？
緒方英二の命の灯火は、今まさに、消えようとしていた。襲撃者の銃弾を全身に浴びて、もう動くことさえできない。
（目がかすんで、よく見えない……）
滲む視界の中、ただ女の子が一人、自分を見下ろ

「……それはあなたの罪です。苦しみ続けて、死んで下さい。……それが、あなたに与えられた罰です」
少女の言葉に英二は驚き、やがて微笑みに変わる。
「そうだな……君の言う通りだよ……」
そして時間が流れる。
「帰りたかったなぁ……理奈？」
「……誰かを助けられなかった罪は重いです」
英二の死を看取り、茜は言った。
自分の姿を、英二に重ねて。
祐一に会い混乱していた心も、今はもう、落ち着いている。
少なくとも、自分ではそう思った。
気を取り直し、歩き出す。
「あなたが、お兄ちゃんを殺したの!?」

していのがわかった。
「……痛いんだ……殺してくれないかな、俺を」
途切れ途切れではあるが、それでもはっきりとした声だった。
「……自分から命を捨てるんですか？」
少女が問いかける。
「もう助からないよ。だったら、早く楽になりたい」
笑う。自嘲の笑みだ。
少女は何も言わず、英二に向けて何かをつきつけた。それは銃だったのだが、英二にはわからなかった。
「人一人助けることが出来なかったなぁ……約束破って、すまなかったな……少年」
本当に申し訳なく思う。
「……誰かを守ると、約束してたんですか？」
「……そうだよ……でも、出来なかった」
言うと、少女は銃を下げ、言った。

誰かの叫び声が、その場に響いた。
その声は余韻を残し、やがて森の中に消えていく。
「……誰?」

十二番　緒方英二　死亡
【残り65人】

183　一つの終焉（中編）

隙をついて、一気に間合いを詰める影。
「――!」
弥生が体を向けた時にはもう遅かった。もはや銃を構える暇すらない。雪見が手にしていたのはサバイバルナイフ。遮蔽物が多く、命中率が低いことを考慮して出た行動はこれだった。そしてそのまま脳天に弧を描いて振り下ろされる――!
シュンッ!!
ほぼ同じ速度で割りこんでくる風を切る物体。
「――!!」
幾らかの恐怖と死線を乗り越えてきただけでこんな動きができるのだろうか。むりやり体をよじってひねる。
「ぐぅっ!」
刹那、傷ついた胸に走る鈍い衝撃。そして先程まで雪見の頭があった空間を音速で通りすぎる白い光――弧を描いたナイフはわずかに狙いをそれ、柔らかい地面に突き刺さった。その間、弥生は腰に下げていた凶器をそのまま雪見に叩きつける。
ガシャーン!!
思わず差し出した雪見の左腕が見る間に赤く染まっていく。
「うああっ!」
押し付けた反動で、そのまま後ろに転がり、森の闇へと消えていく弥生――。今、散弾銃は押そうが引こうが弾を撃てる状態になかったからだ。

184　エンジン始動

瑠璃子の殺害後、浩之は再び資材置き場に戻っていた。まだなにかあるのではと思ったのだ。幸い資材置き場には人影はなかった。浩之はそのプレハブ小屋に入ると今後の作戦を考えていた。

――生き残るために他者は全て殺す。

これは絶対条件であった。では誰から殺すか。そう考えた時浩之は今まで殺した人間の共通項を思い出した。そして思った。

――あいつらはみんな女だった。ならばこれからも女を狙えばいい。

男と行動している奴はまとめてダイナマイトで吹き飛ばせばいいんだ。そうと決まれば行動開始だ。

「その前にやらなきゃならないことがあるな」

浩之はそう言うと資材置き場の各所に罠を張った。

資材置き場入り口には、扉を開くと立て掛けてある鉄パイプが倒れてくるように。コンテナ入り口には、やはり扉を開くと上からペンキが降ってくる仕掛けを。そして、各所に落とし穴（底に鉄パイプ付き）を。

これで自分と同じ事を考える奴が来ても得られるものはない。……命を失うだけだ。

罠を張り終わった浩之は体が痛まない事に気がついた。

――体力が戻ってきているんだ。

浩之は資材置き場を後にして再び走り出した。

殺戮者による真の恐怖が始まる――――

185　決別

探し物は、本当に、どうしても必要なときは見つからずに、忘れたころに見つかる、と聞いたことがある。

だとすれば、僕が一瞬でも彼女のことを忘れたか

ら見つけることが出来たのだろうか？
　酷い皮肉だ、と思った。
　不意打ちを受けたのだろうか。一見すると普段と変わらないように見える表情のなかに見える、驚愕と、怯えの影。
　僕はそんな瑠璃子さんの表情を見ているのがとてもつらくて、そっと手で、表情を穏やかなものにしてあげた。
「……長瀬さん」
　声。
　穏やかで、優しさに満ちた、そんな声に僕は呼ばれた。
　僕は、その声の主を知っている。自分の手が穢れるのも構わず、僕と共に歩んでくれる人。
　ゆっくりと、そしてはっきりと、僕はそのひとの名前を呼ぶ。
「……天野さん」

　沙織ちゃんも、瑞穂ちゃんも、月島さんも、そして瑠璃子さんも、みんな死んでしまった。僕のそばに残ったのは、この島に来るまで一度も会った事も無かった彼女だけ。
　無理をして笑顔を作り、彼女のほうに向き直る。無理をしているのはありありだし、結局のところ彼女はそんな僕の心境も全てお見通しなんだろう。
　土を払い、立ち上がる。
「うん、大丈夫……大丈夫。あまりここに、留まるとまずい。そろそろ……行こうか」
　改めて言うまでもなく全然大丈夫じゃない。でも、天野さんは何も言わない。
　正直この場面で慰められても、鬱陶しいだけだ。思いやりに感謝する。
　そして、ゆっくりと、天野さんに近づいて、ぎゅっ、と、その肩を抱いてみた。
　あぁ、我ながらぎこちない動作だ。でも、天野さんはすんなりと、それを受け入れてくれた。

彼女は僕を支えてくれる。心の面でも、カラダの面でも。
最後に、もう一度だけ、後ろを振り返る。
死んだ人間が動くなんてこと、ある筈もないわけで、先ほどと変わらない姿の瑠璃子さんが、横たわっていた。
その目は、こちらを見ているような気がする。勿論それは、気のせいで。
『助けて、長瀬ちゃん』って言ってる気がする。勿論それも、気のせいで。
死んだ人間は、もう二度と、戻ってくることはないし、助けを乞うことも出来るはずはない。
それが、この世のルールだ。
僕が後ろを振り向いたら、瑠璃子さんがいつもの儚げな笑みを浮かべて佇んでいるなんて、そんな事あるわけない。
それでも僕は、振り向いた。それは未練だ。そんなこと、もうこれっきりにしよう。
僕は瑠璃子さんの事を忘れることなんて出来ない。だけど、もう戻ってこない瑠璃子さんの幻を追いかけるようなことをしてはいけない。
だから、さようなら、瑠璃子さん。

「……いこう」
僕らは歩き出す。
その道は、間違いなく、現実。
僕は大切な人を守れなかった。口にした『覚悟』の意味だって薄っぺらいものだった。
だけど、せめて今、僕の隣にいる人だけは。
出来る限りの事をして、守ってやろうと、思った。

186　宝刀、一閃

きよみと別れてから、再びマナは林道を歩き始めていた。こんな時でなければ、この静かな道は散歩

するにも気持ちいいのだろうが、そうでなくても、昨日まで歩いていた森の中に比べればよほど歩きよいと言えた。
(デートコースにもアリっちゃアリよね……一人歩きにはちょっと色気がなさすぎるけど)
まだ痛む足をかばいつつ、何回か休憩を入れながら数時間ゆっくりと歩くと、遠くに大きな建物が見えた。マンション、だろうか——無機質な、四角い建物がいくつか並んでいるようだ。
(住宅街、みたいなトコかしら……会いたい人か会いたくない人かは別として、誰かしらいそうね)
意識せず歩調が速くなるのは、やはり何らかの期待のためか。ほどなく、道の終わりが見えてきた。
林道からマンション街に差し掛かる、やや開けた場所で。
——マナがその姿を認めた時には、既に黒光りするマシンガンの銃口がマナを狙っていた。
(ずっと見られてた……？　だとすればとんだ抜け作っぷりだわ……)
取りあえず両手を上げ、敵意のないことを示してみる。しかし、そんなことをしたところで、相手がゲームの『参加者』であったなら、何の効果もないことをマナは知っていた。
(でも、あんなご立派な武器なんか持ってて、殺す気ならわざわざ姿を見せる理由なんてある？　そうね、殺す前に脅して慰み者にするとか……私を？　む……笑っちゃうわよ)
著しく起伏に欠けた胸元に一瞬視線を落とし、自嘲する。相手に殺意がないことは本能的に感じ取っていたのかもしれない。マナは、思ったよりも自分が落ち着いているのに気づいた。
手を上げたままで、こちらに銃を向ける男——住井護を観察する。全身に葉や折れた枝がくっついているのは、ずっと森に潜んでいたためだろうか。銃口の向こうの強張った表情は、凶器を向けている人間のものと言うよりは何故か向けられている側のそ

れのようにマナには思われた。
（この人も、何かしらドラマを体験してきてるんでしょうね……）
それも、決して愉快なドラマでは有り得ない。マナは目の前の見知らぬ少年に悲しい同情を感じた。
と、住井がゆっくりと口を開いた。
「人を、探している」
声が上ずっていた。自分でもそれに気づいたのだろう、少し呼吸を整えてから、再び言う。
「人を探している。女の人だ。美人で優しい。髪の毛はそれほど長くなくて、背は普通くらいだ。デニムの服を着ている」
それだけ一気にまくし立て、返答を促すような素振りを見せる住井に、マナは内心で呆れていた。
（この人、かなりキテるわね……そんな説明で本気で人が探せると思ってんのかしら）
そんなことを思われているとはつゆ知らず、住井はあくまで必死だった。
「似た人を見かけたとかでもいい。何か知ってたら教えてくれ。俺が、絶対に護らなきゃいけないんだ……美咲さんは」
最後の言葉はほとんど自分に言い聞かせているような調子だったが、その小さな声はマナの耳にも届いた。
「美咲さん？」
「知ってるのか⁉」
思わず繰り返した言葉に、住井は掴みかからんばかりの勢いで詰め寄ってくる。眼前にアップで迫る銃口が、怖い。
「あなたの知ってる人がどうかは知らないけど……澤倉美咲って人なら先輩にいるわよ。ちょうどあなたが言ったような感じの人」
「さわ……っ！　澤倉だな⁉　澤倉の美咲さんなんだな⁉」
「ちょっと、唾が飛ぶわ……そうよ」
住井の顔がみるみる喜色に染まっていく。マシン

ガンを取り落とし、パキッと指を鳴らした。
「お嬢ちゃん、君に逢えて本当によかった！　それで!?　美咲さんはどこにいるんだ!?」
「落ち着きなさいよ」
小躍りして全身で喜びを表現する住井に、マナは冷めた口調で言った。
「あなたが知ってるその美咲さんは、多分私の知ってる澤倉先輩だと思う。でも、ここに来てからは見てないし、どこにいるかなんて知らないわよ。だいいち先輩がここに連れて来られてたなんて今の今まで知らなかったんだから――」
「んなっ……！」
住井は素早い動作でマシンガンを拾い上げた。
一度掌のなかに捕まえた希望の感触は、消えてしまうことでより激しい感情の渦に住井を投げ込むことになった。
「畜生、知らないなら知らないと最初から言え！　この――」
激昂した住井が吼えた。ただの勢いか脅しか、それともパニック状態に陥っていたのか、拾い上げたマシンガンの銃口をマナに突きつける。マナの背筋に冷たいものが走った。
殺人者とその被害者にもなり得た二人の関係は、その瞬間に住井が発した一言で大きく転換した。
「この――クソチビ！」
殺されるかも、とかそういうことを一切抜きにして、先に身体が動いていた。条件反射だった。
突きつけられた銃身にすっと手を伸ばすと、住井があれっ、という顔をしている隙に、思い切り九十度左に捻る。ごきっ、と嫌な音がした。
「ぐえっ！　ゆ、指がぁ！」
「誰がクソチビよ……」
――どいつもこいつも、さっきの女だってそう、どうしてこうも人を馬鹿にした口を叩くんですか。
そりゃあ確かに私は背も低いし胸も小さいし全体的に女性として魅力的な身体の持ち主だとは思ってま

せんよ。だから、まぁ、私自身スタイルのいい女性に憧れる気持ちがないわけでもないし、百歩譲ってあの女に言われるのは許すとしても……許さないけど、ともかくこんな軽そうな割にモテなさそうみたいな、しかも初対面の奴にチビ呼ばわりされる筋合いは全くないと思うんです——
　以上の思考を瞬時に回転させた結果、しなる鞭のようなマナの細い足はほとばしる怒りのままに唸りをあげた。
「このっ……三枚目！」
「————ッ！」
　伝家の宝刀、必殺のローキックが指を押さえて悶える住井の脛に見事クリーンヒットした。鋭い痛みに言葉を発することもできず、住井はその場に倒れ込む。
「きょうびの男は女の子にマトモな口もきけないわけ？　世も末ね」
　激痛にのたうち回る住井を見下ろしながら、マナは地面をつま先で軽くトントン、と叩いた。

187　一つの終焉（後編）

「楽しめたかしら？」
　石原麗子は余裕の表情で雪見を見上げた。すでに傍らのボウガンに矢はついてはいない。彼女の足は先の被弾で立ちあがれない程のダメージを負っていた。
「——そうね。どうして生きてるのか不思議なぐらいよ」
　雪見が片腕でライフルを構え、一歩一歩、麗子に歩み寄る。彼女の左腕は先が真っ赤に染まり、血が地面にまで滴っていた。罠はまだ左手に噛みついたままだ。取るまでもない。感覚がないのだから。胸の傷もじくじくと雪見を蝕む。まさしく満身創痍という言葉がぴったりだった。
「最後に一つ聞かせて」

雪見は、麗子の胸の真上からライフルを押し当てる。
「川名みさき、上月澪……この両名に聞き覚えは？」
まるでそれは日常会話のように。
「放送で流れたコ達ね……知らないわ。それに、私はまだ一人も殺してないもの」
当たるはずの矢が当たらない。かろうじて最後の一発の矢が狙い通りだったぐらいだ。結局よけられてしまったが。
「そう」
短い答え。麗子は余裕の表情を崩さない。
「あなたは、なぜ戦っているのかしら？」
「……」

五十年前……この孤島で殺戮ゲームが行われた。
それがたぶん第一回目の狂気。
誰もいない無人の廃屋でぶるぶると震える少女。
『いたぞ。へへへ、上玉じゃねぇか……殺す前にいただいちまうか……』
『いや、いやぁっ！』
悲鳴をいくらあげようともやむことの無い凌辱の宴——気がついたら、拳銃を片手に、血まみれで立ち尽くしていた。それがたぶん最初の殺人。狂気の始まり。

「せいぜいがんばるのね。お嬢ちゃん」
「言われなくても……ね」
ライフルを地面に放ると同時に、サバイバルナイフをふり上げた。
(まあ、死ぬときはあっけないものよね)
麗子が薄く笑う。そして——
石原麗子、何が望みで何が目的で……それはもう、おそらく誰にも分からない。

六番　石原麗子　死亡

【残り64人】

188　結界の攻防

　スフィーは到着と同時に、流れ出る魔力をかき集めながら芹香の背中を叩く。
「三分耐えて。リアンを連れ戻すから」
　芹香はコクンとうなずくと、結界の強度を増した。
「何で連れ戻すのよ！」
　綾香がスフィーにくってかかるが、スフィーはそれを相手する時間も面倒だと言わんばかりに怒鳴りつける。
「結界内の力が強すぎるからよ！　リアンじゃ無理だし、今の私でも無理！　この子に対するにはそれなりの準備と時間が必要なの！」
　そう言いながら呪文詠唱に入ったリアンを南が眺め見る。
「――なるほど。そういう事」
　南の呟いた言葉を聞き取れたのは、すぐ側にいた佐祐理だけだった。
「三分で戻るわ。戻らなかったら私達二人は見捨てて、ここから待避して」
　そういうと、スフィーはリアンに寄りかかるように倒れ込んだ。みるみるうちにスフィーの体がしぼんでいく。魔力＝体力と言わんばかりに。
「芹香姉さん大丈夫？」
　綾香の問いかけに対して芹香は汗を流しながらコクンとうなずくだけだ。その瞬間も神奈備命からの攻撃は一向に止まない。
　約束の三分が経過しても、リアンとスフィーは未だ意識を取り戻さなかった。
「舞!!!!」
　バリーーーン
　佐祐理の悲痛な叫び声と同時に――状況は一変した。牧村南が懐から手裏剣を投げつけるのと、芹香が保っていた結界がはじけるのはほぼ同時だった。
　南の投げた手裏剣は舞の体に向かい突き刺さったか

に見えた。
「ぽんぽこタヌキさん！」
舞はそう呟くと南に向かって一気に詰め寄る。
「あれを捌ききれるの⁉」
南は捨て台詞を吐きながら一気に後ろへ飛びすさりながら手裏剣を投げつける。狙いはリアン。同時に四枚投げつける。そのうち二枚を舞が弾き落とし、一枚を綾香が踵ではじき返すが、最後の一枚がリアンの腕にグサリと突き刺さる。だが、リアンはピクリともせず、ただ刺さった部分から紅い血が流れ出す。
「あなた！　どういう了見なの⁉」
怪我をしたリアンを抱きかかえながら、綾香は南に向かって怒鳴りつける。
「ふふ。内緒です……よっと」
舞の繰り出す竹槍を身軽にかわしながら南は綾香の問いかけに答えを返す。そして、そんな最中、暴走した神奈の光弾が、あたり一面に降り注ぎ始めた。

芹香は必死に断片的な防壁を形成してスフィーを守り続ける。
「うわったったったった！　舞さん。姉さん！　これ以上ここにいるのは無理よ、早く逃げて！」
綾香の問いかけに首を振る芹香。しかし、そんな芹香を捕まえて一気に走り出したのは芹香が守ろうとしたスフィーだった。
元の身長から比べると三分の二程度になってしまったろうか、見た目すでに小学生という状態までスフィーはしぼんでいたが、それでも芹香と自分を守る結界をかろうじて張りながら、一気に山を下る方向へ走り始めた。
「遅れてゴメン！　この山を下った所に小屋があったからそこで落ち合おう！」
綾香はスフィーの言葉にうなずき、スフィーとは別の方向へ下っていった。綾香の腕に抱きかかえられていたリアンは苦しげな息をもらしながら、未だ気を失っている様だ。

他の人も気になるけど、今の優先順位はこの子を安全な場所で診ること。綾香は自分で自分に言い聞かせ、一気に山を下る方へ走っていった。

「あとで山を降りたところで落ち合いましょう！　絶対来るのよ！」

気を失ったリアン（九十番）を抱えて駆け去る来栖川綾香（三十六番）の声に、川澄舞（二十七番）は頷くことで答えた。

言葉を返す余裕はない。

「舞さん、すみません。せめてあなただけでも片付けないと……運営スタッフって、意外と大変なんですよ」

その呑気な口調とは裏腹に、牧村南（八十番）の手から繰り出される手裏剣は、正確な狙いで確実に舞を追い詰めていく。

ひとつ、ふたつ、みっつ。

飛ぶ虫を払うかのようにそれらを打ち落とすも、竹槍ではやはり分が悪い。

あと幾つだろう。向こうの手持ちが尽きれば、まだ勝算はあるのに――

「佐祐理、早く逃げて！　私は死なないから。必ず会いに行くから！」

後方に取り残された佐祐理へ叫んで、舞は一気に間合いを詰めた。攻撃を引きつけるためだ。

――自分が囮になる。

これしか全員を逃がす方法はないと判断した結果の、捨て身の戦法。

向かってくる無数の手裏剣をぎりぎりのところで叩き落とし、なんとか時間を稼ぐ。

辛うじて、と評するのがふさわしい、そんな戦い方だった。

「皆の所へは、行かせない……！」

呼吸を乱しもせず、毅然と言い放つ舞。

「あらあら、美しい友情」

竹槍一本でお見事ですね。微笑んで、南が懐から

「よそ見したらいけませんよ、舞さん？」
二本めの短刀を片手に携えた南は、逆に攻勢を激しくしていく。
動揺した舞が社の壁際に追い詰められるのに、そう時間はかからなかった。
「く……！」
刃を無理に受け止めようとした竹槍がすぱり、と切れ、半分以下の長さになる。
絶対的に不利だ。ここはなんとか退くしかない、だけど佐祐理を置いてなんていけない……！
必死で刃の軌道から身をかわしながらも、舞は逡巡していた。
この女性が豹変したとき、初めに無理にでも遠ざけるべきだった。
私のミスで、佐祐理が傷ついた――
その後悔は焦りを呼び、手元を狂わせる。
にこやかな表情を崩さぬまま斬りかかってくる南の刃が、舞の胸を軌道上にとらえた、
脇差を取りだす。
「だけどね、こういうふうにも――使えたりもして」
気づいたときには、遅かった。
竹槍が右手の脇差しを弾くより早く、それは投げ放たれていた。
……倉田佐祐理の居る、方向へ。
ざっ、と。
嫌な音がした。肌を裂く音がした。
「誰でも良いんです……ただ、数を減らせばいいだけ」
「佐祐理ッ!!」
南の呟きと舞の叫びは、ほぼ同時だった。
だが、舞は振り返れない。振り返れない。
倒れ込む佐祐理の姿がありありと想像できるのに。
今すぐにでも駆け寄りたいのに。
だけどこの女性が――そうさせてくれない。

まさに、その時。
「武器、捨ててくださいね」
「……っ……」
舞の身体から、血液は吹き出してはいない。
がさり、と草に何かが擦れる音。
今度は逆に完全に不意を突かれ、南が短刀を取り落としたのだ。
そして舞がその瞳にうつしたものは。

南の胸に、銃口を合わせた佐祐理だった。
「舞に、ひどいことしましたね？　しましたよねーっ？」
腹に。続いてふたたび胸に。今にも火を噴きそうなデザートイーグルの銃口が、向けられている。まるで確認するように。
その右足は血に染まっているのに、微塵も痛みを感じていないかのように、笑みさえ浮かべながら。

学校で魔物と対峙していた自分と同じ、冷たい瞳で。
「佐祐理は、許しませんよ」
「やめて……やめて、佐祐理」
「どうして？　このひとは皆を殺そうとしたんですよ？　……何より、舞のことを」
「分かってる、分かってるけど……佐祐理、」
怖い、とは言えなかった。きっと佐祐理が傷つくから。
だけど佐祐理の目は尋常ではない。
何の色も見えないような、凍えそうな目は、今までに見たことがない――――
そう口に出しかけて、寸前で言葉を飲み込んだ。だめだ。
それを言ってしまえば、たぶん佐祐理は壊れてしまう。
「いいですか？　三つ数えるうちに、武器を捨ててくださいね。でないと全弾撃ち込みますから」

確信に近い直感で、舞は声を喉で殺した。
「ひとつ」
引き金にかかった指に力が込められるのが見えた。
「ふたっつ」
すう、と佐祐理の目が細まる。
「みっつ」

「……バカにしないでください」

ほぼ同じ瞬間、銃声が響き渡り、南が隠し持っていた手裏剣が佐祐理の肩を掠めた。
「もう、私は行きますね。色々調達しなくちゃいけないものが増えたみたいです」
真っ赤な血。佐祐理の血。また怪我をさせた。混乱が止まらない、止まってくれない。
そして涼しい声で笑う南は、無傷だった。
この人はプロだ。動きが違う、速い。だからきっと佐祐理が銃を撃つ予備動作でバレた。

だって佐祐理は普通の女の子だ。自分とは違う。やさしくて料理上手でおしとやかでずっとうらやましくて、こんな、こんなに重そうな銃なんかまともに使えるはずがない。
「行かせません……あなたは、舞を傷つけた罰を受けるんです……っ！」
「駄目、駄目だ佐祐理！　動かないで！」
これ以上動くと、傷口がどんどん広がってしまう。
半ば怒鳴るようになった舞の叫びに、佐祐理はびくりと顔を向けた。
その隙を見逃すはずもなく、南が森の奥へと姿を消してゆく。
スフィーたちが逃げていったのとは逆の方向だったが、油断は出来なかった。
だが。
「……手当が、先だと思う」
「そうだね……でも、佐祐理は大丈夫だから」
「大丈夫なわけない。右足の傷、血を止めないと」

言って、舞は自分のデイパックからタオルを取りだす。包帯替わりにするつもりなのだろう。
「ごめんね舞、足手まといになっちゃったね……」
「謝らなくていい。いいから、動かないで。私は佐祐理に無理をされるのが一番悲しい」
「舞……」
「佐祐理の、ばか……っ！」
血と土で汚れた制服を掴んで、舞は嗚咽を繰り返した。
「うん……佐祐理は、ばかだよ」
「……ばか……」
「だけど、守ってくれてありがとう……」

だがしかし、彼女たちはまだ気づくはずもない。
南の手裏剣に遅効性の毒が仕込まれていたことに、経験の差はあれど女子高生が気づけるはずもない。
処置が終わる。舞が顔を上げる。佐祐理も気丈に痛みを押し隠しながら、その視線を追う。
――空が白み始めていた。

189 カナシミの深さ

それは、住井がマナと会う少し前の出来事。
叶わなかった約束。結果。

＊

嘘だ…………
嘘だ、嘘だ…………
「嘘だあぁぁぁぁぁぁ!!」
美咲さんが死んでいる。
美咲さんが……
ミサキサン……

そんなこと……
あっていいはずないじゃないか……

だがそれは自分のせいで。
自分が別れたから、結果的に美咲さんを見殺しにしてしまった。
その事実が、俺には耐え切れなくて。

そうだ……。
こんなバカなこと、あるわけないじゃないか。
……はっ、俺も疲れてるんだ。
そうだよ、あれは幻覚だ。幻覚なんだ。
ほら見ろ、目の前には何も、何もないじゃないか。
昏い昏い、『何か』があるだけだ。
どこにいるんだ、美咲さん。
待ってろ、絶対、探し出してやる！
そしてあの男……見つけたら……殺す。

間違っていることはわかってても、事実の前には、理性はあまりにもちっぽけで。
俺は、心を閉ざした。
それが、俺の最後の思考。

＊

それは、住井がマナと会う少し前の出来事。
自分を、殺人者を、何もかも認めたくなくて、
精一杯の強がりを放棄して、
記憶からなかったことにした出来事。
そして今、住井はこうして、観月マナに捕らえられている。

190　哀に時間を

何処から、私はこうなってしまったのだろう？

——死のうとしたときだっただろうか？
「死にたいのに……」
太田香奈子は、死ねなかった。
これで終わってしまうと考えると、どうしても足が竦んでしまい、断崖絶壁からの最後の一歩を踏み出すことが出来なかった。
「瑞穂……ごめんね……」
からっぽになったはずの心がきりきりと痛み、涙が何故か溢れた。
ここにはもう瑞穂はいないのに。
あの人はきっと振り向いてくれないのに。
どうして、私は生きようとするんだろう？
何処から、私はこうなってしまったのだろう？
——あの娘を襲ったときからだろうか？
「弱肉強食。簡単な自然の摂理よね」
そう言って、けらけらと香奈子は笑う。
「……わかりました」
名も知らぬ少女は顔を伏せたまま静かに返す。
「あなたがあの人を殺そうというのなら」
少女はぐ、と両の拳に力を込め、すっと流れるような動作で構える。
「この私が、お相手します」
「……ふ。ふふふふ……」
笑いがこみ上げた。
——さぁ、ここからは狂気の領域。
理性の鎖を断ち切って踏み込もう。
瑞穂の居ない現実を捨てて。
あの人に愛されない現実を捨てて。
目の前の少女を生贄に。
つまらない現実を離れ、そのすぐ裏側にある別の世界の扉を開こう。
「……格闘家の拳って、人を殺せるのかな？」
出来るなら、手伝って？

私が幸せになるために。

何処から、私はこうなってしまったのだろう？
――月島瑠璃子。彼女との再会からだろうか？

「瑠璃子……さん？」
生くことも、逝くことも出来ずに、膝を抱えて蹲っていた香奈子に声をかけたのは、恋焦がれるあの人の妹――月島瑠璃子だった。
「久し振り、だね」
そう言ってくすくす笑う彼女は、この島に来る前と何ら変わりがなかった。
――それが少しだけ、怖かった。
「香奈子ちゃんは、ひとり？」
「う、うん。……瑠璃子さんは？　月島さんと一緒じゃないの？」
香奈子の問いに、瑠璃子は首を振る。
「じゃ、じゃあ、月島さんを探さないと。ほら、月島さん、きっと瑠璃子さんのこと心配してるよ？」
言ってて、香奈子は自己嫌悪に陥る。
私はあの人の何なんだろう？　……心の奥底で、何やらどろりとしたものが渦巻いた気がした。
だが、香奈子の呼びかけに瑠璃子は首を振る。
「だめだよ。……だって私は、〝お仕事〟しないといけないから」
「……お仕事……？」
呆けたように呟く香奈子に、くすくすと瑠璃子は笑いながらこう言った。
「そう。香奈子ちゃんを、助けてあげる」

何処から、私は演じてきたのだろう？
――殺人を犯す異常者に、いつから？

切り刻む。切り刻む。切り刻む。切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む切り刻む。
弱いモノを切り刻む。

自分の心を切り刻む。
それはとても、ぞくぞくした……！
ざくざくと音を立てて目の前の彼女が壊れてく。
がしゃがしゃんと音を立てて私の心が壊れてく。
壊れてしまえ。何もかも。
反応を示さなくなった彼女の身体。それでも私は破壊衝動が抑えきれず、彼女の心も砕いてしまう。
「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？
そうなんだよね？
――セイギノミカタ、さん？」
モノに成り果てた彼女にそう囁いたときに、私は何て酷い人間なんだろう、なんて思ってしまった。
何処まで、私は救われるのだろう？
――月島瑠璃子。彼女は私を救ったのか？

「さっき香奈子ちゃんは言ってたよね。もう、死にたいって」
「……いや、それは……」
「言ってたよね？」
その静かな迫力に、香奈子は思わず頷く。
「……う、うん」
「……だったら、殺せばいいんだよ？」
「え？」
「香奈子ちゃんが死ぬのと、他の人が死ぬのって、ひとりぼっちになるって意味では一緒だと思うんだ。……違う？」
「……」
「ここから誰もいなくなれば、香奈子ちゃんは死ぬ必要はなくなるよ。だって、孤独に死んでいくのと孤独に生き続けるのって同じなんだよ。違う？」
違う――と、思う。自分の倫理観やら何やらが総動員で警鐘を鳴らしている。
――でも。

「そう……かも、しれないね」
香奈子のその言葉に、瑠璃子は微笑んだ。

何処まで、私は幸せだったのだろう？
——いや、そもそも全ては不幸だったのでは？

「幸せになる？」
「そうだよ。それが、香奈子ちゃんの幸せ」
彼女の話を聞きながら、私はねっとりとした夢の中へ落ちていく。
今日も学校へ行く。
今日も学校へ行く。
……。
今日は学校には行けない。
人を殺さないといけないから。
弱い奴を殺さないといけないから。
だから、今日は人を殺す。
苦痛が支配するのか、快楽が支配するのか。

永久に形の定まらない混沌の世界かも知れないし、ただ果てしない虚無だけが広がる闇なのかも知れない。
——そんな、狂った精神の世界。
今日は、私はそこへ行く。
……。
親友を失い、恋人をも失いかけて。現実に絶望し死を選ぼうとした太田香奈子をそこへ導くために、月島瑠璃子はそっと囁いた。
「そう……これが、香奈子ちゃんの幸せ」

何処まで、私は演じていたのだろう？
——いや、そもそも私は演じたのか？

「人殺しはいけないなんて言ってたけど、あなたは私に鋏を向けて、刺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたでしょ？
殺そうとしてたよねぇ？

そうなんだよね？
——セイギノミカタ、さん？」
モノに成り果てた彼女にそう囁いたときに、私は何て酷い人間なんだろう、なんて思ってしまった。
嘘だ。
そんなことは思いはしなかった。
本当に？　——本当に。
本当に、人を殺す快感に、酔いしれてました。
何処まで、私は現実を見ていたのだろう？
——これは、何時の、何処のお話？

「香奈子ちゃんが死ぬのと、他の人が死ぬのって、ひとりぼっちになるって意味では一緒だと思うんだ。……違う？」
「……」
「ここから誰もいなくなれば、香奈子ちゃんは死ぬ必要はなくなるよ。だって、孤独に死んでいくのと孤独に生き続けるのって同じなんだよ。違う？」
「違う……と、思う」
その言葉に瑠璃子は、残念そうにぽつりと呟く。
「そう。……じゃ、瑞穂ちゃんはのたれ死にだね」
「……なんですって？」
香奈子が思わず気色ばむ。
「瑞穂ちゃんは、親友の香奈子ちゃんに捨てられて惨めな一生を終えてしまったんだね。何の意味も無い、無様な死に様だったね？」
「やめて！　幾らあなたでも、瑞穂を侮辱することは許さない！」
「だったら、香奈子ちゃんがやるんだよ？」
何処まで、私は現実にいたのだろう？
——狂っているの、私の過去と現在と未来が？
「でも、私には人を殺せるだけの力が、無い」
持っている武器といえば赤旗だけだ。これで相手

を殴り殺す？　馬鹿らしい。
香奈子の言葉に、くすくすと瑠璃子は笑う。
「じゃあ、自分より弱い人を殺そうよ」
「え？」
「強い人を殺そうとするからだめなんだよ。香奈子ちゃん、弱肉強食、って言葉知ってる？」
うん、と香奈子は頷く。
「それと一緒だよ。私たちは強くないから、強い人に殺される。だったら、私たちより弱い人を殺していけばいいよね？」
——ああ、そうだ。
そんな簡単なことに気付かなかったなんて。
何処から、私は殺人者になったのだろう？
——何処で、引き返せなくなったんだろう？
瑠璃子はデイパックをごそごそと探ると、中から布に包まれていた鋏を取り出した。
「これは？」
受け取りながら、香奈子はそれをちょきちょきと切る真似をする。
「気をつけてね。その鋏、毒が塗ってあるんだ」
「毒？」
ぴたりと、持つ手が止まる。
「そう。傷口に入れれば、三十分で死んでしまうよ」
毒と聞いて躊躇する香奈子。
「大丈夫だよ。私が解毒剤を持ってるから」
瑠璃子の言葉に、香奈子はほっと安堵する。
なんだ。解毒剤があるのなら大丈夫だ。
「あの……その解毒剤、私に渡してくれない？」
しかし瑠璃子はその願いを拒否する。
「他にも毒を塗った武器を渡した人がいるんだよ。だから、私が持ってないと。ごめんね」
何処まで、私は私だったんだろう？
——私は、幸せになるんだよ……ね？

「でも……どんなに足掻いたって、香奈子ちゃんは幸せにはなれないんだけどね」
そう呟くと、瑠璃子はくすくすと笑った。
その視線の先には、頼りない足取りで進んで行く香奈子の背中があった。

何処まで、本当ですか？
——私は、どうなったのですか？

やがて。いつの頃からか私は、世界から音と色彩が失われてしまっていることに気付く。

何処かに、私はいますか？
——おかしいんです。私が私で無いようで。
どれが真実で、どれが虚構で。
どれが私で、どれが他人で。
どれを殺して、どれを生かして。
何をどうすればいいのかがわからない。
ああ、わたしは、なにを、どうすれば——？
教えてもらおう。
月島瑠璃子に。
殺してしまおう。
月島瑠璃子を。
あれ？
わたしは、なにを、どうすれば？
なには、どうなって、わたしを？
セイギノミカタをころして、そして？
だれをどうすれば？　なにをどうすれば？
よかったんだっけ？

何処かに、私はいますか？
——私は、私を探しています。
私が死ねないんで、殺してあげないと。

月島瑠璃子を探さなきゃ。
殺さないと。
太田香奈子を探さなきゃ。
殺さないと。
次の獲物を探さなきゃ。
殺さないと。
弱いやつを探しに行こう。
殺さないと。
自分を、瑠璃子を、弱い奴を、誰を？
殺さないと。
月島瑠璃子を――。
殺さないと。

何処かで、私は――。
――死なないといけないのでしょうか？

「いひぃいひぃいひぃ……」
ほら、おかしいでしょ？

だから、殺さないと。
「ころしたころしたころしたころした……」
ああ、もうダメですね。
死んだほうがマシです。
早く殺してください。
早く死んでください。
転がり落ちるんですよ。
このまま、ごろごろとどこまでも。
――ああ、もう見てらんない。
どうせ、ロクな死に方しませんから。
もう、目を背けていいですか？
私は。
私は、こんな私が――嫌なんです。
だからどうか見ないで。
だからどうか見せないで。
私を私と思わせないで。
こんなの違う。
信じてください。

私は、狂ってなんかいない普通の――。
「コロシタノコロシタノヒフフヒヘ……！」
違う！
違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！
こんなの、私じゃない！
私は普通の、普通の……っ！
殺さなきゃ！
こんなの、私だなんて思われたくない！
早く、早く殺さなきゃ！
違うんです！
こんなの私じゃない！
信じて！　信じてください！
殺さなきゃ！
早くこいつを殺さなきゃ！
早く私を殺さなきゃ！
――こんな私は、きっと嫌われる！
何処かで、私を――。

私を、見ませんでしたか？
きっといると思うんです。
こんな狂人じゃない、太田香奈子が。
――ああ、そうだ。
瑠璃子さんに聞けばいいのか。
彼女なら、きっと教えてくれる。
私が、どこにいるのかを。

――。
きっかけは、相原瑞穂の死だったのか。
それとも、月島瑠璃子との接触だったのか。
いや、松原葵を襲った時か。
――きっと、全てが原因なのだろう。
暗闇の中、刃をどす黒く染めた鋏を握り締めて少女が歩いて行く。

――崩壊へ。

191　崩壊、そして死

「いひぃいひぃいひぃ……」
　香奈子は彷徨いながらどこをどう歩いたのか住宅地に来ていた。右手には毒の塗られた鍬を持ち足取りはおぼつかない。時々口から奇声を発しその場でケタケタと笑い出す。
「ころしたころしたセイギノミカタタタタコロシタノコロシタノヒフフヒヘ」
　香奈子の精神は松原葵（八十一番）を殺害したのを境に崩壊の下り坂を転がり続けていた。月島瑠璃子（六十番）と再会できなかった事もその崩壊に拍車をかけていた。
　やがて角を曲がりそこで見た血溜まり、そして導かれるようにフラフラと入っていった民家の一室に転がる瑠璃子の死体――
「イヒィィィーッ瑠璃子瑠璃子瑠璃子瑠璃子るりこルリこーッ!!」
　それが彼女の口にした最後の言葉だった。
　……しばしの沈黙。そして……
　あとには瑠璃子の死体に重なるようにのどに鍬を突き立てた香奈子の死体が転がっているだけであった。

十番　太田香奈子　死亡（自殺）
【残り63人】

192　何も変わりません

　時間は遡る……
　金だらいネタ爆笑後、かなり移動した三人は巡り巡って水場の上の高台まで登ってきていた。周辺に人の気配はなく、見晴らしがいい。こんな情況でなければ風流と縁のない彼らであっても、景観に酔いしれたかもしれない。

しかし、ここにいる約一名だけは何か違うものに酔っていた。いや、むやみに興奮してるというのが適切かもしれない。
「七瀬！　七瀬ッ！」
浩平が喚き、手招きする。
「なによっ、少しは休ませなさいよ！」
七瀬がいつものように肩を怒らせて応じる。見張りのはずの浩平は水場ばかり熱心に見つめていたのである。
そこには、小さな女の子がいた。頭頂部にぴょこんと立ったクセ毛が愛らしい。でもそれだけで、特に不思議はないし——知り合いでもない。
凶暴そうでもないし、味方になってもらってどうこうというガラでも、なさそうだった。
「……あのコが、どうしたってのよ？」
拍子抜けた不満を隠さず七瀬は尋ねる。
「チッチッチッ……甘いな、甘いぞ七瀬」
浩平はご満悦の様子だ。
（どうせまたヘンなこと考えてるんだよ）と遠くに瑞佳の声援（？）を受けて、七瀬は腕を腰に当て少しだけ首を捻り浩平の言葉を待つ。
「あれを見ろ」
視線の先には先の女の子が——その手にハリセンを持って——立っていた。
「ﾊｧ(ﾟДﾟ)？」
情けなさそうな顔をして首の角度を更に横倒しにする七瀬。
「ハリセン？　……が、どうしたのよ？」
「あれこそ七瀬、お前の為にある武器じゃないか！」
こぁん☆
「バッカじゃないの！　あんたは！　ハリセンでなにしようってのよ！」
「いや、だからツッコミはハリセンで……」
浩平の発言は金だらい連打によりキャンセルされまくった。そんな中でも「少なくともあの娘よりもお

前に相応しいぞ」という発言のみ明瞭に響き渡り、怒りに火を注ぎまくった。
「はぁ、はぁ……」
肩で息をする七瀬。
「ぜぇえ、ぜぇえ……」
頭部が歪んで見える浩平。
（自業自得だよ、浩平……）
背中が煤けて見える瑞佳。
「わ、わかった七瀬。ハリセンは諦めるから作戦第二弾だ」
「……めげないわね。言うだけ言ってみなさいよ」
「その金だらいを投下して、あのコを攻撃しろ。古来より金だらいは天から降ってくるツッコミグッズであってな――」
こぁん☆
勿論、浩平の提案は最後まで口にされることなく却下されたのだった。

193　お姉さんなんだよもん

「ぴろー、ぴろー！」
最大限にまで振り絞った声が島中に響き渡る。沢渡真琴と椎名繭はぴろを探しながら歩いていた。自分達のやってる行為が、どれほど危険なことかも理解してはいない。
「あうー、全然見つからないよー、何処行ったんだろう？」
真琴はふぅと溜め息をついた。
「みゅ～」
繭も探し疲れたのか、へたれ気味である。
「もう、疲れちゃったよ～」
泣き言を吐きながら、そのまま近くの木に寄りかかった。そのとき、『カカカッ』と聞きなれない音が耳元で聞こえた。振り返ってみると、その寄りかかった木に釘が数本刺さっているのが見えた。

「何これ？」
真琴は最初はわけが分からなかった。どうしてこんなとこに釘が刺さっているのだろうと不思議に思うだけだった。するとまたすぐに『カカカッ』と同じ音がして釘の数がさらに増えた。そうなってから始めて、自分達が狙われてることに気付いた。
「うわっ！　あぶないじゃない‼」
と叫んだとき、真琴の右手には釘が刺さっていた。
「って、いったーい！」
なおもまだ釘は飛んでくる。その狙いはだんだんと真琴の体の中心に近づいてきている。
「うわわっ、えーっとこうゆう時は漫画で見たように……逃げるのよっ！」
そう言うが早いか繭の手を握り森の中へと走りこんでいった。
「ちっ、もう少し近づかないとこいつは命中率も殺傷率も悪いな」
目標が遠ざかっていく方向を確認するために、茂みから姿をあらわしたのは藤田浩之であった。
「何も反撃してこないってことは、あいつらたいした武器は持ってないってことか？　まあせっかく見つけた獲物だ。逃がすわけにはいかないな」
武器を持ち替え、弾が装填されていることをきちんと確認する。
「さて、行くか！」
そう呟いて繭と真琴の跡を手負いとは思えぬ動きで追いかけ始めた。
「な、なんなのよ、あいつ！　包帯ぐるぐる巻きのくせに全然元気じゃない」
「みゅ〜♪」
必死で逃げる真琴に対して、繭は鬼ごっこでもしているのかと思われるぐらい、無邪気に走っているだけだった。そんな繭の顔を見ながら真琴は心を決める。
「そうだ、真琴はお姉さんなんだもん！　絶対守っ

てあげるんだから！」
　そう叫んでから引っ張っている繭の手をいっそう強く、ぐっと握り締める。
「みゅぅ、いたい」
「そんなことよりもっと速く走りなさいよ！　あいつに捕まったらおしまいなんだから」
　しばらく走りつづけると周りを木で囲まれた森は終わり、深い谷が二人の行く手を遮った。後ろを振り返ると包帯に巻かれた男が確実に近付いてきている。
「ど、どうしよう……あっ！」
　おろおろとあたりを見まわしていると吊り橋らしきものが真琴の視界に飛びこんできた。
「あれを渡ってから落としちゃえば、あいつは追ってこれないじゃない。わたしってばてんさーい！」
　これで逃げ切れると思い嬉々として吊り橋に近づいてみると、それはもうすでに橋としての機能をなくしていた。そこは雪見VS由宇&詠美戦によって崩された後だったのだが、無論そんな事を真琴達は知る由もない。
「うそ……」
　一気にテンションの下がる真琴。追っ手を引き離すどころか、逆に追い詰められたことに気づき愕然とした。周りを見渡してみても、まともに人が隠れるような場所はない。たとえ、隠れたとしても少し探せばすぐに見つかるようなところばかりである。
　真琴は覚悟を決め、突然繭の手を引いて木の陰に隠れるように座らせる。
「いい、ここから動いちゃ駄目だからね♪」
「みゅーっ♪」
　真琴はとびきりの笑顔を見せながらそれだけを言うと、近くにあったそれなりに大きな石を持ち上げ、崖の下に放り投げた。
　それと同時に浩之が森を抜け出てくる。
『ザップーン』
　水に何かが飛び込む音。

「はー、はー、どうも、まだ体が本調子とはいえねえなぁ」
まだ息を乱しながら、浩之が銃を構える。
「だったら追いかけてこなけりゃいいじゃない！」
「まったく、そのとおりだな。だけどな、俺はこんなことさっさと終わらせて家に帰りたいからな。さっさと俺以外の奴に消え去って欲しいわけだ。で、もう一人のほうはどうした？　まさか、川に飛びこんだのかよ？　なかなか勇気のある奴だな」
真琴は黙って浩之を見つめている。
「おまえはどうするんだよ？　撃たれて死ぬか、飛び降りて死ぬか。どっちかは選ばせてやるよ」
「あんたなんかに殺されてたまるもんですかっ！」
そう言い放ちながら、パチンコを浩之目掛けて撃つ。体は崖に向かってジャンプしている。
放たれたパチンコ玉は浩之の左眼に命中する。
「痛っ！　てめっ！」
左眼をおさえながら真琴の落ちていく崖下に銃を乱射する。
『ザッパーン』
そして再び水に大きな物が落ちる音。
「くそっ！　どこだ？」
しかし、真琴が飛びこんだことによって出来た大きな波紋は、すぐにその急な流れにかき消され、見えなくなってしまう。
そして真琴が水面に顔を出すこともなかった。
「ちっ！　狐の最後っ屁って奴かよ……あれ？　狸だったかな？　まあ、この流れじゃ助かるのは難しいだろ」
拳銃を懐にしまいながら、崖から離れる。
「それにしても、これで何人目だ？　意外とやれるもんだな。あかりが知ったらどんな顔するかな？」
フンッと今の感傷を吹き飛ばすかのように、また自分を嘲笑するかのように鼻で笑う。なんと今更のことだろうか。自虐めいた笑みをこぼしながら、先ほどやられた左目に触れる。

「いてぇ、腫れてるな。眼球に当たらなかっただけよしとするか。でもこれじゃ、しばらくは遠近感が掴めねえ……ついてねえなぁ」
何かを確認するように、もう一度崖の下を覗き見る。
「ふぅ、あの医者の次に強敵だったぜ、お姉さん」
それだけを言って、そのままその場を離れていった。
そして木の陰に隠れていた繭はというと、すやすやとハンバーガーを食べる夢を見ていた。

194　夏への追憶、夜への帰還

「——やっぱり」
幾分か歩き、茂みを掻き分け、そして私はその忘れ物を見つけた。
鞄だ。
食糧も水筒も、鞄から出して携帯できるからつい放り出してしまう。
配布元としては、別々に与えられる武器を隠すというのが一番の目的なんだろうけど。
それにしたって迂闊だった。私は地図を持っていなかった。それもあって、わざわざここまで引き返してきた。
少々長い道のりだったが、致し方ない。
……だけど、私、柏木千鶴が辿ってきたのは、実際に歩いたよりも……ずっと長い思考の迷路——
折角の決意も、台無しだった。それとも、最初からこうなることは決まっていたというのか。
初めから……始まる前から……神様はこんな過酷な分岐へと、私という駒を進めることを決めていたのか。
初音。……私のかわいい初音。
どうして、こんなことになってしまったんだろう。
「くはぁっ、はぁっ、はぁっ……」

どれくらい走っただろうか。随分と疲れた気がする。私は空を見上げてみる。月の明かりも、星の瞬きも、ほんのついさっきのそれとなんら変わっていない。時間はそんなには経っていない様だ。それなのにこののしかかるような疲労感……。
「精神に……キてるみたいね……」
ぼそっと、私はそんなことを呟いた。正直、さっきまでのことはよく覚えていない。どういうわけだろうか……。あの子のあんな様態を見てしまったことによって、私の思考は狼狽で埋め尽くされてしまったらしい。
唯々、真っ白に。
「っ……！」
思い出したように左肩が疼いた。先ほど受けた傷だ。……愛する自らの妹によって。
「……」
私は、無言で唇を噛む。それは、自らが受けた傷の痛みに耐えるためか。それとも、残酷な事実による痛みに耐えるためか。
私は近くの少し太めの木に近づくと、そこに回り込んで腰を下ろす。その後、そっと上着を脱いで上半身を露出させる。肌に直接当る風が、少々冷たい。
「つっ……」
私はそっと傷痕を上からなぞった。……なるほど、火裂傷は確かにひりついて痛みを釣り上げるが、しかし思ったよりもその傷は深くないようだった。
だが、左肩に穴の開いた上着を見つめていると、自然と気分が落ち込んでくる自分がいた。
そりゃあ、確かに見た目はちょっとアレだし、今流行のファッションというわけでも無いけれど、選ぶ時は素材にこだわってみたり、またこのタイプで白いものは見つけるのに苦労したものだったから、白が好きだった私としては満足でもあったし、何より普段着としての着心地がよかったから選んだ服だっていうのに、こんなところでこんなことになってしまうなんて……。

「はぁ……」
自然と、ため息が出た。
いつまでもこんな姿ではいられないので、私はとりあえず傷の応急処置を試みた。私は鞄の側面に入れていた水筒を外すと、入れ物の口をあけて左肩にかけた。
……そんなに冷たくはなかった。
冷却する目的においては期待はずれだったが、それでも体温よりは低い温度だし、洗浄だって必要だった。火傷の痕が残るのはまっぴらごめんだ。
元々、そんなに量があるわけではなかったこともあり、あっさりと水は切れた。
「まぁ……無いよりはマシよね」
座ったままで、私は一人呟いた。水が肩を伝って地面に落ちる。私は、自分の肩を拭う布切れなど持っていなかった。上着で拭く？　まさか！
仕方が無いので、私はそのまま肩の水気が飛ぶまで、この場に座っていることにした。
「……」
視線が泳ぐ。それは何もしていない瞬間だったが故に、何も考えられない時間だった。私は、何を見ているのか。
沈黙だけが、あたりに蔓延していた。でもそれで良かった。もし今、誰かから話しかけられていたら、もしそれが耕一さんのような人だったら……。
……私はきっと、泣きだしてしまっていただろう。
覚悟はしていたはずじゃなかったの、千鶴？
私はそっと心の中の自分に問いかけた。私は、決めたはずだった。家族を守るために鬼になる。そのために、自らの姉妹たちからの信頼すら失ってしまうことなど、もうとっくに予期できていたはずなのに。覚悟していたはずなのに。
「ホントに……ダメね、私」
星空は明るく瞬いている。私がこんなに落ち込んでいるというのに、まるで当てつけるように。
「私の両手は、もう紅く、血にまみれてしまったの

ね……」

――ねえ、耕一さん。耕一さんは昔、初音の笑っているのを見て、まるで『天使の微笑み』だって、言ってたことがありましたよね。ううん、私もそう思います。私は、あんな風に笑うことが出来る子を他に知りません。もちろん、楓も、梓にとってもきっとそうだと思います。いいえ……私にとっては、楓の笑顔も、梓の笑顔も、どれもかけがえの無い大切なもの……。絶対に失いたくない……失わせたくない……。私にはもう……そんな笑顔を作ることが出来ないかもしれませんけど。

　でも、それでもあの子達の笑顔を守れるなら私、なんだってやれると思ってきたんです。今まで、ずっと。それは、今こんな状況に追い込まれてしまったからではなくて、もうずっと前から……それこそ、お父さんやお母さんが死んだときから。いいえ、もしかしたら、柏木の血のことを知らされた瞬間から。勝手に独りで背負い込んで、勝手に独りで苦しんで、ひょっとしたら単なる被害妄想なのかもしれない。でも、そうやって気を張っている間は不思議と安心できた……。耕一さんなら、……きっと私の気持ちを分かってくれますよね。守られるのではなく、守ろうとする方の気持ちが。

　もしかしたら、それはあの子達にとっては迷惑なことであったのかもしれないけど……、でも、私の立ち位置は結局そんなところにしかなくて。おかしいですよね、私、こんなにも弱いのに。ううん、もしかしたらだからなのかもしれない。ただ立っていることに不安だったから、だから自分自身の存在をそういうところに求めたのかもしれない。でも、初めて人を殺して、その血に染まった両手で初音に会って……、だから拒絶されて。もうそのときには、私にはあの子の前に立つ資格はなくなっていたのかもしれませんね、あの子に会うまでも無く。……心のどこかでは、もうとっくに諦めていたはずの希望、

私はそれでもその拒絶を受け止めようとしていたのに、結局そうできなくて……。それで、目の前にいないあなたに縋っているんですよ。おかしいですよね。笑ってくださいい耕一さん。でもそれで、あなたの笑顔で、……ほんの少しだけ、元気になれます。

ひょっとしたら怒られるかもしれませんけど、私、この戦いでもし命を落とすことになっても、それで妹達を守れるなら悔いは無いと思っています。たとえ、私があの子たちを守るのにふさわしくないとしても、でも、泥を啜ってでも、それだけはやり遂げて見せます。耕一さんなら、何でそんなこと言うんだ、皆で生き残らなくちゃダメじゃないかって、きっとそういうと思うんです。うふふ、目に浮かぶようです、その時の耕一さんの姿が。

でもね、私の染まってしまった両手は、表面上は拭うことが出来ますけど、でもその奥深いところにある事実までを拭うことはできません。だから、私が自分の手を汚すことはもういいんです。でも、あの子にそれを肩代わりさせることは絶対に出来ない。もし、私があの子たちの前からいなくなったとしても、耕一さんがいれば、誰か姉妹がいれば、笑顔を失わずに済むかもしれません。でももし、仮にリネットに体と意識を操られていた結果であったにしろ、あの子が誰かの命を奪うようなことになれば、あの子の笑顔は永遠に失われてしまいます。私なら、その重責を背負って生きていくことが出来る。でもあの子の小さな肩では、人の命はひどく重過ぎるんです。それは楓も、……そして梓にしても同じこと。私だって……本当は……。私、不安なんです。もし楓や梓と会ったら、そのときまた、初音のときのようなことを繰り返してしまいそうで。そう……、見ず知らずの人の命を奪うことより、誰かから命を狙われることより、私は、妹達からの拒絶の方が怖い――。

もしかしたら、ゲームが終わるまでに、私は他のどの妹とも再会しないかもしれません。でも、それ

ならそれでいいのかも知れません。私があの子たちに会うことより、あの子たちに及ぶかもしれない危害の種を取り除くことの方が、私には大事なんです。でも、耕一さん。もし叶うなら……、死ぬ前に、もう一度あなたに会いたい。こう願うことは罪深いでしょうか？

耕一さん……。

――そして私は、我慢しきれずにほんの少し、涙を流した。

……浅く、短い転寝だった。今の意識が何処かへ行った代わりに、ほんの少し、昔の気持ちが色鮮やかだった。良くは覚えていない、けれど、不思議な懐かしさが胸を埋めている。

焼け付くような日差しの、名残が残る夜更けのこと。どこか儚い……ため息と、花火の記憶。

過ぎ去った夏の思い出。あの時、私はノースリーブのワンピースを着て、今と同じように、肩で直接風を感じていた。

いくらやっても慣れる気がしない経営事務で、体の芯までくたくたになって私は帰宅する。家に帰ると、一番最初に出迎えるのは梓だった。

『千鶴姉、今日遅かったね。御飯すぐに暖めるよ』

私はこくりとうなずいて、自分の部屋に戻る前にまず居間へ向かう。するとそこには、初音と楓の姿がある。

『お帰りなさい、千鶴お姉ちゃん』

『お帰りなさい、千鶴姉さん』

同じ内容の言葉を、全く違った風に私に伝えてくる妹達。私はあの子たちに一言、ただいま、と挨拶を返す。あの子たちは、梓の切ってくれただろうスイカを齧りながら、縁側からそっと片足を放り出してぶらぶらとさせていた。既に日は沈みきっていて、辺りは真っ暗でしかない。するとそこらに点滅する

光点がある。……蛍だ。
『わっ、また光ったよ』
　初音は嬉しそうにそんなことを言う。楓は何も喋らないが、それが光る様子を、興味深そうにじっと眺めている。りんりんと虫が鳴く。途切れることなく、歌を継ぎながら。
『何だ千鶴姉、まだいたの』
　そんな言葉が後ろから聞こえてくる。御飯とお味噌汁を持ってきた梓だった。温かな湯気が、ぼーっと白く立ち上っているように見えた。
『早く着替えてきなよ、大丈夫、蛍やこおろぎはそう簡単に逃げないって』
　梓はそんなことを言ってきた。いつのまにか楓や初音たちと一緒になって、虫達の戯れに夢中になっていたらしい。そうね、と私は相槌をうって立ち上がる。
　夏はまだ完全に過ぎ去っていたわけではなかった。残り香のような蒸し暑さは、私にその存在を必死に伝えているようでこそばゆい。仕事で来ているタイトなスーツは、当たり前だが窮屈でしょうがない。特に、今時期のような気候では。私はクローゼットから水色のワンピースを取り出す。なんとなく今日はこれを着ていたい気分だった。肩をむき出しにしてくれることが、たまらなく自由である気がしたのだ。
　そうして居間へ戻る。私は、折角温めてもらった御飯が冷めないうちに頂くことにした。梓の加減はいつだって絶妙だ。お味噌汁の熱さや塩加減も、その時々の私の体調に合わせてくる。疲れている時は薄味に、といったように。本当に細やかな気配りだと、私は常日頃から感心していた。
『ねえねえ、これ見つけちゃった』
　いつのまにか姿を消していた初音が戻ってきた。その手には何か袋が握られている。それは――
『――線香花火？』
　私の思考に先んじて、楓がそう呟いた。

『うん、耕一お兄ちゃんが来ていたときに一緒に遊んだんだけど、そのときのが余ってたみたいなの。残してしけちゃうのも勿体無いから、今日やっちゃおうよ』

　初音は満面の笑みでそういった。……確かに、今日は静かで、そしてどことなく空気が乾燥していて。風もなく、線香花火にはうってつけであったかも知れない。

　いいんじゃない、火の扱いに気をつけさえすれば。私はそう言った。楓は、千鶴姉さんがそういうのなら……、とでも言いた気な様子だったが、初音から線香花火を渡されるに、まんざらでも無い様子だった。

　初音が私の方を見た。

　私はいいわ、まだ御飯を食べているし。そう言って花火を受け取ることを拒否した。別に自分で点けなくても、ここから見ているだけで十分に線香花火なら楽しめる。

　初音は、花火の袋とは別なところからマッチを取り出した。なんとなく危なっかしげにも見えたが、特に私は行動を起こさなかった。初音だって、もう子供ではないのだから。

　ぼしゅっ、と小気味いい音を立てて火がつく。初音は火を焚くと、それを楓に与えた。楓はそっと線香花火の先端を火に翳す。火が、転火した。初音はすぐにマッチ棒を振って火を消すと、自分の線香花火を取り出した。楓の持っている線香花火は、既にパチパチとその花を開いていた。

　綺麗な輝きね……。私はお味噌汁をすすりながら、その花火の燃え盛る様に心を奪われていた。本当に小さな輝きでしかないのに、激しく、艶やかに燃え続ける線香花火に、何か懐かしいような気持ちを抱いていた。

『お、線香花火か。風流だね』

　台所から帰ってきた梓が、楓と初音の様子を見てそう呟いた。梓はやらないのと聞くと、そうだねぇ、

と少し悩んだ様子を見せた。だが、梓の存在に気が付いた初音と梓が、梓姉さんもいっしょにやろうと言ってきたのを聞いて、花火の輪に混じることにしたようだ。私は、自分の三人の妹が花火を燃やしている様を、ただじっと見ていた。御飯を食べ終わって箸が止まったあとも、ずっとそうしていた。

それから少し時間が経って、線香花火が残り一本になったときのことだ。最後の一本を掴んだ楓が、とことこと私の傍へ歩み寄ってきてそれを差し出した。

『はい、千鶴姉さん』

私は思わずきょとんとしてしまった。私は、いいのよ、楓がやれば、と言った。

だが楓は聞かなかった。

「私たちはもう、いっぱいやったから」

……ふと目をやると、縁側に出ていた初音も梓も、いつの間にか私の方を見つめている。

『やろうよ』

『千鶴姉もさ』

そんな風に、楽しげな瞳で私を見てくるのだ。

私は楓に視線を戻す。線香花火が一本、差し出されている。

……ええ。私は、それだけ口にして花火を受け取った。ほんの少し、楓が笑ったような気がした。

縁側に出ると、少し風が出てきたことに気付く。むき出しの肩に風がぶつかって、涼しいようなくすぐったいような、変な気分だった。

ボッ、とマッチが燃え上がる。初音が、私のためにつけてくれたのだ。

私はそっとそこに線香花火を翳した。幾分もしないうちに、火は無事に燃え移った。

私は中腰になって線香花火を垂らした。すると、まるでそれを囲むかのように、初音と、楓と、梓が近づいてきた。

……そして、今年の夏の、最後の花が咲いた。

あまりにも小さい音でしかないはずの、線香花火

のパチパチと言う弾けが、私たち四人の心の奥深いところに響いていた。
花びらを散らし尽くして、先端に朱い結晶が出来上がる。でもそれは、十秒もしないうちに、ぽとっ、と地面に落ちた。
私たちは、その最後の輝きを名残惜しむかのように、火が消えた後も、少しの間黙ってその場に立っていた。
『さって……と！』
梓がうーん、と伸びをしながら言った。
『そろそろ中に戻ろうか、風も冷たくなってきたことだし』
そうね、と私は頷いた。楓も初音も、同じように頷いた。
私は中へ入ると、食卓へ放置していた自分の食器を、梓と一緒に台所へ運んだ。
居間へ戻ってくると、戸越しに外を見つめている初音がいた。
どうしたの、と聞くと、ううん、なんでもない、と返事があった。そうして初音はその場を立ち去った。
……私は分かっていた。初音は、さっきの瞬間に過ぎ去ってしまった夏の匂いに、別れを告げていたと言うことを。
夏がずっと続いて欲しいとは思わないけれど、それでもこうやって分かれ目を体験しては、寂しげな気持ちになる。
……だからこそ、堪らなくいとおしいのかもしれない。
時刻は既に九時を回っている。
隆山の夜は明るい。それは文明の灯火ではなく、頭上に瞬く宇宙の煌きだ。
遠い空に光る星を見つめて、私はその孤独に思いを馳せる。
こんなにも平和なのに。
こんなにも幸せなのに。

……そしてまた、私はため息をついた。

……どうして、今更こんな過去の記憶にすがっているのか。傷ついた自分自身への慰みなのだろうか。だったら、この程度でいい。この仄かな感触だけで……大丈夫、私はやっていける。

右手で左肩をさすって見た。まだ瘡蓋にもなっていないが、少なくとも先ほどかけた筈の水気は取れたようである。

このまま放置しておくのは格好が悪いし、大体妙齢の女性が上半身をブラジャーだけしか着ないで肌を晒しているというのは公衆道徳上にも教育上にも好ましくないことこの上ない。……もう、そんなことは気にしなくても良いのかもしれないけれど。

肩に少し大きな穴の開いたブラウスに、私は袖を通す。見た目ほど肩に喪失感はなかったが、それでもやはり目に入れたくは無い様態だった。

しかし、どうして私はそんなことにこうまで執着しているのだろう。そんなことが気にかかる。

いずれ、泥を啜り、大地を転がるような戦闘を経験することは間違いが無いだろう。そうなれば、肩がちょっと破ける程度の話ではなくなる。大体にして白いものは汚れが目立つ。案外、肩口に穴が開いたことよりも、土にまみれ泥に汚れた状態の方がダメージが大きいんじゃないかと想像した。そもそも、命のやり取りをするような現場でたかだか服装のことを気にしている方が異常なのだ。

……とは言え、常に外見を気にするのは女の性だ。万が一、突然耕一さんに遭遇することを考えると、そんなひどい格好をしている自分を想像したくないのである。たかが服装、されど服装。

そうでなければ、服装という文化的な側面に敢えて執心することで、普通であることを強調したかったのだろうか。人を殺しておきながら、私は狂っていないと自分に言い聞かせたかったのか。

……出来れば、後者を理由に選ぶのは遠慮したかった。
カタン。
立ち上がった拍子につまずいてしまった。先ほど使い切ってしまった水筒のボトルだった。
「そういえば、もう空なのよね……」
それは少し困ることだった。砂漠が戦場というわけでは無いから、民家や建物に入れば水道はあるだろう。だが、水が止められていない保障は無い。まさか日本国外とも思えないので、沢の水を汲めれば飲み水にはできるだろうが、そこに辿り着くことが出来る保障も無い。
唯々生き延びるためならば、一日やそこら食糧や水分を補給しなくてもどうにかなるかもしれない。
――忘れてはならない。ここは狩り場なのだ。いずれ嫌でも自分の意思ではない物事に突き動かされるときが来る。そのとき、空腹や脱水症状で動けないなんていうのは話にもならない。
そのためには安心して飲める水が必要だ。流石に、さっき使った水を温存しておけば良かったなどとは思わないが。
「配給された水筒が、一番確実ではあるのよね……」
私は、空になった水筒を持ち上げるとそう呟いた。
タイムリミットは無い。少なくとも表向きには。
だが高槻の話し振りを聞くにそうではなさそうだ。確かに、武装で勝る主催者側の兵隊が一挙に参加者の掃討にかかれば、私たちなどひとたまりも無いだろう。
しかしそれは……そう近い話ではなさそうだ。高槻は私たち自身による殺し合いを求めていた。だから……きっとぎりぎりまで、私たちのことを苦しめるつもりに違いない。
そう考えると、この一個の水筒で命を繋げというのも不自然な話だ。餓死で全滅なんていうのは、あの男の話で言うところの最も興ざめな展開だろう。

水はある。多分大丈夫だろう。
私は空っぽの水筒を鞄の脇に入れると、一先ずそこを離れることにした。
――映像が、頭をよぎる。
私は立ちくらみがしたかのように、思わず地面にしゃがみこんだ。
……ああ、そうね。それがあったわね。
感傷にばかり浸っていたせいですっかり忘れていた。大事なことではないか。
私は、右手で額を押さえながら立ち上がった。丁度木々に覆われる形になったので、綺麗に輝いていたはずの月明かりが見えなかった。
私は額から右手を離す。……鏡があれば、そのときの表情を、自分でも確認できたのだろうに。
そして私は踵を返した。そこに留まっていた時間を取り返そうとするかのように勢いをつけた。闇雲に歩くのではない。場所は、私自身が知っている。
程なくしてそこに辿り着いた。今のところ、私がこの島に解放されてから、最も長い時間を過ごした場所だ。
「やっぱり……」
私は思わず嘆息した。予想通りであった。私はすっかり鞄を背負うのを忘れて、置きっぱなしにしていたのだ。
「全く、おっちょこちょいよね……」
私は二度目のため息をした。こんなことだから、いつも梓に『千鶴姉はどんくさい』と言われてしまうのだ。
そりゃあ私だって要領よくやりたいとは思ってるけど、思うだけでできるんだったら苦労しないじゃない！　……いつも思うことであった。
「……っしょっと」
鞄を背負い直す。少し重いがまあそうは気にならない。
ここまで戻ってくるのは随分長い道のりだという印象があったが、実際に早足で歩いてみるとそうで

もなかった。考えてみれば当たり前だ。歩いているよりは、立ち止まっている時間のほうが長かった。
さて……、実はもう一箇所、立ち寄らなくてはいけないところがある。ここに無いのだから、あそこに違いない。私はまたも踵を返した。
……そうして、十分ほど歩いた頃に、そこに辿り着いた。正直に言おうと言うまいと、そこが私にとっては嫌な場所であることには変わりが無い。
――初音に撃たれた場所だ。
あの時は焦っていて気にも留めなかったが、此処は私が撃たれる以前のあの砲撃か何かの爆発で荒れ果てていた。ざっと見て、半径四、五メートルではきかなそうだ。熱源はもう無いが、焼け焦げた土の感触がひどく……気持ち悪い。
私はなぞる様にそこを歩く。……初音から逃げ出したときの道筋を。あのときの様に走る必要は無い。もう、此処に初音はいないのだから。
そして、それはすぐに見つかった。大事なものだ。けして疎かにしてはいけない。それに――
「いくらなんでも、今の私がこれ無しになんて無理だものね」
そうだ、無理だ。これじゃないとしっくり来ない。初音が……妹達が誰かを殺す前に、私が全てをなぎ払う。そんな決意も、やはりこれ無しでは味気ない。
私はいとおしい物を見るように、片面に血の痕がこびりついた爪を拾い上げて、左手に嵌めた。
焦って、外れ落ちていたのに気付かなかったのは一生の不覚だった。まかりまちがって持っていかれでもしていたら、私は早々から武器を失ったことになってしまう。
だが、こうして爪は私の手元に戻った。神様がいるのだとすれば、私の道行きを少し援護してくれたのに違いない。
私は空を見上げ、月を睨む。私は、月にある人物を投影した。他でも無い、私に血を味わわせる原因を作り、その私にこのようなうってつけの武器を与

え、そして今この瞬間も悠々とゲームを鑑賞してい
る男。
　高槻……あなたは一つ失敗を犯した。
　爪を渡したことは何かの余興だったのかも知れな
いけれど、あなたは知っていたんじゃなかったの？
今この瞬間も、私の中に渦巻いている鬼の本能のこ
とを。ええ、鬼の能力は何一つ解放されていない代
わりに、殺意がいつもより増大しているわ。
　……そうね、あなたを殺さずにはいられないくら
い。
　結局、血の味を知った鬼の血族を甘く見ていたこ
とを、いずれ思い知らせてあげる。
　ところで……多分、あなたの誤算がもう一つある
わ。分かるかしら？　鬼の本能が思考を奪う以前か
ら、人間としての私の思考もあなたを殺したくって
たまらないんですって。どうかしら、これ。もう止
まれないかもしれない。だって誓ってしまったんで
すもの。あなたを殺すって。それって、その瞬間に
心が凶器を握ったようなことじゃありません？　そ
う思うと不思議、死ぬ不安が希薄になるわ。だって
殺すことしか考えていないから。
　心が握った凶器……私は、そこから一つの言葉を
想起した。

　　――狂気。

「……そうね。既に私は狂っているのかも知れない
わね」
　正常であることを強調したい私、狂っていること
を認めたい私。……一体、どれが本当の私なんだろ
う。考えることは、もう疲れた。
　一人でも多く殺そう。苦しみを与えないように、
一瞬で運命の糸を断ち切ろう。
　そうすれば……、誰も苦しまずにすむ。誰も悲し
まずにすむ。

死者は何も語らない。
死者は何も思わない。
死者は何も苦しまない。
何も、何も——。
……私は、いつの間にか思考を真っ白にしながら月を見つめていた。
「綺麗な月ね。——吐き気がするくらい」
いつまでもここに留まる気はなかった。一度辿ったルートをもう一度歩み直す真似をしていたのだ。要するに、前進していない。
ぐずぐずしてはいられない。こんなに視界がいいところでは、容易に狙われてしまう。自覚しなさい千鶴、私は狩る側なんだということを。
高槻への殺意、初音への恐怖、……未だ定まっていない殺人者の自覚。私は、どこへ向かえばいいのだろう。一見、一つの目的に集中しているようで、実際はこんなにも乱れたままの心で。単なる狂気なんかじゃない。私の心は混沌なんだ。だから、こんなにも分裂する……。
森へ戻ろう。そして、あと一度踵を返せばいい。それで今度は反対の道へ行ける。
……今度は、進める。
鞄の中には、コンパスと地図、それと未だ口をつけられていない食糧に、波々と水の入ったボトル。これで爪が新品だったら、本当に再出発を果たしたかのようだったのに、と思った。
——選択肢は二つ。
一つは、耕一が選んだ道。
一つは、千鶴が選んだ道。
いずれが正しいのか、知るものは無く——。

……何のことは無い、私は死者を犠牲にしたのだ。
あの時よぎった映像は、私が殺した女性の断末魔。
この鞄は、元は彼女のものだったものだ。武器らしきものは入っていなかった。恐らく彼女が身につけるか何かしたのだろう。それを探る気には流石になれなかった。だが、食糧と水は生者のためのものだ。死者には必要が無い。だから奪った。
それの何が悪い？　生きることは奪うことなのだ。たとえそれが、死者への冒涜だと罵られようとも。
私は、まだ死ぬわけには行かない――。
森へ足を踏み入れる。最初に森へ入ったときとは、場所も状況も、何より私の気持ちが違う。
肩にのしかかった業がずしりと重い。
何よりも重い第一歩、……私は、いつまでその重みに耐えられるのだろう。
……気が付けば、また一人、夜の空を見つめてる。

195　日々のカケラ

眠れなかった。
霧島佳乃（三十一番）と別れた後、民家に戻って来た柏木梓（十七番）は、わけのわからない苛立ちを抑えながらも眠ろうとした。
が、先程あんなことがあったせいか、目を閉じてもなかなか寝付くことが出来なかった。
結局、毛布に包まってうとうとしているうちに、窓から覗く朝日が夜の闇を鮮やかな蒼に染める羽目となった。
「……朝か」
梓は憔悴しきった表情で、窓の外が明るくなっていくのを見つめる。
「結局、あんまり眠れなかったなぁ……」
ため息をひとつ。そして大きな伸びをする。
「……朝飯でも作るか」

驚いた事に、梓が忍び込んだ民家は、ガスも水道も電気も使用可能であり、更に冷蔵庫を開けるとそこには二、三日分の食材が鎮座ましましていた。

あまりにも露骨に設備が整っているので、毒でも入っているんでは無いかと思い、梓は冷蔵庫の中の食材を幾つか調べてみたが――千鶴姉の作った料理と対峙した時のようなプレッシャーは感じなかった。

勿論、何か別の罠が仕掛けられてる可能性はある。が、腹が減っては戦は出来ぬし、滅入るばかりの気分を何とかして転換したかった。

結局、梓は深く考えずに朝食を作る事に決めた。

とんとんとんとんとん……。

「～～♪」

鼻歌交じりで包丁をリズミカルに振るう。

姉妹の食事をいつも作っている彼女だけあって、その包丁捌きはさすがに手馴れたものだった。

梓は無駄なく、そつなく調理をこなしていく。

と、その目が包丁に注がれる。

――これで、人を殺せる。

梓は瞬間頭に浮かんだ考えを、ぶんぶんと頭を振って追い払い――そして、何となく気付いた。

この狂ったゲーム。最初の武器の優劣こそあれ、その気になれば簡単に武器を手に入れることが出来るように仕向けているんだ。

この包丁が良い例だ。だから、無理に家や学校の施設を荒らしたりせずにそのままの状態で放置したり、または手を加えてるのだ。その方が武器を生み出し易い。そして、武器をみつければ殺し合う確率が高くなる。武器が無く、怯えて隠れるよりも。

「なるほど。下種（ゲス）の考えってわけね。……思い通りに行くもんか」

タイミング良く、その下種の声が聞こえてくる。朝の定時放送だ。

梓は舌打ちをしながらも耳障りな声に耳を傾け、耕一たちが、そして佳乃が死者に入っていない事を

確認して安堵する。
　彼女は、止めていた手を再び動かし始めた。

　やがて、キッチンに炊き立てのご飯と、味噌汁の香りが漂う。
　その量、五人分。ついつい、いつもの柏木家に並ぶ分量を作ってしまった。
「……ま、いっか」
　ぱちんと味噌汁の鍋にかけていた火を消すと、梓はいつものようにエプロンを外そう
――として、苦笑いする。
「そっか、あたしってメイド服着たままだったんだっけ」
　テーブルに典型的な日本人の朝食を並べ終わると、自分も席につく。
「では、いただきます」
　ぽんと手を合わせて、梓は久し振りにまともな食事を堪能する事にした。

　非日常のキリングゲームの中でのいつもの食事は、ひどく懐かしい味がする。
　味噌汁を啜りながら、梓はそんなことを思った。

「さて、これからどうしようっか……」
　後片付けを済ますと、梓は呟く。
「まずは耕一たちと合流するのが先決よね。それから、協力してあの主催者をぶっ飛ばす！」
　ぶんぶんと腕を振りまわしながら梓は叫ぶ。
「あ、そだ。耕一たち、お腹減ってるといけないから……」
　そそくさとキッチンに戻り、炊飯ジャーに残っていたご飯で少々大き目のおにぎりをこしらえる。
　その数、五つ。耕一と、千鶴姉と、楓と、初音と、――そして、佳乃の分。
「やっぱ、あのままじゃ納得いかないしね。ちゃんと理由を問いただささなきゃ」
　つ、と首筋に触ってみる。傷は――もう無い。幻

覚か、自分の治癒能力が活性化されているのか、それはわからなかったが、とにもかくにも痕が残らずにほっとする。
――この辺は、やはり梓もオンナノコである。
「耕一たち、千鶴姉の料理を食べる羽目になってないといいけど」
くっく、と梓は笑いをかみ殺す。朝まで抱えていた陰鬱な思いは何時の間にか消え失せていた。
「さて、行きますか」
メイド服を整え、ネコミミをつけたまま梓はそっと玄関を出て歩き出した。
非日常のキリングゲームを終わらせるために。
日々のカケラを五つ、デイパックに詰めて。

196　ごめんなさいの数を数えて

「観鈴！　行ったらあかん！　観鈴……！」
ごめんね、お母さん。
でも、倒れてる人放っておくなんて、出来ないよ。
死にそうな女の子を見捨てるなんて、わたしには無理。
ほんとうに……ごめんね。すぐに戻るから……ごめんなさい。
……けど、辿り着いたときには。
「あの、大丈夫……ですか？」
そろそろと、物音を立てないようにそばに寄る。
――短い髪の女の子は、倒れたまま返事をしない。
抱き起こそうと触った手は血まみれで、ぬるりとそれがわたしの指についた。
「…………ぁ……」
つめたい、身体だった。
無駄のないその躯は、ぼろぼろに傷ついている。
痛かっただろうな。苦しかっただろうな。考えただけで胸がきゅっと締まる。
死んだ人にさわっているのに、不思議と気持ち悪

く感じなかった。
その子の躯を一度だけきつく抱きしめる。
「助けてあげられなくて、ごめんね……」
ちいさくちいさく呟く。
気休めでも、偽善でも、そうしてあげずにはいられなかったから。
もう変わらないその表情がひどく安らかだったことに、少しだけ救われた。

「……もう、ええな」
腕に女の子を抱えたまま、振り向く。
見慣れたお母さんの顔があった。
ひとつ頷いて、わたしは女の子を近くの大きな樹にもたせかけた。
眠っているようにも見えて、また悲しくなった。
「えと……勝手なことしてごめんなさい」
目が合わせられなくて、俯いたまま話す。
「えぇよ。観鈴は無事やったんや。けどな、もう無茶したらあかんで」
不意に頭に、やわらかい手が置かれた。
「あんたが死んでしもたら、うちにはなんにも無くなってまう。命はひとつっきりや。都合よう返ってくるもんやない。せやから……うちら、生きなあかんのや」
真剣な声だった。言いながら髪を撫でられて、安心して、初めてお母さんの顔を見た。
涙がまじってた。
そこでようやく、わたしは本当に自分の行動を後悔した。
わたしのせいでお母さんが死んじゃったかも知れないのに。お母さんのこと大好きなのに。わたしはわたしを捜させて疲れさせてばかりいる。
やっぱり——わたしは頭の悪い子だ。
「……とりあえず、ここは危険や。この子をやったんがおるかもしらん。そやな、地図だと……向こう

の住宅地の方、近いな。行こか」
手にしたシグ・ザウエルショート９㎜（という名前の銃みたいだ）を固く握りしめて、お母さんが先を促す。
今も、遠くから銃声が何発も轟くのがきこえる。その残響を耳から消せないいまま、わたしはなるべく音を立てないよう歩き出し……

「……あの、あの……っ」

弱々しい、女の人の声。逃げてきたんだろうか、服も手足も泥だらけだ。
「動かんといて。うちら、行かなあかんのや」
「お母さん！」
お母さんが女の人に銃を向けた。袖を掴んでも、その目は険しいままで。
「あ、あの、神尾さんという人を見ませんでしたか……!?」

私とお母さんは、同時に目を見開いた。

197　告白と決意と……

「ところでマルチ」
「はいっ？」
智子は、ずっと疑問に思っていたことを問いかけた。
「あんた、あかりを助けた時、木の上に登っとったやろ」
「はいー。そうです」
「……なんで、あんな所におったんや」
えーと。という仕草で思いだそうとする。
「じつは、怖かったので、出発してすぐ目の前にあった林に隠れてたんです」
「ふんふん」
「でも、それじゃあ見つかっちゃいやすいので。木

の上に登ったんです」
「そーかー。よく登れたなー」
「はい。うまく登れるまで三時間かかりましたー」
「……よく殺されんかったわ、こいつ」
……マルチが来てから、ため息をつくことがめっきり多くなった気がする智子だった。それと、もう一つ気づいたことを、今度は晴香に問いかける。
「なあ、晴香」
「どうしたの？」
「いや、今気づいてんけどな、奴らが乗ってたジープあるやん。あれ、使えへんかな」
昨日、智子達を襲った兵士。彼らは軍用ジープに乗ってやって来ていた。
「使うって……乗って行くってこと？」
「や、それもあるけど……もしかして、あの中に何か手がかりがあるかもしれんなー思て。高槻の」
「……そうね。でも、あの場所に戻るのって危険じゃない？」
もともと出発地点の一つであった所だ。警戒されているかもしれない。なにより晴香達は、あそこで兵士を倒している。
「どうやろ。でもあそこに私達が戻ってくるゆうんは、さすがに向こうも考えてないんとちゃう？」
「……そうね。行ってみる？」
「うん。そやな」

廃墟と化した公民館跡。
それを臨む林の中に、晴香達はいた。
「だあれも、おらんな」
「そうね。近づいてみる？」
「うん。……マルチ」
「はいっ！」
呼ばれて、ぴんっ！と背筋をのばす。
「ちょっとの間、神岸さんと一緒にここにおって。私達で見てくるから」
「はいっ。わかりましたっ！」

兵士たちの乗っていたジープに近づいてみた。
危険はなさそうなので、中の物を探ってみる。
「どない？」
「地図があるわね。やつらの拠点がいくつか書かれてる。……それと」
「なに？」
「いや、この無線、使えるのかしら」
備え付けられてある無線機。壊れてはいないはずだ。
「それはちょっとヤバいんちゃうん？」
ぴーっ！
突然、無線機が音を発する。
二人、頷きあい、スイッチを押してみた。
「貴様ら、なにしてる！　早く二〇五中継基地へ来い。高槻殿がいらっしゃる前に来ないと、厳しい処罰があるぞ。わかったな！」
ぴーっつ！
「……どう思う？」
「ワナかもしれない」
「うーん、難しいとこやね」
「でも……」
「うん。行ってみよ。手がかりは今んとこ、これしかないんやしな」

二〇五中継基地。
その入り口で、兵士たちが慌しく動いている。それを臨む丘の上。ジープを止め、様子を覗う晴香達。
「どうする？」
「高槻が来たら、中央突破して奴に詰め寄り、人質にする。これしかないやろ」
あまり利口とはいえない作戦である。
「……無謀ね」
「無謀結構やろ。どのみち私達は、地獄のデス・ゲームに放り込まれとるんや。なにもせんかったら殺されるだけ。万が一でも、みんなで生き残れる方法

があるんやったらそれに賭けてみるだけや。せやろ？」
「……そうね」
たのもしいわね。と眼鏡の少女の言葉に思う。
「マルチ！」
言いながら、智子は後部座席を振り返る。
「今回はあんたにも、出番がぎょうさんあるで。頑張りや」
「はいっ。がんばりますぅ！」
「それと」
晴香に向きなおり、言う。
「ちょっと時間もらえるか？　……神岸さんに話があるんや」
あかりと二人で。ジープを降り、丘を下る。背の高い植物が生い茂る湿地。晴香達に話を聞かれない場所であることを確認し、智子は、言葉をかけた。
「神岸さん」
「……」
あかりは、俯いたままだ。
「……あんた、気づいてるんやろ。藤田君のこと」
「ひろゆき……ちゃん……」
その悲しげな呟きに、智子も俯く。
「初めから、なんか妙やなー思うててん」
……身体を翻し、あかりに背を向け、言葉を続ける。
「私達、出発地点同じやったろ。わたしの前に藤田君が出てったとき、あー多分藤田君は神岸さんと一緒に行くんやろなーって」
表情を消したまま、あかりはじっと聞いている。
「で、次にわたしがあそこを出た時、もう藤田君はおらんかった。せやから、きっと神岸さんのことが心配で、だーっと急いで行きよったんやなーって、そう思とった」
「……」
「けど、わたしが悲鳴に気づいて、引き返して行ったときには、……晴香が、戦うてる所やった」

その情景を思い出し、天を仰ぐ。
さらに智子はつづける。
「この前、神戸の同級生がおったて言うたやろ。あれ、ウソや」
その言葉に、はっ、と顔を上げるあかり。
「あんた、わかってたんやろうけど。藤田君やったんや」
——藤田君、無事やったんやね
——ああ。おかげさまで
——でも、もうお別れだ
——生き残るのは、この俺だけでいい
「あのとき、ああ、この人はゲームに乗ってしもたんやなって。でも、なんでか、ああ、藤田君らしいかもって、思ってしもた」
ふりかえり、自嘲ぎみの笑みを浮かべる。
「なんでやろな。……なんで、そないな薄情なこと、思たんやろな」
「……」
なにも言えないあかりは、唇をかみ締め、感情を押し殺そうとする。一歩、あかりに近づく。
「なぁ、神岸さん。あんたのこと、あかりって呼んでもええか？」
「えっ？」
思わず顔を上げる。そして智子と視線が合う。
「一蓮托生でここまで来たんや。もう、友達やろ？」
「……うん」
「なら、名前で呼びたい。晴香ばっかり名前で呼んでるんは不公平や。そやろ？」
智子のやさしい笑顔。あかりは思わず目に涙が浮かべる。
「うん」
迷いなく返事を返す。
「なら、私のことも智子って呼んで。ええな」
「智子……」
「せや。わたしはあかりを守る。たぶん晴香もそう

思うてる。まず高槻見つけて、どうかしてこのゲームをやめさせる方法見つけてから、それから……藤田君に会いに行こう」
「……でも！」
あふれる涙。ぎゅっと拳を握る
「……たぶんな、あかりに会えば藤田君も改心するんやないか思うんや。甘い考えやろけど」
智子は視線をまた空に向け、何かを見据えるようにして。
「なんとか説得して、みんなで帰るんや。平凡で退屈やったけど、幸せやった、あの日常に」
視線をあかりに戻す。
「な、帰ろう。いっしょに」
「……っつ！」
駆け寄り、智子に抱きつくあかり。その頭を優しくなでながら、
「そうやろ……藤田君」

198　決意

「生き残るのは、この俺だけでいい……」
智子は浩之の言った言葉を思い出していた。
（なんでや？　なんであんなこと言えるん？　嘘やってゆうてほしいわ……神岸さん目の前にしても、あないなこと言えるんやろか……。いや！　藤田君は絶対正気に戻ってくれるはずや！　このままやと神岸さん、可哀相すぎる。どんなことしても、いつもの藤田君に戻ってもらうんや！）
智子は改めて決意を固めた。
浩之を殺さなければならないという可能性は考えないようにしながら……。

199　昔と今と、変わらないこと

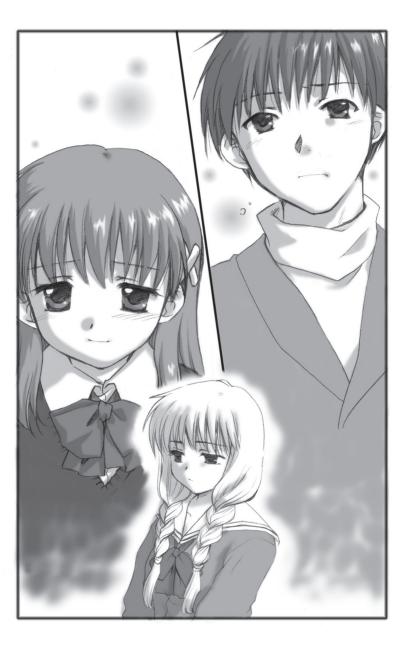
「疲れたなー」

「まぁ、仕方ないさ」
詩子と少年は茜を探し歩いていた。
といっても、探しているのは詩子で、少年は付き添っているだけだ。
（今はまだだ。もう少し状況が動かないと、高槻に対して何もできない）
それまでやることもないので、少々危なっかしいこの少女についてやることにしたのだ。
「このＣＤ、何に使うんだろうねぇ」
詩子の支給品はＣＤだった。¾と記入されている。
「これは……同じ物があと三枚あるんじゃないかな。四つ合わせて何か起こるとか」
「でもさぁ」
不満声で言う。
「どこにある……っていうか、誰が持ってるかもわからないんだよ。使い方もわからないし。意味ないよ」
「それはそうだね」
少年は微笑む。
「うー。また流されたよ」
相変わらずの不満声。さっきから幾度となくこの応酬である。
「あーあ、面白くない……」
「静かに」
突如、少年の声が変わった。
「誰かいる……」
そう言って、道路脇の建物に目を向ける。
「すごいね。わかるんだ」
「……敵意はないみたいだ。様子を見てこようと思う。ここで待っててくれるかい？」
「えぇーっ、つまんないよー！」
「！　声が大きい！」
慌てて詩子の口を塞ぐ。
すると、建物の中で何かが動いた。
「その声……まさかっ⁉」
続いて声。

「……え？」
その声は、詩子にも聞き覚えのあるものだった。
建物から人が現れる。
「……詩子……」
その少年は、驚きの表情で詩子を見つめた。
懐かしい顔。何年ぶりだろうか。
どうして、こんな所で再会するのだろう。
「あ、相沢君……？」

「知り合いかい？」
少年が詩子に問う。
「昔の友達だよ。久しぶりだねー」
満面の笑みで、詩子は言った。
「……本当、こんな所でな」
祐一も笑顔で返す。
しかし、その顔は、どことなく元気がなかった。
詩子にはそれがわかった。
一年間とはいえ、茜と一緒に、誰よりも親しかった仲なのだ。
「何かあったんだね……どうしたの？」
今までの明るい声とは一転、深く、穏やかで、優しい声。
「……いや、なんでもないよ」
隠しきれるとは思っていなかったが、流石に祐一は動揺した。
詩子は本当に、昔から何も変わっていなくて。
茜のことは黙っていよう……そう心に決めた。
「茜だね……」
祐一の心を覗けるとでもいうのか？
そんなタイミングだった。
「!?」
「茜に、何かあったんだね？」
「いや、全然そんなことはないぞ。腹が減っただけだ」
「嘘だね……わかるよ。私達、友達なんだからさ」
「……」

「言ったほうがいいんじゃないかな。君が隠し通せるとは思えないよ」
第三者の声が入る。
そうかもしれない、昔から、この少女はこんな調子で。友達の些細な変化を見抜き、気づかっていた。
「何があったかは訊かない……なんて言えないよ。祐一個人の悩みならそっとしておくべきだろうけど、茜の問題でもあるんでしょ」
心を揺さぶる声。これ以上は、隠せないか。
詩子も、良い話ではないことを悟っている。
それでも、覚悟して、訊いてくる。
こいつは強い、昔から、今も変わらず。
祐一は百貨店でのことを、全て詩子に話した。
自分が茜に想いを告げたことも、隠さずに、全部。
「ついに言っちゃったんだね」
「え?」
全て話し終えた第一声がそれだった。

「告白だって。やるねぇー。あの時うじうじして、結局転校だもんねぇ」
明るい声に戻り、茶化す。
顔が赤く染まるのが自分でもわかった。
「お前……知ってやがったのか!」
「当たり前じゃん」
「……〜〜!」
「あははははっ!」
何も言えなかった。どこまで、この少女は……
だが、少女の笑い声も、どことなく寂しさを含んでいた。
時間がたっても、祐一にはそれがわかる。
自分も変わらないでいられたことを、少しだけ喜んだ。
「でもさ……」
祐一の考えを裏打ちするかのように、詩子の声はすぐに沈んだものとなった。

「やっぱり悲しいよね……」
茜が、人を、コロシタ。
その事実は、二人の前に、重くのしかかる。
「茜。自分のことは話したがらないとこあったもんね。何かあるんだよ、きっと。それなのに、気付いてあげられなかった」
詩子の声に涙が滲んだ。瞳にも、同じく。
「違うだろ」
祐一は、気付けば、そんな詩子を抱き締めていた。
腕の中で小さく震える彼女の姿に、こんなのは絶対におかしいと憤った。
「気付いてたんだろ、茜の悩みに。でも、あえて何も聞かなかったんだろ、茜のために。お前がそうするべきと思って決めた事なんだから、それは、間違いなんかじゃないさ」
本心だった。
こんな言葉で、彼女が救えるかわからなかった。
だが——
「う……ふぇぇぇぇぇん……」
子供のように、声を上げて、泣いた。
その涙は悲しみだけじゃなくて、
祐一にもそれがわかって。
自分出来ることは、まだまだある。
そう確信した。

200　僕たちの失敗——ハッピィライフ

朝。家を出ると、まるで初夏を思わせるようなポカポカ陽気。三ナノ秒で授業をサボることを決意し、そのまま通学路と逆の方へ延々と歩いていくことにした。よく考えてみると特に目的も無く散歩をするのも久しぶりで、できるだけ知らない道を選んで、街の中の未開の世界を拓いて楽しむことにした。まぁ、道に迷っても大声で泣き叫べば誰かが黄色い救急車を呼んだり、保健所を招聘したり、一一〇番をテレチョイスして国家権力に注意を喚起してくれた

りできっと自分に手をさしのべてくれるだろう。
道の脇にオートバイを止め、地図を見ていた郵便配達員がブレザー姿の自分に気がついて、なんとも言えない表情をしていた。うん、多分考えていることと当たってると思うよ郵便屋さん。
墓地沿いの花屋のおばさんが通いのノラネコ達に「遅くなったねえ、ゴメンネ」と言ってエサをあげていた。ふてぶてしいのか堂々たるものなのかそれとも小心者なのか、ネコ達はエサを食べ終えるやいなや集まってきたときと同じように、一斉にダッシュで散っていった。
子供達が地面にしゃがみ込んで蝋石で謎の絵を描いていた。こんな子供たちはすっかり街から消えたものと思っていたけれど、いるいる、ちゃんといた。蝋石もビー玉・おはじきと共に駄菓子屋さんで健在で、大が一個五十円、小が一個二十円なり。
Y字路で挟まれている敷地にお地蔵さまを発見。赤い前掛けが風雨と排ガスで茶封筒のような色に変わっていた。いきおい赤ペンで彩りなおしてあげるのも罰当たりと思ったので、手持ちの小銭と買ったまま鞄の中に入れっぱなしだったミンティアを寄進して三跪九叩頭することにした。
なーんて嘘。一日中寝てました。火傷しそうなほど熱いシャワーを浴びて、ユーロジン二錠とウイスキーを飲んでベッドに入る。十分もしないうちに身体中の筋肉が弛緩。脳味噌が遊園地のコーヒーカップのように次第にスピードを増しながら円を描いて撹拌されてゆくような錯覚が訪れる。逆に肉体は深海の底をゆっくり漂っているような感じ。この上ない脱力感とごくわずかの満足感。そのまま一八時間爆睡。中間試験？　なんだそれ。
なーんて嘘。本当はユタのモルモン教徒と一緒に森の中に隔離されてます。右手には水鉄砲、左手にはもずく。燦々と照らす我らが太陽。百人もの人間

が殺し合いに励んでいるというのに、ここだけは切り取られて隔離された空間。さもなくば書き割りの桃源郷。冗談じゃない。暑苦しくてしょうがない。

北川潤、一七歳。目指すは史上最悪の愉快犯。好きなものはヱビスとレバ刺し、嫌いなものは森とも ずくと水鉄砲。大きくて真っ白な画用紙を与えられ、先生に「じゃあ、みんなの好きなように絵を描いてください」と言われても何を描いていいか分からず、苦笑して辺りを窺う。そんな感じの行動指針。

欲しいものは温かい蒲団。気持ちのいい音楽。ハッピィライフ。

201　昔も今も、かわらないひと

「そろそろ行くよ。俺」

詩子が落ち着いてから、祐一は言った。

「茜を、絶対連れ戻すから。詩子は安心して、生き延びることだけ考えろ、いいな」

「うん……」

「あんた、詩子のこと、頼む」

ずっと黙っていた少年に言う。

少年は「わかってるさ」と笑った。

二人の視線に見送られ、祐一は歩き出した。

「祐一？」

「ん？」

「茜は、変わってなかったよね？」

「あぁ、そうだな」

「……変えてあげてね？」

その言葉の意味を考え、刻む。

「あぁ」

202　忘々却々

川の浅瀬で一人の少女がうめいている。ぴくぴくと体が動く。

「けほっ、けほっ」
かなり多量の水を飲んでしまっているらしく、咽せながら水を吐き出す。
「わたし、どうしたんだろう？　ここはどこかな？　なんでこんなとこにいるの？」
ふらふらになりながらも少女はようやく体を起こす。
「あうー、ずぶぬれになってる。なんで水の中なんか入ってたんだろクチュン。うう、さむいよー」
完全に水の中から這い出てきて少女はぐったりと倒れこんだ。
「はやくおうちにかえって、コタツの中でにくまんたべたーい。あれ？　おうちってどこ？　っていうか、わたしはだれ？」
頭にずきりと鈍い痛みが走る。
「あう！　あたまいたい。思いだそうとするとあたまがずきずきする……だめ、なにも思いだせない……わたし、こんなとこでなにやってたんだろう？」
急流に呑まれ、川岸までようやくたどり着いたのはいいが、少女は落下時等のショックで記憶を失っていた。
「あうー、これからどうしよう……」
――相沢祐一
ふと浮かび上がるビジョン。
「あれ？　いまなにか思いだしたような気がしたんだけど……そう、あい……ざわ……あいざわゆういち！　わたしの憎むべきあいて。いんねんの男。わたしはこいつを探してたんだ。カリをかえすために。よ～し、待ってなさいよ！　すぐに見つけてけちょんけちょんにしてやるんだから！」
ようやく見つけた自分の生きる目的を杖代わりにしてしっかりと地面に立つ。憎悪を抱いた人の生命力は最も強くなる。少女――沢渡真琴（五十二番）は、ただその憎悪のみを武器にして、この危険な島に再び舞い戻っていく。

203　命題

刀に、つい先ほど手にしたばかりのそれに、郷愁を抱く。それが、一体どういう起源なのかは分からない。

だが、蝉丸はぼんやりと夢想する。

かつて、自らが戦場で振るった跋扈の剣。立ちはだかるものを屠り、襲い来る者から命を守った唯一無二の一振り。

場所も、時代も、剣すらも違うと言うのに、今この瞬間の微かな心の昂揚は、紛れもなくかつてのそれと一緒だった。

「懐かしい……」

かつての記憶が頭をよぎる。まるで、駆け抜ける走馬灯のように。

セピア色のスクリーンに映るがごとくでありながら、今もなお記憶の中に天然色を保ち続ける、そんな日々。

昔を回顧して感傷に浸る趣味など、本来の蝉丸は持っていない。

だが、それでもなお彼を惹きつけるものがある。戦場の匂いが彼を捉えて離さない。

――激動の昭和時代への追想、未だ武人の血は眠りについてなどいなかった。

しかし、一体誰が望んでこんな歪んだ戦場へ来ようと言うのか？

戦をゲームと語る浅薄な思想にどうして迎合など出来ようか？

確かに、如何に優れた歩兵であっても、砲兵であっても、戦場においては所詮駒。儚く散っていく塵芥のようにも映るかも知れない。

だが、それは間違ってもゲームなどではない。銃弾刀剣の矢面に立たされる兵士たちの気迫は、少なくとも利己性に染まったものでは無かった。

全ては聖上、皇国、そして家族のため。

誰もが皆、国を背負って闘っていたのだ。
それでこその軍人、それでこその武人。
誰かのために傷つける不毛な殺し合いを、ただそのためだけに我々は負っていた。
それゆえに、その闘いは尊かったのだ。
俺は……俺達は、誰よりもそのことを骨身に染みて知っていた。
屍を積み上げた先に、希望があることを信じていたからこそ、俺達は闘ってこれた。
だが、此度の戦いはどうだ？
仮に生き延びられたとして……その先に希望はあるのか？
——あろうはずが無い。
無理やりに死線をくぐらされ傷ついた心身。
大切な……家族や、友人や、恋人との別離。
そして……信頼していたものの裏切り。
そんなものを経験した人間が、果たして安穏な生活に戻れるのか。

——答えはいつも同じ、
〝否〟だ。
そもそも、人間は命を一つしかもっていない。故に、自分を代償として奪うことの出来る命もまた一つ。
たとえ自らを守るためであったとしても……人は、一より多い数の死を一人では背負いきれない。
だから大義を求めるのだ。唯一のものを奪うと言う逃れがたい大罪の免罪符として。
それなのに、今やここは大義無き殺戮が正当化されている。
生を熱望する餓鬼供の巣。
死を渇望する修羅供の野。
血を切望する博徒供の楼。
誰が、何故こんなにも凄惨な罪人の庭を築き上げてしまったのか。
ヴァルハラには似ても似つかない狂った戦場。
生者からも死者からも、ありとあらゆるものを奪

いつくし、後に遺るのは虚脱だけ。
冒涜された死出の旅路だ。
ああ、死ぬ前から、既に尊厳を奪われている。
かつては俺も、光岡も、岩切も、御堂でさえも、皇国に忠誠を捧げ、心を結託し、剣林弾雨を邁進したものだった。
志半ばで散っていった同胞も、未だ出会ったことも無い同志達も、あまつさえ、自ら命を奪った敵兵であっても、それは無駄死にではなかった。
歴史は、常に彼らの屍の上に刻まれる。
彼らの気迫、忠誠、そして矜持は、死をも超えて後進を行くものに脈々と受け継がれていく。
生きることも死ぬことも、等しく礎であったのだ。
だが、ここにはそれが無い。
意思も理念も、……そして、矜持すらも。
だからこそ俺は迷っている。
生きるため、だけでは不足なんだ。奪うものとしての存在理由が。
守るため、だけでも不足なんだ。奪うものとしての存在価値が。
ならばなんだ？
俺は、自分以外の何に縋って闘うことが出来る？
その値にふさわしいものが、ここにあるのか？
……そう、満足できなかった理由。唯一つの欠落。
もうずっと前から知っていたのに、今この瞬間まで気付くことができなかった破片。
……死者だ。
死者の尊厳は、生きているものの記憶にしか存在し得無い。
彼らを伝えるためには、それを観測するものがいなくてはならない。
この上ない非道の理不尽さの中に散っていった彼らと言う存在は、生者なくしてはもはやあり得ない。
死者が単なる躯として、単なる敗者として扱われると言う無為。
ならば、俺がそれを守ろう。

俺が、彼らのことを風化させせない。
それは、見る人から見れば、弔い合戦のようにも映るかも知れない。
……それだけじゃない。
俺は、自らを知る友人のために、未だ出会うことなく散った友人達のために。
そして、これから出会うだろう友人達のために。
生者も死者も、そして自分も。普く存在のために。
「闘おう、それが俺の大義だ」
蝉丸はぐっと拳を握った。
この島に踏み入ってからいつまでも重かった足取りが、ふっと軽くなったような気がした。
苦悩が一瞬消え去る、まるで霧が晴れるように。
……未来が見えた気がしたのだ。荒廃に支配されたものでなく、希望に照らされたものが。
チャキっ、と唾鳴りがした。
蝉丸はいぶかしむ。もちろん、音の発生源は自らが携えているものであるわけだが。
別に普段なら気にも留めなかっただろう。歩いているときなら、小石が飛び跳ねるとかで音が鳴ったとか、些細なものだと思うはずだ。
だが、今はそうできなかった。
蝉丸は刀を引き抜いた。
シャーッ、と、小気味いい鞘走りの音がする。現れたのは、陽射しを照り返す美しい刀身。
前々から思っていたが、見事なものだ。銘をなすほどの古さは感じられないが、腕の良い刀匠の手によるものだろう。
繊細な刀身に似つかわしくなく、ギラリと光る刃。
未だ血を吸っていないことが不思議なほどの威圧感だった。
刀は、いつだって獲物を求めている。
「……そうか」
蝉丸は刀を鞘に納めた。何かに得心したかのごとく。

刀は、いつだって獲物を求めている。だから感じたのだ。その存在を。
魔的な力を持たずとも、自らの存在理由による警鐘。……いや、疼きと言うべきか。
ざわざわと木々がざわめく。まるでその予兆を確かめるように。
一見、そこにそのような気配は感じられない。
蝉丸は自らの気配を殺し、刀に残心し、そしてその場に落佇した。
——誰か、来る。

ずざぁっ。
茂みを食い破って出てきたのは一人の影。
「ちくしょう、腫れてきちまったぞ。どうする……」
目に映ったのは、一人の少年。
重そうな荷物を背負い、左手で左目をかばっている。

……服の至る所にこびりついた飛沫と、拭いきれない血の匂いを伴って。

——まあ、心のどこかでは分かっていたんだけどさ。
何がって、俺のやっていること自体が、さ。
最初から狂っていたなんて、そんなこと言い訳にできないことも、まあ一応、頭では分かっていたと思う。
そりゃあ、一般人から見れば殺人は狂った衝動なのかもしれないが、ここは一般人の世界じゃない。
俺は、明確に選択したんだと思う。
それが常識という枠の外の選択であったから、説明するのを面倒くさがってただ狂っていることにしてしまった。
違う……。決定的に違う。
確かに表層は狂っていたのかもしれない。でも、

俺は何処まで行っても俺のままだ。何にも変わりやしない。
狂人を装っても、殺人者を気取っても、結局全部俺のまま。
……だから、どこかで竹篦返しが来る。避けるべくもない裁きを受ける。
打算に従って行動して、人を殺して、同級生も……あかりまで裏切って。
そうまでして俺がやりたかったことは、結局なんだったのか。
今となっちゃ、分かりやしねえ——。

藤田浩之は、未だ蝉丸の存在に気づいていない。だが、同時に蝉丸も彼に手を出しあぐねていた。
先手は出せない。それではゲームに乗ったことになる。刀を振るえば、その傷は命へ達する深い刻みを残すだろう。

だが、刀の唾は親指で小出しにしたまま——それ即ち、抜く準備は整っていると言うことだ。刀も、まるでそれを望んでいるかのように手に馴染む。
これはどういうことか——
——乃ち、彼の男の浴血を識りて。
予感めいた……無意識の戦慄は、すぐに洞察によって具象化した。
まだ少年と呼ぶことが許される様相にありながら、そこに微かなる血の匂い、そしてそれを超える猛烈な死の匂いを纏っている。
蝉丸は心中で愕然とした。自ら先刻振り切った現実を、こんなにも早く突きつけられることは予期していなかった。
同時に、歯がゆかった。必要の無い殺生の業を、その若さで帯びることになってしまった少年を目の前にして。

それは、時間にして一瞬の蝉丸の葛藤。
「!?」
浩之が蝉丸の存在に気付く。滑らかに動く右手は
ズボンの裏ポケットに伸びる。そして――
チャキッ。
――拳銃を構えた。
どこか、唖鳴りに似ていた。
蝉丸はその様子を黙って見つめている。その瞳は
どこか、悲しげだった。
「おっさん、……いつからそこにいた?」
痛みを以ってする問答が拷問ならば、武器を以っ
てするそれは威嚇だ。だが、拳銃も行動も、その全
てが彼に馴染んでしまっていて……。その不自然な
自然さが、この無性な悲しさの原因なのかと、蝉丸
はおぼろげに感じた。
「私は……」
そして、蝉丸がゆっくりと口を開く。
「私はまだおっさんなどと呼ばれる年齢ではない」
なんなんだこの男は、と浩之は内心で毒づいてい
た。
拳銃を突きつけられてもまるで怯える様子も無く、
助けを懇願するとか逃げるとかが普通の反応である
だろうに、ただじっとこっちを見つめるだけで、加
えてとんちんかんなことを言ってくる。
「はっ、総白髪のくせに強がりは止めろよ。じゃあ
あんたは何歳だってんだ」
――思えば、それは蝉丸の強がりではなく、浩之
の強がりであったのかもしれない。
「むぅ……」
予想外に蝉丸は口ごもった。
確かに、時間だけを厳密に鑑みるならば、すでに
自分が前線にいた時代から六十年は経ったことにな
る。それでは、私は八十半ばの老人……いや、否定
するべくも無い。そもそもそんな事実は昔からわか
っていたことだったのだ。だが……、この少年の手
前そんなことを言うわけには行かない。

「私はまだ二十代だ」
それも前半だ。と、そこまでは言わなかった。
「けっ、老けた二十代だな。まあいいさ、あんたの年なんか興味は無い。それより……」
浩之は拳銃を何度ばかりか傾けた。
「……いつからそこにいたんだ」
そのセリフには、少し焦燥が漂っていた。
「君が来る少し前からだ、少年」
蝉丸は身じろぎもせずに答えた。
「けっ、そりゃ千載一遇のチャンスを逃したな。俺が気付く前に、それで斬りかかってくれれば、……それで俺を殺すことが出来ていれば、生き残ることが出来たのかもしれないのによ」
ピク……。
蝉丸のまゆが一瞬上がる。
「生憎、今の俺は出会った奴を見逃せるほど寛大じゃねーんだ」
それに呼応するように、浩之の目も細まる。
「死に場所を求めているのか？　少年」
蝉丸が静かに問いかける。
だが、それに即する浩之の答えは無い。
一瞬の沈黙。まるで、時が止まったように。
そして──
「……死に場所なんていらねーよ。俺はただ、生きて帰るだけだ」
だが、蝉丸の目に映った浩之には、生への希望は感じ取れなかった。言葉は、あまりにも希薄すぎた。
「本当にそれだけか、少年」
蝉丸の、心からの不審。
「それだけで、そこまでの血を被れるものか？」
浩之は、応えない。
「生き延びるだけのためには不十分な所以。何が君をそこまで駆り立て──」
「うるせえよっ！」
浩之は突然激昂した。蝉丸が最後まで喋るのを邪魔するように。

蝉丸は押し黙る。そして浩之の顔に視線を向ける。浩之は目線を逸らしている。だが、そこに隠し通すことの出来ない苦渋の色。
「知った風な口聞くんじゃねぇよ」
俯いた少年は、呟くようにそう言った。暗い憎悪にも似た気色に満ち満ちた声色だった。
しかし、かつて躊躇い無く人を殺してきた鉄面皮は、もう剥がれ落ちる寸前だった。
届いていた、確実に。浩之の存在意義にも似た内容を思案し抜いてきた蝉丸の言葉は、確かに浩之の心を捉えていた。
「あんたに何がわかるってんだよ。いきなり拉致されて、かき集められた先でいきなり殺し合えなんて言われてよ。何も分からないで混乱しているところに目の前で一人、あっさり撃ち殺されて。最後まで生き残った一人が無事に帰れるって、それで武器まで渡されて……。……なんなんだよ、一体なんなんなんだよ!?　俺達が一体どんな悪いことをしたっていうんだよ!?　俺たちはただ、日々平凡に生きてただけなのによ。なあ、おっさん。答えろよ、答えてみろよ。ああ!?」
はあはあと肩で息をする浩之。……それは、彼の独白だった。
「……誰も君の心を覗けない。だから、君の選択を否定は出来ない。だが――それは皆同じことだ。君も、他の人間の気持ちは分からない」
蝉丸は、何かを目論むように一拍置いた。
「……殺された人間の気持ちは分からない」
浩之はぎりっ、と歯を食いしばる。
「だから何なんだっ!?　俺は死にたくない！　だから、俺を殺そうとする奴は、殺そうとするかもしれない奴は、誰一人生かしておくことはできない！　だから俺は、皆敵に回して、同級生にまで……銃を向けて……っ……」
少年……。
蝉丸はほんの少し憐憫の思いを催した。

この少年もまた、この狂った環境の犠牲者だったことに気付いて。
「だから……」
浩之は顔を上げ、銃を構えなおす。その目には涙など溜まっていない。ただ、ほんの少し紅いだけ。
「俺は殺してきた。そしてこれからも殺す。もう止まれない。俺は……俺を保つために、走り続ける」
そこには、さっきまでの暴発した感情の残滓も無かった。あるのは、ひどく冷酷で……痛々しい決意のみ。
「そうか……」
蝉丸は目を瞑り、静かに頷いた。
「ならば、私はそれを阻止せねばならんだろうな」
その言葉は、浩之に届かないほど小さな呟きだった。
「さよならだ……」
そして、浩之は一発発砲した。

「何!?」
……銃弾は、蝉丸に掠りもしなかった。
浩之は蝉丸の胸を狙ったつもりだったが、実際の銃弾は蝉丸の左肩上をすり抜けていった。
「少年、そこからでは君に俺を捉えることは出来ん！」
蝉丸は高らかにそう言った。
そこには、二重の意味合いがある。
「くそっ……」
浩之は左目を押さえた。さっきの傷が仇となったか、視界が狭くぼやけている。右目との視力差が遠近感を惑わせ、結果狙いは外れた。
確かに、この場所からの一撃必殺は難しい。
「命中させたければもっと近くから狙うことだ！」
それは決して挑発ではなく、両者にとっての掛け値なしの真実であった。
「一発で無理なら……」
だが、浩之は接近などしない。

「数撃てばいいんだよぉっ！」
ダンッ！　ダンッ！　ダンッ！
浩之は三回連続して発砲した。
だが、その弾道は全て蝉丸に読まれていた。
……ここにもう一つの要素がある。
そもそも蝉丸は、一発たりとも銃弾を浴びる気などなかった。まして彼に命を投げ出す気も無かった。
そして、仮に視界障害と言う優位が無かったとしても、それを為し得るだけの技量が蝉丸にはあった。
蝉丸は初弾の発砲の瞬間に体を翻す。そして、浩之から見ての左側から一気に彼に接近する！
「ぐっ……」
速い……。その予想外の機敏さ、そして死角を突かれたことによって反応が数瞬遅れた。
もう接触まで数メートルも無い。浩之は急迫する蝉丸の眼前に向かってトリガーを引いた。
カチッ。
「何ぃっ!?」
それは致命的な弾切れだった。数で補うには、少々器に違いがありすぎた。
「むんっ！」
一瞬で浩之の懐に入り込んだ蝉丸は、唸るような当身で彼を吹き飛ばした。
かなりの重装備だった。にもかかわらず、浩之の体は見事に宙に浮いていた。
ばたんっっ！
「ぐはあっ！」
地面に叩きつけられる浩之。その重装備が仇となり、彼は内臓への強烈な衝撃に激しく喘いだ。
「がッっ……あああ……くはっ！」
そして、何秒もしないうちに気を失った。
蝉丸はその間、ずっと当身の残心を保っていた。
浩之が気絶したのを確認して、ようやく構えを解く。
するとと何か不可解な手応えがある。

「む」

刀だ。結局左手に握りっぱなしであった。

「まあ……抜かずに済んだのは不幸中の幸いだった。なんだ、不服なのか？」

もの言わぬ刀に、蝉丸は話しかける。

――視界の隅には浩之の姿。

「……他に方法があればよかっただろうにな」

蝉丸は一言だけ、そう呟いた。

「(･∀･)蝉丸〜〜〜蝉丸〜〜〜〜」

どこかからか彼を呼ぶ声がする。

「(･∀･)蝉丸〜〜どこ〜〜〜〜？」

「こっちだ、月代」

蝉丸はそう答えた。

すると少し横道の方から、声の主は姿を現した。

「(･∀･)あー、いたっ。もぉ、早くこれ取ってよ〜」

仮面の少女はひどく不服であることを訴える。だが、その表情からは満足げな様子しか感じ取れない。

当たり前だが。

「まだ水辺には着いていないぞ」

蝉丸はあっさり言った。

「(･∀･)え〜〜、それじゃまだコレ取れないのぉ〜」

「そのようだな」

なぜかくっついていた面は、無理にはがすと月代の皮膚を持っていってしまいそうだった。

「もう少しだ、我慢しろ」

「(･∀･)うぐぅ……」

月代は悔しそうに呻いた。誰かの口癖に似ていた。

「(･∀･)ところで蝉丸。突然声が遠くなったみたいだけどなんかしてたの？」

「いや……」

失神した浩之を、蝉丸は荷物ごとおぶって言った。

「ちょっと野暮用でな」

まるで、本当に何事も無かったかの様子で蝉丸は言う。

「(･∀･)ふーん……」

月代は少ししっくり来ない様子だったが、すぐに興味を失った。
「(・∀・)ま、いっか」
「うむ」
そして一行は、足取りも軽く水辺へと向かって歩き出した。

何かを奪ってまで俺がやりたかったことは、結局なんだったのか。
今となっちゃ、分かりやしねえ——。

204　両表のコイン

朝……
夜を徹して寝ずの番を果たした和樹は、小さくあくびをした。
(不謹慎だよな、あんなことがあったってのに)
明け方、あの高槻からの放送——由宇の名前が挙げられていた。詠美の話から予想できなかったわけじゃない最悪の考え……
もしかしたら由宇ならば——
和樹のかすかな希望すら打ち破られた。
「もう、許せねぇ……いや、ダメだ」
和樹は煮えたぎる気持ちの昂ぶりをなんとか押さえる。いくら和樹の武器が機関銃だからといって、むやみに突っ込んだところで犬死が待っているだけだ。
すぐ横で、詠美が静かな寝息を立てて寝ている。
和樹の迷いはそこにもあった。
最初は仲間を集めてみんなで敵を倒そう——そんなふうに思っていた。
「甘すぎたんだな、俺は」
瑞希は、もういない——
いつも憎々しかったが、心の底では誰よりも固い絆で結ばれていたはずの大志。

裏切られて、そしていなくなった。
いつも大人っぽく、だけど本当は誰よりも子供のように慕ってくれていた郁美ちゃんも、いない。
そして、今また由宇までも。
それだけじゃない。まだどこかにいるはずのみんなも——詠美には会えたんだけど——ここにはいない。
これは、現実なんだ。虚構の世界じゃない。
だけど……
一度は自暴自棄になりかけた自分、それも詠美の存在を確認してもう一度自分を取り戻すことが出来た。
でも、このまま行動して本当にいいのか？
機関銃を手に取る。
共にあいつらを討つ仲間。探せばまだきっといる。和樹や詠美のように生き残って動いてる者もいるはずだ。もしかしたらもう戦っている奴等もいるのかもしれない。

再度詠美の寝顔を見つめる。よほど疲れていたのだろう。最初は寝るのすらも恐がっていたのに。
和樹はためらっていた。詠美を連れまわして行動することに。
誰かに預ける——誰に預けるというのだろう。
おいていく——置いていけるわけがない。というか連れまわしたほうがよっぽどマシだ。
和樹は答えを見出せずにいた。だが、考えるのをやめるわけにはいかない。
後悔しないために。
「——んっ……」
「おっ、起きたのか詠美？」
「えっ？　……そっか……うん、おはよ……」
詠美が目をしばたたかせながら上半身を起こす。
「いつの間にか寝ちゃったんだ」
「そうみたいだな、ぐっすりだったぜ」
「ヘンなことしてないでしょうね」
「するわけねぇだろ……」

「ポチは寝なかったの？」
「……俺は昼間、寝てたからな。（ポチはやめろよ、二人のときぐらい……）」
かすかに、腹部が痛んだ——
「ほらよっ！」
「わっと、いきなり投げないでよね！　で、でも……あんがと」
二人で軽い朝食を取る。昨日食べなかった残りのパン。人間の腹は良く出来ている。食欲はなかったが、パンを口に含むだけで何か充実感を感じる。
「ねぇかずきっ、わたしが寝てる間、何にもなかった？」
不安気に詠美。
「ん、ああ——」
詠美の視線を受けとめることができないままに呟く。
言えない。
いつかは知ってしまうかもしれないが、今ここで由宇の死を、現実を伝えることはできなかった。
「ねぇ、これからどうするの？」
「ああ、仲間……同じ志をもった仲間を集めるんだ。抵抗、脱出、いくつか戦う手段はある。だから行動しなきゃな」
「うん……」
いつものような覇気が無い。
（だけど、これが本当の詠美なんだよな）
和樹は知っている。虚勢の裏に隠された本当の詠美を。
（まあ、本人に言ったら罵倒されるのがオチだろうけどな）
耳まで紅潮させて食いかかってくる詠美が脳裏に浮かんだ。
「あたしも、もちろんいっしょだよね」
「……」
和樹が考えてもでなかった答えが、今そこにあった。

「だ、ダメだダメだ！」
和樹は頑なに首を横に振った。
いざ決め付けられると、それはやはり不安になってくる。
「な、なんで⁉　かずきはあたしがじゃまなわけ⁉　こんなちょーびぼーの乙女なあたしをこんなところでおきざりにしよーってわけ⁉」
置き去りにする……そんなことできない。だけど、どうしても最後の決断、勇気が足りないのだ。
「……」
「うーっ！　もういい、あたしかえるっ！」
目に涙を湛えて、詠美がきびすを返す。
「まてっ！」
そのまま走り出そうとする詠美の手をがっしりとつかむ。
「ううっ……」
今にも涙が溢れ出しそうな瞳。
「……分かった。じゃあ、こいつで決めよう」
「ふみゅっ？」
和樹のポケットに入っていた、たった一枚だけのコイン。
「この十円玉の表が出たら詠美を連れて行く、裏が出たらどこか安全な場所にいればいい」
「そ、そんな、まって……」
ピ――――ンッ……
詠美の静止の声も届かず、コインが舞った。
「――――っ‼」
詠美は目をぎゅっと閉じ、顔を背けた。
パシッ！
「詠美……」
「やだ……聞きたくない！」
「見ろよ、表だよ」
「やだやだ……えっ⁉　それじゃあ……」
「おまえの強運には負けたよ、いっしょに行こうぜ」
「う、うん！」

詠美の顔が、花が咲いたように明るくなる。
「ポチ！　いくわよ！」
「離れるなよ……それと、俺はポチじゃねぇ」
「あんたなんかポチでじゅーぶんよ！　このポチまる！」
おれは、卑怯だよな。こんな形でしか……
コインを手に取る。だけど……
「勇気出たぜ、相棒」
もう一度コインを天に放って、それをつかむと、なぜか力が湧いた気がした。

205　さよならを、あなたに

「誰？　じゃないわよ!?　あなたがお兄ちゃんを殺したのね！」
茜は、地面に横たわる死体と目の前の少女を交互に見た。
「……妹さん？　……誤解です。私はこの人が死ぬのを看取っただけです」
「嘘！　そんなこと言われても信じられるわけないじゃない！」
理奈の言うことも一理ある。茜は銃を持っているのだから。それにこの状況下、肉親の死体を前に冷静でいられるはずがなかった。理奈は大声で叫ぶことで恐怖心を押さえ、茜をきっと睨み付けた。対する茜は全く動じない。
「……だから、誤解です」
「許さない！　絶対、殺してやる！」
そんなことが出来るとは思ってもいなかった。
ただ、感情が先走り、叫んでいた。
茜は「ふぅ」と溜息をつき、冷酷に告げる。
「……武器なしでですか？」
理奈は凍り付いた。
今手持ちのものといえば小型カラオケのみ。
これで殴り掛かれというのか、相手は銃を持っているのに？

「うるさいっ！」
そんなこと構いもせず、茜に殴り掛かる。
茜は銃を理奈へと向け……思い直して、すっと左に避けた。
勢いあまって理奈は転び、小型カラオケが地面に落ちる。
起き上がったすぐ目の前に、英二の死体があった。
「だって……お兄ちゃんが……」
そのまま英二の死体にしがみつき、泣き叫んだ。
その光景をしばし見つめ、茜は再び銃を上げる。
理奈の視線が、その動きを捕らえた。
何も映さない、暗い銃口を見つめる。
「……あなたは私を殺すといいました……だから、私もあなたを殺します。……さよなら」
幾度とない銃声が、この森には響いていた。
今度の銃声もまた、森の一部となっていった。

理奈の体が崩れ落ちる。
傷口から血液が……流れていなかった。
いや、そもそも傷口なんて存在しない。
茜の撃った弾は、理奈に当たっていない。
理奈は緊張に耐え切れず、失神しただけだった。

（……どうして外れたの。
……やっぱり私は、人を殺せなくなったの。
……違う、きっとあの人は私を殺せなかったから。
……私がここで、殺す理由がないだけ。
……そうに決まっている。
……もう行こう）

そう心に呼びかけても、茜はしばらく、その場を離れることが出来なかった。
残された少女は、これからどうするのだろう。
そんなことを考えていた。

206　休息

　小さな沢を見つけた篠塚弥生（五十四番）は、周囲の安全を確認したうえで、そのほとりに腰を下ろした。先程の死闘から数刻。あの戦場から三、四キロは離れただろうか。
　弥生はリュックから水の入ったボトルを引っ張り出し一気に飲んだ後、携帯食を囓りながら武器の点検に入る。
　銃口内の枯葉や土を除き、空うちして引き金の異常が無い事も確かめる。弾を装填しほっと一息ついた際、澱みに映った自分の顔を見て自嘲気味に笑う。
　鮮やかな御髪は乱れ、地面を転がった際の枯葉が所々ささり、顔の右半分は雪見に一撃を加えた時の返り血で赤く染まっている。
「フフフ……まるで鬼ですね……」
　伏せた瞼から涙が溢れ出し、頬を伝った赤い雫が水面に幾つもの波紋を作る。
　一分が過ぎた。
〝ザブザブザブッ〟
　おもむろに弥生は沢の冷たい水で勢い良く顔を洗い、タオルで念入りに拭う。髪の枯葉や埃を払い髪を整え、ボトルに水を補充する。
　身体中を点検して何処にも異常の無いのを確かめた後、ハンチング帽をかぶり直し武器を装備した。
「由綺さん、藤井さん……」
　後に続く言葉を飲み込み歩き出す。
　その顔に先程までの面影は無く、〝いつもの〟表情に戻っていた。

207　環

「おはよう、冬弥くん」
「ん……」
　目を覚ました冬弥はもたれかかっていた木から身

体を起こすと、手の甲でまだはっきりしない目をこすった。俺はどうしてここにいるんだろう。どうして外で寝ていたんだろう。どうして由綺が俺の顔を覗きこんでるんだろう……。

(……っ)

順にゆっくりと戻ってくる記憶が、由綺があの女性を撃ち殺した時の忌まわしい光景を運んできた。

思わず、由綺の顔をしげしげと見る。

どうしたの？　というように少し首を傾げて、いつも通りに微笑っていた。

(夢……だったのかな)

希望的観測から、どうしても思いはそちらに向かう。冬弥はすっと目を伏せた。

——夢ではない。落とした視線の先、由綺の手の中には、間違いない、あの時の短針銃が握られていた。

「行こっ」

由綺はしゃがみ込んだ姿勢から勢いをつけて立ち上がった。

「緒方さんとの約束、今日のお昼くらいなんだよね？　早く行かないと、遅刻しちゃうよ」

「そうだね……」

「ほら、緒方さんすごくカンとか良さそうだし、他のみんなもササーッとすぐに見つけちゃってそうだよね。理奈ちゃんも、弥生さんも、マナちゃんも、はるかも、美咲さんも、きっともう向こうで——」

ジジッ、と嫌な音がした。定時放送だ。

『おはよう諸君、元気に殺し合ってるかな——』

そして、高槻の声が死者の名前を告げる。

初めに読み上げられた名が、一気に冬弥の眠気を吹き飛ばした。

「は……るか……？」

「うそ……うそ……だよ、ね……」

由綺の顔色がみるみる青ざめていく。そしてきっと、俺も同じ。

はるか。

俺の、由綺の友達。いつも軽口ばかり叩き合っていたけど、やっぱりあいつは親友で。
かけがえのない、親友だった。
「…………」
「行こう、冬弥くん」
「え？」
由綺が、冬弥の手を取って、駆け出す。
「ちょ、ちょっと待てよ、由綺？」
「早く……早く、緒方さんたちのところに行こう……！」
ギュッと掴んでいる手が、震えていた。

「いいザマね」
「もぐーっ！　むがーっ！」
住井の両手両足を包帯で縛り、ついでにさるぐつわもかませると、マナはふふんと笑った。
「これからは初対面の女の子にあんな口きかないことね。それに、あなたみたいな人が調子に乗ってマシンガンなんか振り回してると、すぐにタチの悪い人に見つかって狙われて殺されて奪われちゃって、みんなの危険度がアップするんだから。荷物は私が預かっとくわよ」
「もがーっ！　むぐぐーっ！」
「そんなにきつく結んでないし、植え込みにでも放り込んどくから心配しないで。その状態で狙われたらオシマイなんだから、ほどけるまでおとなしくしてることとね」
言いながら、マナは住井の側に転がっているマシンガンを取り上げ、自分の鞄の中に投げ込んだ。ナイフ、オートボウガン、そしてこのマシンガン。薬品や包帯が少々、それに中身は確認していないが聖の支給武器もあった。おかげで荷物は結構な重量になっていたが、使わないからと言って捨てるわけにもいかない。こんなものを転がしておいて、下手な人間に渡ったらそれこそ危険だ。
（その気になったら、普通に戦ってでも結構生き残

れるかもしれないわね……冗談よ、センセ）
ポケットの上から、聖の形見のメスに触れる。先端に睡眠薬が塗ってあるこのメスだけは、いつでも使えるようにポケットに入れてあった。
――メスを受けて倒れたあの男は、まだ寝ているのだろうか。
（また会ったら、今度は蹴っ飛ばしてやるわよ）
今になって再び湧き上がってきた怒りに、思わず手近な住井を蹴飛ばしてやろうと思った時、遠くに人の気配を感じた。
「誰……？」
マナは植え込みに身を潜め、注意深くその方向をうかがった。徐々に姿がはっきりと見えてくる。男と女、二人組だった。しかも……
「藤井さん！　お姉ちゃん！」
見慣れた二人。逢いたかった二人。やっと、逢えた。植え込みから飛び出し、ぱっと駆け出す。
「も、もがーーーーっ！」
道の真ん中に、身動きの取れない住井だけが残された。
「マ、マナちゃん!?」
冬弥は向こうから走ってくる少女を見て驚きの声を上げた。
（まずい……）
まさかこの場で逢えるとは思わなかったが、今の由綺は恐らく――普通じゃない。
万が一。万が一、いきなりマナちゃんを撃ったりするようなことがあったら。最悪の想像が頭をよぎる。……だが。
「マナちゃーん！」
「お姉ちゃん！」
由綺は持っていた短針銃をあっさり冬弥に預けると、走り寄ってきたマナの身体を優しく受け止め、抱き締めた。一連の動作はなんの澱みもなく、ごく自然なものだった。あの時の狂気を感じさせるよう

なものは、何一つない。
（そうか……）
――由綺の心は、無理矢理に作り出した虚構の日常の中にある。こうして俺だとか、マナちゃんとかと一緒に過ごす時間。由綺は今、こんなどこともわからない島じゃなく、いつもの通り、蛍ヶ崎の街にいるのだろう。それはひどく刹那的な、非現実だ。
「ほんと、良かった……っ！　お姉ちゃんがもし死んでたりしたらどうしようかと思ったわよ」
「マナちゃんも無事でよかっ――あっ、足ケガしてるよっ⁉　だ、大丈夫⁉」
「うん、ちょっと、ね。それよりお姉ちゃん、藤井さんをちゃんと守ってあげたみたいじゃない？　良かったわね、藤井さん」
――ドクン。
マナの軽口に、冬弥の心臓が大きく脈打つ。
が、あくまで由綺はニコニコと微笑んでいた。
「てへへ。私、冬弥くん守ったよねー」
「あ、ああ、うん。……由綺には感謝してるよ」
冬弥はどう反応していいかわからず、曖昧に返事をした。外から見れば、この三人の輪は仲の良い三人が世間話でもしているように見えるのだろう。
だから、それは起こった。
「おい、その人たちってお前の知り合いか？」
道端に放置されることに憤りを感じた住井は、全身全霊をもって、必死の努力の末に戒めを解いてしまっていた。
「にしても酷いな、お前。あんな状態で置いてくんだからな、焦るぜ……ところであんたがた、美咲さんって言う――」
由綺は無言で冬弥の手から短針銃を取ると、住井に向け、撃った。
ジャッ！
「ぐがあっ⁉」
動作の素早さが逆に手のブレを呼び、射撃の精度を損ねたことが住井にとっては幸いした。撃ち出さ

れた針は本来の狙いである頭を大きく逸れ、住井は左肩の肉を吹き飛ばされただけで——決してかすり傷というレベルではなかったが——済んだ。
「お、お姉ちゃん⁉」
「ぐ、くっ⁉」
何が起こったかもよく理解できなかったが、住井の足は即座に由綺に背を向けて駆け出していた。
肩が灼けるように痛い。流れる血の感触。熱い。
だが、逃げなければ、確実に死ぬ。
そして、まだ死ぬわけにはいかないのだ。
「美咲さん……みさきさん……ッ！」
浮かぶのは、愛しい女性の顔。
護る、そう約束した人の顔。
——美咲さんは、生きている。
俺が、護る。
生きて、護る。
「……あ」
カチッ、カチッ。

ニードルガンの装填数の少なさも住井には運が良いとしか言いようがなかった。由綺はヨロヨロと逃げていく住井に向けて数回トリガーを引いたが、針が射出されることはなかった。
住井の後ろ姿が遠くに消えると、由綺は照れくさそうに肩をすくめた。
「てへへっ、ちょっと服に血がついちゃったね……そこの水道で洗ってくるね」
由綺はペロッと舌を出すと、側のマンションの敷地内の手洗い場に向けて走っていった。
「……どういう、ことよ」
「…………」
マナの小さな肩が震えていた。
そんなことは冬弥自身が聞きたかった。どういうことなのか。どうしてこうなってしまったのか。
何を話したらいいかわからなかった。しばらく、向こうで水道を使っている音だけが響いていた。
「……俺が」

悩んだ末、この島に来てから今までのことを順に話していくことにした。
英二と待ち合わせをしたこと。見知らぬ少年に襲われたところを由綺に助けてもらったこと。由綺が女性を撃ち殺したこと。そして、英二との約束の場所に向かう途中、ここでマナと出会ったこと。
話し終わったところで、また沈黙が訪れる。ややあって、マナがゆっくりと口を開いた。
「幻滅ね」
マナの目から涙が一筋、零れ落ちた。
「どうして……どうしてお姉ちゃんを護ってあげられなかったの……!? そんな……そんな……」
「俺が……弱かったんだよ」
「……ッ！」
言った瞬間、脛に痛みが走る。泣きながらマナが蹴ったのだ。だがその痛みは、いつも家庭教師としてマナの側にいた時のそれに比べれば本当に弱々しいものだった。マナが冬弥の目を、濡れた瞳でキッと睨みつける。
「行くわ。……お姉ちゃんによろしく」
「マ、マナちゃん！」
振り返ることはなかった。冬弥に背を向け、早足でその場から離れていく。徐々に小さくなり、やがて消えていったマナの背中を冬弥はただ見送ることしかできなかった。

——そう。
由綺がおかしくなったんじゃない。
悪いのは俺なんだ。
弱い俺を護るために、由綺は壊れた。
俺が、壊した。
恋人が、俺のために人を殺す。
俺が、恋人に人を殺させている。
俺が死ぬか、さもなくば俺自身が由綺を殺す。
由綺がこれ以上罪を重ねる必要なんて、ない。
でも、それは俺にはできない。

俺は脆弱で、姑息で、臆病者だから。
……なら。

「あれ？　冬弥くん、マナちゃんは？」
「……行っちゃったよ」
冬弥は、鞄の中から特殊警棒を取り出し、太陽にかざしてみた。反射する光。そこに、粉雪の中で微笑む恋人の姿を見た気がした。
――それなら敢えて罪を犯そう。

208　取れない仮面

月代と蝉丸は格闘していた。
――人と、ではない。
月代の顔に吸い付いて取れない仮面とだ。
二人は月代が見つけた水源地に戻っていた。
「(・∀・)水……つけてもはがれないよ？」
「……この面は、のりの類で貼り付いているわけではない様だな」
「(・∀・)ど、どういうこと？」
恐る恐る月代が尋ねる。
「何かの呪いか……あるいは妖術の類か」
「(・∀・)の、呪い!?　それじゃあ、もう一生取れないってこと!?」
「……」
蝉丸は何も言わない。いや、何も言えなかった。
月代を見つけたのは良かった。
だが月代の顔にくっついて離れないお面が曲者だった。無理に取ろうとすれば月代は痛がる。だいたいお面の構造自体良く分からない。
水をつければ取れるだろうという発想も蝉丸が少年時代に一升瓶の口に指を突っ込んで抜けなかった時、きよみが水を指と瓶の間に注ぎ、それでようやく抜けたことを思い出しての事だった。
「(・∀・)ええ～～～～っ!?　やだやだ！　こんな顔じゃ、もうお嫁に行けないよぉ！」

蝉丸に泣きつく月代、蝉丸は困惑していた。
蝉丸は月代を励まそうと、なんとか言葉を探したが、その結果とんでもない言葉が飛び出してしまった。
「もし、一生その面が取れなかったら、俺が月代を嫁にもらってやる。だからもう泣くな」
「(・∀・)……えっ？　ホント？」
蝉丸はそっぽを向く。今頃自分の言った言葉の重大さに気付いたようだ。
「(・∀・)ヘヘヘ……だったらこのまま取れなくても……いいかな」
「そういう意味で言ったのではない、必ずその面を取ってやるという意味で言ったのだ」
ようやくフォローの言葉が出てきた、だが時すでに遅し。
「(・∀・)でも蝉丸の実家って何処だっけ？　う〜ん、婿養子じゃダメかな？　ねぇ、蝉丸〜」
「……」
その後、延々と月代の話が夢見る乙女状態だったのは言うまでもない。

209　悪夢〜Nightmare〜

闇、一面の闇。
浩之はここがどこかも分からないまま走りつづけていた。
「はあ、はあ、ヘンな所に迷いこんじまったぜ……何なんだよここは」
額の汗を拭う。
（ヘンだな……汗だくだと思ったのに）
浩之の顔は、かなりの距離を全力疾走したのにもかかわらず綺麗なままだった。
「喉が乾いたぜ……」
口の中がカラカラだ。
水の入ったボトルを取り出し、一気にあおる。
「……喉の渇きが消えねぇ」

顔をしかめると、空のボトルを乱暴に叩きつける。
「また水源を探さなきゃな……」
光一つ通らないそこへ、もう一つの声。
「無駄だよ。あなたの喉の渇きは永遠に消えることはないんだよ……」
「誰だ⁉」
浩之が銃を向ける。いつの間に持っていたのだろうか。
気がつくと浩之は手に銃を握っていた。
だが辺りは一面の闇。
「出てこい！」
見えざる敵へ恐怖で、浩之の声は震えていた。
「あなたの心が泣いてるよ。赤い涙。もう、血でまっ赤なんだよ……」
唐突に浩之の目の前に現れる、一人の少女。
「あ、あ、……なんで、お前、死んだはずじゃ……俺が殺したはずじゃ……」
思わずあとずさる浩之。だが、少しも距離は開かない。
むしろ、相手が動いてもいないのにその距離は縮まっていく。まるで浩之から相手に歩み寄るようにゆっくりと。
少女――瑠璃子は浩之のあごにそっと手を当て、童子のような笑いを浮かべる。
浩之は恐怖のあまり、ピクリとも動けないでいた。
「クスクス、あなたの心が泣いてるからだよ。その心、癒してあげる――」
瑠璃子の唇がその頬に触れる。
「く、来るなぁ！」
その刹那、浩之が瑠璃子に銃を放つ。
五寸釘が瑠璃子の胸に突き刺さる。しかし、そこから血は一滴も出なかった。恐怖と狂気が浩之を襲い、脅えに顔が不自然に歪んだ。
「見てみてよ……ほら、あなたのお友達……」
何事もなかったかのように瑠璃子が微笑む。
また闇から一人、一人と現れる。

「藤田くん！　良かったぁ、ここにいたんだね。すごく心細かったけど、藤田くんがいれば、きっと大丈夫だよね。一緒に頑張ろう？」
雛山理緒が不安げな顔を散らして、元気に叫んだ。だけど、だんだんとその顔が、その腕が、赤く染まって……
「そして、あなたの心に今も生きている人達だよ……」
目に光を感じられないけど、どこか暖かい印象の女の子――
まだ中学生位の無邪気な、少女――
自分の命を救ってくれた、ぶっきらぼうだけど優しかったはぐれ医師――
もみあげが印象的な、笑顔の似合う女の子――。
繊細で、触れただけで壊れてしまいそうな心をもった黒髪の優等生――。
――藤田くん…浩之さん……――
口々に知らないはずの浩之の名前を挙げていって、だけど、彼女達の視界は、赤く染まって……
「あなたの、親友だよ」
最後に現れたさわやかな少年。
「ぼくたち、ずっと友達だよね」
「雅史……」
「そして……私だよ」
泣き笑いで浩之がその少年を見つめる。
作り物の真珠のような丸い瞳が浩之を捕らえる。
瑠璃子。
「来るなよ、俺に、近づくなよ……撃つぞ!?」
「いいよ、わたしも、まだここで生きてるから……ね？」
浩之の胸に、あてがわれた白く細い手。
「藤田……浩之ちゃん……」
闇が、ひび割れていく。
「来るなよ、おい……来るな、その名で呼ぶな！俺の中に入ってくるなよっ！」
――浩之ちゃん――

瑠璃子の姿が歪む
「やめろ、やめてくれ……あか……り……」
どうでもよかったあの頃。
ただ過ぎていくだけの、だけど幸せだった日常。
気が付くと、浩之の頬には一筋の涙。
乾ききった浩之が夢で、だけどここに来て初めて心から流す涙だった。

210　落日

熱、熱、熱。肉を刈られた痛みは熱に名前を変えて左肩から全身に広がり、住井の体力、そして精神力までも蝕む。倒れ込みたい。ずっと眠っていたい。何もかも忘れて苦しみから遠く離れた夢の中を彷徨ってたい。駄目だった。自分の意地は高熱を凌駕し、苦しみの中であってもその足を止めることを許さなかった。自分が立ち止まったら誰が美咲さんを守るのだ。自分以外にはいないんだ、泣くなよ格好悪い。

美咲さん、美咲さん美咲さん、美咲さん。必死に呼び続ける声は掠れきっていて、静かな森の中でもまるで響かない。これじゃあ自分の声は美咲さんに全然届いていない。くそ、声出せ住井護、それでもお前は美咲さんのナイトかよ。自虐を無理矢理活力にしようと住井は自分に罵声を浴びせる、だがそれでも足りない。畜生、これも溜息のような声。
ありとあらゆる希望という希望の詰まっていたデイパックは無様にも放置してきてしまった。パソコンも携帯もマシンガンも全部鞄の中だ。脱出できる希望はすべて絶望という暗い海の藻屑になってしまった。従兄弟の北川潤に再会してもこれじゃあ何も成し得ない。何の為に自分は美咲の傍を離れたのだ。そんな自虐が燃料となって住井の足を動かす。
結局この手に残っているのはただ一つの意志だけだ。形もない色もない、ただ熱としてこの右手にある確固たる想いだけだ。思う、それだけでも美咲さんを護るには充分だ。マシンガンよりも爆弾よりも

強い武器がこの世にはあるのだ。この「意志」で美咲さんを必ず守ってみせる。思念が住井の動力炉となり足を動かす。てのひらに残っている意志が命令する、内臓が破裂し熱が身体の自由を奪うまで決して立ち止まるなと。その意志に従い住井は森の中を彷徨う。

生きている。生きている、生きている。美咲さんもオレも、まだ生きているんだ。

薄暗闇の中を探し回るうちに、住井の頭にもやもやした様々な思考が流れてくる。冷静さのかけらもない自己満足の思考だ。洪水のように溢れるそれを、しかし住井の意志は止められない。

思う。

生きてさえいれば光はやがて降るのだ。誰かの温もりがあればオレはずっと生きていける。美咲さんの温もりがあれば歩いていけるんだ。

思う。

それにしても、今までの自分の短い人生には何の目的も無かったな。誰かの温もりも知らず、他人と他人として接し、ぬるま湯のような友人と馴れ合って生きてきたんだ、目的なんてある訳がなかった。だらだらと過ごす日常。なだらかな坂を自転車を引いて上るように、ゆるゆるとした日常。

思う。

こんな非日常に放り込まれてもなお、自分は暢気だったな。人を殺しても非日常を認識出来なかった。自分はどうかしていたに違いないと思う。

思う。

別にすぐ死んでしまっても良かったんだ。そりゃ生き残れるんだったら生き残りたい、女の子を抱いたこともないんだ。けれど実のところ死んだって別に何も違わない。女の子を本当に好きになったことがなくても人は死んでいける。惜しいとは思うけれど嘆くほどではない。

思う。

自分が彼女に出会えたことは運命だったのかもな。きっとみじめな自分に、万有引力という名前の神様が生きる為の小さな目的を与えてくれたのだ。運命なんて全然信じたことのなかった自分が、こうして運命論を抱いていることが少し誇らしい。

思う。

確かにふたり一緒にいた時間は短かった。けれど、その短さは何を邪魔すると言うのだろう。唐突に始まる恋が唐突に始まらない恋に劣ると誰が決めた。共に生きて帰って、ふたりでにこやかに笑い合いながら、美味しいモーニングコーヒーを飲みながら、もう一度朝陽を見たい。

思う。

他人を好きにならなくても人は死んでいける。これだけは紛うことなき事実だと今でも思う。けれど、――人は、誰かに好きになってもらわなければ、生きていけないんだ。

思った。

住井護（オレ）は澤倉美咲（アナタ）に好きになってほしかったんだ。

やがて住井の頭に冷静さが戻る。ここまで探しても見つからないとは、自分の捜し方が悪いのか。それとも、もしかしたら美咲は何処かで気絶などしていて、実は既に美咲と何度かニアミスを、

「――っ、……何考えてんだ、オレの頭は」

何を言ってやがるんだこの脳みそは。ゲロまみれになって遂にイカレちまったか？　あれは幻だっただろうが。あれは幻だ、美咲さんを心配するあまりつい見ちまった幻想さ、だから止まれよこの間抜けな足、そこに行っても美咲さんがいる訳がないだろう、な、だから止まれってば、徒労だって解ってるくせに、止まれって、なあ、頼むから。

朝陽なんて早起きが出来る奴なら何度でも見れるもので、だから全く価値のないものだと、この瞬間も住井は思っている。朝陽くらい何度でも見れる筈

なのだからどうしてありがたがる必要がある？
だから、「それ」を見てしまっても、住井は、朝陽なんてなんの価値もないものだと思う。
真っ赤な血。遠目にもその血が既に高い粘性を持っていることが解る。近づく。住井の足は止まらない。土を踏み締める音が耳のすぐ傍で鳴っているような錯覚がする。薄暗闇の中でも解る。赤い黒い、動きを失い熱を失った行き場のない血液が、彼女の眠る周りの土に染みこんでいるのが解る。
胸に小さな穴が開いている。穴と呼ぶべきかどうかも知らない、ちっぽけな黒い穴だ。そんなもので人が死ぬとは思えないくらいの小さな穴。そこから血はもう流れていない。ほぼ完全に血は止まり、
そして彼女は仰向けに眠っていた。
膝を付く。身体から力が抜けていく。
やはり、先程見た美咲さんのマボロシは、幻ではなかったんだ。自分の頭が現実を認識出来なかっただけなんだ、今頃になってやっとそう気付く。
住井は力無く周囲を見回す。同じ場所だ。自分は先と全く同じ場所に辿り着いている。唯一違うのは、今自分はこれが現実なのだと認めきっていること。
無意識に手を伸ばし、住井は美咲の頬に触れる。土に汚れて黒く汚れてしまっている頬。口から漏れた血で少し赤くなりすぎてしまった唇。閉じられた瞼、変わらず薄い色素の髪。
マボロシは僅かに熱を帯びていた。その僅かに残る熱が、住井の指を通して奪われてゆく。
確信出来た。
オレはバカだ。
「美咲さん」
彼女を呼ぶ声はひどく掠れている。きっとこれから死ぬまでずっと、自分はこんな声でしか喋れないに違いない、そう思う。自分の声はもうこの人には届かないのだから、それでもいいと思う。
美咲の力ない身体を抱き起こし、強く、強く抱き

しめる。住井の身体に、美咲の身体に僅かに残っていた熱のすべてが移ってゆく。
住井護は泣いた。無様なくらい、道化なくらい、惨めなくらい、恥じらいも何もない高い大きい声をあげて。喪失感が胸に大きな穴を空ける。その穴から色々なものが流れ出す。生きる意志も、頭の使い方も、恋の仕方も、全部零れ落ちてゆく。両の眼から零れ出す涙が美咲の頬に落ちる。マグマのように熱い涙は、しかし美咲に何の奇跡も起こさない。住井の涙は、ただ汚れた雨となって美咲に降るだけ。
彼の最後の慟哭だった。

殺してやる。
殺してやるよ、緒方英二。何があっても、殺してやる。美咲さんを殺したように無慈悲に無残に鬼畜のように殺してやる。殺してやるよ、何もかも全部。そう、全部だ。誰であろうとオレの目の前に現れた奴らを殺してやる。全部殺したらオレもこの糞の役にも立たない脳味噌ぶちまけて死ぬ。理由も目的もない、ただ白痴のようにこのゲームに乗ってやる。
考えてみろよ、それがオレの日常だ。彼女は——澤倉美咲は、正当な理由もなく殺された。緒方英二の勝手な衝動の為に。そして何十人という人間が、同じように、理由のない衝動の元に殺されている。目的意識を欠いた日常のオレと同じように、無目的に。オレはオレがそこまで好きではないが、オレがずっと間違った生き方をしてきたとも思わない。オレの生き方の中にも、否定出来ない一つの真実があったと確信出来る。目的なんてなくても人間は確かに生きていける。そう、目的なんてない方が人間は楽に生きていけるんだ。
くだらねえ。守りたいものなんかあったからこんなに苦しまないといけないんだ。
美咲さん。君に出会ったせいでオレはおかしくなっちまったんだ。君のせいでオレは牙を失って、君のせいで幸せな未来なんて想像しちまって、君のせ

いで人のことを好きになっちまって、君のせいでこんなに泣かなけりゃいけなくて。君に逢えてなけりゃあまだもう少しはましだったんだ。オレは怪我なんてしてないだろうし、もしかしたら最後まで生き残れたかもしれない。それに君だって、もしもオレに逢わなければこうやって死なずに済んだのかもしれない。くそ、何でオレ達は逢っちまったんだ。
住井は、目を閉じる。目を閉じて目を閉じて目を閉じて、それでも涙が止まらない。
住井は、それでも、彼女に逢えて良かった、そう思う自分が、死ぬ程情けなく思えた。

左肩に走る痛みなど今や何の問題もない。ただ苦しくて眩暈がするだけだ。人を殺すには充分な体力が残っている。問題は手段だ。今の自分には武器がない。マシンガンも携帯もパソコンも、全部あの小さな少女に奪われた。拳一つで人を殺せる程自分は強くない。殺意だけでは人は殺せないのだ。途方に暮れる。これからこの命は何をするのだ。白痴のように人を殺すことも出来ない自分は、
ふと、光があることに気付く。薄暗い闇の中で太陽の光を反射する銀色が。
——見つかった。
その時住井の目に入ったのは、光だった。幽かすぎて捉えそこないそうな、それでも確かに力となり得る光だ。
——美咲さん、一応これ、護身用にね。オレにはマシンガンあるからさ。
先に美咲に渡しておいた、一人の人間を殺している刃物だった。絶命してもなお美咲が強く強く握りしめていた、自分が渡しておいたバタフライナイフだった。
住井は美咲の熱のない指先からそれを手に取る。柄には美咲の冷え切った汗の感触。
思う。
美咲さんは、オレの手を離さないでいてくれた。

思う。
これは美咲さんの手だ。ならば、
――もう二度と、美咲さんの手を、離すものか。

211　目覚めはまぶしくて

「……なんだったんだよ、畜生」
俺は目を覚ました。
涙の跡……泣いていたのだろうか。
よくわからなかった。
「気がついたようだな」
「オッサン……」
あの男が声をかけてくる。俺を殺さなかったのか？
どいつもこいつも、甘すぎだ。
「泣いてたけど、大丈夫？」
「……なんだ、お前は？」
目の前の女――多分――は、変なお面を被っていた。
その表情がどうにも滑稽で、気がついたら俺は笑っていた。
「笑えるではないか、少年」
「……」
オッサンが言った。
何故だか、今の俺には『殺す』という感情が涌いてこない。
それは、この島に来てから始めてのことで、なんだか気持ちがよかった。
忘れ物を見つけた、そんな時の気分に似ていた。

212　再動

どれだけ走っただろうか。体力はとうに限界だった。どうやら、また森に入り込んでしまっているようだ。適当に走り回ったため、方向感覚がない。
立ち止まって、呼吸を整える。深く吸い込み、吐

く。足の傷口がまたズキズキと痛みを訴えていた。
ただ、あの場所にあれ以上いるのはいたたまれなかった。一刻も早く離れたかった。
従姉の顔を見る自信が、なかった。
「どうしてよ……どうしてよ、お姉ちゃん……」
小さい頃から、ずっと慕っていた。
アイドルとしてデビューした時も、自分のことのように喜んだ。憧れとは少し違ったが、大好きなことに変わりはなかった。
——なのに。
「んっ……」
鞄がやけに重く感じた。紐が肩に食い込んで、痛い。ふと見ると、道のすぐ脇は崖になっていた。マナは崖から少し距離を置いて座り込むと、鞄の中身を改めた。
拳銃。ナイフ。オートボウガン。そしてマシンガン。中身は知らないが——開けてみる気にもならないが——聖の支給品。
いくら重いとは言え、これらは捨てられない。拾われるわけにはいかないからだ。
救急箱は持っていたかった。いつ必要になるかわからないし、聖の持ち物を勝手に捨てるのも気がひけた。
(返せたら、ちゃんと返すからね……)
続いて携帯電話とノートパソコンに手を伸ばした時、不意に胸が締めつけられる思いがした。これらは住井からマシンガンと一緒に取り上げたものだ。
名前も知らない少年。由綺に撃たれた少年。確かにやや危なそうな人間だったが、でも撃たれる必要はなかったはずだ。
(……生きてなさいよね)
携帯とノートパソコンを、崖に向かって投げ捨てる。大して軽くなったわけではないが、荷物を整理している間に少しずつ自分の気持ちも整理できているような気がしていた。
今はもう、誰が頼れるということもない。なら、

せめて自分でできることだけでも、しよう。
霧島センセイを、妹さんに逢わせてあげたい——
それはエゴなのかもしれない。でも、他にできることが考えつかなかったから。妹さんの無事な姿を見せてあげられたら、センセイはきっと安心して眠れるから。
「行こう」
マナは、また歩き出す。今度こそ、本当にたった一人で。
その頃、崖の下では突如後頭部に降って来たノートパソコンの直撃を受けた少年が、もずくを喉に詰まらせていた。

213　（無題）

「Ｏｈ！　どうしたの？　もずくがつまったの？」
「なんか一瞬『ドアの向こうで死んだおばあちゃんが手を振ってる』って感じがした……だれだよ！　山にゴミを捨てるのは、リサイクル法違反だぞ！」
「どうした、もずくが足りないの？　Ah, I see. これが降ってきたのね」
レミィは北川の頭上から落ちてきた黒板のようなものを拾い上げた、
「ナニコレ？」
「…ちょっとよく見せて、ふーんでかい傷もないし動くかな？……やった!!　やったぜカアチャン！　アイガッタイットだ！」
レミィの手を取り小躍りする北川、その頭には希望への思いと小さなたんこぶができていた。

214　ユガミ

「……天野さん、探していたおさげ髪の子って、もしかしてあの子？」
〝自分達が手にかけた〟死体を目の当たりにしてか

ら、数時間。
〝既にコト切れていた〟瑠璃子さんを確認してから、数十分。
おそらくこの数値は正確ではないだろう。
あまりに連続した人の死の数々に、僕の心も身体も、すこし妙な具合に軋み始めているような感じがするからだ。
「いえ、違います。あの子はもうちょっとこう……なんて言ったらいいんでしょうか」
「どういう風に違うの？」
「ええと、まず髪の色はあの方よりすこし派手です」
そう言った天野さんが指差す先には、仲の良さそうな女の子の二人組がいた。
……それと、なぜか傍らにタライ。
(タライ……水浴びでもするのかな？)
ぼっ。
「祐介さん、顔、赤いですよ」
「え」
言われてから、自分の顔が上気しているのに気が付く。
「なな、なんでもない。なんでもないからっ」
ばたばたと両手を顔の前で振る。
「どこか調子でも悪いんですか？」
「いいいいや、そんなことはない、そんなことはないから大丈夫だよ」
「……そうですか」
僕がそれこそ必死の思いで浮かび上がらせた、つぎはぎだらけの笑顔に。それでも、天野さんは安心してくれたようだった。
(はあ……なんか最近こういうのばっかりだな、僕)
いつも――女の子のことがからむと特に――僕は妙に浮ついた気分になってしまう。
こういうとき、沙織ちゃんだったら、
「祐くん、欲求不満なんじゃない？」

なんて笑いながらちょっとふざけた台詞で僕を——

さおりちゃんは死んでいた。
（だめだ、忘れろ。今は自分達の目的のことだけを考えるんだ）
自分の心が彼岸に去り行く前に、必死で目の前の現実にしがみつく。例えその現実に猛毒の刃が光っていても、だ。
その刃は決して現実の物ではないのだから、いくら掴んだって現実の僕は傷つかない。
だから……耐えるんだ。辛いこと、悲しいこと、やりたくはないこと、全て。
「そういえば、あの子犬はどうしたんだっけ」
すこしでも気を紛らわせるために天野さんに話を振ってみる。
「え、ピコのことですか」
「うん」
自分で名前をつけた子犬。
少し前までじゃれ付いてきてすこし鬱陶しくも思った子犬。
いなくなったらなったで、寂しくも思う子犬。
……たぶん、逃げていった子犬。
「朝、あの人を殺す前に私が逃がしてあげました」
「そう、か……」
やっぱり逃げていったのか。
僕は少しだけ安堵し、少しだけ落胆した。
「これから、どうしましょうか」
「そうだね……僕たちの目的は人探しだから、人のことは人に聞くのが一番だと思うんだ。もうピコもいないし」
「私も同意見です。けど」
「けど？」
「……この状況下で、そもそもまともにコミュニケーションが取れるのか、心配なんです」
「つまり、あの二人がいきなり凶器を振り上げて襲ってくるかもしれないってこと？」

「はい」
「その点なら、心配しなくてもいいよ」
「どうしてですか？」
「一応、僕も男だしね。それに」
見ててごらん、と言って、僕は右手首をひゅんっと前に振った。次の瞬間、ぱぱんと乾いた音を立てて、狙った場所の木の葉が二枚落ちた。
「少しは、この武器の使い方も解ってきたんだ」
「……」
「こうやって、目潰し。時間稼ぎなら十分だと思う」
天野さんは、驚いたような無表情で落ちた葉っぱを見ていた。
「今の、どうやったんですか？」
「種明かしをするとね」
皮手袋の上から中指に巻いたピアノ線を、できるだけ速く手繰り寄せる。
「ほら、先のほうに小さな石が括りつけられているだろう？」
「この石を使って、木の葉を落としたんですか」
「まあ、人間、やる気になれば大概の事はできるってことかな」
ピアノ線をしばらく手のうえで玩び、それから手の甲側に収めた。
「いつ練習したんですか？」
「昨日の夜、緊張して眠れなくてね。コツをつかんだらすぐに寝ちゃったけど、あの時は」
「それじゃあ、行きましょうか」
「うん。僕が先に行くから、天野さんは後からついてきて」
「わかりました」
そう言って、僕らは隠れていた茂みから外に出た。水面にいる二人が驚きの眼で僕たちのほうを向いた。
僕は両手をあげて戦う意思のないことを表現する。二人のうちの一人が、もう一人を庇うように前に出てくる。

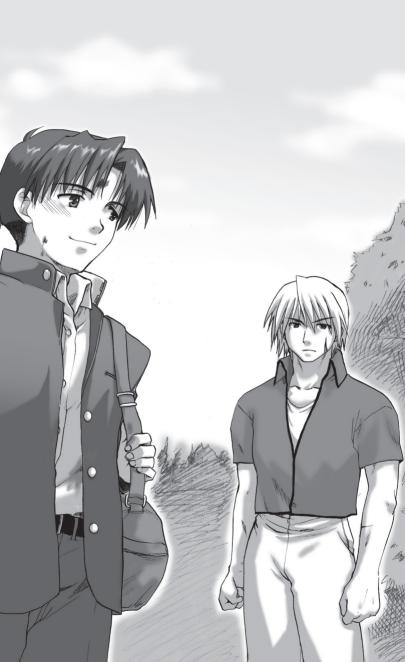
「……誰よ、あんたたち」
女の子にしては妙にドスの利いた声で、おさげ髪の子が言った。

215　笑み

笑えることはいいことだ。
嘲笑の類いとは違う、真の笑顔。
喜び、楽しみ、そういった笑顔。
浩之が浮かべた笑顔は、まさにそれだった。
笑顔は人の心に安らぎと希望の光をもたらす。
どんなに辛い状況でも、その強さをもって、周りを安心させることのできる人間がいる。
それは、ずっと昔から、そうだった。
「笑える強さがあるのなら、少年、君はもう大丈夫だ」
蝉丸は浩之に告げた。
「何のことだかわかんねーよ。何がいいたいんだ、あんたは？」
蝉丸を睨み付ける。その目には、殺気はこもっていなかった。
「君は先程、自分を保つ為には『殺す』しかないと言ったな。今もそうか？　本当に『殺す』ことしか見えないのか？」
違うだろ、とでも言いたげに、蝉丸が問う。
『殺す』感情が涌かないという事実。あの悪夢。
最後に呼んだ名前。あかり。
今まで自分がやってきたことと、その重さ。
正面から、向き合って。
聞こえてきた言葉。
(浩之ちゃん。本当は優しいから)
「俺はさっさと帰りてーんだよ。――あかり達と、一緒にな――」
たったそれだけの言葉を言うのに、長い、本当に

長い時間がかかった。
「そうか」
変わらぬ口調で蝉丸は言った。
何を思っているのか、浩之にはわからなかったが、どうやら非難されてはいないらしい。
「あぁ。気付かせてくれてありがとな、おっさん。お人好しもいいとこだ」
本来の浩之の、あの独特の笑み。
「む」

「じゃあ、俺はそろそろ行くぜ」
銃を含む自分の荷物を持ち、浩之は立ち上がった。
「気をつけてね〜」
今だに面を被ったままの月代が言う。
「あんたもその顔。なんとかした方がいいぜ」
からかうように言った。
「これからどうするのだ、少年？」
「そうだな……」

「君は相当に人を殺めているのだ。その姿が誰かに見られている可能性も大きい。協力者は期待できないぞ」
蝉丸の忠告が飛ぶが、そんなことは承知の上だった。もとより、見ず知らずの協力者を期待する方が間違っている。
だがそんなことは、今言うことではない気がした。
「わーってるよ」
言って、空を見上げる。あの広い大空を。
「とりあえず、安心させてやりたい奴がいるから。そいつを探す。その後は。その時に決めるさ」
「そうか」
「おっさん、名前は？」
「坂上蝉丸だ」
「変な名前だな」
「む」
浩之の失礼な台詞に、多少ムッとした顔をする。
「俺は藤田浩之だ。じゃあ、世話になったな」

今までとは違う未来へ進む。
その為の一歩を、今、踏み出した。

人を人とも思わずに殺した過去を、受け止め。
その上で、あいつに会おう、笑ってやろう。
さっきまでは全然思い出しもしなかった、自分の殺した人達の顔がよぎる。
(自分勝手で悪いが、あんたらを殺した責任はきちっと取るぜ。
絶対に、今までとは違う方法で、生き残ってやる。
女医さんよ——あんたに助けられた命、無駄にはしないよ。
あんたは医者の鑑だぜ)

空を見る。
聖が苦笑を浮かべていた、そんな気がした。

216　傍にいたいと願うこと、そして別離。

——待たせた罰は二時間。
……私は七年待ったけど、祐一は二時間で許してあげるよ。
あの雪の日。名雪は自分を置いて遠いところへ行った少年にコーヒーを差し出した。
「遅れたお詫びだよ。それと……再会のお祝い」
だけどその缶コーヒーには、言葉にならないもうひとつの想いが込められていた。
『もう、私を置いて遠いところへ行かないでね』
——七年ぶりの再会には、そんな意味も込められていた。
「おねえちゃん達も、ありがとう。ぽちをよろしくね……ばいばい」
それは別れの言葉。名雪は精一杯みちるの名前を叫ぶが、その声がみちるに届く前に彼女の姿は消え

た。後には、ぽちと名付けられた白蛇が残るだけだった。
「消えちゃいましたね……」
「うん」
忽然と姿を消したみちるの安否を気遣って、名雪と琴音は沈んだ表情で語り合う。秋子が二人にお茶を淹れてくれたが、名雪はあまり飲む気になれなかった。
手をつけず、じっとカップを見つめるだけの名雪に、琴音が心配そうに話しかける。
「名雪さん？　……顔色が悪いようですけど、大丈夫ですか？」
「ん？　あ、だ、大丈夫だよっ」
名雪は心配無い、と言う風にぶんぶんと手を振る。
「……そうですか？」
怪訝な顔をしながらも、琴音はそれ以上は問い質しはしなかった。
今までは、お母さんがいてくれるから安心だった。琴音ちゃんや、みちるちゃんも一緒にいてくれた。
でも、ここを人が訪れるにつれ、名雪の心の中に言い様の無い不安が押し寄せてくる。
もし、お母さんがいなくなったら？　琴音ちゃんがいなくなったら？
現に、みちるちゃんは消えてしまった。お母さんたちもそうならないという保証がどこにあるだろう？
もう、一人はいやだよ……。傍にいて欲しいよ……。
……祐一……。
——名雪は意を決して、ずっと考えていたことを秋子に打ち明けた。
「ねぇ、お母さん。……私、祐一を探しに行ってくる」
「ダメよ、名雪。危険だわ」
秋子はいつものように了承しなかった。めったにないことに、名雪も驚きを隠せない。

「でも、祐一も私たちと一緒にいたほうが良いと思うよ。お母さん、祐一が心配じゃないの？」
「勿論、心配だわ。でも名雪。私は、あなたを危険な目に遭わせたくないの」
「……」
「お願い。これ以上お母さんを困らせないで」
優しい微笑みを浮かべて、秋子は名雪を諭す。が、その口調には有無を言わせない迫力があった。
「さ、お腹空いたわね。……琴音ちゃんも、何か食べる？」
……はい、と気まずそうに琴音は答える。秋子は了承、と答えて名雪たちに背を向けた。
「……お母さん、変だよ」
秋子の動きが止まる。
「以前のお母さんなら、わたしのためだとか言って祐一を放っておいたりしないよ」
「……名雪？」
秋子はゆっくりと振り返る。
「お母さん、この島に来てから変わったよ」
戸惑う秋子に、名雪は目を伏せて呟く。
「……わたし、今のお母さんは嫌だよ」
言葉の無い秋子を尻目に、名雪はすたすたと瓦解した入り口へ歩み寄る。そして、ゆっくりと振り返るともう一度だけ想いを告げた。
「わたし、祐一を探してくる。見つけたらすぐ戻って来るから。……行ってきます」
「ダメよ、名雪っ！」
我に返った秋子が叫ぶ。
が、その時には名雪はもう駆け出した後だった。
「……」
困惑しながら見ていた琴音は、何も言えずただ座っているばかりだった。
「……琴音ちゃん？」
と、突然秋子が声をかける。温和な笑みをたたえたまま。
「……は、はいっ⁉」

「名雪を、連れ戻してきてくれる？」
にっこりと尋ねる秋子に、只、琴音は頷くばかりだった。
「ありがとう。それじゃ、お願いね」
慌てて飛び出す琴音を見ながら、困ったわ、という表情を見せる。
――せっかく、祐一を探しに行こうなんて言い出さないために、往人に人物探知機を譲ったというのに。
「……難しい年頃ねぇ」
秋子はそう呟いた。

217　手負いの獣

山を抜け、廃墟と化した町へと進む――
誰も通らない道、そんな場所にある路地裏。
そこへと抜ける道は、人一人通りぬけるのも困難な場所だった。入り口を少し進んだ場所、そこに赤い血が付着した罠が仕掛けられていた。
手入れされていない雑草に覆われたそれは、普通に歩いていたのではまず気づかれないであろう巧妙な仕掛け。
さらにその奥……そこに死んだように眠る一人の女、深山雪見（九十六番）。雪見の左腕には、先ほど殺害した石原麗子の白衣が巻きつけられていた。
白衣が真っ赤に染まっていたが、どれが雪見の流した血なのか麗子の返り血なのかもはや分からなかった。
「……生きてるのね、私」
やがて、雪見がゆっくりと目を開ける。
「もう私、駄目だって思ってたよ、みさき……」
雪見が空を見上げた。
「みさきが好きだった夕方まで、生きていられるのかな、私」
疲労と苦痛に苦しめられながらも、親友たちの復讐を胸に誓い、ここまでやってきた。

雪見に危害を加えるものは誰も来なかった。幸いだ。先ほどまでは、戦える状態ではなかったのだから。
　たとえ細い路地裏への道を利用して仕掛けた罠にかかった者がいたとしても、とどめをさせたかどうか……
　雪見が手持ちの武器をもう一度確かめる。アサルトライフル……残弾はまだ充分にある。だが、既に左腕は動いてはくれない。片腕でそれを扱えるほど雪見は銃器を使いこなせてはいない。
「かまわないわ。壁や障害物に支えてもらえばまだいける。もしなければ気力で支えればいい。それに、みさきや澪ちゃんがきっと私を支えてくれる」
　復讐への渇望だけが、今の雪見を突き動かしていた。
　すでに引火して、なくなってしまったが、最後のひとつ——ジッポオイル水風船。そしてドラゴン三十連花火。
「組み合わせて使えば、と思ったけど、浅知恵だったのかな」
　雪見の腰にはサバイバルナイフ。
「……私には、これが一番ね」
（これで二人——殺した。もう後戻りはできないのね……）
　そして視線の先には、雑草に隠された罠。
　私は復讐者。きっとそこまで辿り着いてみせる。
「本当はもっと眠りたい。だけど私は——！」
　罠を取り外すと、私は再び戦場へと歩き出す。
　失った心——半身を取り戻すために。

218　魔獣、その水の下へ。

　柏木千鶴は、地図をスカートのポケットにしまい込み、足音も無く森の中を歩く。
（……住宅地は隠れている人間も多い分、危険性が高いわ）

指先の疼きを酷く感じた。
（森もそろそろこの時期になれば罠が仕掛けられている可能性が高い。あの忌々しい主催のことだわ、あいつが仕掛けていなかったとしても、参加者が仕掛けているかもしれない。罠は無差別、私がジョーカーだと見分けてくれる筈はないわ。……見分けて作動する様な罠があった場合は……考えないでおこう。これ以上は精神衛生上、良くないわ）
そこまで思考して、ふっと笑う。
（精神衛生上？　ダメよ。私はもう狂っているんだから）
口元の微笑みは柔らかく、優しげなその目は笑っていない。冷え冷えとした、人ではない者の、瞳。覚醒時の様な、赤黒い色でないだけに余計に残酷な色を帯びたその目が、目的の場所を捉えた。
（ここ）
口に出さず、呟く。
そこは川縁だった。森の切れ目から、その川の断片を佇み、眺める。
一見して、清らかな水の流れだとわかった。
（人が生きるのに、水は必要だわ）
慎重に人の気配を読みとる。背後の森へ、そして目的地の川辺へ。
（誰も、近くには居ないのね……）
早く。早く。殺さなくちゃ。
千鶴の思考がぐるぐると廻る。
（梓も、楓も、初音も……耕一さんも。私が、守るんだから）
だから、殺さなくちゃ。他の誰かを。物言わぬ亡骸に変えなくちゃ。
思考を、気配の察知を、研ぎ澄ませる為に、千鶴は川辺へと歩み寄る。
静かだった。静寂に、川の流れの音以外、何も聞こえない。
そっと、水に触れる。
冷たい。心地よく、冷たい。

スカートの埃を落としてから、手で川の水をすくい顔を洗う。思考が冷えていくのを感じる。

(さあ、行かなくちゃ)

殺しに。大切な人達を守る為に、だれかの大切な人を、殺しに。

219　水の中の、戦い

藤田浩之は、ようやっと森の出口を見つけ、ほっと安堵の息を吐いた。ここまで誰にも遇わずに済んだのは、幸運としか言えないだろう。

(待ってろよ、あかり。……委員長も)

今までの黒々としたものが、もうなくなっていた。

誰かを蹴落として、殺して、独りだけ生き延びる。

そんなのは俺のやり方じゃないと、どうして最初から気付かなかった？　級友を、見知らぬ者を、助けをくれた者を、俺は殺した。

それは大罪だと、今は、痛いほどにわかっている。

だから、俺は生きる。

その罪をなかったものにはできないから。

俺が、忘れない。そして責められる限り、この罪は消えない。

許されたくはない。許される筈がない。

正当防衛ではなかった。俺は望んで、人を殺したのだ……。

森の切れ目から川が、見える。

誰も居ない事を確認して、川辺へ足を踏み入れる。

水は綺麗だった。月代が汲んできた水もここのものだったのだろうか？

浩之は、水を口に含む。そして、少し深くなっているその川に頭を突っ込んだ。

顔も髪も汗と汚れ、血で汚れていたから、それを落とすために。

その瞬間、気配が、動いた。と、いうより唐突に現れた、そんな感じだった。浩之は誰のものともつかない、その気配に顔を勢いよく上げ、頭上を見た。

目が、合った。冷たい、目。
浩之のあげた水飛沫にピクリとも動かぬ、人の物とは思えない、その目。幸い、萎縮はしなかった。ただ、悲しくなった。酷く、酷く悲しい気分だった。浩之はわかってしまったから。この女性も、このゲームに乗ってしまっている。
そう、直感したから。
「勘がいいのね……気配、消していたのに」
口元も表情も慈愛の顔をしているのに、冷たい、美しい女性——柏木千鶴。
気配を消して、贄を待っていた、魔獣。
「俺を殺すのか？」
あんた、前までの俺と似たような匂いがするぜ……言いかけて止めた。
止めざるを得なかった。
長い髪の美しい女が、浩之に攻撃を仕掛けて来た為だ。
ヒュッと、風を切る音と共に長い爪が頬を掠る。
避けていなければ耳くらいは持っていかれていた……いや、死んでいただろう。
「これが、答えよ」
冷たい声が響く。やはり、と浩之は唇を噛む。
「ダメだよ、アンタ。そんな風にしてたら、俺みたいになっちまう！」
必死に攻撃をかわしながら、浩之は叫んだ。全身の傷が痛む。そして、心も。
「アンタ、それで満足なのかよ！」
「ええ、満足よ。それで大切な人を守る事ができるなら——それに」
言いさして、一撃。失われていない、千鶴の左の爪が、浩之の腕を掠る。
千鶴は浩之の言葉を聞き入れなかった。甘言に惑わされるのも、改心を求められるのも嫌だった。そして、その声を聞き入れたくない一番の理由は、彼の体に、心に染みついている、
——血の臭い。

それも、一人や二人ではない。
もっと……沢山の。
自分にもこれから染みつくであろう、その臭い。
千鶴よりも先に一歩を踏み出したくせに、自分を説得しようとする少年の姿は、酷く欺瞞に満ちているように思えた。
「貴方、血の臭いがするわ。一人、二人じゃないわね？　殺したのは」
千鶴の指摘に浩之の動きが止まる。
彼女はその隙を狙っていた。
この少年の意図はわからない。本気で説得しようとしているのか、千鶴を騙して利用や殺害しようとしているのか。
だが、それもどうだっていい。どちらであろうと千鶴がやるべきことに変わりはない。
(私は……貴方を、殺します)
突き刺すように繰り出した、爪。
それで勝負はつくと、思っていた。

完全に少年の、浩之の心臓を捉えていた。
だが。
彼はそれを受け止めた。
片腕を犠牲にして。
「なっ……！」
肉深くにまで達した爪は、するりとは抜けない。
「……もう、やめろよ。こんなこと」
全身の痛みが酷い。腕が熱い。でも、やめられなかった。
自らの腕に突き刺された、その爪を、黒髪の魔獣を離さないように、浩之は掴んで離さない。
その、掴んだ手から、指先からも血が滴り落ちる。
「俺、殺して、沢山の人殺してさ。凄く辛かったから」
「……離しなさい」
「苦しいぜ？　凄く、アンタが誰か大切な人を守るなら殺しちゃ、ダメだ」
目が合う。浩之の、悲哀に満ちた、その目が。

「綺麗事いわないで！　貴方殺してるんでしょ!?　沢山の人を！　それでお説教ですって？　笑わせないで」
目は、伏せなかった。反撃がくるかもしれない。だから、恫喝する。わかっている。それは、弱点だ。人を殺すこと、人の死は、何よりも苦しく痛いことを千鶴は知っている。知っているから。
「アンタ今、凄く悲しい顔してるよ。誰も死なせたくないのは皆、皆一緒なんだ。皆、わかってても、弱いから、自分を守る為に、大切な人を守るために殺さなくちゃって誰かを殺す。……俺は、多分一番弱かったから、殺した。級友を、見知らぬ人を、助けてくれた人を」
「……そう。わかっているなら。離しなさい！　それで私に殺されなさい！　私は弱いの。わかってるわ。主催側の甘言に乗った時点でそんなことは、わかりきっていたのよ！」
鬼の本能が、能力をセーブされていることで弱まっている。人の心の方が、比重が大きい。
（だけど……！）
千鶴は、それを認めた上で浩之に攻撃をくわえるべく、蹴りをその腹部めがけて繰り出した。
「ぐァぁッ！」
爪が自らの手に、まだ三本残っている事を確認して、千鶴は蹴り飛ばした浩之に歩み寄った。

220　水の中の、戦いが終わるとき

「私は、決めたの。決めたのよ！」
浩之に歩み寄りながら、千鶴は呻くように言葉を吐き出す。まるで、自分に言い聞かせているかのように。
「私はどんなに汚れても、構わないと。そう、例え愛する人達に顔向けできなくなったとしてもよ。それがどれ程のものか、私は知ってるわ。だって、私はこの島に来る前にも人を殺そうとしたことがある

んですもの……」
「……そんなに、悲しいのにか？　そんなに苦しいのにか？　……気付いてるのかよ、アンタ、泣いてる」
千鶴の目から、雫が滴る。頬を伝わり、浩之の頬の上に、落ちた。
「そうよ。どんなに、どんなに苦しくて、悲しくて、どうしようもなくなっても、私はそうしなきゃいけないの。これが、私の宿命。鬼の血を引く者のね。どうしても、殺戮はさけて通れないのよ。そうやって、私達は生きてきた。制御ができなくて、人をあやめることに苛まれ自殺した者も多いわ。私の父も、よ」
一度言葉を切り、涙は拭わずに、瞳を閉じ、開ける。
「だけど、私は彼らほど強くないの。人を殺して生きていたくないと思えるほど強くないの。どうせ、どうせ死ぬなら。大切な人達を守りたいの。心の自殺なのはわかっているのよ。でも。でもね。私は、それを引き替えても、そうしてもあの子達を守りたいの。人を殺して恨まれても、呪われても」
もう、千鶴は泣いてなかった。浩之に、言い、聞かせることで自分の決意を強めた。
偽善的過ぎる理由付けだけれども、納得していた。
「……アンタ、強いな。俺、アンタになら殺されてもいいかも。美人だし」
浩之はそう言って少し笑った。蝉丸達に、見せた、あの、笑顔で。
「ただ、ちょっと待って欲しいんだ。一言、謝りたい、大切な人がいるから、こんな俺でも、な。だから、そいつらに一度だけ、一度でいいから会いたいんだ。それまで待ってくれないかな？」
それに、と浩之は付け足していった。
「この怪我じゃ、アンタに殺されなくても死にそうだしな。わざわざ、アンタが手を汚す必要はねぇと思うし、俺が会いたがってる奴……あかりっていう

んだけど、すげえ、可愛いヤツなんだ……アイツには絶対いわねぇけど。アイツんとこ行く前に、俺、誰かに殺されるかもしれないし」
「…………わかったわ」
浩之が口を閉じて数秒の沈黙のあと、千鶴はそれを了承した。確かに、この怪我では、生き残れない可能性が高い。だとすれば、大切な人に会いに行くことを止めてまで、そうしてまで今、ここで……私が殺す必要はないのかもしれない。
「ただ、悪いけど、その爪返してくれないかしら？」
「ああ、わかった」
これは、お互いに賭けだった。
千鶴にしてみれば、抜いた爪を武器に、浩之が反撃をするかもしれない。
浩之にしてみれば、抜いた爪を渡した途端殺されるかも知れない。
この、猜疑心がこのゲームの一番の敵だ。理性では、そんなことはないと思っても、恐怖心は消えない。
（全く、クソッタレたゲームだぜ）
その計略に嵌った自分が呪わしい。だから、今は、この人は、例え裏切られても信じよう。
そうすれば、強くなれる。
強くなれる、気が浩之にはした。
浩之がやっとの思いで爪を抜くと、千鶴は自らのスカートを切り裂いて浩之の手当をした。
「…………」
浩之は黙ってされるがままになっていた。千鶴も、何も言わなかった。この時、互いに信頼が生まれていたことを千鶴も浩之も、あえて口にしなかった。
「じゃあ、俺、行くから」
浩之がそう告げると、千鶴は「ええ」とだけ答えて、付け加えた。
「名前、教えてくれない？」
「藤田浩之。つっても、次にこの名前聞くときは放

送かもしれないな」
「……そう、ね。そうならないことを祈りたいわ。……私が言うのも、変ね」
千鶴は、小さく笑った。
人の、微笑み。
「なんだ、笑った方がいいじゃん……えっと」
「千鶴、柏木千鶴よ」
くすっと笑ったまま千鶴が答える。
「私が言うのも、何だか変だけど……気をつけて」
「ああ、千鶴さんも、な」

221　痛むハート

「名雪さん、待って下さいっ！」
前を走る名雪に向かって、琴音は必死に呼び掛けた。
だが、名雪は止まらない。差は広がるばかりだ。
『わたし、陸上部で部長さんやってるんだよ～』
そう言ってたのを思い出す。陸上部部長の名は伊達じゃなかった。
もう息が上がっている。これ以上は走れないと悟った。
「名雪さんっ!!」
最後に、もう一度、叫んだ。
名雪の足が止まる。
「……わたし、ダメなんだよ。……怖いんだよ。祐一がいないと、ダメなんだよ！」
小さな声だった。
いや、そう聞こえただけだった。
琴音と名雪の距離はかなり離れている。
琴音の位置から名雪の声が聞こえるということは、相当大きな声を出しているはずだ。
「祐一もお母さんもいないと、わたしこころから笑えないよ!!」
それで、知った。

自分が喫茶店に辿り着いてから、こんな状況を気にしてないかのように笑い続けてきた名雪。
この人は強い人だ、琴音はそう思った。
それは違っていた。表面では笑えていても、心では助けを求めていた。
安らぎを求めていた――ここにはいない、祐一に。
――もう、限界だった。祐一に、傍にいて欲しかった。
「名雪、こっちに来なさい」
琴音はビクッと体を震わせた。
――この人はいつの間に、自分の隣にいたのか――
「あなたの気持ちはわかるけど、それでも、あなたに危ない目に遇ってほしくないの。あなたが死んだりしたら、お母さん、どうすればいいの？」
秋子の悲痛な声が響く。
それが、最後だった。

「お母さんも勝手だよ！　お母さんも勝手だから、私ももう勝手にするの！　そんなお母さんなんて、大嫌いだよ！」
泣き声が、叫びが、秋子の心に深く突き刺さる。
それだけ言い捨て、名雪は走っていった。
もう――誰も、追うことをしない。
「秋子さん……」
琴音が声をかける。
「ごめんなさい。ひとりにしてもらえますか？」
琴音にもわかるほど、悲しみを帯びた声だった。
琴音は何も言わず――何も言えず、その場を後にした。

222　この孤島、脱出不可能＃2

白い砂浜、青く澄み渡る海。
「この島も、こうしてみれば悪いところでもないん

ですね」
楓が、潮風に揺れる髪を押さえてそう呟いた。
「それにしても、島ひとつ見えません」
「ねぇねぇ、この辺って一体世界地図でいえばどのへんなんだろうねぇ？」
玲子が楓の袖を引っ張る。
「どこでしょう？」
楓も控えめに首を傾げた。その仕草が傍目にとても愛らしい。
「SOS出したら気付いて貰えるのかなぁ？」
「そもそも、SOSというのはどうやって出す物なのでしょう？」
「にゃはは、あたしもわかんないや」
玲子はお手上げと言う風に肩を竦める。
「地下道もありませんでしたし、これからどうしましょう？」
島の地下に秘密の連絡通路があるのでは？という玲子の思いつきから行われた地下通路探索は空振りに終わった。
どこにも地下道の入り口らしき物はは見つからなかった。マンホールの蓋も開けてみたが、中は全てコンクリートで埋められていた。
「船を作る！……なんて無理だよねぇ？」
「作るのは無理でも船はあるかもしれませんね。監視の人も居るみたいですし」
楓は島の内陸部を見つめる。
(耕一さん、千鶴姉さん、梓姉さん、初音……)
幸いまだ放送で誰も呼ばれていない。けど、あれだけ探索しても誰も遭遇することはなかった。
心を覆う黒い予感はまだ晴れそうにない。
(今は……私にできることをやるんだ)
楓の決意は固かった。
「ねぇ、楓ちゃん、そろそろお腹すかない？向こうの岩場で休憩しよ☆」
「はい」
玲子が二人の残り少ない食料を取り出しながら、

笑った。
（みんなで、笑って帰りたいな）
周りからは見つかりにくい岩場の陰へと移動しながら、そう祈った。

223　白い、決意。

杜若きよみ（十五番）は森の中を彷徨っていた。
（困ったわ……）
鞄の中に食料はもうない。途中黒髪の女性と出会った以外、幸か不幸か誰とも会うことはなかった。
（蝉丸さん……会いたい……）
彼女の知る者は蝉丸、そしてもう一人の自分『〈複製身〉きよみ』しかいない。
時代も眠っている間に流れ流れてしまった。
孤立。そう、彼女は孤立していた。元来、お嬢様であったきよみは、森を歩くことも、ましてやサバイバルなど縁遠いものだった。
木の実などを食べる知識もなく、方向感覚も殆どない。地図はあれども、意味をなさない。
（どうしたら……いいのかしら？）
当てもなく森を彷徨っていても解決策がみつかるわけではないかもしれない。
立ち止まり、座るに丁度いい石の上に行儀良く座り、バッグの中身を改める。
入っていたのはもう少しで空になりそうな、水の入ったペットボトルとパンの入っていた袋、地図、そして、4/4と書かれた謎の円盤、そしてハンドマイク。武器になるものは何もない。つまりは、外れのバッグだった。
（私は、一度死んだようなものなのに……何故かしら、怖い）
弥生と遭遇した時、実際きよみは少しばかり、恐怖を覚えていた。
知らない時代の女性。
誰かを捜していた。その情報をつかむため、今も

奔走しているのだろうか？　協力を仰げば良かったのかも知れない。
でも、そうするには、時代の隔たりは大きかった。こんな状況で、「殺し合え」と言われて、見知らぬ時代の見知らぬ女性に協力を仰げるほど、きよみに話術力はない。下手を打って側にいて、いつ殺されるともわからない。
そう、戦争だ。
（私の、生きていた時代と同じ……）
人が人と殺し合う、血で血を贖わねばならぬ、状況。
（いつ、殺されてもおかしくない……）
それでもいいか、という程、命は安売りできるものではない。
自分の命は、そんなに簡単に捨てていいものじゃない……。
甲斐甲斐しく、私の面倒を数十年も、苦汁をなめながら看てくれた弟。私の為に戦ってくれた蝉丸さん、光岡さん……。彼らをないがしろにしていいわけがない。自分自身の命は、彼らが守ってくれたものなのだ。
（そう。……そうだわ）
独り、こくりと頷いて、きよみは歩き始めた。その視線の先には、ある程度の高さのある建物が、木々の切れ目から覗いていた。
（戦う術も、生き残る術も、私独りにはない……）
きよみは森の木々の間から覗く建物を見上げながら、走った。あまり走ったことがないきよみに、ペース配分など、知る由もない。
（どうして、どうしてこんなことになったの？）
苦しい息の中、懸命に走って走って、その中で思考する。
（平和に、なったのではなかったの？　どうして、また戦いが起こっているの？）
きよみにしてみれば、戦争中に病を患い、目が覚めていたら数十年も経っていて、町は平和を取り戻

していた。
浦島状態だった。
でも。
(でも。町は平和だったわ。国全体が、平和だった筈なのに)
弟が教えてくれた。今の時代は、女性も政治に携わることが出来る程に平和になったと。女性も権利を獲得して、しっかり男性と一緒に働くこともできるようになったと。階級も何も、軍も何も、なくなったと。
(それなのに)
この島では、戦いが続いている。
離ればなれになった人々。戦いたくないのに戦わせられている人々だって、いるはずだ。
そして、勝つことではなく、平和を望む人々が、自分以外にもいるはずだ。
放送で幾人かがもう、命を落としている。それを嘆き悲しむ人だって居るはずだ。

途中、何度も木の幹や、石に蹴躓きそうになりながら、きよみは走った。
(止めたい。この状況を、戦争を、止めたい。今の時代なら、今の私なら、出来るかもしれない)
そう、何もしないで……何も出来ないで、ベッドの上にいた頃の自分では、もう、ない。弟に、蝉丸に、光岡に、与えられた命なら、ちゃんとちゃんと出来る。意志を持って出来ないことはないと、教えられた。私は教えて貰ったのだから……！
そういう考えの人間だって居るって、他の人にもわかって貰いたい。
そうすれば、誰かと協力出来るかも知れない。蝉丸や、自分の複製身と、上手く行けば出逢えるかもしれない。
平和を、取り戻せるかもしれない。
国が、平和を取り戻したように。
危険は沢山あるけど。死ぬかもしれないけど。
何もしないで死ぬのよりは、価値があるから。絶

対に……！
　がむしゃらに走って、ようやっと森が切れた。一度、立ち止まって、苦しい息を吐き出す。もう暫くはなれた、頭上の建物を見上げ、きよみは意志を強め、鞄の中のマイクの感触を確かめた。
「蝉丸さん、もう一人の私……どうか、気付いて！」

224　復讐の序曲。

……どれくらい時間がたったんだろう？
　緒方理奈は、意識を取り戻してぼんやりと辺りを見回した。
(誰も居ない……)
　硝煙の匂いと血の匂いが微かに、鼻を突いた。
「兄さん……っ兄さん！」
　物言わぬ亡骸と化した兄。インテリを気取って付けていた小さな眼鏡は所々ひび割れ、泥と血が付いていた。
「嘘、嘘よ！　嘘嘘嘘嘘!!」
　こんなのってない。こんなの、きっと嘘よ。
　きっとこれは夢で、私はまだ目が覚めないんだわ。いつも通りに、目が覚めたら、寝起きの悪い兄さんを起こして、歌の収録にいって、そう。そうよ、それで由綺もいるの。冬弥くんも。
　休憩に喫茶店でいつものダージリンを飲んで、収録が終わったらレッスンをして、帰ったらまだ兄さんは帰ってなくて、電話で「何時になるのよ？」っていつも通りに訊いて。帰ってくるまで待つの。一緒にご飯食べて……。
　そうだわ。言ってやらなきゃ。兄さんの部屋いつも換気しないから、煙草臭いのよ。いい匂いだけど、ちょっと、好きだけど。
　そこまで、思考して、理奈は兄の遺体に取りすがってまた泣いた。
　血の匂いに交じって、微かに愛飲していた葉巻の

香りがしたのが余計に悲しかった。
「嘘だといってよ！　兄さん！」
……わかってる。これは現実だ。兄さんは死んだ。殺された。誰だかわからないような、あんな、あんな女に！
「私を、殺さなかったことを……後悔させてやるわ」
ギリ、と自らの手を握る。
「必ず、必ず殺してやる！」
そう、叫ぶように呟いて、目を閉じる。
目を開き、涙を拭って、最愛の兄の頬をそっと撫で、泥と血を落とした。
その躯に、体温はない。
だが、もう理奈は泣かなかった。悲しみよりも、憎しみの方が、ずっと色が濃い。
（殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる！
絶対に、兄さんをこんな目に遭わせた、あの女を！）

英二の顔を綺麗にしてやると、理奈はその眼鏡をそっとポケットに忍ばせた。
「愛してるわ……兄さん。だから、私が敵を絶対に……とるわ」
立ち上がり、囁くように言って理奈は走り出した。
茜を、殺すためだけに。

225　悪夢を拭い去るために

兵士達の動きが、さらに慌ただしくなった。
その様子を、丘の上から伺っている晴香達。
「もうすぐ、来そうやね」
「そうね。……マルチ、あなた飛び道具は持ってるの？」
「鉄砲ですか？　いいえ。そうゆうのは持ってないです」
「……じゃあ、これをあげるわ」
晴香が手渡したそれは、ニューナンブ。

公民館で入手した、三丁のうちの一つだ。
「あかり。あなたには渡せる銃がないから。ここで待ってて。あなたの爆弾が、最後の切り札になるかもしれないから」
すこし寂しそうな表情をみせたが、うなずく。
「……うん、わかった。無事で帰ってきてね」
「ええ。もちろん」
「来たで！」
黒塗のリムジンが、基地の前に止まる。
敬礼する兵達に囲まれて現われたのは、やはり高槻だった。それを見て、智子がイグニッションキーを捻る。
「じゃあ、行ってくるわね、あかり」
「うん。晴香さんも、智子も、マルチちゃんも。気をつけて」
「うん」「わかっとる」「はいー」
三者三様返事を返す。そして、向かうべき場所を見据える。

「よおし。じゃあ、突っ込むでー！」
そう言うなり勢いよくアクセルを踏み込む。
そして。
ジープは砂塵を上げ、目指す場所へ突入していった。
「どりゃーっ！」
兵士達をなぎ倒し、高槻へと迫るジープ。それを見た高槻は、身を翻し、建物の中に消えた。
その入り口にジープを横付けする。
晴香達の前には、それを遮るように、兵士達が展開した。
「じゃまやーどけー！」
タタタタタン、タタタン！
智子の六四式小銃による一斉射、そしてマルチの首根っこをつかむ晴香。
「いけえっ！　マルチカタパルト弾」
「はわわーっ！」
カタパルトでも何でもないのだが、人間爆弾は思

いのほか効果的だったのか。
幾人かをなぎ倒し、兵士達がたじろぐ。
「ふみゅうーん」
抜刀し、駆け抜けざま、晴香はマルチの腕をつかみ、引きずる。
「よくやったわ！」
「ふえーん。あんなコトする人嫌いですぅー」
「……いらない敵をつくるわよ、そのセリフ」
その後ろを、半身で銃を乱射しながら、智子が続く。
「ぐずぐずしてる間はないでぇ！　高槻を追うんや！」
「わかってる！」
そう……わかっている。自分の為すべきことを。
この手で決着を。そして過去の悪夢の清算を。

226　非日常の再会

「なんで助かったんだろ……。私……」
理奈はだいぶ経ってからふと立ち止まる。
（気絶から覚めて……。そう、目覚めることができたんだ……）
なんで助かったか彼女にはわからない。
茜は理奈にとどめをささなかった。今までの茜なら理奈はこの場にいられなかった。
このささいな歯車のずれがどう影響していくのか。
理奈の脳裏に英二の亡骸が浮かんだ。
憎しみが上回っているはずだった。
あの場で、かたきをとると決心したはずだった。
兄を不安がらせないようにしたかったのだ。
自分はしっかりやっていけると、兄に教えたかったのだ。

(お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん……)
涙が止まらない。
兄の元から離れて、我慢していたものが噴出した。
手の小型カラオケに目が行く。立ち去る際に無意識に持ってきてしまった。
「こんなもの……。なんの役に立つっていうのよ……」
その場にへたり込む。
(冬弥君……。由綺……。会いたいよ……。助けてよ……)
理奈は考えていた。
(自分はこんなに弱い人間だったんだ……。
いつもの私は偽者なんだ……。
さっきだって兄さんのことをお兄ちゃんって……
こんなんじゃかたきなんてとれない……
子供みたいだよ……。子供みたい……)
「うぐっ……。う……ぇ……」
(冬弥君……。由綺……。会いたいよぉ……)
涙を止めるのはもうあきらめた。
子供でもいい。子供扱いされてもいいから誰かに慰めて欲しかった。泣きつきたかった。
「理奈ちゃん!?」
「えっ!」
理奈にはその声が誰のものかわかる。
森川由綺。彼女が今、最も会いたかった人間の一人。
反射的に顔を向ける。
そこに由綺がいた。
駆け出す。そして抱きついた。
「り……理奈ちゃん!? ちょっと……」
「由綺! 由綺! うっ……あ……」
由綺は当惑する。理奈が自分に泣きついてくるなんて考えてもみなかった。

気丈な理奈が。
由綺は理奈の頭をなでる。
右手にはニードルガン。左手でなでた。
(可愛い……)
彼女は泣きついてくる理奈が無性に可愛く思えた。
「理奈ちゃん」
理奈の涙を舐めとってあげる。
「おいおい」
冬弥が声をあげた。
「仲良いな」
「冬弥く……ん」
理奈がやっと冬弥の存在に気づく。
自分の最も会いたかった人間は二人。その両方に再会できていたのだ。
会いたかった人間……。
触発されて彼女は兄のことを思い出す。
「冬弥くん……。兄さんが……。お兄ちゃんが……」
今度は冬弥に抱きつこうとする。
「!?　英二さんが？」
——カチャリ——
冬弥に近づこうとした理奈の頭へ、ニードルガンの銃口が向いた。
「冬弥くんに何するつもりよ」
冷たい声がその場に響く。
理奈は耳を疑った。
でも声は確かに由綺のもの。由綺が銃口を自分に向けている。
おそるおそる顔をそちらに向ける。
わけがわからなかった。本当に……銃口が自分に向いている。
「冬弥くんは私が護るの。理奈ちゃん何しようとしたの？　殺しちゃうよ？」
(そんな……)
理奈は冬弥に抱きつきたかっただけなのに。

彼の胸で子供のように泣きたかっただけなのに。
「由綺。殺したいのか？」
冬弥の声。なんという非日常的なセリフだろうか。
「うん。理奈ちゃん冬弥くんになにかしようとしたもの」
その返事も、また……。
(え、え、え!?)
理奈が二人から離れるように後ずさる。
「そうか……。由綺が殺したいのなら……」
冬弥が一歩理奈に近づく。
「由綺が殺す必要はない。俺が殺そう」
手には特殊警棒。
(由綺を説得するのは無理だろう)
冬弥は思った。
一度殺意を持ってしまったらもう手遅れだ。
理奈はどのみち由綺が殺すだろう。ささいなきっかけで。
なら由綺の手をこれ以上汚すことはない。
「今の俺達に近づくな」
冷たい言葉。特殊警棒を大きく振りかぶりながらのセリフ。
(そ……そん……な……)
理奈はとっさに森の奥へと向かって駆け出した。
冬弥の警棒が大きく空を切る。
「もう二度と近寄らないだろう。深追いはしないぞ」
由綺に言った。理奈を殺さないための口実だった。
「冬弥くんが危険な目にあったらやだもん。いいよ」

周りの木が勢い良く背中の方へ流れていく。
走る。走る。走る。
(なんで!?　なんで!?)
自分は甘えたかっただけなのに。
(みんな狂ってる。さっきの女だけじゃない。みんな狂ってるんだ……。殺される殺される殺される。

殺さなきゃ兄さんみたいに殺されるんだ）
冬弥の遠まわしなやさしさに、彼女は気づかなかった。

227　間の抜けた人

『……ろしあってくれたまえハハハハ――』
「ん～……ふわぁ～」
島中に響き渡る高槻の定時放送により、佳乃は夢の世界から引き戻された。
「なんだか、よく寝た気がするよぉ……あれ？　ここ、どこ？」
キョロキョロと辺りを見回す。
そこは神社だった。朝の太陽の下、鳩が何羽か日向でひょこひょこ歩いている。
「鳩さん、おはよ～」
佳乃が近づくと、鳩たちは一斉にそそくさと飛んで行ってしまった。それを残念そうに見送ると、佳乃は頭をぶんぶんと振って、昨日のことを思い出していた。
（おかしいなぁ、昨日は確かボディーガードメイド一号さんと一緒に……あれ、一緒にどうしたんだっけ？）
夜、民家に侵入して、そこで梓と交代で見張りをすることになり、自分がまず見張ることになって……と、そこまでは覚えている。佳乃は首をひねったが、そこから先はどうしても思い出せなかった。
「ま、いいよねぇ」
それで簡単に片付けてしまうと、今日のこれからの行動について考え始める。
（やっぱり、まずお姉ちゃんを探そうっと。メイド一号さんにもまた会えるといいなぁ）
佳乃は、目覚まし代わりとなった放送に、姉の名前が含まれていたことを知らなかった。そして、それは佳乃にとっては幸運だったのかもしれない。
「じゃ、出発だよぉ～」

景気づけに右腕を高々と挙げる。黄色いバンダナが、風に揺れた。
と、ちょうどその時、神社と下界を結ぶ石段の下からコツコツと足音が聞こえてきた。
昇って来たのは、杜若きよみ〈複製身〉だった。
「……動かないで。服の下から狙ってるわ」
そう言いながら姿を現したきよみのワンピースのポケットが不自然に膨らんでいた。佳乃はそこに目を落とすときょとんと不思議そうな顔をした。
フェイクである。実際は中で指を二本、前に突き出してそれらしい形を作っているだけだった。マナに指摘されたことを活かしてみた、ということだ。
きよみは少しおかしくなった。
(さっきの生意気な子といい、この頭弱そうな子といい、妙なのばっかりに出くわすわね……まぁ、もう何十人も死んでるらしいし、殺人鬼みたいのに会うことを思えば運がいいんでしょうけど)
そう考えたところで、少し反省する。目の前の少女が、殺人鬼でないという保証はどこにもないのだから。
——そういう楽観的なトコ、なんとかしないと早死にするかしらね。
そう思って、改めて佳乃のことを見てみたが、やはりそんな風にはとても考えられない自分に苦笑するばかりだった。
「おっはよ〜、黒髪の美人さん」
当の佳乃は至ってのんきに言った。
少なくとも、一般的に銃を突きつけられている——と、当人は考えているだろうと思われる——人間の態度ではなかった。
(だいぶネジの緩い子ね……まさかこれが演技で実は、ってこともないでしょうけど……ともかく、この子と馴れ合っても仕方ないわ)
きよみはそう判断すると、ピストルに擬した指先を佳乃から外すことなく言った。
「どうも緊張感が欠けてるみたいだけど、そんなん

じゃこの島では長くないわよ。……見逃したげるから気が変わらないうちにどっか行きなさい」
「あっ、君、右手！」
「え？」
きよみはポケットから手を抜くと、しげしげと見つめた。何の異常もない、いつも通りの手だ。
「右手がどうしたのよ」
「やっぱりピストルじゃなかったねぇ」
佳乃がクスクスと笑う。
立ち尽くすことしばし。ようやくその意味に気づき、きよみは自分の頬が熱くなるのを感じた。フェイクだとかなんとか、それ以前の大馬鹿である。
(なんかあたしってどうしようもない間抜けなんじゃないかと思わざるを得ないわ……)
あの生意気な子のみならず、目の前のどう見ても頭の弱そうな子にまで看破された——きよみは半ば真剣に生きていく自信をなくしていた。文字通りに生き残るという意味のみならず。

「あははっ、なんだか縁があるみたいだねぇ？　ほら〜、そうと決まれば行くよぉ！」
落ち込むきよみの手を、佳乃が握った。
「誰が？」
「君が」
「誰と？」
「私と」
「どこに？」
「さぁ〜……これからのんびり考えればいいんじゃないかなぁ？」
「わ、きゃあっ!?」
言うなり、いきなり石段を駆け下り始めた佳乃にぐいぐいと引っ張られ、きよみは危うく転びそうになる。
「ちょっと、何するのよ!?　あ、危ないわよ！」
「一人よりも二人だよねぇ？　やっぱり」
「あ、あたしはあなたと馴れ合う気なんか——」
強引な佳乃に引きずられるようにしながら、実の

ところきよみはそれでもいいかな、と思っていた。
諦めというのももちろんあるのだが、この佳乃という少女と一緒にいて不快な気持ちはしなかった。
「よし、じゃあ君を『おまぬけさん一号』に任命するよぉ！」
石段を下りている間ずっと、きよみは佳乃を突き落としたいという衝動を抑えるのに必死だった。

228　堕ちる道化

すう、と空気が冷え込み、湿度が上昇する。
流れる音はさらさらさらと。
それは、この地に流れた血潮のように。
さらさらと、さらさらと。
絶えることなく、ざわめいていた。
ちゃりん、かちゃりん。
硬質の異音が重なる。
無人の川に混じる、有人の証が。
酷く虚ろで、禍々しく聞こえる。
ちゃりん、かちゃりん。
時折閃く反射光の眩しさが、それを刃物だと知らしめる。
近付けば微かに、足音が聞こえる。
半ば呆けたような、憑かれたような、刃物よりも危険な顔が、見てとれる。
さらさら。
『り……理奈ちゃん⁉』
かちゃりん。
弄んでいた刃物を、ぴたりと止めて握りこむ。
林道の木漏れ日が、さながら教会の狭間窓のように彼を照らしている。
下を見やれば、河原道。
さらさらさら。
『兄さんが……お兄ちゃんが……』
見える。知った顔は居ない。
さらさらさらさら。

『!?　英二さんが？』
（理奈？　英二？）
凍結させていた思考を、渋々回転させる。
そしてようやく、あの男の台詞を思い出す。
道化さながらに、ころりと騙された自分を思い出す。
「緒方――理奈。兄さん？」
呟いた一言が、ぽんと背中を押していた。
住井護（五十一番）はナイフを携え、崖を飛び降りる。
迷い無く。
涙無く。
暖かな想い出も、悲しさも届かぬ、地獄の底へと彼は落ちて行った。
川の音は、もはや聞こえなかった。

229　日常の味

「……誰よ、あんたたち」
二人のうちの片方、ツインテールの子がなんとも女の子らしくないドスの効いた声で訊いて来る。
あまりの迫力に気圧されそうになるが、何とか平静を装って僕は尋ねた。
「人を、探してるんだ」
「人を？」
そう言いながらも、彼女の殺気は解かれない。
まあ、こんな状況で知らない人に出会ったら、こんなものなんだろうけど。
暫し、睨み合ったままの対峙が続く。
その均衡を破ったのは、
「やめなよ七瀬さん、話くらい聞いてあげようよ」
勝気な女の子、……どうやら七瀬さんというらしい、の後ろにいた子だった。

「え～と、それじゃ、長瀬君と天野さんは、さわたりまことって子を探してるんだね？」
はい、と天野さんが小さく頷く。
七瀬さんと、もう一人の女の子、長森さんには、僕と叔父さんの事は伝えていない。
一参加者にしか過ぎない彼女達……まあ、僕もだけど、が叔父さんのことを知っているとは到底思えないし、何よりまだ打ち解けていない状態で僕が主催者側の人間と少なからず係わり合いがあることが知れると、下手をすれば殺されかねない。
そのことを考えると、叔父さんの事を話せる相手はそうそう居ないように感じられるし、実際そうなのだろう。
「それで、その真琴って娘はどんな子なのよ？　髪型とか、外見とか……」
長森さんに代わって、七瀬さんが不機嫌そうに口を開く。
まだ僕らを信用しているわけではないようだ。
そんな事は意にも介さないのか、天野さんは平坦な口調で、その沢渡さんの特徴を話し始めた。
「ふ～ん……じゃあその子、今頃繭に髪引っ張られてたりするかもね」
一通り話を聞き終え、七瀬さんがけらけらと笑う。
自然な彼女の笑いを見たのは初めてだ。少しは心を許してくれたということだろうか。
「……いえ、真琴の髪型はそんなに長くないですが」
あちゃあ、そうバッサリ会話を断つこともないだろう、と少し思う。
「そ……そうかもねえ？　まあいくら髪型が似てるって言っても、乙女を目指すこのあたし程伸ばす人間はそうそう居ないわね」
……乙女？
「乙女……ですか」
僕と同じ事を思ったのだろう、天野さんが口を開

く。

……ただ問題なのは、語尾に（笑）がついていたことで。

「何よ！　なんか文句あるっていうの！」

あぁ、やっぱり怒った。

「やめなよ七瀬さん。天野さんもきっと悪気があって言ってるわけじゃないと思うんだよ」

七瀬さんの剣幕に、慌てて長森さんが止めに入る。さっきからずっとこの調子。よく飽きないものだなあ、と思う。

でも……

すっかり僕らは、打ち解けていたんじゃないか、と思う。

たとえそれが、この島の中でも『日常』にしがみつきたいという甘えから来る物であっても。

そう。退屈な毎日の中にあって日常とは、色を持たない無味無臭な存在だ。

だけど、こんな非日常下においては、いつもは意識しない『日常』も色や味を付ける。

それは甘い甘い、蜜の味だ。

僕たちはそれにすがる蟻。それを失うと、心が軋み、壊れてしまうから。

「それじゃあ、そろそろ私たちは……」

「え？　行っちゃうの？」

腰をあげ、この場を出発しようとする僕らを、長森さんが引きとめる。

「……そうよ、あんたたち二人で行動するより、私たちと――あともう一人居るけど、行動したほうが安全でしょ？」

天野さんに激しく突っかかって居た筈の七瀬さんも止めようとしてくれる。

正直、あの短い間で僕らそこまで信用してくれたというのはとても嬉しい。

「ありがとう。……だけど、僕たちは行かなくちゃいけないんだ」

真剣な顔で僕は言った。二人はもう、止めなかった。

結局長森さんも七瀬さんも、天野さんが探している「沢渡真琴」の事は知らなかった。

それは残念だったけど、この狂気の島で、ほんの一瞬でも誰かと楽しく会話をし、日常を感じる事が出来たのは、幸せだった。

でも、こんな甘ったるい馴れ合いは、島の意に反しているのだと、僕らはすぐに気づく事になった。

「……良かったのですか？」

「何がだい？」

また二人になってしまった森の中で、天野さんがぽつり、と聞いてきた。

「……いえ、あのまま長森さんたちと一緒に行動したほうが、安全だったのではないかと」

「いや、確かに人数は多い方がいいかもしれないけど……それじゃ、天野さんが探している人達が探せなくなってしまう」

それに、確かに二人は危険だけど、もしそんな状況になったら、僕が命を捨てても天野さんを守る

――

なんて台詞は、とても恥ずかしくて言えずに喉の奥に飲み込んでおいだ。

「ありがとうございます……」

「礼を言われるような事、してないよ」

結局はこれも、僕のエゴなんだから。

もしかしたら彼女らのいう『もう一人』がその「沢渡真琴」を連れて来た可能性も無いとは言い切れないのだ。

そこまで考えて、思考は中断される。

がさり、と、音をたてて、ほんの、ほんの少し先で、何かが動いたからだ。

「……長瀬さん」
天野さんもそれに気づいたのか、声を潜める。
僕は、前方に視線を向けたまま、
「……下がってて」
天野さんを制止させる。
ポケットの中の、ワイヤーを強く握る。
さっきみたいに、話が通じる人ならいいけど、そうでない場合はどうなるかを、僕らは既に一回、身をもって経験している。
……だから、慎重に行動しなければならない。
「……誰」
僕の気配を察知したのか、草むらから女の子が顔を出す。驚いた事に、着ている服は色こそ違えど、天野さんが来ているのと同じだった。
そう言えば、天野さんは制服のまま連れ去られたと言っていた。だとするならば、この人は天野さんの学校の上級生だろうか？
僕がその子と天野さんを交互に見ている間に、女の子がまた口を開いた。
「……こっちは怪我をしてる人がいる。手を出さないで欲しい」
どうやら、草むらの影にもう一人居て、その子が怪我をしているから見逃して欲しい、と言う事だろうか？　このゲームのルールを考えると、なんとも無謀極まりない申し出だけれど、殺さなくて済むなら、それにこした事は無い。
僕はそれを快諾し、ポケットの中でワイヤーを握っている手を緩める。
それが、油断だった。
「佐祐理は騙されません！」
それは女の子の背後から聞こえてきた。
「……え？」
「佐祐理、ダメッ！」
その気配に僕が反応したのとほぼ同時に。
だんっ
重い音が僕の耳を激しく突き、なにかの塊が僕の

頬を掠める。
視界の端が紅く染まってゆく。頬が熱い。
なんだ？　なんだ？　一体何が……
――それが、銃弾だと気づくまでに、僕のアタマは数秒を要した。
僕は混乱した。目まぐるしく変化する状況に思考が追い付かない。
「逃げて！」
と、目の前の女の子が言った。
なので、逃げる。
呆然としている天野さんの手を引いて、逃げる。
僕のアタマはちゃんと動いてくれなくて、それしか出来なかった。
「…………はぁ、はぁ、はぁ……」
走って走って、走りつづけた。
どこまで走りつづけたのかも分からないぐらい、走って、膝が笑ったので、僕らは止まった。
二人で、死んだように木陰に横たわって、ようやく、僕のアタマは正常になりつつあった。
……つまりは、騙された、って事か。
たしかに『日常』を求めるという気持ちは誰も同じなのだろう。
だけど、彼女たちと、僕らではその手段が違ったのかもしれない。
僕らは、この狂気の中にある今に日常を求めた。
彼女たちは、いつか再び日常の中に戻るために、僕たちを撃った。そう考える。
仕方が無い事だ。手段はそれぞれだし、この状況下では彼女たちの判断のほうが賢明で、そして正しいの……だろう。
……そして、いつかは僕らも、ああなるのだろうか？
或いは、既に僕らも彼女たちと同じ、殺し合いをも厭わない人間で、その上更に今この時間にも日常を求める、より欲深き存在なのかもしれない。

森の闇が、一層深くなった気がする。

230　日常は霞んで

目の前が真っ暗になったような、そんなショックを受けた。
聞こえる筈の無い場所から聞こえる銃声。
そして、その銃を持っているのは、間違いなく佐祐理で。
私を信用してくれた人が、一瞬、呆然とした後、踵を返し走り去ってゆく。
その背中に向けて、また、佐祐理は銃を撃った。
一回発砲するごとに、肩の傷が開き、その服を赤く染めて行く。
見たくない。
佐祐理の傷も、佐祐理がなんの罪も無い人に銃を向けることも。
「やめて……佐祐理」

「あははーっ、騙されちゃダメだよ、舞ー。あの人たちは、ああやって近づいて油断させてから、舞を殺そうとするに決まってるんだから」
言いながらも、佐祐理は発砲を止めない。飛び散った血が、私の頬にかかる。
私の言葉は、佐祐理には届かない。私は、何もできない。
既に私たちのほかに誰も居なくなった森に、銃声だけが響いた。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。
佐祐理は私が守るって、決めた筈なのに。
でも、私の所為で、佐祐理は――
「逃がしちゃった……舞を殺そうとした相手なのに、佐祐理はダメな子だ」
そう言って佐祐理は微笑む。それは、不自然なくらいに、いつもと変わらず。
不意に、悲しさが胸を押し寄せてきて、私は、た

だ無言で佐祐理を抱きしめることしかできなかった。
「どうしたの、舞？　……大丈夫だよ。佐祐理が守ってあげる。舞には誰も指一本触れさせたりはしないから」
その言葉まで、いつもの佐祐理の口調そのままで。
私は、腕にもっと力をこめて、強く強く佐祐理を抱きしめた。
もう、私たちの日常は遥か遠くに、霞んでしまっていた。

231　再会

江藤結花と長谷部彩は、昨晩来た道を逆にたどりながら再び森の中に入った。
しかし、昨日の疲れがまだ残っていて足取りは鈍い。二人は森の中の小道を、そろりそろりと慎重に歩いていった。
どれくらい歩いただろうか、道のはるか前方に小さく人影が見えた。
「誰か来てる。隠れましょう」
二人は物音をたてぬように、道ばたの草むらに身を隠した。
結花が注意深く草むらの中から目を凝らす。
一人は三角頭巾をかぶったおとなしそうな女性、もう一人はピンク色の長髪の少女……ピンク色!?
次の瞬間、結花は弾け飛ぶように駆けだしていた。
「スフィー！」
その少女は一瞬驚いた様子だったが、結花の姿がはっきり見える距離まで来ると、
「結花ぁ！」
そうつぶやくと、トタトタと走り寄った。
「会いたかったよぉ。寂しかったんだから……」
スフィーに抱きついたまま、結花はただ泣きじゃくっていた。

「こんなに小さくなって……」
「結花も、無事だったんだね」
幾日ぶりの再会を体いっぱいに味わっていた二人の後方では、
「……」
「はじめまして……」
彩と来栖川芹香が小さな声で挨拶していた。

万一の事があっても容易に見つからないように、周囲から見て少し窪地になっている所を見つけて、四人は草むらに一列に座った。
簡単な自己紹介の後、それぞれスタートからここまでの出来事を話し始める。
結花と彩が出会ったときの話、夜中に銃を拾おうとして危うく刺されそうになった事。
スフィーがリアンを助けに社に行き、結界を破ろうとした最中に牧村南に邪魔された事。
ここまでほとんど話しに加わらなかった彩が、突然つぶやいた。
「牧村、南……南さんが……嘘、嘘でしょ」
「……？」
「南さん……簡単に人を殺めるような人じゃない。私の知っている南さんは、ルールを守らない人には厳しいけど、普段はとても親切な方です。なのに、どうして……」
「そうなんだ。でもね、社で私たちを襲った時はとてもそんな風には見えなかったよ」
「そう、ですか……」
肩を落とす彩。
「うん、それで芹香さんと夜通し逃げてきた、ってわけ」
「ところでスフィー、そんなに小さくなったのは、その結界とかを破ろうとして魔力を使ったから？」
「うん、でもそれだけじゃないんだ。けんたろが死んじゃった後も、この腕輪から魔力が抜けているの」

「外せないの？」
「外すのにも魔力を使わないといけないから……」
「……」
「えっ、芹香さんが？」
「……」
「黒魔術？」
「……」
「な、なんだかよくわからないけど、とにかくお願いします」
結花と彩を後ろに退けさせると、芹香は静かに目を閉じ、なにか呪文のようなものを唱え始めた。
そして三分ほど経った後、
ビリッ、ビリッ……
スフィーの腕輪から音が聞こえだしたかと思うと、
パリン！
鋭い音を立てて、腕輪が真っ二つに割れた。
「あ……」
スフィーは喜びたい反面、ちょっと後ろめたい気分になっていた。健太郎との思い出の品でもあった割れた腕輪を見つめながら、
「けんたろ……ごめんね」
小声でそうつぶやくと、腕輪の破片を拾い上げ、
「ね、これ持ってたままでもいいよね。けんたろの事、忘れたくないから」
「そうね」
「うん、これでもう大丈夫。もう体が小さくなる事もないと思うよ、きっと」
「ねぇ、ところでスフィーの武器って何？」
スフィーは鞄から厚い本を取り出した。
「なんだか魔術書みたいなんだけど、よくわからなくて……」
結花はスフィーから渡された本をパラパラとめくってみた。
「あのさ、グエンディーナの魔術書って、日本語で書いてあるの？」
「えっ？　そんなことない……よ」

今度は芹香が本を手に取る。
「……」
「ほら、芹香さんも『これは魔術書なんかじゃありません』って言ってるよ」
「は、ははは……」
スフィーはただ苦笑いするしかなかった。
「ほら、魔力が抜けてたから、必死だったんだよ、ね」
「本当かなぁ」
その場が一瞬和んだ。
「……あの、これから先、どうすればいいでしょうか」
「う〜ん、まずはリアンたちと落ち合う事が先決、かな？」
「……」
「そっか、『南さんが追ってきているはず』かぁ……」
「牧村南の武器って手裏剣なの。その上、身のこなしも速くって忍者みたいだったんだよ。もし、ここを襲って来られたら……」
「その時はこのトカレフで、バーンといっちゃうわよ！」
「その……落ち合う場所って決めてあるんですか？」
「うん、さっき言った神社の近くの小屋で待ち合わせる事になってる」
「それって、この近くにあるの？」
「えーと、そんなに遠くはないと思うよ」
「そこへ行けばリアンに逢えるのね？」
「たぶん……」
結花が立ち上がった。
「ひとまず、その小屋に行こう！」
「うん！」
「……」
残りの三人も次々と立ち上がった。

茂みから道に戻り、芹香とスフィーが来た方向へ歩き出す。
結花の足取りは、先程よりもすっかり軽くなっていた。
一方、彩の足取りは依然重い。それは、
「南さん……」
牧村南の事を気にかけたままだったから。

232　白い、決意。二

……息が、苦しい。
杜若きよみ（十五番）は、森での全力疾走でかなり疲労していた。
(こんなところで、挫けてる場合じゃない、のに)
膝ががくがくする。呼吸が乱れたまま戻らない。
だが、数十分、走り続ければ誰もがそうなる。
(……早く、早くとめなくては……これ以上誰かが傷つかないように。誰も、死なないように……！)
だが、体は言うことを聞いてくれない。
こんなところを狙われたら、一溜まりもない。はじめて、きよみは全力で走ったことを後悔していた。
(あそこ……あの場所で、呼びかける。もしかしたら、いえ、もしかしなくても、主催の意向に反したことだから、それによって私は……殺されるのでしょう)
だから。それをやるのは自分独りでいい。
他の誰も、この支給品がなければ出来ない事だから。
これは、宿命なのだ。
(私が、生きた証になりますように……)
息を整えて、きよみはまた走り出した。
前方に、川が見えた。
誰も居ないことを確認して、きよみは川辺に佇む。
水位はそう高くない。橋がなくても歩いて渡れそうだ。水は清らかにさらさらと流れている。
そういえばもう水はない。急いで、川の水をペッ

トボトルにいれ、ついでに喉の乾きも癒す。
　これから、呼びかけをする。
　川に足を忍び入れ、川の中を真っ直ぐ反対の縁に向かって歩きながら、きよみは思考した。もちろん、人の気配にも細心の注意を向けていた。
　……それは、ずっと少しずつ、考えていたことだった。
　呼びかけをする。それは危険な賭けだと、思いついた時からわかっていた。如何に上手く、これをこなせるか否かで、この島にいる哀れな人達を救えるかどうかがかかっている。
　最初は、森の中や、人気のないところで呼びかけをするつもりだった。
　でも、これは危険性が高い。
　主催側による、腹部に爆弾が仕掛けられているという情報。嘘でない場合は、新たな猜疑心の種として、生き残らされる可能性がある。
　それは、自分の放送そのものが、主催側に利用されかねない、ということだ。
　見知らぬ女性の、殺しあいはやめましょうという、放送。見せしめに殺されるのであれば、それを考慮して喋ればいい。
　だが、殺されなかった場合。
　主催側が再度、自分の放送に似た……つまりは偽の放送を行い、人を集める。
　そして、そこで殺し合わせる事も可能だ。更に言えば、そこに集まった人達を一網打尽にしてやろうとする、主催側に協力的な人が出てくる。
　……結果、大量殺戮が起こるだろう。
　姿を隠したままでは、上手くいかない。
　だとすれば。
(死をもって、呼びかける……しかない)
　自分が見せしめになる為の放送だ。
「死ぬかも知れない」ではなく「死ぬ」ことが確定、もしくは百パーセントに近い確率であることを、きよみはわかっていた。

ただ、協力しあってください、と言うのではダメだ。自分が死ぬことを前提に、それに賭けていることをアピールしなくては。

恐ろしい。

（怖い……）

反対側の川縁に着いて、自分が震えていることに、きよみは気付く。

（特攻隊の人達も……こんな気持ちだったのかしら？）

今、自分は死にに行くのだと、実感しながら、きよみは建物へと向かう。

233　その手を汚す価値

「茜……何処いったんだ」

一番近くにある木にガンッと拳をぶつける。

詩子達と別れてからしばらく、相沢祐一は里村茜を探し島中を歩き回っていた。

「闇雲に探しても見つからないか……ん!?」

森の中に入って少しひらけた場所に出たところで祐一は突然立ち止まる。物音を聞いたような気がしたからだ。

祐一の全身に緊張が走る。考えてなかったわけではない敵との遭遇。呼吸を整え、静かに濃硫酸入りのエアーウォーターガンを構える。周りをゆっくり見渡すと、がさがさと無用心に音を立てて何者かが近付いてきていた。

「やっと見つけたわよ、あいざわゆういち！」

森の奥からフラフラになりながらも祐一の名を呼んだのは、体をびっしょり濡らした一人の少女であった。

「真琴！」

祐一はその少女の出現に対して、なんの警戒心も持たずに構えていたそれを降ろし、今にも倒れそうな彼女に駆け寄る。

「どうしたんだ？　びしょ濡れじゃないか」

「あんたのことを探してたのよ」
　祐一はエアーウォーターガンを地面に置き、両手で少女の体をしっかり支えてあげる。
「あ、そうそう、そーいえばおまえあの時パチンコ撃って逃げただろ？　なんであーいう事する……んぐっ」
　言い終わらないうちに少女の手は祐一の首をつかんでいた。
「ま、まこと……」
「なんでだかはよく覚えてないんだけど、あんたのことがすごく憎いの。だから……殺すの」
　両者とも地面に倒れ、少女はその上を跨ぐ。いわゆる馬乗りまたはマウントポジションとも呼ばれる体勢になった。そして祐一の首に全体重をかける。
　少女の力は非常にはかなげで弱々しいものだったが、なかなかその手を引き剥がすことは出来ない。
「や、めろ……やめるんだ真琴！」
　ありったけの声を出して叫んでみるが、首を絞められてるためあまり大きな声は出ない。
「まこと？　それがわたしのなまえ？」
　首を絞める手が一瞬緩む。
「おまえ、まさかまた記憶がないのか？」
「だからなに？　あなたが憎いということに変わりはないもの」
　祐一の意識が朦朧としてくる。
　もうだめかと祐一が考えたとき、頬にぽたりと雫が落ちた。何事かと閉じかけていた目をもう一度見開く。
「なんでだろう……憎いはずなのに。すごく憎いはずなのに……」
「ま、真琴……」
　首を絞める手がまた緩くなった。
　さほど力の入ってない手によって絞められた首からゆっくりと呼吸を取り戻していく。真琴の頬を流れる涙を拭おうと手を伸ばした次の瞬間、また祐一の頬にぽたりと雫が落ちる。

今度は綺麗に透き通っている人の生を伝える液体ではなく、赤く紅く濁った人の死を伝える液体だった。

「まことー！」

もう完全に力の入ってない手を振り解き、祐一は倒れこんでくる少女を抱きしめながら彼女の名を叫ぶ。

そして彼女の背中越しに見えた光景は、ナイフを持って、返り血を浴び、カタカタと振るえている水瀬名雪の姿であった。

名雪はこの場所に来る前はまったく武器などを持っていなかったのだが、ただの偶然なのか、はたまたこの島の因果による必然なのかはわからないが、観鈴が晴子に向けて投げたナイフを見つけて拾っていたのだった。

「ゆ、祐一、大丈夫？　この子が悪いんだよ。祐一を、ゆういちを殺そうとしてたから」

「だからってなんで、なんでこんなこと……」

「だって、祐一が、ゆうイチが……」

名雪は気が動転しているのか、とても正常とはいえない言動をしている。

「ゆう、いちぃ……」

沢渡真琴が口から血を流しながら祐一の名前を呼ぶ。さっき森の奥から呼んだ時のような刺々しさはもうなくなっている。

「名雪、俺の前から消えてくれ。でないと、俺、おまえに対してどうすればいいのかわからない……」

エアーウォーターガンを拾い上げ名雪に銃口を向ける。

「これの中身は濃硫酸だ。たのむ、俺に引き金を引かせるな」

「そんな、そんなの……嫌、イヤ、いやだよ」

壊れた人形のように力なく首を横に振る。そんな名雪に祐一は、残酷なまでに強烈な視線を浴びせる。

「イヤァァァァァアア!!」

居た堪れなくなった名雪は、激しい絶叫を残して森の奥に姿を消し去っていった。

「大丈夫か真琴？」
名雪に向けていたものを投げ捨て、真琴をそっと抱きかかえる。
「あうー、わたし……どうしたんだろ？　なんで祐一はここにいるの？」
「あんまり喋るな！　安静にしてろ」
「あのね、変な夢を見てたの。みんなでね、殺し合いをするの。なんだか、漫画みたいだよね。それでね、私は、真っ先に祐一をやっつけようとするの。とりゃーって感じで」
「うん、わかったから……」
祐一は話を聞きながら真琴の手をぎゅっと握りしめる。
「でね、途中で『みゅ～』て言って、泣いてばっかりの、女の子に会うの。その子はまだ子供だから、わたしはその子の、お姉さんになってあげるの……木の実をあげたり、変な人に襲われたときは、わたしがね、守ってあげたりするの」
真琴は途中苦しそうな表情を見せながら、祐一にぽつりぽつりと語っていく。
「祐一は、いっつも、真琴のこと、子ども扱いするけど、どう？　わたしって、おねえさんでしょ？」
「ああ、そうだな。真琴はお姉さんだな」
「えへへ……もう、今度から、子ども扱いしたら、だめ、なんだからね！」
「うん、わかった」
祐一の目には涙が溜まり始めていた。
「あぅ、なんか、いっぱい、おしゃべりしたら、疲れちゃった……もう、眠くなって、きちゃった……ぴろはいないけど、ゆういちと、一緒に眠っても、いいかな？」
真琴の声がだんだんと途切れがちになっていく。
「ばか！　寝るな！　眠っちゃだめだ！　ほら、今日の悪戯がまだだろ？　俺に仕返しするんじゃないのか？」
「んー……今日は、見逃してあげる………ありが

たく、思いなさいよ」
真琴はゆっくりと微笑む。
「それじゃあ、おやすみ。ゆーいち……」
握っていた手が力なくだらりとたれる。
いつか贈った鈴がチリンと鳴る。
そしてその場はしんと静まりかえる。
ただ一つの嗚咽を除いて……

四十五番　沢渡真琴　死亡
【残り62人】

234　堕ちた道化

「あの様子だと……。英二さん死んでしまったみたいだな……」
冬弥が由綺に話しかける。
――ザッ――
崖下。静かに着地。
住井にも聞こえた。信じたくない台詞。
英二、あの男は自分が殺さなければいけなかったのに。
信じられない。
美咲さんのかたきをうつ。
それが唯一無二の望み。
決心したばかり。
そう決心したばかりなのだ。
「嘘だ……」
『!?』
冬弥と由綺が振り向く。
「嘘だ……。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だーーーーー!!」
早足に冬弥の方に近づいた。
「でたらめ言うんじゃねぇ！」
冬弥の目の前まで……。
「死んでもらっちゃ困るんだ！　死んでもらっちゃ！　あいつは俺が殺す！　美咲さんを殺したあい

つを！　俺が！　俺が殺すんだ！」
（英二さんが美咲さんを⁉　なにを言っているのだろう。こいつは）
冬弥の率直な感想だった。
「くそ！　くそ！　くそ！　くそ！　だったら今逃げていった妹の理奈って奴を‼」

——カチャリ——

住井は気がついた。
（こいつらさっきの……）
銃口が自分に向いている。
遅すぎた。
「あはは、あはははははは‼」
笑いしか出てこない。
（なんて馬鹿なんだ俺は。これじゃまるっきり……）
「由綺……。俺がやるよ……」
（道化じゃないか……）

235　強者の綻び

「あいたいあいあい……♪」
「だから歌うなっつってんだろうが！」
「……うぐぅ」
まことに遺憾ながら、御堂の御守りは二日目に突入していた。朝までだ、と念を押したにもかかわらず、あゆはちょこちょこと後をついて来る。脅し賺しも効果が無い。結局、根負けして放っておくことにした。
——安宅みやの言葉が気になったわけでは決して無い……はずだ。
「だって、つらいときや悲しいときは、歌を歌うと元気になれるんだよっ」
「俺の体調は万全だ。ヘタクソな歌なんか聴いてられるか」
「ひどいよっ。ボク、歌上手いもん。歌手デビュー

したら、きっとオリコン十一位ぐらいに入るよっ」
おりこん、というのが何だかわからなかったが、御堂はそれを尋ねるのは止めた。
「知るか。……とにかく黙れ。てめぇの歌のせいで敵に居場所がバレちまうだろうが」
「うぐ……敵って？」
きょとん、とした顔であゆは尋ねる。
「お前馬鹿か。こいつは殺し合いだ。自分以外は全部敵だろうがよ」
「自分以外は敵？　でも、おじさんはボクを殺したりしてないよ？　そりゃ怖いなぁ、って思うけど」
「……お望みどおり、今ここで殺してやろうか？」
「うぐぅっ!?」
あゆはその場で飛び上がると、ぶるぶると泣きそうな目で御堂を見る。
「全く、ムカつくガキだぜ……。いいか、忘れるな。お前なんざ、俺がその気になればいつでも殺せるんだよ。少しでも長く生き延びたいなら、俺にこれ以上手間をかけさせるな」
こくこくと頷くあゆ。おとなしくなったのを見て、御堂は舌打ちをしてから歩き出す。
「行くぞ。俺はさっさと坂神と殺り合いた……」
途中で押し黙る。御堂は瞬時にあゆを引っ張って近くの大木に身を隠す。
『……来やがる』
何者かが近づく気配を、御堂は察知したのだ。
あゆを胸元に抱き寄せ、片手で口を塞いでおいてから気配を殺す。あゆはもがくが無視しておく。
『ち、全く邪魔なガキだぜ。……そんなことより、この気配は只者じゃねぇな』
近づいて来る者の気配は強化兵のそれとは違うが、辺りを押しつぶすような威圧感があった。
『殺気はしねぇが、この威圧感は――敵に回したら厄介かもしれねぇ』
そう考えて、御堂はその考えを追い払う。
『ふん、つまんねぇことなんざ考える必要はねぇ。

俺は強化兵じゃねぇか。それも、完全体と呼ばれるに相応しい。その気になりゃあ誰でも倒せる。坂神だろうが、誰だろうが、だ』

その時――。

「にぃぁ～～」

呑気な声で頭の上の猫がないた。

「？　何かいるの⁉」

しまった、と御堂は素早く銃を取り出そうとして――左手に鋭い痛みを感じた。

「く」

「うぐっ……はあっ、はあっ……おじさんがいけないんだよ。ボク、息が苦しくなってついついい噛み付いちゃったけど、あのままだと死んじゃうって思ったんだからっ」

「……このガキ……っ！」

どん、と御堂はあゆを突き飛ばすと、頭上のぴろを掴んでそちらへ放り投げる。

やはり殺しておけばよかったと後悔するが、今更言ったところで始まらない。今は目の前の敵を排除しなければ。

「あんた、何してるのっ⁉」

その声に御堂は振り向き、銃を構え――る途中で、思わず呆ける。

「何だ……その珍妙ないでだちは……？」

突き飛ばされたあゆが腰の辺りをさすりながら、御堂が対峙している敵の姿を見つめ、こう言った。

「うぐぅっ、痛いよ……。あ、それ猫の耳だねっ」

「にぃ～～」

ぴろも同意するようにないた。

頭から珍妙な耳を生やし、ひらひらとした服を着た格好で憤慨する少女の姿がそこにあった。

「う……うるさいっ。あたしも好きでこんな格好をしてるんじゃないのっ。それより女の子に手をあげるなんて、あんたそれでも男なのっ！」

珍妙ないでだちの少女――柏木梓は、御堂に対し

怒りをあらわにする。
『ちっ……こんな女に威圧されていたとはな。俺もヤキがまわっちまったぜ』
御堂は自分の感覚が鈍っていることに、少々面食らっていた。——実際のところ、彼が察知したのは梓の鬼としての本能であり、感覚が鈍っていたわけではないのだが。
「黙ってないで、なんとか言ったらどうなの？」
「……うるせぇ」
すっと御堂は銃口を梓に向ける。
「……！」
銃を突きつけられ、さすがに梓も息を呑む。じりじりと緊張が辺りを支配する。
「だめだよっ！」
突然声がして、御堂の腕に何かが絡み付いた。
「く、このガキっ！」
「人を撃ったりしたらダメなんだよっ！」
しがみつくあゆを、御堂は必死で振り払おうとする。——一瞬、御堂の注意が梓から逸れた。
「……今だっ！」
ここぞとばかりに梓は勢いにまかせて飛び出す。捨て身のタックル。——が、梓の突進に気づいても御堂は冷静だった。
銃を真上に放り投げる。一瞬、梓とあゆの視線が上を向く。
「うぐ？」
御堂はその隙に、自由になった両手であゆを引き剥がし——そのまま梓の方にめがけて投げ付けた。
「え、ちょ、ちょっと!?」
とんでもない飛び道具に、たまらず梓は姿勢を崩してあゆを抱きとめる。そのまま、勢いにまかせて二人して倒れこんだ。
「阿呆が。俺に勝てるわきゃねぇだろうが」
目の前には放り投げた銃を再び手に取って、その銃口を梓たちに向けている御堂の姿があった。

「くっ……」
目の前の銃を避けようと、梓は身をよじる。が、上にあゆがのしかかっているために思うように動けない。
幾ら防弾チョッキを身に着けているとはいえ、頭を吹き飛ばされたらお仕舞いだし、例えチョッキを狙われても、この至近距離じゃ貫通してしまうかもしれない。だいたいこのまま撃たれたら、あゆはよくて重傷、悪ければ死んでしまうだろう。
——絶体絶命、だった。
「……この、卑怯者」
せめて口だけでも、と梓は恐怖を押し殺して精一杯の悪態を吐く。
「いい度胸じゃねぇか。卑怯者らしく、存分に楽しませてもらってから殺してやろうか？」
御堂は下卑た笑みを浮かべ、凄みを効かせて言う。その言葉の意味を察して、梓の顔が青ざめた。
「ふん。張れもしねぇ虚勢なんか、最初から張るんじゃねぇ」
あくまで御堂は冷静に言い放つ。そしてこの二体の目標をどうしようかと思考する。
勿論、強化兵としての本能は、こいつらを殺せと命じている。——だが。
「……うぐぅ。殺すなんてダメだよっ、おじさん」
梓の上に乗っかったまま、あゆが御堂をじっと見つめて、そう言った。
ち、と御堂は舌打ちする。
「……馬鹿かお前。まだそんなこと言ってるのか」
「ボク、馬鹿じゃないもん」
「言ってるだろうが。殺し合いなのに、殺さないでどうする？」
「そんなことしないでも、みんなが一緒になればきっと帰れるよっ」
反吐の出るような、甘い考えだった。御堂は何も言わずに、ただ、銃口を向けたまま冷たい眼で二人を見ていた。

しん、と。死の気配が辺りを支配する。
梓とあゆにとっては気が狂いそうになるぐらいの恐怖の時間。
――だがしかし。それを打ち破ったのは、他ならぬ御堂だった。
「もういい。――おい、お前。殺さねぇでやるからこのガキを連れてどこかへ行け」
『え？』
意外な御堂の言葉に、梓とあゆの声がハモった。
「そいつがいると何もできねぇ。……そのガキは邪魔だ」
「うぐぅ。邪魔ってひどいよっ」
「黙れ」
「ひぐぅっ!?」
あゆは銃口を向けられて思わず悲鳴を上げる。
「いいか。今回だけは生かしてやる。次は無ぇ」
「……ど、どういうことよ？」
うぐうぐと震えるあゆを両手で抱きしめて庇いながら、梓は御堂に尋ねる。
「言葉通りだ。次に遭った時は、その頭を花火みたいにふっ飛ばしてやるって言ってるんだよ」
「だ、だったら何故、今襲わないのよ……？」
「……」
梓の問いに、御堂はしばし沈黙する。
――そして、ため息でもつくかのように言った。
「……知るか。ほんの気まぐれだ」
「うぐぅ、おじさん……」
あゆが何か言いたそうだったが、御堂は銃を構えたまま走り出した。
『ち。なんだったんだ、あのガキは。調子が狂うったりゃありゃしねぇ』
御堂は駆ける。本来の目的を果たすため。
坂神蝉丸を打ち破る、そのためだけに。
――だが、彼の強化兵としての本能は。

冷静に只、敵を討つだけの本能は。
少しだけ。ほんの少しだけ、綻びが見えていた。
『俺は、坂神を倒すためだけにここにいるんだ。他のやつらがどうなったって構わねぇ。――だから、見逃してやったんだ』
御堂はそう言い聞かせると、走る速さを上げる。
……その背中にはいつの間にか、離れぬようにぎゅっとしがみついたぴろの姿があった。

236　そのころ

御堂が改めて蝉丸を捜し始めたそのころ、蝉丸と月代は山中の獣道を高台に向けて進んでいた。
月代は、蝉丸が念のためにと付近の竹藪から刀で切り出した竹竿……いや、竹槍を振り回している。銃や刀に比べれば大した得物ではないが、何も持たないよりは心に余裕ができようというものだ。
「(・∀・)蝉丸……これからどうするの？」
「まずはきよみを探す。きよみは野外での生活には慣れていない……おそらく、どこかの建物か、洞窟などにいるはずだ。見晴らしの良いところに行ってそれらしいものを探す。その後は……分からん」
きよみはああみえて芯の強い娘だ。決して殺人の狂気などに囚われてはいないだろうが……。
蝉丸は考える。
朝の放送を信じる限りでは、既に二十人もの死者が出ている。こうしているうちにも新たな犠牲者が生まれている事だろう。
仲間を、家族を、守りたい……多くの者は、そう願っているはず。だが、その思いを嘲笑うが如く死者は確実に増えつつある。
――誰かが、殺している。
――誰が？
考えられる可能性はおよそ三つ。
――一つは、この「げーむ」を「理解」した者。
冷静に自分が最後に生き残るために動いている者。

さほど多くはいるまい。
――もう一つは、恐怖に溺れ、狂いかけている者。正気を失ったあげく他人を巻き込んで自滅する者も少なくはあるまい。
――そして、最も多いであろうのが――
蝉丸達と同じ境遇――あるいは境遇だった者だ。自分を、家族を、仲間達を守るためならば、敢えて罪を犯そう。そう考えている者達だ。
仮に相手が見知った仲間であっても、信用できるとは限らない。むしろ、知り合いなればこそ自分の弱点に通じているかもしれないのだから。
時間が経つにつれ、信頼は不安に、不安は恐怖に変わり……さらなる悲劇が起こるだろう。知り合いでない者ならばなおさらだ。
戦場でもままある事だ。一つの死がさらに多くの死を招き寄せる。ひとたび繋がってしまった疑心と憎悪の連鎖は、容易に断ち切りうるものではない。このままではいずれ、島中の多くの者が、人の為に人を殺めていくことだろう。
――仕方がない、と心を凍てつかせ、他人を……そして、かつての自分を殺めていく。先程の少年がそうだったように……。
そして友や家族を喪った者は、絶望と怒りのままに、己を犠牲にすることを厭わぬ、時に相手すらも選ばぬ最悪の復讐者と化す。大半の者がそうなってしまえば、共に手を携えて脱出の術を練ることも、主催者を倒そうとする試みも叶うまい。
そもそも彼らはたった一人しか生き残らせぬ、と言っているのだ。嘘か真かは知らぬが腹中に爆薬を仕込んでいるとも言っていた。
(どうすればいい？　光岡……お前ならどうする？)
亡き友の事を思う。
軍に入った時から戦いで命を落とす覚悟はある。自分自身の死なら従容と受け入れる事もできよう。だが……。

生かしたい者達がいる。
そのうち誰か一人を、選ばねばならないとしたら。
そして敵となる者の多くはまだうら若い娘達なのだ。
考えれば考えるほど額に険しい皺が刻まれていく。
「(・∀・)……どうしたの？」
「いや……心配するな」
月代の髪に手を置き、掻き回す。
それに――岩切は死んだらしいが、御堂はまだ、生きているだろう。あの男と出会ったならどうなるのか。

……心を落ち着ける。ここはもう、戦場なのだ。
考え事に気をとられ続けるのはまずい。
当面やるべきことは決まっている。
一刻も早くきよみと、そしてまだまともな理性を残している者達を探さねばならない。

きよみ。
……何か、胸騒ぎがした。

237 第四回定時放送

みんなーお昼の時間だぞー。
例によって定時報告いくぞー。

六番　石原麗子
十番　太田香奈子
十二番　緒方英二
三十八番　桑嶋高子
四十四番　澤倉美咲
四十五番　沢渡真琴
五十七番　橘敬介
五十八番　塚本千紗
六十番　月島瑠璃子
六十二番　遠野美凪

七十三番　雛山理緒
八十一番　松原葵
八十七番　みちる

以上だ。
ペースアップしてきたじゃないか。
この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……

238　白い、決意。三

川から出ると、その先は、また森になっていた。
どうやら、この森はさっきいた森よりは深さはないようだ。そこまで確認して、きよみ〈原身〉は慎重に森へ歩み寄った。
水気を含んだスカートが重い。スカートをかがんで絞り、水気を切る。大分マシにはなったが、靴の湿り気の不快感はどうしようもない。
最後にパンをかじってから、随分時間が経った。
空腹感は、ない。
疲労と、喉の渇きは酷いが、不思議と空腹感はなかった。
森の中はさっき彷徨っていた森よりも明るい。木の数が少ないのだろう。誰にも会わないことを祈りながら、きよみは歩を進める。殺戮者と化してしまった人より何より、今は、蝉丸に会いたくなかった。
死にに行くことを、決めた、その時から。
会ってしまえば、決意は鈍るだろう。
自分にしか支給されていないであろう、武器。

マイク。

足早に歩きながら、きよみは鞄のソレを確かめる。
(私は、私の戦いをする……)
その、代償がこの、命。
弟に、蝉丸に、光岡に、救って貰った命。
(もう、甘えたりしません……。だって、女性でも

男性と同じように働いて、生きていける時代に、なったのでしょう?)
蝉丸を心に思いながら、きよみは建物へ向けて、歩く。
(だから、悲しまないで。大丈夫、私は満足です)
独り、少し微笑んで泣いた。
意識せず、涙が零れる。
怖かった、怖くて仕方がなかった。
ずっと震えは止まらない。
だけど。
だけど、誰かが。
(戦う意志のない人が居ることを伝えなくてはいけない。伝えて、狂ってしまった誰かを、正気に戻さなければ)
そして、それが全員に、例え主催の贄となっても、伝えられるのは……
(私、だけ)
森が、切れる。

と、同時に放送が聞こえた。
心臓が痛いくらいに、ドキリと跳ねた。
聞き終えて、自分の体をぎゅっと抱きしめる。
(また、沢山の……罪もない人達が殺された……哀れな、同胞の手によって)
自分も、あの死者リストに載る。
だが、私は誰にも殺されないのだ。
参加者の、哀れな人達の手に掛かることはない。
卑怯な計略には、乗らない。
目の前に、建物がそびえる。
そっときよみはそれに近づいた。誰にも、出逢わなかったことを神に、感謝しながら。そして、人の皮を被った悪魔を呪いながら。
建物の扉は容易に開いた。というよりも、半壊していた。その中に人の気配はない。
埃の匂い。自分の足跡が、うっすらとつくということは、長時間、放置されていた建物の様だ。
きよみは、安堵の息を吐いて、階段を探す。

屋上に向かうために。
死にに、行くために。
階段は程なくして見つかった。
(これは、天国への階段？　それとも……地獄への階段？)
何に使われていた建物かは気にならなかった。それより何より、きよみは、これから紡ぐべき最後の言葉を考えていた。
屋上に着くまでが勝負だと、確信している。着いてしまったら、もう、後戻りは出来ない。立ち止まってしまえば、もう、動けない。恐怖に埋もれて、泣くしかできなくなる。
(そんなのは、嫌)
そう、嫌だ。
(蝉丸さんも、光岡さんも、もっと辛い戦場に居たはずなのだから。負けない。私も、戦う。もう、守られるだけなんて嫌、嫌だから)
一歩一歩を踏みしめるように、階段を上る。
途中、放送を思い返して、ぎゅっと手のひらを握る。
(……止めて、みせます)
屋上への扉は、もう、目の前にある。
その時、声が聞こえた気がした。
死んでしまった……夕霧の、声が。
『がんばって』
思い出すまいとしていた。最初の放送。信じたくなかった。
(あんな、いい娘まで死ぬだなんて……殺されるだなんて)
でも、今は、それがきよみの決意に拍車をかけた。
(貴女の敵、討つわ……だから、見守っていてね)
きよみは、そっと、静粛な気分で扉を開けた。
少し強めの、風が吹き込んでくる。濡れたスカートが足にひやり、と冷たい。
もう、震えは止まっていた。涙も、乾いた。あとは、マイクのスイッチを入れて、喋るだけ。

（私の生き様を、どうか、どうか焼き付けて……生き延びてくださいね、蝉丸さん。それから、月代ちゃんに、よろしくと）

建物の屋上は思ったより狭く、その中心に立っていても、島を見渡せる程度のものだった。

（こんなに、狭い島で、今も人が死んでいく。……同胞による無益な、殺し合いが……やれる限り、私は戦う。止めて、止めて見せます！）

きよみは、マイクのスイッチを、入れた。

「聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？　私は今、森近くの建物の屋上にいます。見えますか？」

自分の声が、島に、反響する。

言いたいこと、言うべき事を早く、伝えなければ。いつ、殺されても、おかしくはない。

「私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！」

反響する、自分の声に重ねて、きよみは喋り続けた。

「あなた達は、何人殺しましたか？　何人の友人を肉親を大切な人を、失いましたか？　私は一人、大切な友人を、失いました。私は、酷く悲しかった。悲しくて、辛くて、仕方がなかったのです」

「あなた達はどうですか？　これだけの人達が、同じ時代の同じ国に住む、普通の人達が、殺し合いをさせられているのに、自分のことだけを思い、自分の大切な人だけを守ることしか、できないのでしょうか？」

「……私は、嫌です。そんなことは死んでも、したくありません。自分や、大切な人を守るために、誰かの大切な人を殺すだなんて、そんなことは出来ません。もし、私に同意をしてくれるなら、手を取り合って人の皮を被った悪魔の魔手から、逃げ果せて下さい。方法は、必ずあるはずです」

239　白い、決意、そして終幕。

「人は弱いものです。とても弱い。猜疑心、嫉妬、劣情、優越、劣等……ありとあらゆる、負の感情があります」
「それでも、大切な人がいるのであれば。守りたい人がいるのであれば、人は強くなれる。私は、少なくとも、私はそう思っています。だから、死を賭して、この場で語りかけます。疑うのも、争うのも、止めて、協力しあってください。活路は醜い争いからは生まれません。決して、生まれないのです」
「私は、これから主催の手にかかり、死ぬことにはなるでしょう。でも、それは、無意味な死ではないと、そう思っています。私は参加者の誰の手にも掛からずに済むのです。そして、自らが出来るたった一つの反抗を主催にしてやれたのです」
「さあ、考えなさい。あなた達が、今するべき事を。本当の敵は誰か。想い出して下さい」
　そこまで言い終えて、きよみは腹部を押さえた。
　何か、異物が、腹で膨らんでいる……！
「最後に！　蝉丸さん!!」
　耐えきれず、膝をつく。コンクリートと膝のぶつかる音が、マイクを伝わり、島に響いた。
「聞こえますか？　私は、もう、ダメです。でも、悲しまないで。私は私の誇りに従って、戦うことが出来たのです。私はこうして、私を守りました。だから、蝉丸さん、月代ちゃんをみんなを守ってあげてください。私は、こんなことしかできないけど、でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……」
　その瞬間、爆音が、響いた。
　きよみの最期の断末魔として、島じゅうに、響く……。
　その場に、残されたのは、無惨な躯だった。
　生前の儚げな美しさはなく、ただ、惨い、肉塊に

なりはてていた。
だが、一部、無事だったその顔は、満足げに微笑んでいた。

十五番　杜若きよみ〈原身〉死亡
【残り61人】

240　仮面

Ｊｏｋｅｒ：

一　［略式］ばかげた事をする人、ふざけた奴、冗談の好きな人。
二　どんな影響か測れないもの。
三　思いがけない事実。
四　策略。

水瀬秋子の思考は常に大局の上にあった。

それはかつての経験によるものか、また自身が生来備えた素質のようなもののせいか。それは誰にも分からない。
ただ、それはもはや彼女の特質として認められ、他人も、そして自身もそれを否定することは無かった。それが彼女にとっての、そして彼女の周りにとっての〝普通〟になっていった。
だがときにその振る舞いは他人から恐れられ、その冷静沈着さは人の怒りを買った。
水瀬秋子ですら〝不完全〟だった。
だが、むしろ〝完全〟などというものの方が、この世界に人間が勝手に作り出した欺瞞であるということは言うまでも無いことだった。
未完。
未だ、たどり着いてはいない。
一見悟りきった様相、しかしそれは全てを語っていない。
沈黙はごまかし。

均衡は奇蹟。
その危うい綱渡りが、たまたまうまくいっていただけ。
……分かってる。水瀬秋子がどれくらい脆いかなんて。だって他ならない私自身のことですもの。
不思議なものだった。
私自身が名雪に縋っているように、名雪もまた誰かに縋っていることなんて分かりきったことだった。
……それが、私であればいいと思っていた。
それなのに、あの子は祐一さんの名前を追って行ってしまった。
嫌い。
大嫌い。
そんな言葉、今まで名雪に言われたことはあっただろうか。
……いつものあの子なら、間違っても言わないだろう。
いつものあの子なら。
いつもなら。
……だから、私も〝いつも〟じゃない。
心が沈む。
あの人……名雪の父親が死んで以来、ずっと絶やさないようにしてきた笑顔を忘れそうになるくらい。
多分、名雪は琴音ちゃんが追っていってくれているでしょう……。そんな言い訳をしてまで自分をごまかして、あの子から離れなくてはならないくらい。
だから私は、琴音ちゃんを放り出して道を逆行した。
——いや、正確には名雪を。
ふぅ……。
嘆息する。
穏やかな微笑、だが瞳にはかすかな憂い。
「やはりダメだったのかしらねぇ」
——二人で生き残ろうなんてことは。

私は、自分が善人だと思ったことは一度も無い。
いざとなれば、顔色一つ変えずに人だって殺める。
私は咎人だ。
でも……だからこそ、せめて母親としては正しくあろうとした。何に代えても、娘だけは守ろうとした。
……それがいけなかったとでもいうのだろうか。
名雪の精神は、そろそろ限界が近い。
そもそもこの状況で正気を保っていられる方が普通でなかったのだろう。
常人にこの状況が堪えられるはずが無い。
知らず知らずの内に……蝕まれていく……。この島を包む、血と、硝煙と、死の匂いに……。
「……だからといって」
あの子までそれに巻き込まれてしまうのは、死んでしまうのは、なんとしても避けなければならない。
……秋子はその言葉を最後まで口にはしなかった。
たった一人の娘。本来なら、今すぐにでも追いかけていって抱きしめてあげたい。命に代えても守ってあげなくてはいけない。
それなのに、放り出してしまった。
……自分に、負けて。
拒絶されたことへの落胆に、足を留められて。
もし、この瞬間に名雪が殺されるようなことがあれば。
……私は、一生後悔する。犯人には間違いなく究極の苦痛を与えた後に緩慢な死を与える。それどころか、この島にいる全ての人間を殺しても止まらないかもしれない。何より、私が私を許すことが絶対に出来ない。
それくらい、もう分かりきった未来なのに。それなのに、今この瞬間は投げ出した。
打算も、何も意味が無い。
後に残るのは、あの子を御せなかった事実だけ。
優しすぎる名雪。
あの子に殺し合いなんてできるわけが無い。

それは、他の参加者にも言えることだった。
今この島にいる人間のほとんどは無理矢理つれてこられ、なし崩しに殺し合いに参加させられているのだろう……日常を平和に生きてきた、会ったことも無い彼らにとって、その要求はあまりに悪意にあふれたモノだったに違いない。
……黒の少年のことは、話だけ聞いたことがあった。FARGOの中でずっと隔離されてきた、人にあらざる存在。どうしてそのような存在を、このゲームに投入したのか。また、彼はみすみすこのような茶番に付き合うことになったのか。
後始末、だろうか。私達？　それとも、彼？
そしてそれが、一体この殺し合いにどのような影響をもたらすか……それもまた掴みきれていない。
ただ、脅威だということだけしか。
その不審が消えないこともある。だが、それ以上に主催者側の動向が気になる。もし前々回ゲームの生き残りとしての私が、彼らのシナリオの一端を担っていることになっているとすれば……。
それを考えると、迂闊に自分が能動的になるわけにはいかなかった。
だが事態は私のそんな葛藤など無視して、無条件に進んでゆく。
〝ジョーカー〟
それは主催者側の仕掛けた卑劣な罠。
密かに島に入り込み、私たちと同じ境遇を装って接近し、一人ずつ……だが、確実に人間の命を狩っていく死の使い。
だからこそ私は、少人数だけれど少しでも人間が無駄に殺されるのを防ぐために、ここに留まった。
でも……状況はそんなことを許してくれないみたいだった。
置いてきぼりにしておきながら、子供たちがこっちへ戻ってくる様子は無い。
当たり前のことだが、彼女たちを単体で行動させることに危険が無いなんてことは無い。だからこそ。

本来なら、今すぐにでも追いかけて、捕まえて、離さないようにしなくてはならないのだろう。
……頭は、もう十分に冷えた。
だが、何も脅威はあの子達が向かった方ばかりにあるとは限らないのだ。
もうこの島において、安息できる場所などどこにも無いことは、とうの昔に分かりきっていたことだった。
スッ。
音も無く、袖口から小太刀を取り出す。左手にそれを構える。その構えは、通常の剣を用いたところにおける剣術の、無行と呼ばれるものに酷似していた。
一つだけ違うところと言えば、刀身を逆手に構え、ある方向からはその姿を確認できないようになっているところだった。
「……あなたも、そういう目的だったのかしら？」
秋子が呼びかけた相手は、彼女の後ろの方の、少し離れたところにいた。
――天沢未夜子。
一体どのような途を辿ってここまでたどり着いたのか、その表情は一歩間違えれば廃人のように見えるほど虚ろだった。
「……あら、こんにちは」
声は、まるでそんなことに気付いていないようなのんびりした調子だった。加えて、いわゆる艶があった。
しかし、どうも彼女の様子は変だ。
声だけ聞けば……確かに普通なのかもしれない。でも、どこか覇気の無いような……。何かを偽っているような……。そんなことを、秋子は未夜子に対して背中を向けたまま察知した。
未夜子は、口を小さく横に吊り上げて、引きつったような笑みを浮かべていた。
「とぼけても無駄ですよ、だいぶ前から近くにいたんでしょう？」

秋子は未夜子に呼びかけた。けして乱暴ではなかったが、あたりに良く通る声で。
「さあ……」
クスクスクスクス……。
引きつった口元は、かすかな笑い声へと昂揚していた。一体何がそんなに面白いのか、その表情にはどこか無邪気さすらも垣間見えた。
「聞こえて……いたみたいね」
名雪の叫び声が。
彼女のことは、うすうす気配として捕らえることは出来ていた。だからもし彼女が名雪を狙ったとしても、それを阻止する自信はあった。それが私の打算だった。
だが、それはあまり考えたくないことでもあった。
「かわいい娘さんがいらっしゃるみたいですね――」
――やはり。
だが、その台詞に秋子が応えることは無かった。
「親子の絆というものは尊いものですよね……。ええ、私にも娘がいるから分かります。あなたならご存知じゃないんですか？　そんな事ぐらい。そうです、参加していますよこのゲームに。郁未……。私のかわいい郁未……」
「……なら、私たちは似たもの同士なのかもしれないですね」
秋子が静かに――未だ後ろを振り返ることは無く――言った。
「わざわざ見逃してあげた、とでも言いたいのかしら？」
「…………私は、ずっとＦＡＲＧＯにいたんですよ」
未夜子が発したのは、けして秋子の問いに答える内容ではなかった。……そう、まるでその語り口調は、子供に昔話を聞かせるように。
「ずっと私は一人だったから、私は欠けたものを取り戻そうと思っていたの。でも欠けたものがなんな

のかも知らなかった。だからずっと考えた。そしてそれは幸せということだと思った。いろんな立場の幸せがあったことにも気付いた。それは娘としての幸せだったり、母としての幸せだったり、女としての幸せだったりした」

……秋子は、何も口を挟まない、

「私はＦＡＲＧＯに入って、それらの人間としての何かを取り戻したかった。何かを得るためには何かを捨てなければいけなかったわ。だから私は平凡な日々を捨てたの。そしてここで気付いたの。何かを手に入れるために、何かを失わずにすむ方法を」

ただひたすら沈黙を保つ。空気のようにその場にいて、彼女の話に耳を傾ける。

「それは力だったの。何者にも屈することの無い、脅かされることの無い、絶対の力。ＦＡＲＧＯはそこに至る道筋を指し示してくれた——だけど」

未夜子は、一度話を切って自嘲した。

「だけど、私にはそこまでいく事が出来なかった。舟はあったけど、チケットが無かった。私は、選ばれなかったの。だから私には失うということしか残らなかった……」

依然、笑顔。

……それは、絶望以外の何であると言うの。

秋子は心の中で問う。

未夜子の声は変わらない。不気味なまでに、穏やかなトーン。

「でもね」

ほんの少し、口調に明るさが混じる。

「私の娘には力があった。選ばれるのにふさわしいだけの資質があったの。だから私にはそれがとてもうらやましく思った。憎らしくさえあった。でも、私があの子をずっと一人にしていたことに気付いたら、その気持ちは霧散したの。一人、一人、一人、一人、結局、私があの子をそうしていたわ。私が一人でいたせいでこんなに苦しんだと言うのに、それを娘に押し付けることなんて出来るはずも無かった。

だからね、私あの子の側にいて、ずっとかわいがってあげようって決めたんですよ」
……そう、それは良かったわね。
秋子は心の中で相槌を打った。
「ああ……、あの子の好きなものをずっと作ってあげられる。あの子の買い物にも付き合ってあげられる、あの子のおしゃべりの相手にだってなってあげられる。それは、郁未にとっても私にとっても本当に幸せなことだった……」
それならば、何故……。
喉まででかかった言葉を秋子は口の中で押しとどめた。
「でもね……FARGOに二人分の居場所なんて無かった。二人そろって出るなんてことできるわけが無かった。でも……ここでならずっと一緒にいられる」
あなたの声は、そんなに乾いているの……。
「さっき、あの子に会えたんですよ。すごく驚いていました……、私があの子の目の前であの子の友達を殺したことに」
……秋子は未夜子のセリフにうすらさむいものを感じてきていた。
「あの子ったら動転して私に攻撃しようとしてきたんですよ？　おかしいでしょう。かわいい娘が親に向かってそんなことをするなんて」
やけに饒舌に語り続ける未夜子、岩のように口を閉じて黙して語らない秋子、奇しくもそれは、お互いがお互いの正反対を映し出す鏡にでもなっているかのように。
「思わず、私も反撃しようかと思いましたよ？　あの子、すごく震えていましたから。ええ、私からその場を離れたんです。郁未がそうしろって言うから」
未夜子の声に込められたものが……、冒頭の頃とどこと無く変質してきている。秋子はそのことに気付いていた。

「私、その時思ったんです。殺してしまってもいいかなって」
さらにほんの少し、未夜子の口調が昂揚する。
「あの子言ったんですよ。『今殺されるわけにはいかない。お母さんを止める人がいなくなるから。お母さんに殺されるぐらいなら、今ここで一緒に死んでもらうわ』なんて。……でもね、それもいいかなって。私があの子を殺してしまえば、ずっとあの子を側において置ける。あの子の側にいられる」
木々が、ざわめく。
「ずっと一緒にいられる、それなら私が一緒に死んでもいい」
空が、ざわめく。
「ずっと二人一緒……私が生きていても、私が死んでも、結局あの子と一緒にいられることには変わりがないんですもの」
……まるで、それ自身がその場に存在するのを拒むように。
「そのために、私はこの役をかってでたの」
彼女の声に含まれていた笑いが、止まる。
「すべては、そのために」
——やはり。
ある程度は予想できていたことだった。だがそれ以前から、既に彼女の心は破綻していたのではないか？　そう秋子は感じた。
嘆くべきことだった。
本質的なところは、私と何も変わるところがない……。娘に対する、深い愛情。それが悲しいまでに見事に反転してしまっている。
彼女は、もう一人の私の可能性。
今なお進行している、狂気の侵食。
そして、裏の殺人を担うものへの堕落。
……私は、違う。
そう、一人だったあのころとは違う、
私はもう一人ではないのだ——。
秋子の沈思黙考……、それは目の前、いや、後ろ

にいるはずの女性が自分を映す鏡であることを明確に肯定する。
「ところで……。私たちは所詮、母の立場でしかないですが……」
語りのトーンが変わる。
秋子の無反応が気に食わなかったとでもいうのだろうか、未夜子は話を転換した。
「大好きな母親がいなくなってしまった娘は、どうなってしまうと思います？」
「!?」
秋子は後ろを振り向いた。そこには茶色い物体が向かって飛んできた！
ドン!!
秋子は一気に吹き飛ばされる。
……だが、間違っても左手の小太刀を取り落とすことはしない。
「あなただったら、分かりますよね？」
いささか笑みが混じった声。
立ち上がった秋子は、初めて彼女の顔を見た。
そこにいのは、狂った一人の殺人者というような、単純な人間では少なくとも無かった。
口が切れて、血の味が広がる。
秋子は口から血の塊を吐き出した。
「プチ主……ね。まさかこんなところで出くわすとは思っても見なかったわ」
秋子の呟き……。未夜子にも聞こえるように、やや大きい声の呟き。
「知っているなら話は早いわね。私が何を要求しているか、分かるでしょう？」
未夜子は……、平常な人間であれば不敵と表すのがもっともふさわしい表情で言った。
「ごめんなさい」
秋子は一言そう言った。
いぶかしむ未夜子。プチ主はその間に手元に戻ってきていた。
「生憎、まだ殺されるわけにはいかないの」

それに……。
「言うのは勝手よ、実現できるかはともかくとして」
未夜子はもういちどプチ主を放とうとした。
秋子は、小太刀を逆手に構えたまま、未夜子に向かって走り出していた。
「……無駄な抵抗ね」
走りよる秋子に向かって、未夜子はプチ主を放った。
プチ主は高速で秋子に迫った。だが、
「ふっ！」
体を沈ませて、縦に前転する！
そして秋子は、その軌道をまっすぐトレースするように小太刀を振るう。
スパン！
プチ主が真っ二つに分断される。正に刹那の出来事だった。
「それに、一度でも見たことのあるものに遅れをとるほど余裕は無いのよ」
果たしてその呟きが音声として認識されたかどうか……彼女は止まることなく、そのまま未夜子に接近していった。
「ひ!?」
一瞬のことだった。未夜子が一瞬悲鳴を発した間に、秋子の小太刀は未夜子の右胸を深々と突き刺した。
冷徹な視線が、未夜子の目を捕らえる。
――――暗黒。
心の闇の深さが、目の前の狂気を凌駕していた小太刀を抜く。すると血飛沫が宙を舞う。
艶やかな紅が、秋子の頬を濡らした。
「ひっ……ひひっ……ひぃーっ、ひぃーっ！？」
未夜子はその一瞬で錯乱した。
右手で体を抑えつつ、未夜子はもときた方の反対へと逃げていった。
秋子は、それを追わなかった。ただ、悲しげに彼

女に視線を送っていた。
「母親がいない娘を、あなたが仕立て上げてどうするというの……？」
貼りついた血を拭うことも無く、そう呟く。その表情は、少し……ほんの少しだけ沈んでいた。

未夜子は逃走している。
居もしない秋子の幻影に追いかけられているかのように、必死で体を引きずっている。
刺し貫かれた痛みは鮮烈だったが、むしろ痛みよりも、彼女の殺気が大きな衝撃だった。
「ぐっ……」
苦しい……。
傷は肺に到達している。彼女の絶命はもう決まったようなものだった。
唯、殺気。
未夜子の精神は、目で殺されたようなものだった。
恐慌に追い込まれたせいで、いろいろな感情が爆発し、もう制御が利かなくなってしまっている。
私は、死んでしまうのか……。
そうだ、だったら郁未を捜さないと。
私が死んだことを知ったらあの子はきっと悲しむ。
だからあの子も殺して一緒に逝ってあげなきゃ。
見つからない娘を目指し、未夜子は血だらけの体を引きずるように歩いていた。
いつしか彼女は声に出して娘を呼んでいた。
郁未、一緒に死にましょう、と。
風が吹く。
少し冷たく、でもあたたかい風が。

目がかすんできた……なんだか視界が狭い……。
ぼやけた視界の中で、未夜子は何か黒い人影を見た気がした。

未夜子は風を感じていた。
何処から来たのかも、何処へ還るのかも知れない

——凪。

未夜子は大気を感じていた。
どこまでも自分を解放してくれない、けれどどこにいても探し出して、自分を包み込んでくれている——大気。
ほおを凪ぐやさしい気流は、まるで子供をあやすゆりかごのようだった。

「——哀れね、道を踏み外したものの末路は」

バシュウウウウウウウ！

柏木千鶴は彼女の胸を、もとあったものよりもさらに抉り取った。
その一撃で未夜子は完全に事切れ、そして倒れた。
「殺意なんて所詮、誰の心の内にだって眠っているもの。……でも、それを自己満足の手段にしてしまったらおしまい。所詮あなたは、ジョーカーにも母親にもなりきれなかったのよ」
黒い人影は、爪を仕舞うことも無く、死体を顧みることも無く、そう言った。
そこから少し離れた場所で秋子が呟いた。
「——でも、状況に埋没して雌伏したまま、真のジョーカーは均衡を打ち破るべく潜んでいるわ」
果たして、その呟きは千鶴まで届いたのか。

四番　天沢未夜子　死亡
【残り60人】

241　わたつみのような強さを

死んだ。
美凪も、みちるも。

道を行く途中流れた放送で、往人は立ち止まった。
守ろうと思っていた二人が。
誰よりも大切にしていた二人が。
死んでしまった。

予感はしていた。
――ありがとう――そんな声が、あの時確かに聞こえていた。
二人の、優しい声。最後に出会うことが出来たのだろうか、彼女達は。
そうであって欲しい、きっと、そうだ。
そう思い込むことにした。そうじゃないと、余りにも悲しすぎるから。

夏の田舎町。
旅の途中で路銀が尽き、必然的に留まることになった、あの町。
夏と海の香りが風に運ばれ、どこまでも澄んだ青が、限り無く遠くまで広がっていた。
交通の便も悪く、閉鎖的で、そこにある空気はまるで、千年も変わらぬものであるように思えた。
廃線となり、人のいなくなった駅で、彼女達と出逢った。
気付いたらいつも三人で、まるでずっと昔から、そうであったかのようだった。
変わらぬ日々が、いつまでも続く、そんな錯覚を覚えていた。
そしてその夢は、呆気無く、どこまでも呆気無く、終わった。

感傷に浸るのはここまでにしよう。
自分には、自分の役目が。

一人また、死んだ。
あんなものは理想論だ、現実は違う、そう思う。
自分に出来ることは、ゲームに乗り無作為に人を

殺す者を、殺す。
主催者も、殺す。
それだけだった。
センチメンタルは他の奴に任せればいい。
心に空虚を抱え、道を往く。
それに押しつぶされない強さを。
変わらない、わたつみのような強さを、もう持っていた。

242　無知の中の死

「この住井護様ともあろうものが……はは」

——ガッ！——

脳天に衝撃が走る。
冬弥の特殊警棒。

（まぬけだなぁ……）
住井の頭から血が次々と流れ出す。

（いろいろあったな。
美咲さん。綺麗だった。
最初に出会ったときは怯えてたな。
でもすぐに打ち解けて。
彼女はまな板を持ってたんだ……。
違う。ノートＰＣだったんだ。
従兄弟。潤に渡せばどうにかしてくれる。
俺の携帯と合わせりゃなんとかできるかもしれない。
探して。
緒方英二さんが出てきて。
なんであんな奴さん付けしてんだ！　俺は！
クソ!!
美咲さんを預けちまって。
そうだ。キスされたんだ。

別れてすぐに放送があって。緒方の野郎の嘘がわかって。
変なチビガキにスネ蹴られて。
違う。その前にもう美咲さんを見ていたんだ。
あん時からもう狂ってたのかな？　俺。
あのチビガキに縛られて……。
……。
そんな趣味ないのに……。
…………。
変な二人組に近づいたら左肩の肉吹っ飛ばされて。
美咲さんにナイフを渡されて。
違う！　もう死んでいたんだ。
俺がナイフを取っただけだ。
くそ！　なんでこんなに間違えるんだ!!）
彼は気づいていない。
最も大きな間違いに。

（美咲さん。
誰かに先を越されたけど、
緒方の野郎は……。
美咲さんのかたきは死んだってさ……）
冬弥は住井の落としたバタフライナイフを拾う。
（ああ、潤のやつにも会いたかったな。
〝もずくを食べる時ってなんで猫背になるのかな？〟
こんな話題で五時間は論議ができるおもしれー奴だった。
いい奴だったな）
『ジジ……みんなーお昼の時間だぞー』
住井の胸に……。突き立てられた。
「うっ……みさ……き……さ……」

『以上だ。ペースアップしてきたじゃないか』
冬弥は初めて人を殺めた。
なのに……。
（放送と同時に死ぬと……。発表されないんだな……）
頭に浮かぶ言葉はあまりにもつまらないものだった。

五十一番　住井護　死亡
【残り59人】

243　偽りの円舞

走る。
高槻を追って。
そして……駆けてゆく誰かの白い服が、前方に見えた。

パン！
「きゃあぁ！」
「っ！　智子っ！」
背後からの銃弾を腕に受け、智子が倒れこむ。駆け寄ろうとする晴香。
パン！
智子を撃った兵をマルチが倒す。
「晴香さん、行ってください。保科さんは私が！」
倒れたまま、智子が叫ぶ。
「せや！　早ぉ行きや。高槻は目の前やで！」
「……わかった。マルチ！　智子を任せる」
「はいっ。必ず安全な場所へお連れします！」
再び駆ける。使えるだけの「力」を駆使して、スピードを上げる。
そして……
「高槻いっ！」
目の前に、高槻の姿を捉えた。
ここは最上階。

最奥の部屋に、高槻が逃げ込む。
追いかけ、そこに飛び込む晴香。
「いた！」
壁を背にし、シニカルな笑みを浮かべている。
……ついに辿り着いた。ここまで。
銃を構える。致命傷とはならないが、深手を負わせられるように、狙いをつける。
「どこを見ているんだ」
後ろからそう声がし、振り返る。そこには……スタンガンを手に晴香に迫る、もう一人の「高槻」がいた。

……気がつくと、薄暗い部屋の中にいた。
両手両足を頑丈な車椅子に固定され、身動きが取れない。
「……お目覚めかな、巳間晴香。いや、C—219」
部屋の一部にライトが当たる。

そこには、下卑た笑みを浮かべる高槻がいた。
……ずっと憎んでいた、その男が。
悪夢のような日々を思い出し、その元凶たる男を睨みつける晴香。
「そんな恐い顔をしなくても良いだろう。これでも俺は、おまえの初めての男なんだからなぁ」
「貴様っ！」
「はっ！　威勢がいいな。だが、これでどうだ」
カッ！
高槻の背後が明るく照らし出される。
そこには……身体を拘束され、壁に張り付けられた、智子と、あかりがいた。
「嘘……」
二人とも、衣服をはぎ取られ、裸にされていた。
意識が無いようで、頭をうなだれている。
「うそだぁ……」
「あはははは。残念だったな。おまえの仲間は、すでに俺の手の中だ」

言って、智子に近づく。
「悔しいか。憎い男に仲間を奪われて！」
智子の胸を、無造作につかむ。
「ほう、この女、お前よりも胸が大きいな」
「やめろーっ！」
今度はあかりに近づく。頭をつかみ、その頬に舌を這わせる。
「やめてえぇ。お願い……」
その舌を強引に、口の中に突っ込む。なすがままにされるあかり。
「コイツらは、手篭めにしようが、どうしようが俺の自由にできる」
「いやぁ……」
「どうだ！　悔しいだろう！　こんなゲスにいいようにされて！」
涙を流しながら、晴香は二人を見つめる。
「コイツらを助けて欲しいか？　なら、俺を感動させてみればいい。俺だって人の子だ。熱い友情を見せつけられたなら、情に負けて屈服してしまうだろう」
「友情……」
「そうだ。こいつらを救う為に……そうだな、まずは参加者を十人ほど殺して来い」
そんな……言葉を失う晴香。
「そうすれば、助けてやらんでもない。そうでなければ、こいつらは俺の慰み者だ」
「……」
「どうする？　大事な仲間を見捨てるか、それとも見知らぬ他人を殺すか」
この男は本物のゲスだと、晴香は知っている。あかりと智子が、どんな目に遇わされるか……
「……わかった」
「ほう、では友情の為に殺人を犯すというのだな。では行け。そしてこのゲームのジョーカーとなれ！」
外に連れ出され、自由の身となった晴香。
だが、彼女の心は漆黒の闇に拘束されていた。

——友情の為に殺人を犯すというのだな
そう。全てはあかりと智子を救うため。
もう、最初の目的など、どうでも良かった。
もし、わたしと同じこと……いや、それ以上の過酷な仕打ちをあの二人が受けたら……
わたしにとっては、「不可視の力」の扉をあけてしまったほどの苛烈な仕打ちを、あの二人が受けることになったら……
「そうは……させない」
どうせ、この両手はたくさんの、本当にたくさんの血で汚れている。ならば……
死神に身を落とすことは、運命なのかも知れないと、そう思った。

晴香のいなくなった部屋で、一人ほくそ笑む高槻。
「簡単なものだな。小娘を騙すということは」
そう言い、ポケットから取り出したメスを、あかりの頬に突き立てる。
つーっと、そのメスを縦に下ろす。
その下から現れたのは……量産型メイドロボットの、冷たいマスクだった。

「智子。我慢してね」
その傷ついた肩を治療しながら、あかりが呟く。
「うん。あ、いたたたたっ！」
智子たち三人は、マルチの機転により中継基地を脱出していた。
……あの時、晴香の身体を担いだ高槻が、部屋から出て行くのを目撃した。
しかし、他の兵に遮られ、助けることが出来なかった。
かろうじて再び敵のジープを奪い、ここ——出発地点の一つである建物まで来るまでに、高槻の放送で……少なくとも、晴香が生きていることを確認できた。
「全く……どないしよ」

幸い腕に受けた銃弾は貫通していた。痛みは激しいが、動けないわけではない。
「どうにかして晴香を助けんと……」
その後ろでは、マルチが声を上げて泣いている。
「セリオさーん。どうして死んじゃったんですかー」
この建物の付近で見つけたセリオの死体。その上で泣き崩れている。
……こんなふうに、知らん間にわたしらの知り合いも、死んでいってるんやもんな。
「やっぱ、あいつに頼るしかないんかな……」
藤田浩之。すでにこのゲームに乗ってしまった友人。だが、本来なら一番頼りになる人物。
晴香を取り戻すためには、彼の力がどうしても必要だと思う。
……それに、晴香と同じ「不可視の力」を持つ者たち。
「とにかく、仲間になってくれる人を探して、晴香を助けるんや……」

そう呟き、窓の外。青く広がる空を見つめた。

244　一つの愛の形

どうして、こんなことになったのだろう。
何がいけなかったのだろう。
隣を歩く佐祐理をじっと見る。
「ふぇー、舞、どうしたのー」
「……なんでもない」
それはいつもと変わらぬ佐祐理で。
でも、佐祐理はもう、壊れていて。
せめて、佐祐理は元の佐祐理に戻って欲しい。
そのためなら、私は……
二人の前に、突如影が躍り出た。
左腕はボロボロで、全身傷だらけで。
瞳だけが、まるで獣のようにギラついていた。
深山雪見——

「……人を探しているわ。黒髪でおしとやかそうな女の子、大きなリボンをつけた小さくてかわいい子。この二人を殺した奴を探している。覚えはない？」
静かに、暗い声で問う。
「……知らない」
「佐祐理もですねー」
二人は揃って答えた。
返事を聞いた雪見の表情に、失望の色が宿る。
「そう、なら用はないわ。私の気が変わらないうちに消えなさい」
――よくもまぁ、そんなことが言えるわね、私もう、ろくに戦えないというのに――
自嘲しながらも、残された右腕はしっかりと、アサルトライフルを構えていた。
「待って、怪我してる……」
「だめだよー、舞ーっ」
大怪我を負っている雪見を気遣い、駆け寄ろうとした舞を、佐祐理が止める。

そのまま、雪見に向かって銃を構え、言った。
「あなたも舞を殺そうとするんですねーっ。あははーっ、そんなこと、この佐祐理が許しませんよーっ」
「!? だめっ、佐祐理っ!!」
舞が叫ぶ。
だが佐祐理は耳を貸さない。
「そう……じゃあ死になさい、あなた」
雪見もアサルトライフルを佐祐理に向け……。

ダンッ！

撃ったのは、佐祐理の方が早かった。
そのまま、舞の体が崩れ落ちた。

これでよかった……
あの人は……生きてる……
驚いているみたい……
「舞っ、舞っ！」

佐祐理の声が、遠くから……
「……さ、ゆり……
もう、人……ころさないで……
……さゆりが、そんなこ、とす、るの……
見たくないから……」
最後に私は笑えただろうか？
佐祐理に笑いかけることができただろうか？
佐祐理……
……佐祐理……
……さ、ゆ……り……

雪見は目の前の光景が理解できなかった。
それは佐祐理も同じだった。
佐祐理の方がずっと、銃を撃つのが早くて。
もう終わったと、思った。
次の瞬間、舞が佐祐理の手をつかみ、そのまま自分の方に向けた。
それだけだった……。

「舞っ！　舞ぃぃぃ！
どうして、こんなこと⁉
佐祐理は舞のためにやったのに！
舞が大好きだったから！
守りたかったから！
なのに、どうして⁉
舞っ、ま――」
物言わぬ舞に抱き付き、喚く佐祐理。
その隙を逃すことなく、雪見は持っていたナイフで、佐祐理の喉を切り裂いた。

佐祐理は、一体どこで道を間違えたのだろうか。
今となっては、わからなかった。
舞と佐祐理の関係、最後に舞の言った言葉。
それらは雪見にわかるはずもなく。
血のついたナイフを拭い、佐祐理の手から銃を奪い、放り出したアサルトライフルを持ち直した。

二十七番　川澄舞　死亡
三十五番　倉田佐祐理　死亡
【残り57人】

245　明かされる過去、死闘の始まり

『まさかこのようなところで貴様と会うとはな』
『かの裏庭で一戦を交えた以来か。俺に敗れて北に流れたと聞いていたが』
『ああ。あのときの屈辱はいまだ忘れられぬ』
『借りを返すには絶好の機会とでも言いたいのか？　あのときの惨敗忘れたわけではあるまい』
『黙れ！　今の俺は違う！　今の俺には守るべき人がいる』
『その老人のことか？　笑止！　己の牙と爪、その他に戦いに意味あるものはない。さぁ、来い！　格の違いというものを教えてやる！』

「うなー、にゃあにゃあにゃ」
「ぴこぴこぴこっり。ぴこっぴっこ」
「にゃあ。うにゃにゃあにゃー」
「ぴこぴっこ？　ぴこぴこぴっこりぴこぴこぴっこ」
「にゃ！　ふー！　うなーうにゃ」
「ぴっこりぴこ？　ぴっこり！　ぴこぴこぴっこり。ぴこ！ぴっこり！」
「にゃあだのぴこだのうるせぇ！」
付きまとう猫とどこからかやってきた毛玉に御堂は叫んだ。
「なんなんだよ次から次へと、ったく。暴れんなこら！」

246　無言、そして消えぬ罪

『以上だ。ペースアップしてきたじゃないか』

『この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……』
どれだけの放送機器があるのかわからないが、島中に響き渡る不快な嘲笑。それは最果ての海岸の岩場までも届く。
狂気を孕んだ明るい調子の言葉は、現実を妙に遠く感じさせる。
楓は何も言うことができないでいた。
姉妹たち、そして耕一の名がないことだけを確認して、ほっと胸を撫で下ろす。
「……」
そして玲子。——ただ泣いていた。
楓はハッと玲子の表情を覗き込む。
——知り合いの名前があったんですか？
——その言葉もまた言えない。
やがて、玲子が涙を拭う。
楓の思いを汲み取ったのか、笑って、
「違うよ。ただ……悲しかっただけ。私の知り合いは、せんどークン一人しかいないから」
でもそれは寂しげな瞳で……
「……」
「どうして、こんなことになったんだろうね」
見知らぬ他人の為に涙を流す、それが楓には出来ないでいた。
「楓ちゃんは強いね。こんなときでも」
——違う、そう言いたかった。でも言えないでいた。
……結局自分の中に住み着いている鬼は、楓を人ではなくしているのかもしれない。
前世の記憶、最愛の男性を守るために同朋を、姉妹を、裏切った女。そしてエルクゥとして切り捨てた数々の命。
そんな自分にとって、この狂った非日常も、かつて経験した日常でしかないのかもしれない。
あの頃の、あの時の私は、まさしく修羅であったのだから。
「休憩、終わりだね……行こうか☆」

玲子が食したパンのゴミを投げ捨てると立ち上がった。
「これから……どうするんですか？」
楓はふと現実に引き戻される。
「脱出ルートを探さなきゃならないでしょ、帰るために……生き残った人みんなでね。私はね、やっぱりどこかに秘密通路があると踏んでるのよ。それでね――」
途中から楓の耳には何も入らなくなっていた。
迷走する想い、あの時の約束。
そして、ここでの約束。
だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆
右手に光る鉄の爪が、より鬼の感情を呼び起こす。
（きっと、私は一緒には出られないかもしれない。かつて、血に魅せられた私が、確かにここにいるんだから）
次郎衛門、その名が心にある限り彼女もまた殺意を呼ぶ鬼の娘だから。
胸を押さえて、少し寒さに震える。
それでもまた二人は歩き出す。この島を脱出するその時の為に。

247　現実

和樹は自分が少しずつだが自分の考えが絶望へと傾いていくことを感じずにはいられなかった。
行けども行けども死体しか発見できない。
そして正午の放送が追い討ちをかける……千紗ちゃんが死んでいた。
瑞希、大志、由宇、郁美ちゃん、千紗ちゃん。
こみパの仲間たちが次々と消えていく、たとえ助かったって、もうあの日々は帰ってこない。
自分のすぐ隣でクスクスと笑い声が聞こえる、……？　詠美？

「あはははっ、わかったわよ、ぽちぃ～。これは全部夢！　夢なのよう」
「きっと、朝起きたら、いつものベッドであたシはお魚にエサをあゲて、それからラがッコ行って、原稿カいて、こみパでしたぼくがいっパい待っていて……なのにどうして目が覚めないのぉ～」
「夢じゃ……ないんだ。俺たちは今ここで、殺し合いをしているんだ……」
「うそぉ、パンダいルんでしょう！　ほらハリセン持って出てキなさいよ、ほうら出てこないわよ！　アイツがいない時点で夢なのよ」
「詠美……由宇はもう死んだ」
「あははハはは～ほぅらやッパり夢～。ぽちがそンな酷い事あたシに言ウわけ無いもの」
……狂い行く詠美を見ているうちに、和樹の心の奥底に秘めていた今まで必死で押さえつけ、殺してきた感情が溢れ出していった。
もう、止められない。

「目を覚ませ、詠美！　俺だって、俺だってこれが夢ならどれだけ良かったと何度思ったか……だけど現実なんだよぉ!!　瑞希も大志も由宇も郁美ちゃんも千紗ちゃんも皆死んだんだ！　夢じゃないんだ！　夢じゃないんだよぉーー！」
「帰りたい、帰りたいよぉーー。またこみパに行きたいようーー。でも、でももう誰もいないんだぁ！」
「死にたくない、死にたくないよぅ、でもでも、怖いんだよぉ……どうすりゃいいんだよぉ。誰か教えてくれ！　大志ぃ、瑞希ぃ……」
いつのまにか和樹は詠美のひざの上で泣きじゃくっていた、そして詠美の瞳からは狂気の熱は消え、意志の光が戻っていた。
「ごめんね、かずきも辛かったんだね……ごめんね、ごめんね、あたし助けられてばっかりで、あたし一人だけ楽になろうとして……逃げたりして」
「もう大丈夫だから、あたしもう大丈夫だから、現

実から眼をそむけたりしないから……だから和樹も泣かないでよ」
　詠美は力いっぱい和樹の体を抱きしめる。
「怖いなら……ずっとこうしてあげるよ……それとも瑞希さんじゃないとダメ？」
「え……いみ」
　そして二人はごくごく自然にお互いの肌を重ね合わせ、男女の行為へと及んでいった。
　今こうしている間にも誰かが死んで、もしかしたら自分たちが殺されるのかもしれない。
　それでも、たった一つくらいは肯定できる現実が……絆が欲しかった。
　生き残るための支えが。

248　CHILDHOOD'S　END

北川潤（二十九番）は暖炉の側のロッキンチェアに身をゆだねて葉巻を燻らせながら、ウォーラーステインとサイードとチョムスキーを読みつつ、9・11以降のアメリカの抱える諸問題と行く末を案じていた。というのは嘘で、痛むコブをさすりつつ、天から降ってきた神様からの贈り物のノートパソコンの解析に勤しんでいた。
　ノートを立ち上げたとき、初めに北川が目にしたのは、彼もよく知っているＯＳの起動画面だった。落下のショックで破損してないことを確認すると、早速ノート内部のシステム周りをチェックしはじめた。あらかた中身を調べてみた結果、彼の確認した限りノートにはただＯＳがそのまま入っているだけの、まっさらな状態であることくらいしか分からなかった。
　むしろノート本体よりも北川の目を引いたのは中に挿入されていたＣＤ―ＲＯＭだった。表面のレーベルには「2/4」と書かれ、中身を調べても〝02〟というフォルダに、〝02.nag〟と命名されたファイルだけが入っているだけで、他にこれといっためぼし

い収穫は無かった。
ただ、ボリュームラベルに"Cancellation_02"と付されたこのROMの存在は先ほどから北川の心を捕らえて離さなかった。
「きゃん、せ、れいしょん……か」
ふう、とため息をついて北川はノートパソコンの電源を落とした。殺し合いもさることながら、腹の爆弾やら、ミサイルやらで手一杯だというのに、ここに来てまた一つ謎ができてしまった。
そこで北川は肝心な事を忘れていた自分に愕然とした。今まではレミィ云々でそれどころでは無かったのである。
「そうだ、爆弾だ。アイツが言ったとおり本当に俺達の中に……」
高槻は放送で自分たちの中に爆弾を仕掛けたと言ってた。さらに三十六時間以内に生存者が二十五人まで達してない場合、この島を吹き飛ばすとも。その言葉を思い出すと北川は軽い嘔吐感を覚えた。

「やれやれ、便通で流れ出た場合はどうなるんだっての。適当なこと言われても困るんだよなあ、こっちは何の選択権もないんだから」
変な先入観があると、どうも自分の身体とはいえ信用がおけなくなる。北川は傍らにいる宮内レミィ(九十四番)を振り返って尋ねた。
「なあ、レミィ。お前、腹の調子が悪いとか変だとかないか？」
「え、どうして？　ぜんぜんなんともないヨ。オールグリーン！　パーフェクトだヨ！」
ぽんぽんと自分の腹を平手で叩きながらレミィは答える。あれだけ水っぽいもずくを浴びるほど食したというのに、まったくたいした消化器だと北川は思う。
「ん……そうか。わかった」
やはり杞憂なのだろうか。それぞれの腹に仕掛けられた爆弾。主催者のほしいままに爆破させて人を破壊する爆弾。本来自分達の全滅をあちらさんが願

っているのだったら、一挙に爆発させて覆滅させてしまえばそれでいい。または高槻が嬉しそうにほのめかしていたミサイルでもよかろう。まさに、どかんと一発、それでお終いにできるのだし。
「ブラフか本気か、それともウィットに富んだジョークか……いずれにしても迷惑千万この上ないな」
大地にあぐらをかき、あごに指をあてて考え込んだところで結論はでない。どう考えても情報が足りなさすぎる。さらにはボリュームラベルのあの単語"Cancellation"。つまりは解除か。どういうことなのだろう。こいつで何を解除できる？　何が解除される？　爆弾かミサイルか、はたまた彼らの防衛システムか。
しかし実際のところ、このノートパソコンやCD—ROMが、あちらさんからの支給品であるとすれば、彼らの首を絞める物をこちらに送りつけたとはとても考えられない。また、戦闘の最中にいくらでも支給品は損壊するおそれがある。結局これらは最初から「あっても無くてもいいもの」、と考えるべきなのだろうか。
となれば、仮にこのROMやノートで「解除」されても向こうに痛くないものとはなんだ？
「やーめた」
あぐらを解いて地面に大の字になって寝転がる。身体を伸ばしたときに全身がぽきぽき音をたててほぐれていくのが心地よかった。
「やめちゃったノ？」
よく分かってない、いやおそらく何もわかってないであろうレミィがニコニコしながら北川の顔をのぞき込む。
本当に大らかで明るい、向日葵のような笑顔をする子だ。こんな人がもう少し増えれば、世の中はもっと平和で住みよいものになるだろうに。争いも諍い事も無くなって、シャロンとアラファトも仲良くチークダンスを踊ったであろうし、ブッシュとフセ

インも暮れなずむ夕日に向かって肩を組んで蒲田行進曲を熱唱しただろうし、毛沢東と蒋介石だって互いの恥骨に指を這わすのも厭わなかったに違いないと、北川は確信したというのは真っ赤な嘘だが、見る人を安心させる微笑みができる彼女ならば、普段は周りに友達や恋人を絶やすことはまず無いのだろうと北川は感心した。

「そ、やめちゃったの。普段頭使ってないからさ、なーんか脳ミソがオートミールみたいにドロドロになっちまった。てわけで、冷えて固まってムースになるまで当分は頭使わないことにしたんだ」

「アハハッ、ジュンのノーミソがムースになるの？　ちょっと振ってみたいデス」

「だめだめ！　今振られると元に戻ったときおかしくなっちまうの！」

「いいじゃなーい、だっておもしろそーダモン！」

そういってレミィは北川のすこし栗色がかった髪に包まれた頭を両手でつかんでやさしく揺する。そうやって無防備にじゃれついてくる彼女を見て北川は獣欲に任せてこのヤンキーを蹂躙して、児童福祉法と国連人権宣言の限界に挑戦することを決意した、というのはなんら根拠もない出鱈目だが、レミィの振る舞いに少し気恥ずかしくなった北川は、自分の頬がかっと熱くなるのがわかった。

（ん、考えるのはやめだ。後は行動で示すとしますか）

「さぁ、レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ！　休暇は終わりぬ、だ。僕たちを外の雑音から守ってくれた庇をとっぱらうのは少々心苦しいけれども、ぼちぼち書を捨てて街に出るとしますかぁ！」

急にがばっと立ち上がった北川に、一瞬面食らった様子のレミィだったが、すぐにいつものスマイルにもどって、親指を彼の前に突き出した。

「イエス！　ジュン、わっかりましタァ！」

ま、殺し合いだけが脱出への方法とも限らないし、

このさい地見屋もまた良しだ。そうだろ、護？

249　偽りの仮面

初めての遭遇。それは玲子をおびえさせるには充分な出来事だった。
「だ、誰!?」
武器としては頼りない釘バットを両手で構え、前方を見据える。
細かに震える玲子より一歩前に出るように楓。
右手に装着された爪が不気味に輝く。
「あ、あら……」
息も絶え絶えなその眼鏡の女性――牧村南が二人の姿を見つけ、たじろぐ。
「……」
既に戦闘モードに切り替わった楓は、いつでも動けるようグッと腰を下ろす。
鬼の力はほとんど封印されている。力も機敏さも鬼のソレの比ではない程発揮できない。
だが、幸い楓には使いやすい武器がある。
格闘戦であれば、闘いの素人相手に負ける道理は無い。その位の力の行使は可能だ。
この場合の問題はそこではない。敵の武器が楓にとって不利なもの――たとえば重火器――である時、そして横で震える玲子だった。
「……」
玲子の前へと少しずつすり足で移動する。
相手もこちらを伺い、慎重に間合いを詰める。
それはとても長い時間だった。
それを破ったのは玲子の戸惑うような一声。
「あの……こ、こみパに……いませんでした？　スタッフか何かで」
「……こみパですか？　スタッフですよ」
少し柔らかい口調になる。場の空気が少しだけ緩やかなものになった。
「私に戦う意思はないんです……あなた達もそうな

ら、その物騒なもの、しまいませんか？」
南が両手を広げ、それを強調する。
「……助かったの、かな？　それにしても、本当にこみパの関係者だったなんて……」
玲子が胸を撫で下ろしながら、本当に安心した顔をする。
「私もです。本当に世界は狭いわね……私も、別の意味で驚きました」
二人が戦闘態勢を解いても、楓は構えを解かなかった。解けなかったといったほうが正しいだろうか。
今までで一番強い黒く、嫌な予感。
「どうしたの？　楓ちゃん。この人、この声、確かに聞き覚えがある……さっきこみパの話したよね？そのスタッフの人なんだ。毎回大きな声が通ってるの聞いてるから間違いないよ」
楓が爪を下ろした。玲子にそう言われてはそうするしかない。
だが、爪は装備したままだった。

「えっと、お名前教えていただけるかしら？」
南は荒れた息を整えて、にこやかに笑った。
「玲子ちゃん達……そう、脱出ルートを探してるのね」
南が話を聞き終えて感心したように呟く。
ゲームが始まり、初めての遭遇。それが殺人者でなくてよかったと楓は思う。
(でも何でだろう、この胸騒ぎ)
楓の思考をよそに、南の話が始まった。
「私はこんなゲームのこと、よく分からなくて……帰りたいってだけ思ってたんですけど、狂った人たちに襲われて、それで走ってたんです」
本当に人心地ついたように南が笑った。
「詳しく話そうにも何がなんだか……この位しか分からないけれど、いいかしら？」
ゲームに乗せられ、狂ってしまった人達がいる。その事実に楓と玲子の顔が曇る。
(何で、この人は笑って話せるんだろう……)

――私のように、血に染まった過去があるわけでもないのに……

それは憶測に過ぎなかったが、ささくれとして楓の胸に波紋を呼び起こす。

「それで、お願いがあるんです……一人だと心細いので御一緒してもいいかしら？」

南の言葉に、玲子は二つ返事で了承の意を唱える。

「楓ちゃんも、いいよね」

「玲子さんがそう言うのなら、私は構いません」

確かに、この島を一人で行動するのは得策じゃない。

このまま一人にさせるわけにもいかない。

「とりあえず……周りに追ってきている気配はないみたいです。少し歩きませんか？」

楓の問いに、

「え、ええ、いいですよ。楓ちゃん、玲子ちゃん、よろしくお願いしますね」

南と玲子が並んで歩く。こみパの話だろうか。漫画やゲームのキャラクターの名前が飛び出す。

（きっと気のせいですよね）

楓は無意識のまま気づかない。記憶の彼方にある前世の自分が、右手にある爪をはずさなかったことに。

250　光を見つめ闇黒を往く鬼

（真のジョーカー……）

「そう――ですか」

構えもなく、だらりと垂らした手の先には、鉄の爪。風になびく黒髪が夜闇のように美しく、開いた左手は薔薇のように紅かった。

ひゅん、と空気が擦れる。

その短い悲鳴が耳に届いた時には、既に爪と小太刀が交わっていた。どちらからともなく、吸い込まれるように二人は踏み込んでいた。そこに殺意が介在していたかは、誰にも解らなかった。

柏木千鶴［鬼］。
秋子は前大会参加時の知識で、鬼という生物を知っている。
今の自分があるように、彼女もあるならば。
たとえ異能者が、その能力を抑制されてるとは言え——リスクが高すぎる。
「あなたは、どうして殺すの？　私は娘のために生きるわ。たとえ世界を敵に回しても、名雪のために私は在るの」
小太刀を捻り、右手で爪を抑え、肘を浮かせ、脚を掛ける秋子。
爪をずらし、斜めに流し、腕を捕らえ、小手を握り、爪で裂く千鶴。
千鶴は体を崩しかけ、秋子の手からは浅手とは言え血が滴る。
二人は弾けるように距離をとった。
「わたしは、妹達のために。そして愛する人のために。たとえ私の心が滅びても、私は足掻き続けるでしょう」
二人の視線が合う。
ふ、と笑ったのは秋子のほうだった。
「お互い苦労してるわね——心身ともに、ね？」
千鶴は何も答えず、ただ力を抜いて秋子を眺める。
「私は行きます。あなたと延々戦い続けるよりも、やらねばならないことがありますから。柏木家の方々も、縁があれば助けて差し上げます。了承？」
こくり、と頷く千鶴。
「私も名雪さんと——縁が、あれば」
『二人で探すのよ、それだけで縁は二倍じゃない？』
秋子の声は、既に遠くなっていた。
目を閉じれば、そこは闇の中。
心の闇の中に、ひとすじの光明。
(あのときと、変わってないわね)

溜息ひとつ。
そう、私は闇黒に飲まれたわけではない。
元から、だった。
私は闇黒と共に生まれ育ったのだ。
（ばかな、わたし……）
支えていてくれていたのは、妹達の存在だった。
それでも光の中で生きることを諦めかけた事があった。
（このまま殺しつづけて、本当にどうにかなると思っているの？）
あのとき助けてくれたのは、耕一さんだった。
また、溜息ひとつ。
目を開けば光の世界。
そう、私は——こちらの世界に、愛されたい。

（梓、楓、初音、待っててね？）
左手についた血糊を、ぴっと吹き飛ばす。
盛大に血塗られた左手と、その手にのみ握られた武器。血飛沫ひとつ付着していない、右手。
そして肩には、痕。
（なんて、アンバランスな。私にぴったりね……）
秋子との出会いは、千鶴を微かに光のほうへと引き込んでいた。
しかし、まだ決定的ではない。
足元に横たわる死体を、路傍の石ころのようにまたいで歩き出す。
光を見つめ闇黒を往く鬼。
（ジョーカーを。［殺すもの］を、殺さねばならない。そしてみんなを、助けるの）
「縁が、あれば——」
自分に言い聞かせるように千鶴は小さく呟き歩き始める。
光を見つめく闇黒を往く鬼。
（耕一さん？　もう一度私を——助けてくれます

か？）

251　迷走演舞～序～

「……」
楓は無言のまま、歩いていた。
右手には鉄の爪。振り上げられることは無い。
「か・え・で・ちゃん！　ど～したのぉ、元気、ないよ？」
あくまで明るく、かつ心配そうに楓の顔を覗き込む。
「……いえ、何でもないんです」
「下を向かないで行こう？」
「はい……」
牧村南を加え、芳賀玲子と柏木楓の二人は森の中を慎重に進んでいた。
「ねえ、楓ちゃん。あたしサークル作ってこみパに参加してるんだけど、楓ちゃんも一緒にやらない？　あと三人程メンバーいるんだけどみんないい子達だし。ん……まあ、ちょっと生意気な子も一人いるけど、きっと楽しいよ？」
「……はい」
自分を励ましてくれている、そう感じた楓はすぐ――といっても何か別の不安が無いわけでもない――頷いた。
「それと南さん、ここであったのも何かの縁、ちょ～っとばっかしこみパ……当選させてくれない？　いや、次回だけでいいんですけど」
玲子が楓の方を気にしながらそう切り出――
「不正はだめですよ」
「……やっぱり？　にゃはは……ダメかぁ……」
一秒で却下された。
「ふふっ」
そのやり取りに、
「あっ、楓ちゃんが笑った……やっぱり笑い顔のほうがぜんぜんいいよ☆」

「か、からかわないでください」
気恥ずかしさからか、赤面する楓に南も控えめに笑う。
「私も早く帰ってこみパに専念したいです。待ってますからね、楓ちゃん」
「は、はい」
少しずつだが、楓も南に対して警戒を解きはじめていた。そして、警戒の意識を徐々に周りへと飛ばしていく。
また、いつどこから誰が襲ってくるのか分からないからだ。二人を守ってどこまで闘えるか――楓の手のひらの汗が消えることは今もない。

「――!!」
楓が突如、二人の前方に身を踊りだす。
「ど、どうしたの？」
突然の楓の変貌に玲子が声を震わせる。
「下がって――！　何かくる！」
すごい勢いで向かってくるものすごい殺気の塊。
玲子たちが下がる間もなく現れたそれ。
鬼――一部ではそう呼ばれる魔物。

252　迷走演舞～惑い～

鬼――女は走っていた。
（梓、楓、初音……耕一さん……）
その鬼は木々の間を風のように。
鬼の力を封じられているとはいえ、元々自分の中の鬼を百パーセント飼いならしているその彼女にとっては体力を残しつつ駆け抜けることなど造作もないことだった。
（と、いっても……）
この極限状態の思考の中で、精神的な疲れは確実に彼女の体力を削り取っている。
（何故なの？　あの男、高槻は――）

――それでですねぇ〜、やっていただけるんでしたら、せめてあなたの縁者の方々だけでも命を救って差し上げましょう。

妹達――少なくとも初音は――安全な場所にはいなかった。死と隣り合わせの戦場に身を置いているのだ。

――千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！

今も彼女の耳にあの声が響く。
(初音は……私に牙を向けた)
いつでも優しかった初音、一体何故こんなことになってしまったのだろう。それ以前に、何故高槻は初音を……
いつでも、そして誰でも、誰をでも……ここで人を――殺せる。
それは狩猟者でなくても心のどこかで感じている感情。
「……愚問ね……」
現に妹達、そして耕一の名前は放送されてはいないではないか。
それは偶然であれ必然であれ、まぎれもない事実なのだから。
やがて人の気配。意識をそちらに飛ばす。
(これも私の所為ね)
水瀬秋子の言葉を思い出す。
――縁があれば名雪さんを……ね。

鬼は走る。薄暗い森の中を。
そして――辿り着いた先、二人の女性、そして……。

鬼が、いた。

253　迷走演舞～綻び～

　楓は思わず鉄の爪を取り落としそうになった。
「千鶴……姉さん……」
　思いがけない再会。無事でいて……と思い続けた
かけがえのない大切な人。
「楓……」
（無事でよかった……）
　千鶴は声に出してそれを言うことができなかった。
　千鶴が楓に近づこうと歩を踏み出す。
「来ないで……千鶴姉さん」
　楓が呟く。
「かえ……で……？」
　楓の視線が一点に注がれる。どこで破れたかわか
らないがスリット状に変わったスカート、その上に
存在する白い服に……薄く血が着いていた。
　そして、先程の殺気。
「また……人を狩るの？　……昔みたいに」
　楓の声が、冷たく、刃物のように千鶴に襲いかか
る。
「かえで……」
「人を……生きるものを……姉さん」
　自分で制止しておきながら、楓自身も千鶴に一歩
近づく。
「……」
　千鶴は楓の雰囲気に、圧倒的な威圧感に飲み込ま
れていた。一歩、また一歩と後ろへと下がる。
「……答えて……答えてリズエルッ！」
　激昂。普段の楓からはおよそ考えもつかないその
叫び。
「いや、来ないで……かえで……」
　今度は千鶴が静止を呼びかける。無意識のうちに
口が開く。
「今度は私達を……狩るんですか？」
　静かに、楓が、爪を横に凪いだ――。

「……」
何も言えないでそのやり取りを呆然と見つめる玲子。その横で、静かなる一人のＪｏｋｅｒが薄く笑っていた。

254　迷走演舞〜慟哭〜

パッ!!
血飛沫が舞う。横に薙いだそれを千鶴が茫然自失で見つめた。
楓は一瞬で間合いを詰め、千鶴の腕の皮を軽く引き裂いたのだ。
もちろん、楓が故意にはずしたもの。
今の千鶴には楓とまともに闘えるだけの精神的な余裕はない――
我に返った千鶴が叫ぶ。
「や、やめて……私は……楓っ！」
楓の攻撃は続く。よけなくても、かわさなくともそれは致命傷にはならない攻撃の嵐。
だが、その攻撃の意図を千鶴には汲めない。
千鶴はソレを左手でいなす。だが、腕に、体に、少しずつかすり傷が増えていく。
「姉さん……」
楓の目からはとめどなく涙が溢れている。それを拭う手は今はない。
いつしか千鶴も、表情が変わっていく。
「やめて……やめてぇ、楓っ!!」
その叫びが森の中にこだまする。哀しみの、悲痛の声だった。

――高倉みどり
確かに自分は人を殺した。
それは大事な人を守るための悪魔の契約。
だけど、私は生来の狩猟者。その気になれば誰でも殺せる。
かつての自分がそうであったように。

楓の猛攻は続く。それは傍から――玲子達から――見れば、異種格闘技の上級者たちの試合に見えたかもしれない。

またもJｏｋｅｒが含みをもたす笑みをこぼす。

だが、これは死合いだ。

それに玲子は気づくこともなくて。

楓……お願い、お願いよ……

もはや声にならない叫びを意味不明に呟きながら千鶴が尻餅をついた。

「……」

楓が振り上げた爪を千鶴の右手の爪へと振り下ろす――!!

『聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？』

そのとき、二人の、いや、四人の耳にそれが響き渡った。

255　迷走演舞～想～

『聞こえますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？』

楓の、そして千鶴の動きが止まる。

それだけの意思を持った、強い声だった。

『私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！』

一人の顔から笑みが消える。

『あなた達は、何人殺しましたか？　何人の友人を肉親を大切な人を、失いましたか？　……』

ギリッ……！

その歯軋りの音はその強き少女の声の中聞こえるはずもなく。

少女の演説はさらに続いた。

――そして……爆発音。
そして、静寂……。

256　迷走演舞～漆黒～

「……」
「……」
誰もが無言だった。
千鶴が、ゆっくりと立ち上がる。そして――歩き出す。楓もその動きを黙って見つめるだけだった。
そして、玲子たちの方へと歩いていく。玲子も、南も動かない。
そして――
（…………）
「………っ!!」
すれ違いざまに闇が運んできた言葉。
それは千鶴にだけ、かろうじて聞き取れるものだった。
千鶴は、楓を、玲子を、そして南を一瞥し、再び風とともに消えた。
「……姉さん」
楓も、すぐそばにいた玲子も、その短い一瞬の出来事に気づくことは無く――
（楓……初音……）
千鶴は駆けた。何も考えたくない。
少女の命を賭けた放送――そして。
――裏切ろうなんて、考えないほうがいいですよ。大事な人がいなくなってもいいんですか？
いつ、どこから彼女らの命を奪いにくるか。だって、私も――
Ｊｏｋｅｒは、まだ生きている。そして死のゲー

ムに魅入られた哀れな人たちも。
(わたしも……同じね)
千鶴は後悔の念を胸に、走り出した。もう、後戻りはできないのかもしれない。

257　迷走演舞〜疑念〜

「さあ、気を取り直して行きましょう」
沈黙を破ったのは南の手を叩く音だった。
「……どこへ……ですか?」
玲子はそう南に聞く。未だにこの現実を直視できないでいた。
「この先の……放送室。前に見つけたのよ。無人だったから、今のももしかしたらって……」
二人を先導し、南が歩く。
(都合が……よすぎます)
放心したままの楓が、南の後姿を見つめる。それはいつもと変わらない。
(何故だろう……また、胸騒ぎ……)
最後の千鶴の様子はどことなくおかしかった。何か、おびえるようなあの視線。
そして、今の放送と、その場所を確信しているかのような立ち振る舞い……だが、答えは出ない。それでも自然と、玲子と南の間に体を入れる。
なぜかそうしなければいけないような気がした。
「……ここだと思いますよ」
その建物の屋上に、黒く何かが爆発したような痕跡。
そして、チラリと見えた赤い何か。
「……」
玲子の顔が青ざめる。
「玲子ちゃんはここで待っていたほうがいいかも知れないわね」
南がそう呟く。玲子は力なくうなだれるように肯定した。
「楓ちゃんは……来るんでしょうね」

それが当然と言わんばかりの立ち振る舞い。
「……そうですね。ご一緒します」
そして、楓も南が来ることを当然のように受け入れ、答えた。

玲子を残し、二人は階段を昇っていく——
（この人……慣れすぎている。何か……）
ずっと無言の時が続いた。
やがて屋上の扉の前まで来ると、躊躇無くそれを開け放つ南の両の手。
ギ……ィ……
（うっ……）
楓は思わずその状況に顔を背けた。玲子は来なくて良かったのかもしれない。
「杜若……きよみさんね……」
その躯の姿は南の背に隠れた。今、彼女がどんな表情でソレを見ているのか分からない。
「知りあいですか？」
（やっぱりこの人、血をみても平然と……？）
「……いいえ。私、記憶力がいいだけです。スタート時に見覚えがあったから……ね？」
言い聞かせるように南の声。それは優しい響き——

258　迷走演舞〜終劇〜

「これは……」
屋上の入り口に意味ありげなＣＤ。
「……これは……？」
楓がそれを拾い上げる。
「あら、それ……」
南もそれに気づいて、手を伸ばす。
「私に貸してくれないかしら……？」
だが、楓はそれを何故か拒んだ。
（何故だろう……この人に渡しちゃいけない気がする……）
嫌な予感がとまらない。

（……怖い……）

漠然とそう、感じた。

時が止まる……静寂……そしてそれは永遠ともいえる凍りついた空間だった。

「……しょうがないわね」

やがて、南が溜息とともに折れた。

「それはあなたが持っていて頂戴。そろそろ戻りましょう、下にいる玲子ちゃんが心配ね」

「そう……ですね」

楓は玲子の所に戻るまで、南の前を歩くことができなかった。

259　快晴

この調子で頑張ってくれよ、ハハハハッ……

死亡者発表が終わった。——そこに彼女の名はあった。

「石原麗子……確かに聞こえた。安宅も逝ったか……」

あの時の、彼女の言葉を思い出す。

——軍部はあなたを必要としなかった……でも今はあなたを必要としてくれる人がいるじゃない。

御堂は悩んでいた。この島に来てからというもの、まるで自分が自分ではないような気がしてならなかった。

「俺は、強化兵だ。人を殺す……その為だけに造られた、甘えは許されねぇんだ……皆殺し、生き残るにはそれしか——」

——うぐぅ。殺すなんてダメだよっ

「うるせぇ！　キレイ事言うな!!　俺がその気になれば誰だって殺れる！　生き残るのは俺一人で充分だ!!」

彼は信じられなかった、自分はいつからこんなに

他人の言葉に流されるようになったのか……。
「坂神だ、とにかく坂神を殺る！　それまでは他の奴らも皆殺しだ！　他人の命令なんて死んでも聞くものか‼」
『――ますか？　島にいる、皆さん、聞こえますか？　私は今、森近くの建物の屋上にいます。見えますか？』
放送……少女の声が島中に響き渡る。死亡者報告ではないようだ。
『私は、きっと、これから死ぬことになるでしょう。それは、主催の意に反することをするからです。よく、聞いてください。これは、私の主催に対する宣戦布告です！』
「何だ？　一体誰が――――」
『……私は、嫌です。そんなことは死んでも、したくありません。自分や、大切な人を守るために、誰かの大切な人を殺すだなんて、そんなことは出来ません』
自分の邪魔ばかりしていたあの少女の言葉を思い出す。
――みんなで一緒になればきっと帰れるよっ
見知らぬ少女の訴えは続く。
『人は弱いものです。とても弱い。嫉妬、劣情、劣等……ありとあらゆる、負の感情があります』
なぜか嫉妬、劣等の言葉が御堂の耳にひときわ大きく響いた。それらは彼が坂神蝉丸に対して抱いている感情でもあったからだ。
『ガクッ』
ふいに異様な音が聞こえた。
御堂は悟った。少女の命が短い事を……腹の中の爆弾とやらが暴れ出したのだろう。
『聞こえますか？　私は、もう、ダメです。でも、悲しまないで。私は私の誇りに従って、戦うことが出来たのです。私はこうして、私を守りました。だから、蝉丸さん、月代ちゃんをみんなを守ってあげてください。私は、こんなことしかできないけど、

でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……』

「なるほど、坂神の連れか……道理で強ぇえワケだ」

御堂は大きく息を吸った。そして、あの少女の声に負けないほどの大声で叫んだ。
「坂神ぃーーー！　貴様との勝負はこの島を出るまでお預けだぁーーー！　俺は貴様を殺すまで絶対に死なん！　だから貴様も俺以外の奴の手にかかるんじゃねぇぞぉーーー！」

「どうやら俺は闘り合う相手を間違えてたみてぇだ、予定変更だ……行くぞ、獣共」
「にゃ？」
「ぴこ？」
御堂の表情はこの島の空のように雲ひとつなく、快く晴れていた。

260　復讐の女神の目覚め

緒方理奈は、森を全力疾走していた。
（どうしてどうしてどうしてどうして⁉）
自分に銃口を向け、その照準をしっかりと合わせた、由綺。そして、それに代わり自分を攻撃しようとした、冬弥。
まだ、心臓がバクバクと高鳴っている。全力疾走の所為だけでは、ない。
（酷い、酷い、酷い、酷い！）
兄を殺され、悲しみと怒りと恐怖の中で、やっと出逢えたと思っていたのに。
その安堵は、つかの間だった。
（由綺、どうしちゃったの⁉　何で、何で、あんな……）
膝が重い。足場も悪い。これ以上走り続けるには

限界だった。
「あっ！」
木の幹に足先を強かにぶつけ、転倒した理奈は、大きくでっぱった木の幹に腹部を強打して、呻く。
その呻きは、すすり泣きに変わった。
（もう……疲れたわ……助けて、兄さん……っ）
どうなってもいいと、半ば投げやりになっていた。
兄さんはいない、由綺も冬弥も自分を裏切った……。
腹部が、ジンジンと痛む。鼓動が、うるさい。
木漏れ日だけが、優しく降り注ぐ。今までの出来事が全部、全部嘘だったかのように平穏があるのに。
（なのに）
もう、兄は永遠に理奈の元には帰ってこない。
軽口を叩く兄を叱咤することも、一緒に買い物に行くことも、食事をすることも……何もかも、出来ないのだ。
「こんなのって……こんなのってないよぉ……」

殺されるという恐怖よりも、今は腹部と心臓、そして想い出が痛く、強く、理奈を縛り付けていた。
苦しくて切なくて、涙が止まらない。目頭が熱くて……。

ガガッ！
不意に、スピーカーの音がした。高槻の放送が始まったのだ。
理奈は地面に倒れたままの姿勢で、涙を拭うことなく、ぼんやりとそれを聞いていた。
兄の名が、死亡者として、呼ばれた。
「……兄さんの名前、だ」
呟いて、顔を伏せ、すすり泣く。
（私は、何をしているの？　ここで、こんなところで）
悔しい。悔しかった。何も出来なかった自分が。何もしていない自分が。何よりも悔しかった。
高槻は、美咲の名をも告げる。

（……冬弥君と由綺の学校の、先輩……）
　何度か、由綺や冬弥が話して聞かせてくれた、優しい女の人。
（そう、その人も……死んじゃったんだ……）
　どうしてこんなことになったのだろう。理奈は、そっと、ポケットに忍ばせていた兄の遺品を取り出した。
（私も、死ぬのかな……）
　愛おしそうにそれを撫でる。
　ヒビの入った、レンズに触れ、指から血が滴った。
（痛い……）
　レンズがフレームが、自分の血で汚れる。理奈は顔をしかめて、自分の服でそれを拭い取った。
（痛かった？　兄さん……？　殺されたとき、どんなだった……？）
　殺されたとき。
　殺された。
　誰、に？
　一気に、感情が爆発しそうだった。
　それは、憎悪だ。
「兄さんを、殺した……あの、女」
　ありありと目に浮かぶ、茜の顔。
「許さない……許さない……っ！」
　自分を何故殺さなかったのかなんてわからない。
（そんなの、知らないわよ）
　冬弥も由綺も、もういらない。
（今までだって、やってきたのよ。冬弥も、由綺も居ないときから、出逢う前からずっと、兄さんと二人で！　二人でずっと生きてきたわ。その大切な大切な兄さん。私の……一番大事な肉親を奪った女を殺すのは、由綺でも冬弥でも、ない！）
　理奈は立ち上がり、睨むような一瞥を前方に向けた。
（……差し違えても、あの女だけは……私の手で八つ裂きにしてやるわ……！）
　由綺と冬弥と決別したことで、理奈の殺意はこれ

以上ないものになっていた。
（手負いの獣は……何よりも、獰猛だということを教えてあげる……）
その瞳にアイドルとしての輝きはなく、復讐に彩られた凄惨な笑みがあるだけだった。

261　何かを守れる強さ、そして弱さ

誰とも知らぬ女の最期を、どこか夢心地で聞いていた。
（……）
確かに一理ある。
私も、大切なものを守るためになら……
そこまで考えて、やめる。
嘘ね。昔の私は弱虫で……あの子みたいに強くなくて……。
光を失った少女。本当の強さを持っていたかは分からない。
その自分のすべてを受け入れる、それはあくまであの子の強さ、そして、すべてをあきらめてしまったかもしれない弱さ、儚さだったのかもしれない。
今となっては、真実はすべて永遠の闇へと消えた。
守ってあげたかった、陰からいつでも支えてあげたかった。
だけどそれは二度と叶うことのない夢物語。
「だから奪うの。私から大切なものを奪った人からすべて……。必ず殺してやる……友達も……命も……大切だと思えることのすべてを」
私の今の道標。見失わないよう前へ、前へ……。
少しずつ、復讐から狂気へと——。
たくさんの人の死を扱うには、彼女の心は脆すぎた。
私は強くなる……守れなかったあの子の為にも……。
本当は心の弱さであったのかもしれない。

だが、少しずつ狂気の扉を開きつつある彼女――
雪見は、その弱さを受け入れることはなかった。

262　受け継がれた誓い

『……さあ、考えなさい。あなた達が、今するべき事を。本当の敵は誰か。思い出して下さい』
『最後に、蝉丸さん！』
『……私は、こんなことしかできないけど。でも、蝉丸さんなら、切り抜けられる。そう、信じてま……』
爆音が響き――そして、消えた。後に残されたのは、氷のような冷たい静謐。

「(･∀･)……せ、蝉丸……今、の……」
月代が血の気が引いた顔で呟いた。
無意識のうちに腹に手を当てる。
放送が始まった瞬間から立ち止まっていた蝉丸を見上げるが……。
背を向けたままで、その表情までは分からない。
「……いくぞ、月代」
「(･∀･)……。どこ、に？」
「今の音はこの向こうから聞こえた。そう離れてはいない」
蝉丸は歩き始めた。その足取りに澱みはない。
まだ足の震えが止まらない月代は、
「(･∀･)なんで、なんでそんなに冷静なのっ？　きよみさんが、きよみさんが……」
蝉丸は応えない。そのまま真っ直ぐに早足で歩き続ける。
「(･∀･)ま、待ってよぉ……」
震える足を叱りつけて、月代は蝉丸の背を追った。

ぽた、ぽた、ぽた……
「え……？」
そして気づく。

蝉丸の後を、月代の足音とは違う小さな音が追いかけていた。
小さな、本当に、小さなそれは――
握りしめられた拳から流れる、赤い雫がたてる音だった。
「(・∀・)……」
月代はもはや何も言わず蝉丸と並んで歩き始める。
（……そうだ、きよみさんは命を賭けて、みんなを、蝉丸を信じたんだ。私だって蝉丸を信じて……頼ってるだけじゃなくて、助けないと！　それで、この島からみんなで出るんだ！）
誓いは、受け継がれた。
そして彼女はこの時から、只の元気な少女であることを止めた。

そして二人は、建物にたどりついた。
最早あの後、誰かが立ち入った後であるらしい。
幾人かの真新しい足跡が残っていた。
階段を昇ったところの、屋上の扉は開け放たれていて、そこには――
月代の動きが止まる。呼気が乱れる。
「……！」
だが決して、取り乱しはしなかった。
そして『彼女』に祈るために、目を閉じた。
蝉丸は、ただそれだけは奇跡のように残っていたきよみの顔に近づき、手を当てる。
彼女の顔は、自らの血にまみれ汚れていたが――
それでもなお、美しかった。
それは神が彼女の勇気に対して与えた、せめてもの慈悲だったのかもしれない。
（きよみ……）
後悔も、怒りも、悲しみも、憎しみも。全てが、蝉丸の中にあった。
だが……それに溺れるわけにはいかない。
きよみは、あの従容と死を受け入れようとした時と同じように。いや、あの時以上に己の優しさと誇

りを貫いて……逝ったのだから。
ならば自分は、応えなくてはならない。
きよみの信頼と遺志を裏切るわけにはいかない。
（きよみ。これから俺は、御国のためではなく、他の何のためでもなく、お前の為に戦う。お前のその優しさのために、俺に残る全てを賭けよう）
それが彼の誓い。彼女を救えなかった自分にできる、たった一つの償いだ。
そして、蝉丸はきよみの遺髪を切り取り、懐に収めた。
（たとえ……死出の道は別々のものであろうとも）
（おまえの想いは、常に俺と共にある）
（しかと見ていてくれ……きよみ）
残る意志を奮い起こして立ち上がる。
探さねばならない。きよみの遺志を受け取った者たちを。この悪夢を破るための希望を。
振り返り、背後に佇む少女に話しかけた。
「いくぞ、月代。急いで仲間になる者を。そして真の敵を探しださねばならない……ついてきてくれ！」
「……（・∀・）うんっ！」

263　勝機

「調子はどうだい？　A—12」
ねっとりと絡みつくような声に鹿沼葉子（二十二番）は答えた。
「まるでだめです。あの放送で逆に警戒されてしまって」
放送とは、初日に高槻が行った放送——天沢郁未を始めとする五人を殺せ——というものだ。
「なぜ、あの放送に私も含めたのですか？　高槻様」
多少の非難を含めながら葉子は付け加えた。
「私もジョーカーの一人だというのに」
「ああ、悪いな」

高槻は肩をすくめた。
「手違いだ」
「手違いですか……」
うそに決まっている。おそらくは高槻独断の嫌がらせだろう。
『Aクラスに手を出せないことを常々不満に思っていましたものね、この人は』
「ま、そんなことはどうでもいいだろ？　ジョーカー君」
ニヤつく高槻に葉子は表情を変えずただうなずいた。
『そう、私はジョーカーです……あなたたちにとってのね』
鹿沼葉子は確かにジョーカーとして働くようこの大会にエントリーされた。かつての自分だったら、その任務を忠実にこなしていただろう。
かつての自分……母を殺し、ＦＡＲＧＯの教義だけがすべてと思っていた自分。天沢郁未に出会うまでの自分ならば。
一日一時間程度、一週間にも満たない日数。
そんなほんの少しの時間だけれど。
郁未と共にとる食事の時間は、ＦＡＲＧＯをすべてとしていた自分にとって、それは輝けるかけがいのない時間だった。
『郁未さんは、そんなたいしたものだとは思ってはいないでしょうけどね』
少し寂しげに葉子は思う。
『まぁ、私の態度も誉めれたものではなかったけれど』
それでも、郁未は自分のことを友達と呼んでくれた、その友達に……。
葉子は天沢未夜子――自分と同じジョーカー――のことを頭に浮かべる。
『私と同じ苦痛を味わせる訳にはいきません』
だから、今ここに自分はいるのだ。ジョーカーとしての立場を利用して、目の前の男にこの槍を突き

刺すために。
浩平たちに伝言を託した後、自分は高槻の元へ行くための理由を探していた。
ジョーカーとはいえもちろん胃に爆弾は仕掛けられている。だが、ＦＡＲＧＯの忠実な犬としてみなされている自分ならば高槻も油断するかもしれない。
「あー、それでお前を呼んだ理由だけどな」
だが、その理由を思いつく前に高槻から呼び出しがかかった。
なぜかはわからない。
だが、千載一遇の好機。
今現在部屋の中にいるのは葉子と高槻とその間にいる何人かの黒服の男たち。おそらくこの男たちも不可視の力の持ち主だろう。
葉子と高槻の間には不可視の力を使ったとしても二回の踏み込みが必要な距離があいている。槍を手放していないとはいえ、成功する確率は十に一つもない。
成功したとしても高槻は所詮手先。根本的な解決にはなっていなく、自分はここで死ぬだろう。
けれど、自分はやるつもりだった。
表情を変えることなく、だけど槍を強く握り締めて……。
そこで高槻は言った。
「まず、新しいジョーカーができた。九十二番、巳間晴香だ」
その名前におぼえはあった。確か郁未の友人だ。
「巳間晴香？　放送にあった五人の一人ですね」
「ああ、ＦＡＲＧＯに背いた、不可視の力の使い手だ」
「……今度はどんな手を使ったのですか？」
高槻は得意げに一連の出来事を話す。
「そこで、だ。お前には任務がある」
モニターに三人の顔が映し出された。
「二十五番　神岸あかり、七十八番保科智子、八十二番マルチだ。こいつらは中継基地から脱出してし

まってね」
高槻は憎憎しげにモニターをにらみつける。
「わかるだろ？　こいつらを巳間晴香にあわせるとおもしろくない。だからこいつらを消せ」
「ああ、」
葉子の問う視線に高槻は答える。
「胃の爆弾を使えば話は早い」
そこで、高槻は肩をすくめる。
「けど、上がうるさくてね。さっきもやっちまったし」
実際、ジョーカーというのはこの大会でさほど重要な役割ではない。
この一件に関しては高槻独断の遊びとも言える。今回の指令も出し抜かれた高槻の私怨だろう。
「あまりに爆弾を使うのは、上にしてみれば面白味がないんだろうさ」
あざけるような高槻の声に、葉子の表情は変化がない。
ただ「了解しました」と呟いて高槻に背を向ける。
『勝機は、高槻を倒す勝機はなくなりましたか』
けれど、と葉子は頭を振る。
『晴香さんに……郁未さんの友人が取り返しのない罪を犯すことはとめられるかもしれません。絶望するのはまだ早いです。未だ、好機はあるのですから』

264　ジョーカー・ジョーカー

「こ、この声は!?」
再び秋子の助言で聞いた建物を求め歩いていた弥生は、森の中で出会った女——杜若きよみ——の声に気が付いた。
弥生は放送が終えるまで、と立ち止まる。
そして、それが終わるまで耳をそばだてて聞いた。
放送は、むなしい爆発音と共に終わりを告げることになった。

……おそらく、きよみの信念は美しいのだろう、と弥生は思った。
しかし、理解できたのは、愛しい人たちに殺し合って欲しくない、死んで欲しくないという部分だけだ。
確かに他の方法もあるかもしれない。しかし、それが見つかる前に大切な人間を失ってしまったら、どうするのだろうか。
それに、弥生が脱出プランの一つに数えていたものは、どうやら使えそうになかった。
(やはり、というべきなのでしょうか。腹部の爆弾というのはブラフではなかったようですね)
きよみが別の爆発物で殺された可能性も無いわけではなかったが、あまりにもタイミングが良すぎる。
やはり、現在のところ判明している脱出手段は、殺して、殺し合って、殺し合い抜いて、最後の一人になることのみ、ということになる。
主催者達を何とかやり込め、脱出の活路を求める、というプランは体内に爆弾を抱えた状態では実現不可能だった。
(何とか、何とか助かる方法を見つけなくてはならない。既にあの人——緒方英二——は逝ってしまった。次が由綺さんと藤井さん達にならないとは限らない。或いは、もう……)
頭(かぶり)を振って弥生は歩き出す。
とにかく、まずは二人に出会うことだ。その為にも、助言の建物に……。
「どなたです!?」
再び歩き出して間もなく、背後に気配を感じた弥生は散弾銃を構えて向き直った。
「おー、怖い怖い。撃たないで下さいよぉ?」
のんきな声を挙げて出てきたのは黒服の男、一人。
「あなたは?」
「一、ゲームの参加者ではありません。二、むしろ私は主催者側の人間です」
そこで、弥生は男に向けた散弾銃を強く握り直し

た。
男は意に介さず言葉を続けた。
「三、大切な人を守りたくて守りたくて仕方のない貴方に、御提案があります」
「!?」
男はにやりと笑う。
「おや、表情が変わりましたね？　ビスクドールのようだとか、中にはくすだえりこが入っているに違いないと言われた貴方が、温度を感じさせないとまで言われた篠塚弥生その人が、他人のことで表情をそこまで変えられるとは……。情報は確かなようです」
男は満足げに頷く。
「くっ」
「そんなにあの二人が大切ですか？　大切なんでしょうねぇ。自分の命を犠牲にしてでも守りたい。イヤ、感服しました。そんな貴方には非常に魅力的なお話だと思いますよ、ハハ……」
男は散弾銃を突きつけられているにもかかわらず、笑いながら続ける。
「貴方にはジョーカーになっていただきたいのです」
弥生は男の意図することが分からず、首を軽くかしげて続きを促した。
男は、『よろしい』とばかりに頷き、続きを口にし始める。
「ジョーカー……つまり、このゲームの参加者でありながら、むしろ我々に近い立場になって、ゲームの進行をスムースにしていただきたい。そういう特殊な役割を演じていただきたいのですよ。そうしていただければ……」
男はそこで言葉を切って、弥生の表情を確かめる。
弥生の瞳は未だ、その奥に訝しげな光をたたえているが、話には引き込まれたようだった。
「そうしていただければ、貴方の大切に思う二人が他の者に殺されることのないよう、対処して差し上

げましょう」
言い終えて男がニヤリとするのと、弥生がそれに指摘を加えるのは同時だった。
「それで、主催者のカードには何枚のジョーカーが入っているのですか？」
ぴく、と男は一瞬だけ表情を変えた。しかし、すぐにその顔に張り付いていた笑みを呼び戻す。
「なんのことですかな？」
「あと何人とそのような約束を交わしているのか、と聞いているのです」
再び銃口を向けられ、男は戯けてみせる。
「さすがはあの緒方プロを裏方から支えてきただけのことはありますな？」
「戯れ言は結構。この程度のことは多少人生を歩んでくれば誰にでも分かる道理です」
「ふむ、おだてにも乗らない……と。ふむ、噂通りのお方だ。しかし……」
男は値踏みするように弥生の体を、足下から首筋まで舐めるよう見つめた。
おお……と男はやや芝居がかった感嘆の声を挙げる。
「いやぁ、実物は映像で見るよりも数段素晴らしい。その豊満なボディーには不釣り合いなぐらいのクールなマスク。どうです？　無事に本土に帰られたなら、グラビアモデルとしてデビューされては？　っと、その怖いくらいの視線で、若者の心は釘付けですな」
弥生の圧力が込められた視線を受けてもまるで動じない黒服の男。果たして人間か。
「それでは、お話を戻しましょう。冷徹な、そして美貌の女ヒットマン……。フィクションではややありきたりの設定かもしれませんが、これが現実の話となれば、観客も大喜びでしょう。少しずつペースは上がってきていますが、ゲームはもっと刺激的でなくてはなりません。どうです？　ご理解、いただけましたでしょうか？」

弥生は迷っていた。この男が言うことの何処までが信じられるだろうかと。
(おそらく、私のような誘いを受けた者は何人かいるのだろう。しかし、誰が、どのくらいの人数が承諾したのか。それが問題だった。
さらに、この男の言うとおりにしたとき、約束が守られる可能性は?
純粋にゲームを加速させるためだけであるならば、守られる可能性もあるかもしれない。しかし、約束が守られなかったことで絶望する、そんな人間の表情を見ることまでが望まれているとしたら……)
弥生の思考を妨げるように、男がやや冷たく言い放つ。
「そうやって沈思黙考されるのも結構ですが、貴方様がご指摘なされたように今こうしている間にも、他のジョーカー達が行動を起こしているかもしれません。ご決断はお早めがよろしいかと思われますが?」
……弥生は答えを出さざるを得なかった。
(こうしている間にも由綺さんや藤井さんの身に危険が迫っているかもしれない。そして、あの二人は虫も殺せぬような温かな人間なのだ。私が惹かれたのはあの温かさと、その純粋さにこそ……。それだけは確かだった。二人を守る為であれば、私は修羅にでもなれる……)
「……それで。具体的にはどうすればよろしいのですか?」
「おお、お引き受け下さるのですねぇ。さすがは賢明なる弥生様。そうですねぇ、ざっと十人。そう、十人を殺していただければ、貴方とそのお二人には配慮をいたしましょう」
「十人……。私がそれを成し遂げるまでの間、お二人は?」
「そこまでは我々の知るところではありません。ですから、お早めに願いますよ?　全てが手遅れにならぬ内に」

弥生は舌打ちをする。
「では、十人を殺したときにはどうすればよろしいのです？」
「これを」
男は懐から、何かを差し出した。手に握り込める程度の大きさで、小さなスイッチがついている。男はそれを弥生に渡した。
「これは？」
弥生は今度は首をかしげたりなどせず、言葉で先を促した。
気が急いているのが自分でも分かっていた。
「これは発信器のような物です。十人目を殺した時点で、このスイッチをお押し下さい。すぐさま処置が行われるでしょう」
「最後にもう一つ。私は既に一人の少年を殺していますす。これはその十人に数えていただけるのでしょうか？」
男は顎に手を当てて焦らすように、口元には笑みを浮かべつつ考え込んだ。
弥生にとっては今や、一秒が一分、いや一時間にも匹敵する感覚だ。
無闇な質問で出発を遅らせることになるのなら、するのではなかったとさえ、思えてきた。
実時間で一分ほど、男は考えた上で答えを出した。
口元には笑みを浮かべつつ、結論を口にする。
「本来、その少年は貴方が自由意志で殺したものです」
断じられて、弥生は動揺した。
(そんなことで動揺していては、残りの十人は殺せない)
何とか心を落ち着かせようとする弥生を、男は楽しそうに見つめていた。
「しかし、我々はサービス精神が旺盛です。その少年を約束の十人の内に数えてさしあげましょう」
そこまで男が言ったところで、弥生は走り出した。
それ以上は待てなかった。

（早く！　一刻も早く！　あと九人の生け贄を捧げなくては！　二人が殺される前に！）

　疾駆する弥生。

（自分が由綺さんや藤井さん達と幸せな日常を送るというのは既にアンリアルだ。こうなった今、私が望むべきは、二人の意思を尊重した上で、由綺さんをトップアイドルにして差し上げることのみ。それ以上は望まない。

　その為に、これ以上何人殺そうと今更大きな違いはない。今までだって、多くの犠牲のもとに生きてきたはず。今回は、それがたまたま他人の命であるだけ。

　そしてもう、藤井さんと体を重ねることもない。どんなに綺麗にしようとしても、もはやことを成し遂げたあとでは殺意の抱影は消えないだろう。

　……由綺さんを幸せにする。

必ずや、二人の幸せな生活を守って見せる！）

　獲物を求めて、弥生は疾走する。

　二人が既に、幾人もの命をその手に掛けていようとは思いも寄らずに……。

265　折原を待ちながら

「それにしても折原のヤツ遅いわね……私達をほったらかして一体どこまで行ってんのよ、ホントにもう」

　七瀬留美は折原浩平の去っていった方を見ながらそう毒づいた。

「うん、そうだね……」

　長森瑞佳も自分の鞄を漁っていた手を止め心配そうに呟く。

「それで、瑞佳の支給品見つかったの？」

「あ、うん……これだと思うけど……」
そう言って瑞佳が鞄から取り出したのは一冊の分厚いファイルだった。
「何それ？」
瑞佳は覗き込んできた七瀬と一緒にそのファイルを開いてみた。
開いたファイルの左側にはナイフの写真、そして右側には羅列された文字。
『№001　スペツナズ・ナイフ』
「旧ソ連軍の使用していた発射式暗殺用ナイフ。鍔にあたる部分にあるスイッチを押すことで刀を前方に飛ばす事が出来る」
「え、これって……」
パラパラと他のページをめくってみる。
『№017　Colt M 1911』
「一般的にはコルトガバメントという呼ばれ方の方が有名。一九一一年に米軍に正式採用され米国政府が認証した、という意味でガバメント（Goverment＝政府）と呼ばれる……」
といった具合に左側のページには武器の写真、右側に解説及び使用方法などが書かれてるページが延々と続いている。
二人は理解した。
これは今回のゲームで配られた武器、及びアイテムのリストなのだと。
「うわ、何これロボットじゃない、きゃ白蛇って何なのよ！　あーあたしに当たらなくてよかったわ」
「あ、猫までいるんだ、私これがよかったなぁ」
「あ、ほら七瀬さんのタライもちゃんとあるよ」
「なになに……『№079　金盥』洗面や洗濯の時に使う平たくて丸い容器。上空から相手の頭上に落としたりして使用します。緊急時には頭に被ったり盾がわりに使うと効果的です……って、んなワケあるかー！」

266　（無題）

太陽は、高く頭の上にある。そろそろ正午か、それくらいの時間なのだろう。放送がかかったのは、そんな時間帯のことだった。聴神経をいちいち引っ掻き回すような、耳障りな高槻の声。どうしても耳を塞いでしまいたくなる。

だが、それはできない。どれだけ目を背けたくても、今ここで現実から目を逸らすことはできない。

そうして、また死者の名前が楽しそうに読み上げられる。

（緒方英二……？　ッ、澤倉先輩……！）

マナの表情が暗くなる。

緒方英二。由綺の所属する、緒方プロダクションの経営者。多くのアイドルを世に送り出してきた彼の名前は、ラジオで歌番組をよく聴くマナには由綺のデビュー前から聞き慣れたものだった。

そんな有名人がこの島で死んでいることにも驚いたが、それよりもむしろ美咲の死ははるかに衝撃的だった。『蛍ヶ崎学園の最後の良心』と皆から慕われていた美咲。マナも憧れ、尊敬していた。

――すごく、尊敬していた。

（限界……かもね）

この島のどこかに、英二を、そして美咲を殺した人間がいる。他にも、マナの知らないどこかの誰かを、やはり殺した人間がいる。

しかし一方、これまでに名前を呼ばれた死者のうち、誰かは従姉である由綺が殺したものであり――今の放送で呼ばれた人間の中に、もしかしたら由綺が、冬弥が殺した人がいるのかもしれない。

知り合いが人に殺され、知り合いが人を殺す。

若干十七歳の少女が受け止めるには、一連の出来事は余りにハードで、重すぎた。

（私が何かすれば、何をすればなにもかもがうまく

いくの……？　……セン、セイ）
心の中でさえ、頼れる人間は既に聖しかいなかった。
そして、聖はもういない。
「ぅあっ……！」
左足に激痛が走り、地面にへたり込んでしまう。
血の滲んだ包帯が解けかけていた。
だらしなく引き摺られ、薄汚れた包帯が、マナにはなんだか自分自身と重なって見えた。
「…………」
少し向こうで、人の足音がした。
マナは呆然とした表情のまま、ポケットの中のメスを握り締める。
話し声が近づいてきた。
「はぁ……わかったから、とにかく、その握った手を離してちょうだい」
「ダメだよぉ、はぐれちゃったら困るでしょ？
……あれ〜、誰かいるねぇ」
「ちょっ、そんな大声で……って……あなた、一体なにやってるわけ？」
瞬間の出来事だった。
マナは、現れた二人に向かって飛び出した。
その手に輝く銀色の刃物を認め、きよみは焦った声を上げた。
「なっ、なんで――」
それは彼女のミスだと言えた。一瞬の判断の遅れが、いざという時には生死を分ける。
だがどちらにせよ、きよみに避ける時間はなかった。マナは、その目の前に踏み込むと――両手できよみの手を包み込み、メスを握らせると、手は握ったままで、膝から崩れ落ちた。
不可解な展開の連続に、きよみはすっかり混乱していた。
「あ、あなた、どういう……」
「――さいよ」
「何？　聞こえないわ」

マナは視線を上げ、きよみの目を正面から見つめ、言った。
「殺しなさいよ。……殺してよ……」
きよみの足元にすがりつき、丸めた背中を震わせ、マナは泣いた。

267　幕間劇

島の南端、さびれた共同墓地の地下深く、潜水艦「ＥＬＰＯＤ」は故障のため、搬入用ドックに緊急停泊していた。
「ええい、復旧までどれくらいかかる？」
高槻の機嫌は悪い。
愛らしい少女たちが血の海の中で、のたうち悶えながら死んで行く光景を想像しながら自慰にふけっていた矢先（ちなみに今回のネタは神尾観鈴だ）の故障である。
「故障原因、現在調査中」
ＨＭ―13の事務的な回答が返ってくる。
「バカな、こいつは組織から与えられた最新鋭の潜水艦だぞ、通常航海でイカれるはずは無い！」
「故障原因不明。調査中」
再び機械的な回答。
「ええい、このガラクタが！　もういい！」
メイドロボのよこっ面を張り倒す……自分の手が痛くなっただけだった。
元来が小心者なためわずかなほころびでも我慢が出来ない。今こうしている間にも、奴らにここを発見される可能性が無いわけではない。俺はこんなところで終わる男じゃない。この任務を成功させれば、ＦＡＲＧＯでの発言力も増し、明るい未来が待っている。
だが……失敗すれば、光差さぬ実験室で死すら許されぬモルモットとして永遠を生きる運命が待っている。
ハハハ……何を焦っているんだ、たとえ発見され

ても、戦闘用にチューンアップされたこいつらが俺の盾になる。戦闘用って事であそこのしまりはイマイチだがな、ヒャハハハハ。
それでも止まらん奴はしかけた爆弾で、吹き飛ばしてしまえばそれでいいんだ。
コクピットのコンソールに備え付けられた起爆装置にほお擦りする。
が、起爆装置が勝手に起動していることに気がつく。
十六番……杜若きよみ！
「バカな、俺は命令を出していない！　こいつにはまだ利用価値がある！」
解除ボタンを力いっぱい押す、だが何の反応も示さない。
そのとき偶然か、高槻の胃がちくりと痛んだ。
まさか……俺の胃の中にも……？　そんなバカな。
ハッハハハハ……ハハハハハ……。
不安をかき消すように笑い続ける高槻の背後ではメイドロボたちの無表情な音声が途絶えることなく続いていた。
「故障原因未だ不明……調査続行中」
「了解、調査続行」

268　死者の残したもの

「——ばかみたい」
泣き続けるマナを冷ややかな目で見つめながら、きよみはつぶやいた。
「数時間前、私にケンカ売ったあなたはどこ行ったのよ。所詮はチビっ子だったということね。あーあ、ばかみたい」
マナは顔を上げた。
そして気付く。目の前の女の人が、数時間前出会った彼女だということに。
「何があったかなんて訊いてあげないわ。そんな必要もない。あなた言ったわよね？『どうしてそん

なことで殺さなきゃいけないの？』って？　私も同じよ。なんであなたに泣きつかれて殺さなきゃいけないの。どうせ今のあなたなんか、のたれ死にがオチね。どっかのキチガイに勝手に殺されるなり、好きにしなさい。自分の命を奪うも他人の命を奪うも同じことよ。それがわからないなんて、やっぱりあなたはチビっ子ね」
　どこまでも冷たく言い放ち、再び歩き出そうとする。
「うわっ、毒舌だよぉ」
　二人の間に立ち、おろおろする佳乃。
「……霧島先生……どうすればいいのよぉ……」
　涙混じりの声で呟く。
　返事は期待していなかった……が、その返事は返ってきた。
「え、お姉ちゃん？」
　佳乃が驚いたような声を上げる。
　その反応に今度はマナが驚き、気付けばきよみも立ち止まり、ことの成り行きを眺めていた。
「霧島……聖先生を……？」
　マナが問いかける。
「うん。お姉ちゃんは凄いんだよぉ。なんでも治せるお医者さんなんだぁ。なんと、トラクターも治しちゃうんだよぉ。私、お姉ちゃん、大好きなんだぁ」
　マナは、偶然というものに驚き、感謝した。
　だが、直後に沸き上がる疑問。
「あなた……お姉さんが死んだのに……悲しくないの？」
「……え？」
　佳乃の時間が、止まった。
「放送、聞いてなかった？　霧島先生は私の前で……私は足手纏いにしかならなかった」
　今でも鮮明に思い出せる。

血に染まった聖、その声、言葉。
早く逃げろと、マナを思って、最後までそればっかりだった。
そして口には出さなかったが、妹のことも最後まで思っていたはずだった。
その妹が、今、ここにいる。

「嘘だよぉ……。お姉ちゃんが、死ぬわけないよぉ。だって、お姉ちゃんだよ？　お姉ちゃんは、なんでも出来て、それで……それで……」
佳乃の笑い声が、次第に悲しみに彩られていく。
「現実よ……。先生、きっと最後まであなたのこと気にしてた。会いたがってたから、連れて行ってあげる。いい？」
動揺している佳乃に向かい、言った。
「嘘だよ……お姉ちゃんが、お姉ちゃんが……。そうだ！」
佳乃は自分の手首に巻かれていたバンダナを外す。
聖の施した枷。
それが、聖の死によって、解かれてしまった。
「これを外せば、魔法が使えるんだよぉ。お姉ちゃんが言ったんだ、お姉ちゃんとお母さんに、帰ってきてもらうんだぁ……」
わかっていた。
そんなものは、存在しないということを。
ずっと昔から、わかっていた。
叶わない願いだということを、もう知っていたのだ。

「うわぁぁぁぁぁっ‼」

佳乃は突然叫び声を上げ、傍に立っていたきよみの持っていたものに手を延ばした。
「⁉」
ふいをつかれたきよみは、その手にあった物を奪

われる。
それは――メスだ。
マナが持ち、きよみに持たせ。
大元は……霧島聖のもの。
「お姉ちゃん……っ！」
佳乃はそのまま自分の手首を切り裂こうとした。

カチャン……という音が響く。
メスが、地面に落ちた音。
きよみが寸前で、佳乃の持つメスを蹴り飛ばした。

「いい加減にしなさいよ、あんた達……」
気付けば、きよみは震えていた。
「あんたらにとっては大切な人なんでしょうけどね!?　そんなの、今はいなくなった人間に甘えてるだけじゃないの!!」
マナと佳乃は、ただ呆然と、叫ぶきよみを見つめていた。
「で、その人が最後に『生きて欲しい』と願っても、あんた達はそうやって死を選ぶわけね!!　大切な人とやらが最後に残した願いごとも、全部無駄にしちゃうんだ!!」
止まらない。言葉が止まらない。
ただ、自分勝手な彼女らが、許せなかった。
綺麗事ばかり唱えて、それでも結局は自分勝手な彼女達を、嫌悪していた。
「その人に同情するわ!!　大切に守っていきたかった人達が、よりにもよって自分の死なんかで死を選んじゃって。最後の願いすら叶わなかったわけ!!」
こんなに、こんなに自分の感情をぶちまけたことが、今まであっただろうか。
思い出せなかった――

「……あなたに、何がわかるのよっ!?」

呆然ときよみの言葉を聞いていたマナが、叫ぶ。
「こんな不条理なところで、大好きな人が殺されて！　大好きな人が変わっちゃって！　支えになってくれた人もいなくなって！　あなたに何がわかるのよっ！　弱くなることも許されないのっ!?　私にはっ!?」
マナは泣き叫んだ。
悔しかった。目の前の女が言ってることは、全部正しくて、事実だった。
「そんなの知らないし、関係ないわっ！　だから、死にたいなら、死になさい！　先生とやらに謝りながら、後悔しながら死になさい、チビっ子！
私は例え自分の存在がぐらつくことがあっても、強く生きるわ。あなたのような弱者を笑いながら、ね！」
きよみの言葉の一つ一つが、マナの心をえぐる。
もうこれ以上、聞いているのが辛かった。
まだ持っていたメスに手をのばす。

――先生。弱くて……ごめんなさい……――
誰かが手を掴んだ。
「……妹さん？」
佳乃は、ただ俯き、首をふっていた。
それでも、マナの手を離そうとはしなかった。
「あなたは、その子よりも弱いのよ。肉親を失った子でも、生きようと決めたのね。それでもあなたは、死ぬの？」
静かに、静かに、空気が流れる。
聞こえるのは、佳乃の泣き声。
とても痛々しく、それでも、生きることを決めた。
わずかに許された、弱さの声だった。

269　蒼天の雨

一歩。また一歩。前へ進む。

──その足取りは重い。
だが、深山雪見はそれでも歩みを止めない。
鈍痛に歯を食いしばって耐えながら、彼女は歩き続けた。
自分の道標を見失わないように。前へ、前へと。
──この身体が動くうちは。
左腕からはじわじわと血が滲む。
──みさきのために。澪ちゃんのために。
荒れた呼吸が収まらない。
──立ち止まるわけにはいかない。
鼓動は早鐘を撞くように乱れ続ける。
──でも、出来れば。
ふらつき、倒れて。また、立ち上がる。
──次が当たりでありますように。
そう願いながら、雪見はひたすら前へ進む。
──出来れば、早く終わりますように。
彼女を突き動かすのは、狂おしいほどの衝動。
──出来れば、早く終わらせてください。

「そんな怪我で、どこへ行くんだ？」
男の声がした。
雪見は立ち止まり、荒れた呼吸の中から搾り出すようにして答えた。
「……人を、探しているの」
「どんな奴だ？」
「長い黒髪の、おしとやかそうな女の子と、大きなリボンをつけた小柄で可愛い子。この二人を殺した奴を探しているの。……知らない？」
「知らないな」
男はあっさりと答える。
雪見は注意深くこの男の表情の変化を見極めようとしていたが、そこに動揺は見られなかった。
「……そう。じゃあ用はないわ。さっさと消えて」
また、違った。
雪見は落胆の色を隠せない。まだ終わらないのか。
またこの島を探しまわる羽目になるのか。
「こっちも、ひとつ聞いていいか？」

「さっさと消えて、と言ったでしょう」
雪見はおぼつかない手つきで銃を構えると、男に向けて二、三度引き鉄を引く。
「ちっ！」
素早く転がって、弾を避ける男。
「おい！　あんたは今みたいに、出会った奴を片っ端から襲ってきたのか⁉」
「関係ないでしょ。わたしは、二人を殺した奴を探さないといけないの。……邪魔をしないで」
うっとおしげに雪見は再度銃を構える。
「……そうはいかない」

銃声が響く。

その刹那、雪見は腹部が爆ぜたような感覚を味わい――そして、その場に倒れた。
「無秩序に人を襲うような奴を、放っておくわけにはいかない」

国崎往人はそう言うと、構えた銃を下ろした。

「くぅ……」
まだ……まだ、生きている。
もうだめだと思ったけど。まだ、生きている。
だったら行かないと。探さないと。
二人を殺した奴を殺しに行かないと。
血溜まりの中で足掻く雪見に、往人はゆっくりと歩み寄る。
「……苦しいんだったら、楽にしてやろうか？」
銃口を雪見の額に突き付け、無表情のまま往人は言った。
しばしの沈黙。
雪見は、目の前の銃口をただ無感動に眺め続け、それから震えた声でそっと呟いた。
「いい……みさきも、澪ちゃんも……きっと、楽に死ねなかったと思うから……」
「だから、あんたもその苦しみを共有するために、

痛みを甘んじて受けてやるってわけか」
「……うん。もう、わたしにはこれぐらいしか……出来なくなっちゃったみたいだから……ね」
その言葉を合図に、銃口が雪見の額から逸れる。
往人は一瞬、何とも言い難い表情で雪見を見た後、彼女の傍に腰を下ろしてこう言った。
「変なところで強情なんだな、あんた」
「……そうかもね」

雪見の荒れた息は、次第に力なくひゅうひゅうと掠れた吐息となって漏れるだけになる。
そんな様子を、往人は何をするでなくじっと見つめていた。
「……ねぇ。何で行かないの？」
「もう少し、ここにいることにする」
「自分で撃っておいて、まさか助けるつもり？」
「いや」
雪見の問い掛けに、往人は静かに首を振る。
「悪いが、俺に医学の知識は無い。知り合いに凄腕の医者はいたんだがな」
『いた』という表現。
――もしかしたら、自分が手にかけた者の中にその人がいたのかもしれない。
そんなことを、今更ながら思った。
「助けてくれないなら……何で、ここにいるの？」
「あんたがまた起きて、人を襲うと困る」
「……だったら、止めを刺せば良いじゃない」
往人は表情を変えずに、その問いにこう答えた。
「止めを刺して良いか聞いたら、断ったからな」
雪見はちょっと驚いた顔をして、それからふっと唇の端を歪めて微笑んだ表情を見せた。
「変なところで律義なのね、あなた」
「……そうかもな」

掠れた呼吸の中で、雪見はゆっくりと呟いた。
「……ねぇ。お願いがあるの」

「なんだ」
ぶっきらぼうに往人は聞く。
「わたし、夕焼けを見たいの。みさきが好きだった夕焼けを。でも……さっきから眠くて。お願い、何か話して気を紛らわして……くれないかしら」
しばし考えて、ぽりぽりと頭を掻く往人。
「……悪いが、話は苦手だ」
「そっか。じゃあ、一人でどこまで起きていられるか……頑張ってみようかな……」
「代わりに、こんなのはどうだ？」
往人はズボンのポケットから何やら取り出すと、雪見の前にそれを置く。
「……何？」
そしてこほん、と往人は一つ咳払いをし、前口上を述べた。
「──さあ、楽しい人形劇の始まりだ」

とことこ……ぱたん。
能力を制限された、往人の人形劇。
それは、いつものような華やかさは影を潜め、ただ起きあがって、歩いて、転ぶだけの。
──そんな、滑稽な代物だった。
「……つまんない」
雪見のその感想に、往人はがっかりした表情を見せたが、それでもその通りだな、と頷く。
「だが普段なら、もっと派手に動かせる。……本当だぞ？」
「そうじゃなくて……」
雪見はじっと人形を見つめ──涙を零した。
「みさきと澪ちゃんを殺した奴を探して……。誰か見つけたら、殺して……また、探して……その繰り返し。ほら、まるでこの人形みたい。わたし、つまんなかったんだね……」
「……」

泣きじゃくる雪見を、往人は無言で見つめる。
「なんで……なんでこんなに痛い思いしてまで……こんなつまんないこと……やらなきゃいけなかったんだろ……!?」

とことこ……とん。

「さあな」
と、往人は雪見の元へ人形を歩かせるとそのまま起立の格好で立ち止まらせる。
「だが、どんなにつまんないことだったとしても、せめて自分だけは意味があったと信じ込んでやれ。最後まで、嘘をつき通してやれ。……俺も、殺人を正当化する気はないが、自分がやっていることは間違っていないと信じている」
雪見はしばらく嗚咽を漏らしていたが、やがてゆっくり顔を上げると、往人に言った。
「……うん。そうする……よ」

「よし」

ふ……くるくる……とんっ……ととと、ぱたん。

雪見が小さく頷くのを見て、往人は人形をふわりと宙に舞わせてくるくると回し、見事に着地を決めさせようとして――転ぶ。
「ふふ……すごいね」
「特別サービスだ。普段ならきちんと着地を決められるんだがな。……本当だぞ？」
「ありがとう。……今の……澪ちゃんに、見せたかったなぁ……」
雪見が、微笑う。
その瞳からはゆっくりと色が失われていった。
「ねぇ……夕焼けは……まだ、かな……？」
「残念ながら、まだだな」
「……そっか」

――空は、まだ蒼く。

「ねぇ……お願いが……あるんだけど」
「なんだ？」
「みさきと澪ちゃん……この二人を殺した奴を……殺して……くれないかな……？」
「……考えておく」
「……ありがと」
――それは、嘘だとわかっているけど。

「ねぇ……」
「……」
――それでも、よかった。

往人は、人形をしまうと立ち上がる。
人の想いを抱えこむのは――やはり、つらい。
そう思いながら、往人は涙をそっとぬぐった。

矛盾した行動。
人が死なないようにするために、人を殺す。
自分で殺して、その死を悲しむ。
狂っているこの島で。
――果たして俺は最後まで、正しい行動を取っていると信じ続けられるのだろうか？

蒼天に降る雨の上がりは余韻を残さぬほどに早く、そして、悲しみを帯びていた。

九十六番　深山雪見　死亡
【残り56人】

270

空白のなか

「ねえ……ねえってば……ああ、もうっ！」
柏木梓と月宮あゆが御堂から別れた後、梓たちはその場から一歩も移動していなかった。いや、出来

なかったというべきか。
その原因は御堂と別れた後に聞こえた放送。
その放送は高槻ではなく若い女性のもので、内容も普段の死亡者報告ではなく、休戦、そして皆で力を合わせて助かろうというものだった。
そしてその放送をした女性は……死んだ。
おそらくは主催者側の手によって殺されたのだろう。
彼女の持っていた拡声器（梓はそう判断した）はその一部始終を生々しく伝え、そのせいであゆは恐怖におびえ、その場で震えることしか出来なくなっていた。
それから数時間、梓がどう説得しようとも、あゆはまったく動こうとしなかった。
（しばらくは駄目か。そりゃそうだ、あたしだって……）
頭の中に浮かぶ情景。それを梓は頭を振って払いのける。
「ふぅ……仕方ない、しばらくここにいるしかないか。でもこんなとこを誰かに襲われでもしたら……」
大ピンチだろう。自分はともかくこの子が危ない。そしてこの子を見捨てることは出来ない。梓はそう判断していた。
「誰にも出会わないことを願うしかない……か」
ため息と共につぶやく。
しかし、世の中とはそううまく行くものではない。こういう場合は特に。
目の前から人の気配を感じた梓は身構えた後、横にいるあゆを気にした。
（どうしよう……この子……守りきれる？）
相手が一人ならともかく複数だと無理だ。ともかく敵でないことを願いつつ、梓はあゆにバッグの中から取り出した服をかぶせた。
「聞いてるかどうか知らないけど、一つ言っておくから。あたしはあんたを見捨てたりしない。絶対に

ね」
そして目の前の木の陰から姿をあらわしたのは……
「千鶴姉！」
側から見ると満身創痍の柏木千鶴だった。

271　落下性

――柏木初音は、長い長い、ひどく嫌な夢から、漸く覚めた。どんな夢だったか思い出そうとして、ぶるぶる身体が震える。恐い、恐い夢だった。それは落ちていく夢だった。暗い闇の底に落ちてゆく夢。
だが今は夢のことを考えてはいられない。初音は身体を起こし、小さな握り拳を作ってみる。それなりの拳が作れたことから自分に多少なり体力が戻った事を確認する。幾度か瞬きをして、ぼやけた視界の中、壁に掛かった時計の数字を見る。黒い針は既に十二時半を回っている。ベッドから出て小さく深呼吸をする。――三時間ばかりの睡眠でここまで体力が戻ったのは僥倖と言える。というのは、生理が始まっていたからである。自分は人より幾分と「重い」方らしいからだ。しかもこんな緊迫した状況に置かれ、自分の疲労は増大した。倒れ込みそうになるほど重い痛みは初めてだったのだ。
しかし結局、自分の為に何時間も彰を待たせてしまった。ずっと迷惑を掛け通しで心底に申し訳ない。好きな人を探す時間を奪い取ってしまったのだ、自分がいなければ、もしかしたら今頃その恋人――澤倉美咲と会えていたのかもしれないのに。
ともかく、自分がこうして無事だという事は、この数時間の間は誰かの来訪がなかったと云う事だろう。彰は今家の中の何処かにいるのか、それとも町を散策しているのか。
「彰お兄ちゃん？」
返事がない。家の中にはどうやらいないようだ。
一歩足を踏み出してみると軽い眩暈がしたが、そ

れでも充分、歩けるくらいまでは力が戻っていた。
初音はまずトイレに向かい身支度を調える。それを終えてもまだ彰は戻ってこない。ここで待っていた方が安全だと理性は告げていたが、初音は本能的な直感に従って彰を探しに家を出ることにした。
「彰お兄ちゃんは、美咲さんを捜しに行ってしまったのかな……？」
元々彰には初音に付き合う義理はない。所詮出会って数時間かしか経っていないくらいの浅い関係でしかない。姉たちと再会したら、別れることになるのだ。自分と彰の関係は蜘蛛の糸よりも脆弱だ。彰は優しいから自分などに構っていてくれるが、本来なら自分が彰に絶縁状を叩き付け、彰の枷を外してやるべきなのだ。自分に構っていたら彼の目的は達成できないかもしれないだろう。
なのに、初音の脳髄が命じるのは、早く彰を捜せ、というものだった。もし今彰に置いて行かれたら、自分は生きてこの島から帰れない。脳髄はそんな訳の解らないことを言う。
足を引きずりながら初音は家の外をぐるりと回り、彰を捜す。しかし道路に出て見渡す限り、少なくともこの辺りにはいないようだった。初音は注意深い歩行で商店街の方に出る。そこにも彰の姿はない。何処に行ってしまったんだろう。ふと見上げると灰色の空だった。まるで落ちてきそうな灰色だ。先の夢を思い出し、夏だと言うのに鳥肌が立つ。初音は己の身体を抱きながら歩き回る。
まるで人影がない。彰の姿もなく、あるのはぼんやりとした自分の影だけだ。曇りの日にありがちな、あるのかないのか解らない灰色の影が初音の後ろについて回る。死ぬまで一緒、死んでからもずっと一緒の存在である影以外には今、初音の回りには誰もいない。——圧倒的な孤独だった。
気付くと動悸が乱れている。それは単に体調が悪いから、という理由だけではないと思う。
——実は現在、自分は死の危険が然程大きくない。

自分は今、多分他のどの参加者が持っている武器よりも強力な兵器を持っている。自分に他人が殺せるとは思えないが、それでも威嚇になる武器を。あくまで、装備的な面では不安はないのだ。
　なのに焦燥は、まるで消えない。初音は孤独の風に侵される。
　——この武器を見てなお、自分を殺そうと襲い掛かってくる相手に、自分はどうしたらいいか。
　焦躁の根源は結局こんなところなのだろうか。狂気に陥った誰かがナイフを持って拳銃を持ってサブマシンガンを持って襲いかかってきたとして、決して止まらない相手に自分はこの武器を放つことが出来るのか。相手が死ぬと解っていても、自分は他人にこれを放てるのだろうか。無理に決まっている。たとえ目の前に姉を殺した人間が現れても、自分はこのレーザー兵器を殺人鬼に向けることさえ出来ないかも知れない。自分には圧倒的に覚悟の絶対値が足りない。人を殺せるかの問題だけではない、生への意志までが他の人に比べて欠けているとまで感じる。生き残りたい、だけでは駄目なのだ。生き残る、と決意しなければならない、
　声がする。
　何処かで聞いたような声だった。ずきり、と頭が割れるような痛みが走る。初音を脳髄の海の暗い暗い深くに引きずり込もうとする痛みがする。足が強く引っ張られる感覚、身体を縛られる痛みに堪えられず初音は座り込む、
　じろうえもん、
　そんな名前が深くで呼ばれたような気がする。痛みが増し、しかしその痛みが全身に広がるにつれて、快楽に似た享楽が初音の身体を支配する。気持ちが良い、と確かに初音は思う。まるで自分が強くなったような錯覚がする、
　わたしは、還るんだ。
　還りたいというイメージが初音の頭に痛みを伴っ

て焼き付く。初音は今の自分なら泳いで海を渡れるかもしれないとも思う。しかし考えてみて、この腹の中にある爆弾をどうにかしなければまず脱出なんて不可能だと気づく、

じろうえもん。じろうえもん。

名前だ。それは誰かの名前。遠い昔に知っていた筈の名前だ。初音の身体が俄かに熱を帯びる。それは先ほどまでの苦しみを伴う熱ではなく、興奮した動物が決まって持つアドレナリンが与える活力だ、初音は昂揚していく、

——記憶の羊水が、初音の脳髄から溢れ出す。

「じろうえもん、」

声になる。初音は、少し高いところから自分自身を見下ろしているような気持ちでそう口にする。

ひどく、帰りたいと思う。今ほど狂おしく帰りたいという思いは、この島に来て以来感じたことがない。ただ泣き喚いて帰りたいと嘆くだけだったさっきまでとはまるで違う、確固たる意思がある。多分今ならば、目の前に決して止まらない殺人鬼が現れたとき、自分はこの大砲で撃ち抜けると思う。

わたしには、まっているひとがいるのだ。

そのまどろんだ思考を邪魔する、がさり、という、何か脆いものを踏んだような音が遠くでする。初音は瞬時に現実に引き戻され、ゆっくりとした調子で振り向き、中華キャノンを強く握り締める。

——遠くに七瀬彰がこちらに歩いてくる姿が見えた。初音は息を吐き、キャノンを握り締めていた手を緩める。座り込んだまま、迷うことなく中華キャノンを握り締めていた自分に気づき、冷たい驚きで胸を焼かれる。

凛。

そんな、鈴の音が響く。何処から？

「彰お兄ちゃん、」

出発しよう、わたしは大丈夫だから。そんな風に言おうと思ったのだ。しかし名前を呼ぶのが限界だ

った。初音が意味を紡げなかったのは、
近付いてくる彰の様子が「違っていた」からだ。
あれは七瀬彰なのか、と初音は半ば真剣に思う。
まだ数十時間しか付き合いがないから彰の本当のサガがどのようなものかなど判断のしようがない、
けれど、それでも、「あんな風」ではない筈だ。
今まで見てきた七瀬彰という人格のすべてを否定しても構わないような、そんな貌をして彰はこちらにやって来る。
この人は、こんな眼が出来る人だったのか、
初音は動けない。気づくと彰は傍に立っている。
「初音ちゃん」
自分の上からそんな声がする。声の質は先となんら変わらない。違うのはその調子だ。平坦な、感情という感情を殺し切った、いや、
殺され切った声の調子で、彰は言う。
「もう大丈夫みたいだね。行こう、早く。君のお姉ちゃんを見つけに行こう」
彰はまっすぐ手を伸ばしてくる。初音は恐る恐る手を伸ばして、彰の手を握る。彰は強く握り返す。
彰は歩き出す。右手には自分の分と初音の分、二人分の荷物を抱え、左手は初音の手を握り締めて。
初音は当惑しながらも彰の歩みに付いていく。左手には中華キャノン、右手は彰の手を握り締めて。
——自分の手を牽いて、彰は森の中を突き進む。
今、自分の前を歩く七瀬彰というその青年の心の深奥には、今まで自分が見た事がないような闇が眠っていると初音は感じる。初音はおぼろげな思考で、
果たして何が起こったのかを想像しながら歩く。これほどまでに彰を変えるようなこと、
まさか、——
初音は、答えを彰に尋ねることは出来なかった。
ぐんぐん町を離れ、暗い闇の中、武器のひとつも握り締めずに彰は歩き続ける。誰かと交叉する瞬間を待ちわびているように。
——そして、意外にあっさりと、自分は大切な人

に再会できたのである。

――さて。目の前で水浴びしている美女が天沢郁未であると解った以上、こうして隠れているわけにはいかない。折原浩平は至極混乱した頭で悩んだが、結局潔く姿を現すことにした。

「こんちは」

などと言ってみる。しかし言ってはみたものの、こっちは下半身を痛いほど硬直させているし、あちらさんはあちらさんで裸なので、明らかにまともな話し合いになりそうになかった。

「あ、あんた……」

こっちは話し合いをやる気満点なのだ。使命を果たすためにこうして、恥を忍びながらも堂々と姿を現したのだ。なのに天沢郁未はまるでこちらの話を聞こうとしないし、挨拶すら返してくれない。

「きゃーきゃーいやーっ!!　覗き魔ーッ変態ー!!」

「くっ……この変態めっ!!」

横ではスカート穿いた変態が人を変態呼ばわりする。なんてこった。変態に変態呼ばわりされるほどオレは変態だったのか。だが、自分も少しは変態かも知れないが、しかし真性の変態にヘンタイ扱いされるのは我慢ならない。てめえの方が変態じゃねえか。しかしそんなこと言ったら本気で殺される気がする。なんたってマッチョだ、オレなんて一撃の下に首をへし折られる予感がする。

「ま、待てっ!　話を聞いてくれっ!」

浩平は大声を出す。大声を出すと少しすっきりした。落ち着いた頭で必死に弁明するが、しかし先方が駄目だ。まったく冷静になってくれない。顔を真っ赤にして怒り狂う少女と女装マッチョはまるで話を聞いてくれない。

「の、覗いたのは悪かった!　マジで謝る、とにかく話を聞いてくれっ!　あんた、天沢郁未さんだろ」

そう言うとやっと静かになる。水に浸かって顔だけを出しているその少女は二度瞬きをして、
「何で知ってるの？」
と声を上げた。

五分ほど待っていると、お待たせしました、という柔らかな声が聞こえた。ううむ。金切り声をあげてる時には気付かなかったがなかなか良い声だ。茂みを覗くと、天沢郁未はちゃんと服を着て、って着てねえっ!! 何なんだそれ!! オレを誘惑しているのかッ、下だけブルマってッ!!
その鼻を伸ばした変態の視線に気付いたのか、
「すけべっ」
そんなこと言われてもどうすればいいんだ。不可抗力じゃないか。浩平は小さく溜息を吐きながらそう思う。マッチョの青年も同じように溜息を吐き、
「郁未ちゃん、やっぱり返そうか、スカート」
あのスカートは天沢郁未のものらしい。

「——本気で言ってるんなら、ばーかっって返すわ、耕一さん。下、何も穿いてないくせに」
「う」
穿いてねえのかよ。
郁未はこほん、と咳払いをする。
「それじゃあ本題に入るわ。あなた、どうしてわたしの名前を知ってるの？」
郁未の至極当然の疑問に、浩平も同じような調子でこほん、と咳をして答える。
「あんたの知り合いに会ったんだ。鹿沼葉子さん、っていう美人だ。伝言も預かってる」
郁未は大きな目をさらに丸くする。驚くほどに狼狽した調子で郁未は浩平に詰め寄る。
「葉子さんが!? 葉子さんに会ったの？ 何処で？ いつ？ ホントに？ 何で？」
「ああ待って。取り敢えず伝言言うから聞いてくれ。——鹿沼葉子が、高槻を殺しにいきます、だそうだ」

声が消える。少女は唖然として浩平の顔を眺める。本当に信頼できる話なのかを考えている。信頼できる、という結論はすぐに下されるだろう。彼女以外には情報とも呼べない情報を自分がわざわざ危険を犯して伝える道理などないのだから。
「……葉子さん、が？　本当に、」
そう呟いたかと思うと、彼女は突然立ち上がる。
「葉子さんっ」
立ち上がり、あらぬ方向へと駆けていこうとする郁未の腕を、しかし裸マッチョが掴む。
「待って郁未ちゃん、俺にも事情を説明してくれ。今まで一緒にいた縁だろ、郁未ちゃん？」
郁未はその力に抵抗できず、再び膝を付く。

葉子さんとは結構前に会ったんだ、と、目の前の少年——折原浩平は言った。
「あ、あの、葉子さん、高槻を殺しに行く、ってこと以外に何か言ってた？」
おずおずと訊ねる郁未に、浩平は軽く頷く。草むらに手を突いて、小さく息を吐き、再び話し出す。
「このゲームを仕組んだ黒幕について言ってたよ。確か——そう、この殺し合いは絶対にＦＡＲＧＯが仕組んだものじゃないとかなんとか言ってたな。それ以外の何か大きな組織が関係してるって。それに、この島へのミサイル発射に関する事は全部嘘じゃないか、とか、結界を破ればこのゲームがお終いになるだろう、とか。まあ大体そんなとこかな」
言い終えると郁未は唾を飲み込んだ。耕一は自分なりに浩平の話を解釈する。「結界」の存在は確かに自分も感じている。自分の中の鬼の血が殆ど全て制限されているのも、結界のせいなのだろう。ミサイル発射はどうだろうか。鹿沼葉子の第一の説、「主犯はＦＡＲＧＯじゃない説」が正しいのなら、あの高槻と言う男は重要な地位にはいない筈だ。だとしたらミサイルの仮説も正しいのかも。
「そう、……そうよね、ＦＡＲＧＯが主犯の訳がな

いわよね。それならあいつだって……」
　郁未は郁未で訳の判らない事を呟いている。混乱している彼女に聞くのは少し無理そうだと判断した耕一は溜息を一つ吐いて、浩平に解らなかった事を尋ねる。
「ところで浩平君よ、その葉子さんとやらはどうやって高槻と戦うつもりなんだ？　その姿形とかは明瞭に解らないけれど、結界が俺たちの力を抑制しているって事だけは解った。その葉子さんって人も例外じゃあるまい。マシンガン一丁くらい持ってたとしても、警備を乗り切る事が出来るんだろうか？」
　その言葉を聞くと、浩平もまたおかしな顔で唸る。細い腕で腕組みし、ゆっくり呟く。
「……それが、槍一本で行っちゃったんだ、葉子さん。あんなんで乗り切れる筈がないんだけどな」
　郁未は、――葉子さん、とか、はあ、とか言う呆れとも感嘆ともつかぬ溜息を吐くばかりだったが、耕一は、浩平のその言葉に確かな違和感を覚えている。喉に魚の骨が引っかかっているような感覚、考えろ、この違和感の正体は何だ、待て、そうか、
「あのさっ、郁未ちゃんっ、」
　耕一が思いつきの言葉を口にしかけた瞬間、郁未は突如立ち上がってその声を遮る。
「わたしも行く！　葉子さんに無理はさせられない」
「ちょ、ちょっと待って、」
　耕一の止める声も聞かず、彼女は森の中に入って行ってしまう。っていうかそっちには何もないぞ、と耕一が大声で叫ぶと、心配しないで、すぐ戻るから、という軽い返事が返ってくる。すぐ、とはどれくらいなのだ。呆然としたまま隣に座っている折原浩平に目を遣る。浩平も首を傾げる。
　数分後、郁未が長い木の枝を持って現れたのが耕一の目に入る。郁未の身の丈の四分の三もありそうな、枝というよりは木の槍と呼ぶべき長さの武器だった。だが、所詮は木の枝でしかなく、拳銃なんか

には当たり前だが勝てないだろう。
「そ、それは無茶じゃないか？」
浩平が呆れた顔で言う。信じられない、とでも言いたげに。
「槍も木の枝も一緒だと思うけど」
と、郁未は不敵な笑みを見せて言う。何故この娘はこんなに自信満々なのだろう。腕をぐるぐると回し、足を軽く動かし、拳を握り締め、瞬きをして、小さく頷くと、郁未はにこりと笑う。
「うん……——それじゃあわたし、行きますね。何処に敵の本拠地があるかも判らないけど、なんとかこのゲームをぶちこわしてやるから」
郁未ちゃんっ、と耕一はもう一度声を掛けるが、郁未はその言葉の意味を勘違いしたようで、
「耕一さんは今は調子が悪いんだから無理はしなくて良いです。今は、わたしの方が、多分強いです」
瞳には氷のような決意があり、恐ろしさがあったけれど、耕一はそれに脅えるほど馬鹿ではない。
「違うんだ！　話を聞いてくれ、郁未ちゃんッ」
もう一度郁未の腕をつかむ。逃がしてはならない。座れ、俺の話を聞け。耕一は男の力で郁未を抑えつける。郁未はその懸命な表情に気圧され、
「——なに、耕一さん」
一つ唾を飲み込んで、三度膝を付く。

浩平も、実は同種の違和感を覚えていたのかも知れない。得体の知れない、闇の中で踏んだ猫のように奇妙な物体の感触を。耕一が話し出した内容を聞いて、その違和感の正体を浩平は漸く理解した。
「その、葉子さんが出発してから十時間くらい経っているんだろう？　……不思議じゃないか？　例えば、その葉子さんが高槻を殺したのなら、どうしてゲームはまだ終わっていないんだろう？　高槻を殺したなら、葉子さんは、放送機材を使って、爆弾は解除された、戦闘は終わったと放送するだろう。無駄な殺しなんてこれ以上しなくていいように、戦闘

に勝利したなら出来る限り迅速に。しかし、そんな放送は流れてない。つまり、葉子さんは襲撃に失敗した事になる。槍一本で突っ込むという事情からして、まあ当然なのかもしれないが。
だが、ならば、何で放送されない？　彼女の死亡放送が。鹿沼葉子、死亡っていう放送が。さっき何度目かの放送が流れたが、その時にも彼女の死を告げるメッセージはなかった」
そうだ、そこなのだ。浩平もまたそこに違和感を覚えていたのだ。――先ほど、氷上シュンが死んだという放送を聞いて衝撃を受けていた自分を思い出す。もし郁未にとって葉子さんが重要な人なら、その放送を聞き逃す事など無いはずだ。
郁未が目を見開いて耕一を見たのは、それが、――何かの確信に繋がったからだろうか。
郁未はへたり込んで、ごくりと唾を飲み込んだ。
郁未と耕一の脳裏には一つの仮定が浮かんでいる。
自分たちが数時間前に遭遇した敵、そして、そこから得た、「そういうもの」が存在し得るのだという知識。そして、この企画に携わっているＦＡＲＧＯの存在。違うのかもしれない。葉子はただ高槻に捕まっているだけで、違う、反逆した人間は常に殺される。葉子さんは戦うと公言しただけで逃げた、そんなの考えられない。葉子さんはそういうことを公言したときに逃げる人じゃないと思う、いや、解らない、もしかしたら逃げたのかも、でも逃げてどうするの？　この島の中、重点的に狙われる中、逃げ回っているの？　それも違うと思う、葉子さんは一番効率のよい方法を選ぶ筈だ、高槻を殺すのが一番効率のよい方法の筈だ、――本当にそう？
「まさか、――」
「……そういう事になるのかも、知れない」
浩平には二人の会話がまるで解らない。仕方があるまい、浩平は「そういうもの」が存在し得るということを知らないのだから。だが、残念なことに折

原浩平が知らないだけで、ジョーカーはいる。
この殺人ゲームを終わらせるために全員を殺して生き残ろうと考える人間は、実は少ない。協力して逃げ出そうとしたり、殺されることに脅えながら震えていたりする娘の方がずっと多いのだ。だから、ゲームの運営を迅速なものにするために、主催者側の情報と、勝ち抜き後の報酬という約束を握らせ、殺人マシーンになる事を了承させる。
ジョーカー。キリングマシーン。何でも構わない。そんな存在があるのは知っていた。郁未と耕一は実際に出会っている、マーダーと化した郁未の母に。
だが、どうして葉子が。郁未にはまだ信じられない。葉子さんは人殺しなんてできる人間じゃない。だが、本能が悲鳴を上げる。郁未の理性に高い熱量で訴えかけえる。考えてみなさいよ、葉子さんも高槻も死んでいないし、参加者の人数は半数近くに減っている、彼女はジョーカーなのかも、
郁未の理性は必死に抵抗する。もう崩れかかった牙城を必死に守る。叫び声となって理性が泣く。
耕一が説明すると、浩平の表情がみるみる歪む。彼もまた、不吉な気持ちに犯された顔をした。
「嘘よ！　葉子さんがそんな、そんな、」
一方で郁未は叫び声をあげる。郁未は立ち上がり再び駆け出そうとしたが、三度耕一の腕に阻まれる。
「何処へ行くんだ郁未ちゃん」
「葉子さんを捜す！　捜して問い質すの」
きっぱりとした、強い口調で郁未は言う。
強すぎる眼差しだった。――その細い腕の何処にそんな力があったというのだろう、郁未は耕一の腕を虫けらのようにはじき飛ばすと、森の中に駆けていってしまう。
そしてもう、二人の前には現れなかった。
「どう、しようか」
という、浩平の呆然とした声を聞く。
失策だった。彼女に一般人より強い身体能力があ

るとはいえ、それでも女の子だ。木の枝だけで戦えるはずがない。しかし、追おうにも彼女は足が速く（そういえば陸上部だと言っていた）、疲れきったままの現在の自分ではとても追いつきようがない。考える。少し休んで、茂みの中で眠っている名倉由依と共に彼女を追うのが一番の策だろうか。
言葉にして決意を固める。
「少し休んだ後、郁未ちゃんを、追おうと思う。それしかないだろう」
浩平も同感だったのだろう、小さく頷く。そして何かが気になるような、そんな一瞬の迷いを見せる。耕一はそれを見て察し「君はどうする」と訊ねる。
「思うに、一人じゃないんだろう？」
十秒ほど逡巡した挙げ句、浩平は少し悩んだ顔をしながら返事をする、
「……オレは、取り敢えず連れの所に戻ります。近場ですから、少し待っていてくれますか。俺も一緒に郁未さん探します」
耕一は思う。この折原浩平は、待たせてる人がいて覗きをやっていたのか。ううむ、馬鹿だ。
「――どうでもいいすけど、そのスカートどうすんですか？　ていうかノーパンはまずくないですか？」
「んなこと言われてもなー……」
「んー……ちょっとした事情でオレは今ブルマを持ってるんですが、それでいいなら穿きますか？　そいつにはナイショで」
「――なんでそんなもん持ってんだ」
浩平は必死に言い訳をする。
「いや、実はこのデイパック、どうやら連れのものと間違えて持ってきたらしくて。何を血迷ったか体操服なんて持ってきてやがってて」
事実である。長森との抱擁のあと慌ててあの場を離れた自分は、拳銃とタライと己のデイパックを持

ってきていたつもりで、実は七瀬のものを持ってきてしまっていたのだ。興味のままに鞄の中を覗くと食料と水とコンパスと体操服一式。何であいつは体操服なんて持ってきていたのだろう。
　思う。鞄の中身は、ここに攫われてきた瞬間のまだったのかも知れない。自分の鞄の中に煙草が入っていたのも同じ理由なのかも。
　ともかく。
「体操服は襲撃にあって奪われた、ってことにでもしときますから。どうです？　何も穿かないよりマシでしょう？　つーか精神的にオレがきついです」
　耕一は半ば呆れかかって言う。
「――君なあ、守りたい女の子なんだろう、その女の子。いくらなんでもオレなんかにブルマ穿かせて、君は心が痛まないのか？」
「痛みますよ、痛みますけど。七瀬は困っている人がいたら迷うことなく服を脱いで分け与える星の金貨もびっくりの献身にあふれた女の子だから」
「――死っっっっっっっっっっっっっぬほど胡散臭い」
「あはは。まま、穿いといたほうがいいですよ。絶対バレませんし。そのままじゃ種枯れちゃいます」
　結局言い包められて耕一はブルマを穿いている。ううむ、多分に可愛らしい女の子なのだろう。その女の子が穿いていたブルマ。ううむちょびっと興奮しなくもないな。だがいけない。こんなことで興奮していたら千鶴さんや梓にずたぼろにされる。
　とにかく穿き終える。当然温いものは全くない。まあこれでハイキックをしてもなんとかやっていける。モザイクのかからない人生に幸あれだ。
「わはは、似合ってますよ耕一さん」
「うるさいなー……」
　そんな馬鹿げた瞬間に、それは訪れた。
　鈴が鳴ったような錯覚の元、何かが現れる。二人は瞬時に振り向き、気配の正体を探る。何が？

そこには、幼い少女と、恐らく耕一よりも少し年下と思われる青年が立っていた。耕一は言葉を失い、ゆっくりと身体から力が抜けていくのを実感する。
その少女は、自分が誰よりも愛しいと思っていた、守らなければならないと思っていた少女、柏木初音だった。少女もまた、目を丸くして立ち尽くしている。——何秒か解らない。僅かな時間が立って、喜びが二人の胸を支配する。
「初音ちゃん！」
耕一は歓声を上げ、駆け寄り、細い肩を抱く。
「お、お兄ちゃん、痛いよ……」
という初音の声を聞き、ようやく力を緩めたほど、耕一の力は強かった。仕方がないと思う。下手をしたらもう会えないかもしれないとも思っていたのだ。本当に良かった。
「良かった、初音ちゃん、元気で、」
後は、千鶴さん、梓、楓ちゃんの三人だ。彼女たちにも逢えるか。いや、必ず会うのだ。彼女たちを守り抜くために、全力で生き抜くのだ。自分が泣いているのが判った。頬を伝う涙が初音の頭に落ちる。
「良かった——」
そう言うと、初音も自分の胸の下でこくりと頷くのが判った。震えている。当然だ、強い不安にずっと脅かされていたのだから。だがこれで大丈夫。
「それじゃあ、僕は行きます。……耕一さん、その娘をちゃんと守ってやってください」
抱き合っていた自分たちに、青年の、凛、とした声が届く。見上げると、笑顔の一つも見せない暗い表情で自分たちを見ていた。
それで、耕一はすぐに理解する。今までこの青年が初音を守っていたのだ。
「ありがとう、今まで初音ちゃんを守っててくれて」
礼を言うと青年は首を振る。
「必ず守り抜いてあげてください。そんな娘が死ぬ

なんて、何があっても間違っていますから」
青年はそう言うと、少しだけ微笑った。
「――、彰お兄ちゃん、」
初音は耕一の腕の中振り返り、青年（彰というのだろう）、に不安げな目を寄せる。これまでずっと一緒に行動していた人と、こうして別れることになるのが寂しいのだろうか。
「初音ちゃん。……うん、また、逢えたら逢おうね」
「彰お兄ちゃんっ!!」
初音の呼び止める声も知らず、彰は初音の鞄を地面に置くと、そのまま走り去ってしまう。
耕一と浩平は、呆然として、その後ろ姿を見送る。
「彰お兄ちゃんが、わたしを守っててくれたんだ」
そう云う初音の声を聞いて、耕一は、先の青年が見せた眼に、ひどく不吉なものを感じる。
「だいじょぶ、またあの彰君とも会えるさ」
無責任な励ましの言葉を並べて、耕一は笑う。本心では、そんなことを微塵も信じていなくとも。
「で、郁未ちゃん追うのはどうするんです」
という浩平の冷静な声を聞き、耕一は慌てて、
「ここで待ってるから、連れの所に行ってきなよ」
と返事をした。言うと小さく頷いた浩平は、早足で駆けていく。自分と初音の様子を見て、自分にも守るべきものがあるのだと思い出したのだろう。彼の連れの七瀬さんってのが無事であるといいが。
しばらくしてから静寂が訪れる。それでも耕一は初音を離さないでいる。温もりを逃がさないように。
――ただ一人で、闇の中を駆ける青年がいる。息を枯らして、自分の脆弱さを呪いながら、それでも走り続ける青年がいる。小柄な体躯と少女のような可愛らしい童顔をした青年は、しかしもう二度と天使の笑顔を見せることはないのだと思う。そう思わざるを得ないほどに、彼のその黒目がちの大きな目

には、表現し切れないほど巨大で無数のどす黒い、人間が持ち得るあらゆる負の感情が宿っていた。その中でひときわ大きい感情が「後悔」だ。
　自分には行きずりの少女に構っている暇はなかった。か弱いか弱い見知らぬ他人を守っている暇など自分には一秒だってなかったのだ。狂おしいまでに自分は馬鹿だった。
　七瀬彰は無様で惨めなどん底に落とされた。もう這い上がれない深さの、狂い切った非日常の穴へ。
　——自分の名前を思い出せ、
　風の中で、青年の喉の辺りの粘性の高い塊が青年の耳元で質問の言葉を囁く。青年は勿論即答、
　七瀬彰。僕の名前は七瀬彰だ。このゲームの主催側であり管理側である、自分たちを殺し合いの渦の中に巻き込んだ、長瀬家の分家筋の末裔だ。
　だから、彰は走っている。
　鞄の中には、大きな袋が入っている。重くて重くて仕方がないけれど、これが自分の最強の切り札。
　うまくいくかは判らないが、しかしうまく使えば、自分の愛しい人を奪ったゲームを終わらせることが出来るのならば、自分は危険を犯して戦うべきだ。
　向かうべきは管理者のいるところ。
　美咲さんの為だけじゃない、すべての死んだ人のために、今自分は走っている。
　彼らを殺して全て終わらせる。その為の切り札だ。

272 ReStart

「んー、もう大丈夫やな」
　立ち上がる智子。
　撃たれた方の腕を激しく動かさなければ、我慢できない痛みではない。
「せや、マルチ、頼みがある」
「なんでしょうかー」
「あんたの持っとる拳銃、あかりに渡してくれんか？」

「いいですよ。でも、どうしてですか？」
「あんたには、コレを使こおて欲しいんや」
そう言って、六四式自動小銃を手渡す。
「……さすがにコレはもう撃てん。せやから、あんたに使こうて欲しい」
「……はい、分かりました。大切に使います」
それから、と智子は問う。
「どうやった？　例のサルベージいうんは」
「はい。サテライトシステムは使われていないようですが、本体内のメモリーに蓄積されていた情報の方はいくつか拾えましたー。武器・弾薬・爆発物のデータ。電気・電子・通信関連のデータ。それから車の運転技能。そして薬草・野鳥に関するデータ。サバイバルゲームのルールなんてのもありました。そして、船戸与一の著書のデータ。そして最後に『バトルロワイアル』のデータ。ただ、これについてきましてはコミックス三巻分のデータしかありませんでしたー」
「……あまり関係無いものもあるような」
「そーか。で、どうなん。あんたの鳥頭で、そんなぎょーさん覚えられるんか？」
あうー、と言う感じで頭を垂れる。
「その分、優先順位の低いデータを消去しますから大丈夫ですよー」
「そか。がんばって覚えなあかんで。あんたの友達の残してくれた、大切なデータやからな」
……友達の残してくれた、大切なデータ。
その言葉に、ついと真剣な眼差しを智子に向ける。
「はいっ！」
「じゃあ、マルチ。あんたにもう一つ頼みがある」
外に止めてあるジープ。それを窓から見つめる。
「車に積んである無線使こて、情報を集めて欲しいんや」
「はい。具体的にはどんな？」
「もちろん晴香のこと。それから高槻の動向。そして……藤田君が、今、何処におるか」

……その言葉に、休んでいたあかりが振り返る。
そのあかりに向けて言う。
「……そろそろ、その件にも決着をつけんとあかんやろ。もう半分近う死んどる。ぐずぐずしとったら、藤田君が、それか私達が殺られることになる」
「……うん」
あかりの返事にうなずき返しながら、付け加えた。
「それとマルチ。もう一人探して欲しい人がおる」
「どなたですか？」
「天沢郁未……晴香の親友や……」

273　折原を待ちながら　2

長森瑞佳に配布されたリストは、彼女自身が持つ『№100アイテムリスト』で締めくくられていた。
途中目を引いたもの以外はパラパラと流し読みしたので詳しいことは解らないが、大半は普通の銃器や刃物、そして何の役に立つのか解らないようないわゆるハズレの支給品ばかりだったが、注意するべきものもあった。
外見は普通のウォーターガンなのに中身は硫酸といったものや、六時にセットしてアラームが鳴ると爆発するという目覚まし時計、熊のぬいぐるみに仕込まれた小型特殊爆弾等、その外見からは想像できない危険なモノがあった。
同時に某ファミレスの制服型防弾チョッキとか(･∀･)仮面とかちょっとお間抜けなものもあったりもした。
この事が分かっただけでもそれなりの収穫かも知れない。銃器に関しては弾数や射程、威力といった細かな性能、それに使い方というか撃ち方まで明記されているみたいなので、今後何かの拍子に銃器を手に入れたならば自分や七瀬でもなんとか扱う事が出来るかも知れない。
勿論そんな時が来ないにこした事はないけれど。
そして、瑞佳にはもう一つ気になっているモノがあった。

「しかし……これだけ武器があるなら皆団結してこのゲームの主催者達と渡り合うのも可能なんじゃないかな。爆弾やら何やらまで結構あったわよね。あいつらのいる所なんてバーンと吹き飛ばしちゃえばいいのよ」
　瑞佳の横からリストを覗きこんでいた七瀬が物騒な事を言う。
「でも、始まってから時間が経ってるから今はもう残っていないのも多いんじゃないかな。何回か遠くで銃声や爆発音がした事もあったし……。それにあの高槻って人を殺すと核ミサイルが撃ち込まれるって。葉子さんは自分の力が解放されれば大丈夫って言ってたけどどうなったのかな……」
「う〜ん」
　そう言って七瀬は頭をかく。
「それより七瀬さん、これって何だと思う？」
　そう言って瑞佳が開いたページ左側には何の変哲もない普通のＣＤが一枚。右側に『№049　ＣＤ1/4』とあった。
「ちょっと待って瑞佳、あ、来た来た、やっと戻ってきたわよあのアホ」
　振り向くと瑞佳にも向こうから駆けてくる浩平の姿が見えた。

274　UNREAL

　あたしにとっての友達とは、出会った時からなんとなく脳内にビビッっと電波が走るっていうかー。ん、まあ、それもあたしの思い込みなんだけどね。こういう世界に身を置いてると、なんかドラマティックな展開にあこがれちゃうから、特にあたしみたいなコは。
　でも、そういうことってすごく大事だって思ってるんだ。

　本当は早く帰りたかった。

だけど、そこは絶海の孤島。ただ思うだけでは帰れるはずがなくて。
だから脱出口を探そうって切り出した。元々黙ってるのって性に合わないから。それは空元気だったのかもしれないけど。
『だったら、一緒にココを出ようね。約束だよ☆』
この島で出会った大切なお友達。
いきなりこんなところに連れて来られて、『殺し合い』。訳わかんなくなる。
だから、目の前にある現実だけを信じた。それがこのコ、柏木楓ちゃん。割とおとなしいコだけど、いつの間にか打ち解けていた。あたしの強い押しのせいかな？　こんなときだけはあたしの生来の明るい性格に感謝する。
そして、約束したんだ。一緒に帰ろう……って。ただの口約束だったけど、あたしは信じてた。これで一緒に帰れるんだって……帰ったら電話で今日のこと、そしてこれからのことを笑って。
そして一緒にこみパで騒いで。
——来ないで……千鶴姉さん
また……人を狩るの？
……昔みたいに
あのコの声が耳の奥で響く。
あのコのお姉さん、たしか千鶴って呼んでた。
あのコがいつも心で無事を祈っていた、女の人。
だけど、あのコのお姉さんとの、あのコが渇望して止まなかったはずの感動の再会は無かった。爪、血、涙。ただそんな光景が目の前に広がって。
昔こんなお話を本で書いたことがある。たしか大事な人を泣く泣く傷つけるってお話。ずいぶん前の話だから結構忘れちゃってるけど。男同士が、ひょんな事から互いを庇い合い、憎しみ合い、殺し合う。
それは愛する女性の為、そして友情の為。
それは本の中で、架空の世界だからこそできた綺

麗事の夢物語。
目の前での二人、それは架空の綺麗事なんかじゃなくて。
見ていてつらく――哀しい。
あたしを守ってくれるような騎士様なんかじゃない。そして放送があった。凛とした透き通る声の女性。
独白、そして爆発――
あたしはたぶん死ぬまでこのときの爆発を忘れない。そのコが最期を迎えたと思われる建物の側で、あたしは泣いた。黒こげた建物の屋上と、こびりついた大量の血の痕……。
あたしはやっと理解した。
あたしがここに来てから感じていたアンリアルは、全部嘘だったという事に。今は、楓ちゃんが怖い。そして途中から一緒に行動していた南さんが怖い。そして千堂クンが、この島にいるみんなが……怖い。
いつかあたしもこの島に住みついた狂気に飲まれてしまいそうだったから。

本当は、それでも信じなきゃいけなかったのかもしれないね。この島で、本当に出会えて良かったと思える柏木楓ちゃんを。

275　見つめたくない現在のこと

余りにも無残な現実を見せ付けられるのと、それが現実だと確認する事になる放送を聞いたのは、殆ど同時だった。
「……ま、こ……と」
僕達の探し人は、また、目の前で果てていた。
「……まこと……真琴！」
すでにタンパク質の塊と成り果てたモノを、天野さんは必死で揺さぶる。もう決して開かれる事の無い瞼が、開かれる事を信じて。
そんな天野さんを遠くから見ていることしか出来ない、僕。
激しい無力感と自己嫌悪が、僕を傷めつける。

なんで。
なんでなんでなんでなんでなんで、
僕はこんなにも弱いのだろうか。
ああ、天野さんが、泣いている。
遠くへと逝ってしまった、親友の為に。
そして、そんな彼女にかける言葉を持っていない
僕は、情けない存在で。
――あの時、僕が気づいてさえいれば……。

「真琴……」
返事を返すことの無い、躯に向かって美汐は囁き掛け続ける。これ以上この場所に居ても、何か得られるわけでもないと、分かっているのに。分かっているのに、美汐はこの場所から離れられなかった。
『あははははっ！　美汐、騙された〜』
そう言って、真琴が突然目を覚ますことなんて、無いと、心では理解しているのに。体が、動いてはくれない。この場を離れたくないと、悲鳴を上げていた。
真琴の頬を、そっと撫でる。
ひやり。
冷え切ったその頬に、美汐の涙が落ちた。
祐介は、そんな美汐の姿を、ただ見ていることしか出来なかった。何も出来ない自分が不甲斐無く、ぎゅっと唇を噛んだ。
赤い血が一滴、唇の端を伝い、落ちた。
そんな時。
「……天野」
第三者の、声。
それは、聞きなれた、懐かしい、声で。
「相沢さん……」
真琴の遺体を、木陰の目立たない場所に安置し、祐一が手向けの花を添えてやる。それだけが、この島で朽ちていった者に出来る、精一杯の葬式。
「……誰が真琴を……殺したんですか」
怒りを押し殺した声で、美汐が祐一に尋ねる。祐

一は俯いて……搾り出す様に、言った。
「……名雪だ」
その名前を聞き終わるや否や、美汐は立ちあがる。手には、きつく握ったデリンジャー。
「天野さん！」
祐介が美汐の前に飛び出し、道を塞ぐ。
「……どいて下さい」
祐介は、無言で首を振った。
「待ってくれ、天野」
代わりに言葉を発したのは、祐一。
「……いくら相沢さんの従姉妹だからといって、真琴を殺したことには変わりありません」
美汐は祐一とは目を合わせず、吐き捨てるように呟く。
「……違う、そうじゃない！　名雪は、悪くないんだ」
祐一が叫ぶ。その悲痛な声は、美汐を振りかえらせるのに充分事足りた。

そして、祐一は話す。
記憶を失った真琴に殺されかけたこと。
そんな祐一を守るために名雪が真琴を殺したこと。
そして、死の間際に真琴が記憶を取り戻してくれた事——
がくり、と肩を落とす。何もかもが分からない。
確かなのは、行き場のない憎悪と、絶望感や無力感だけ。
「私は……誰を憎めばいいのでしょうか」
誰にでもなく、美汐がぽつり、と呟いた。
祐一は答えない。否、答えられない。
誰を憎むか、と言えば、それは自分たちをこのゲームに参加させた人物たちだ。
だが、彼らは、距離の問題でなく、遥か遥か遠いところに居る。
怒りをぶつけられる場所には、居ないのだ。
祐介も、そんな場所に居る叔父達をあてもなく探すことに、疲れていたのかもしれない。

「……僕を憎めば、いい」
だから、長瀬祐介は、確かにそう言い放った。
答えを知っているから。
手軽な場所に居る、怒りをぶつけられる人物は、自分だと。
「……長瀬さん？」
美汐が不思議そうな表情で祐介の顔を覗きこむ。
「おい、何言ってんだ」
祐一が多少声を荒げ、祐介を睨むように見やる。
祐介は二人の視線を意にも介さず、自嘲じみた笑いを浮かべ、言った。
「……だから、僕を憎めばいい。僕がもしあの時気づいていれば、こんな事にはならなかったのかもしれないんだから……」
「どういう事だよ」
獣のような低い声で、祐一が唸るように言った。
美汐は何も言わない。
「……分かったよ。じゃあ、話そうか」
祐介は顔を上げ、二人のほうに向き直り、語り始めた。

276　変えられない過去のこと

「起立、気を付け、礼っ」
日直の号令が、今日の学校生活の終わりを告げる。
僕はひとつ伸びをすると、鞄を持って教室を後にした。
体育館の脇を通って、校門へ。
「ゆーくん、じゃあねー」
沙織ちゃんが体育館の入り口から元気に手を振っている。
彼女に悪気は無いのだろうが、往来の真ん中でのゆーくん呼びは正直恥ずかしい。
仕方ないな、と愛想笑いを浮かべ、手を振ると、満足気に沙織ちゃんは体育館の中へ消えていった。
そのとき、ふと体育館の裏のほうに歩き去ってゆ

く人の姿が目に入る。
（……あれ？　あれって……）
　間違いようも無い。叔父さんだ。
　部活の顧問を受け持っているわけでもない叔父さんが、なんで体育館裏に歩いて行くのか？
　花壇の手入れ……似合わない。
（なにやら犯罪の……いやいや、ミステリーの匂いがするな）
　つまらない事に首を突っ込むなと言う冷静な僕も、溢れ出る探求心の前では勝負にならず、僕はこっそりと叔父さんの後を尾行（つけ）ることにした。

　体育館裏の、ちょうど袋小路のような、三方を壁に囲まれた場所。そこに叔父さんは居た。
　気づかれないように隠れて、様子を見る。どうやら、電話をしているようだ。
　聞き耳を立てる。盗み聞きは悪事？　知ったこっちゃ無い。
「……ええ。順調ですよ。……ええ、ええ。こちらも候補者の目処はつきました。きっと思う存分……」
　場所が離れているので、断片的にしか聞こえず、会話の全貌が見えなくてもどかしい。
　そんなことを考えているうちに、叔父さんは電話を切って、こちらに歩いてくる。
「うわっ、やば」
　僕は慌ててその場所を離れる。叔父さんの言葉の意味も分からないままに。
　強いて言えば、
（なんかテレビアニメの悪役みたいな事言ってるなぁ……）
　この程度の感想しか持つことは無かった。
　あの時、僕が何か感づけていたならば、誰も悲しむ事は無かったかもしれない——

277　決まっていない未来のこと

「……と、いうわけ。僕が叔父さんの言葉に何か引っかかるものを感じていれば、誰も死なずに、誰も悲しまずに済んだんだ。だから……僕が悪い。僕を憎んでくれていいよ」
　俯きがちに、祐介は言った。非は、自分にあるのだと。
「おい」
　祐一が、祐介の肩に手を乗せる。
　祐介が顔を上げ、祐一の方を見やるよりも早く、祐一は祐介を、殴り飛ばしていた。
「が……ッ」
　ぼたぼたと血を吐きながら、祐介はむせ返る。
　四つん這いになった体勢から、顔だけ起こすと、その眼前には祐一が居た。
「お前な、何が『僕が悪い』だ？　お前一人で何とかなるような話じゃなかったんだよ、もともと。自惚れるのもいい加減にしろ！　それにな、お前が自分で悪いと思ってるなら、そうやって責任を放棄するような真似すんじゃねえ！　責任感じてるんなら、逃げてねえで、憎まれようが殺されかけようがちゃんと責任とれ！」
　一気に捲し立てた後、暫し息を荒げる祐一。
　その祐一の姿を唖然と見ていた祐介だったが、
「……ぷっ」
　気づいたときには、何故か笑っていた。
「……ったく、恥ずかしいこと言わせやがって」
　祐一は、照れたように空を見上げた。
　こんな場所でも、空は、青い。
　心のモヤモヤが、全部吹っ飛んだ気がして、
「ごめん……僕が間違ってた」
　その言葉を言う祐介の表情も、晴れやかだった。
「相沢さんも……人を、探しているんですね」

「ああ……ホントはもう会ったんだけどな、逃げられちまった」
そう言って、陰のある表情で祐一は笑う。
美汐もそんな祐一に微笑みかけ、
「頑張ってください……私や、長瀬さんみたいに悲しむ人はこれ以上必要ありません」
と優しく語り掛けた。
「おう、任せとけ」
そう言って祐一は力こぶを作って見せる。そのわざとらしい動作に、三人の間に自然と笑みがこぼれる。
「さて、俺はそろそろ行くか……おい長瀬、天野を死なせんじゃねーぞ。俺が真琴に怒られちまう」
祐一のその台詞は、目的を果たした後なら死んでも構わない、という覚悟の表れだろうか。
「気をつけて」
祐一は手を振りながら、森の奥へとやがて消えていった。

ふぅ、と二人同時に溜息をつく。
やがて、よし、と気合を入れると、
「さぁ……行こう」
「ええ」
二人は歩き出す。
僕が僕の責任を果たすために。
管理者を倒す。
高槻を倒す。
……そして、叔父さんも。
どこまでやれるかは分からない。
だけど、天野さんだけは絶対に守ってみせる。
空を見上げた祐介の目には、これまで無かった決意の色が表れていた。

278　流れる涙をそのままに

「千鶴姉！」
びく、と震える千鶴。

怯えを含んだ悲しい瞳は、梓の視線を避けるように下を向いている。
ある意味、梓と千鶴は、姉妹の中で最も親しい。
もちろん生まれた早さに由来する、共に生活した日々の長さもあるのだが、気性の凹凸がうまく合っているのか喧嘩もすれば助け合いもするという、互いに腹蔵なくものを言える間柄なのだ。
しかし。
鬼の記憶に衝かれた初音に撃たれ、楓に切られ。
半ば心の拠り所をなくした千鶴は、梓にかける言葉がなかったのだ。
「千鶴姉!!」
再び梓は叫ぶ。
叱られた子供のように、千鶴は涙を溜めて血塗れの面を上げる。
漸く口にした言葉には、ほとんど意味は無い。
「あず……さ……」
よろめくように、一歩下がる。
「ごめんなさい、あずさ……わたし、また……ごめんなさい……」
また一歩下がる。
「初音が、楓が……!」
踵を返して跳躍しようとする。
「千鶴姉!!」
梓が三度、叫ぶ。
「わかんないよ！　ちゃんと聞かせてよ！　いつもいつもいつもいつも独りでなんとかしようとして！　失敗して、傷ついて、悲しんで！　そのくせ家では笑ってて、なんかあっても全然教えてくれなくて！」
「梓……」
梓の激昂に、千鶴が、あゆが、目を瞠る。
二人の視線が合う。
「ううん、この島に放たれたときから、わかってた

よ……。きっと千鶴姉は手を汚してでも、みんなを助けようとするんだろうなって、思ってたよ……。だから、聞かせてよ。ね？」
二人とも泣いていた。

「お腹、空いてない？　おにぎり、あるよ？　一緒に、食べよ？」
慌てて包みを開く。海苔の香りが広がる。
柏木家の食事は、いつも梓が作っていた。
今では遠い平和な日常の香りが、たまらなく——悲しく、嬉しかった。
「服もボロボロじゃんか、あたし服二着あるし！着替えなきゃ、ね？」
あゆごと抱きしめるように服を示し、畳み掛けるように言葉を重ねる。
「だから、だから、行っちゃだめだよ！」
流れる涙をそのままに。
ゆっくりと目を閉じて。

千鶴は小さく口を開く。
「だめよ、梓……」
否定の言葉に、梓がびくりと震える。
「ちづ……！」
「手を洗わないと、ね？」
にっこりと笑ったその顔は、日常の千鶴のそれだった。
流れる涙をそのままに。
こころの鬼は、祓われた。

——食後。
「それでさ、千鶴姉」
いまだもぐもぐと、おにぎりと格闘するあゆをよそに、梓が話しかける。
服なんだけど、と二着——スクールタイプとアイドルタイプの服——を並べて置く。
そのデザインにちょっと、いや、相当げんなりする千鶴であったが、比較的ましと思われるスクール

タイプに着替える。
なかなか似合う。
子供の耕一が惚れるのも解ろうものだ。
「この歳でスクールタイプもなんだけど……これって……」
千鶴はアイドルタイプを手に取り立ち上がる。
――大きい。
そこそこ長身の千鶴が肩の高さに持っても、余裕で引き摺っている。
三人目を合わせ、同時に首をかしげる。
「こんなの、誰が着れるっていうのかしら？」
「はっくしょん！　ぬおおー、なんか悪寒がしたあー」
「お兄ちゃん、大丈夫？」
たぶん、大丈夫じゃない。

279　知恵比べ

「……」
「……」
草葉の陰で二人は互いの肌のぬくもりを感じていた。
それはつかの間の暖かな時間。
「ねぇ、和樹……わたし、たよりにしても……いいんだよね？」
「ああ。頼りにされたいし、頼りにしてる」
何度も肌を重ね合い、愛し合った二人の声は、いつしか恋人へのそれと変わっていた。
「でも、いじょうなじょーきょーで結ばれたカップルは長続きしないって……」
涙声。和樹はそっと詠美の目尻を指で拭った。
「影響されすぎだ、馬鹿」
「ごめん……」

二人は再び唇を重ね、激しく抱き合った。決して離さぬように、ぎゅっと強く。
ややあって、複数の足音。地面に寝そべるようにいた二人にそれははっきりと聞こえた。
「ちょっ……やだっ……かずきっ……‼」
「す、すまん、驚いて中で……」
「そんなばあいじゃないでしょ！」
ひそひそと怒鳴りあいながら和樹と詠美が衣服を羽織る。いつもならすぐに着替えられるような服を、長い時間かけて着替える。
少なくとも二人にはとても長い時間に感じられた。
それは、その足音が殺人鬼であるという可能性よりも、愛の営みを見られたくないという気恥ずかしさからきたあせりだったのかもしれない。
慎重に遠目からその姿を確認する、見知った顔二つ。
詠美には恐らくは一つだっただろう。
「南さん、玲子ちゃん！」
和樹が叫ぶ。もしもの時の為、詠美を手で押さえて隠しながら。
「も、もが……この、いたい……がずぎ〜」
詠美の視界は、雑草で彩られた土で埋まってた。
もう一人、見知らぬ顔が一人。黒髪の少女。その可憐な風貌は、日本人形を連想させた。
声をかける前からすでにこちらを窺っていた少女。隠れていたのに。
和樹はうすら寒い思いをしながらも相手側の反応を待った。
「あら、和樹さん。無事だったんですね」
南が顔を綻ばせて、手を振る。
玲子はこちらを伺って一瞬嬉しそうな顔を見せたが、何故かすぐにその表情が曇った。
「南さんも……よかった」
それをしっかりと確認してから、和樹が詠美を伴って三人と合流した。
「こちらが……和樹さんは知ってますよね？　芳賀

玲子ちゃん。そして、こっちが柏木楓ちゃん」
お互いが、南を経て、自己紹介をすます。
そして、お互いの状況を確認し合う。
由宇との別れ、大志との離別、いろいろなことがありすぎた。
和樹も何度も心がくじけそうになっていて……
(だけど、詠美を、守りたい人を見つけたからな……)
「何よ、あんまり見つめないでよ……ぽちのくせに」
照れ隠しからか、詠美がそう言って……目をそらさず和樹を見つめ返す。
「あらあら、なにかお熱いですね……何かありました?」
「ななな、なんにもないわよ！　し、したぼくはしたぼく。この詠美ちゃんさまにつくすのはとーぜんのことよ、ね、ぽち!?」
いつもならむかついていた詠美の悪態が和樹にはほほえましく感じられた。
もしかしたら和樹は大きく変わったのかもしれない——いろんな意味で。
(でも、南さんも変わらないよな……)
和樹が玲子と南をじっと見つめ、そう感じたままを思う。
(玲子ちゃんが元気無いのは気になるけれど、こんな島にいてもいつもと変わらず……無理してるわけじゃないよな？　……っ!?)
突如、足に鋭い痛み——!!
怒りに身を任せた詠美の——足が和樹の足を踏み潰していた。
「ふふふ、今度は私達のほうですね」
南が、淡々といつも通りの調子で事の顛末を語り出した——。
和樹の、詠美の顔が少しずつ青く、深刻なものになっていく。

ここにいる少女——何を考えているか分からないので和樹はどうも気を許せない——楓と、その姉の闘い、そして、女——きよみの放送とその最期を。
いつもと変わらない南の口調だけが不自然に浮いていた。

胃の中に爆弾……和樹は由宇が遺した最後の手紙を思い出す。
(本当に……全員に……埋め込まれているものなのか?)
もしそうなら絶望的ではないか。和樹は唇を噛み締めた。闘うどころか、逃げることもままならないではないか。自分たちの命はすべて向こうの奴等の思うがままということになる。
「……それはどうでしょう?」
今まで黙っていた楓が、和樹の心の問いに答えるように口を開いた。
「仮に……爆弾が全員に埋め込まれてるとします。起爆するときはリモコンか何かの遠隔操作だと思います。それはどんなときに爆発するんでしょう……。たとえば、この島の裏側……地球で一番離れたところにいる人を爆発させることができますか? どんなに優秀な科学者であろうとも、現代の科学力でそれを実行するには不可能だと思います」
「そうか……」
和樹の顔に希望が見える。そう、爆弾には有効距離があるに違いない。
「それにあの女性を爆発させたとき——確実にあの人を爆破させせました」
哀しみに少女の瞳が揺れる。
「それは、爆弾を起爆させるスイッチがあるはずです。もちろん、一人一人区別して爆発させる方法……小さなリモコンなんかじゃなく、大きなコントロール室みたいなものが」
……その少女の見事な推理に、全員が水を打ったように静まり返る。

「あの人の死は無駄なんかじゃありません」
ただの少女の憶測に過ぎなかった。だが、それは確かな理論に裏づけされていて。
つまり、爆弾には有効距離があるということ。
そして、それを起爆させるスイッチはおそらく大掛かりなもので、持ち運びなど出来ないだろうということ。
大体、島全体が有効範囲だろうと、楓は呟いた。
この島から脱出、あるいはコントロール室を押さえることで、希望が見えてくるのかもしれない。
――ちなみに詠美だけは意味がわからず、その場で立ちつくしていた。
「私の推理はここまでです……そうは思いませんか？　牧村――南さん」
楓が南と正面から対峙する。
「……」
南は何も言わず、彼女を見ていた。
楓の行動に面食らいながらも、和樹達はそれを見守ることしか出来なかった。

280　夕焼けの空の下で

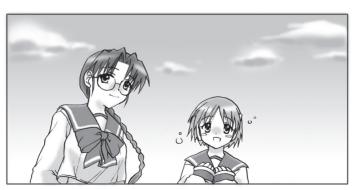
……ざぁーっ……
夕焼けの海岸。
打ち寄せる波。
海面から突き出ている奇岩。
そこに腰をおろし、休息をとっている浩之。
そこから僅かに離れた場所に、ジープが到着する。
そのシートから降り立つ、あかりたち三人。
遠目に浩之の姿をみとめ、そっとあかりの背を押す智子。
あかりは頷き、ひろゆきの元へと歩いていく。
「……これは、賭けやな」
殺戮者となってしまった浩之に、あかりの言葉が果たして届くのかどうか。
だけど……信じよう。二人の絆を。そして、あか

りの想いの強さを。
……さく、さく、
近づいてくる足音。
閉じていた目を開け、顔を上げる。
そこには……ずっと会いたかった、本当に会いたかった、愛おしい少女の姿があった。
「……」
言葉を交す事なく、見つめあう二人。
その時。少女の目から、ひと雫の涙がこぼれた。
「あかりっ！」
立ち上がり、抱き寄せる。
頬をすり寄せ、その暖かさを感じる。
言葉にならない想いがもどかしくて……二人、唇を合わせた。
「ここに来て……いろんな事があったね。浩之ちゃん」
「……ああ、そうだな」

本当に、いろんな事があり過ぎた。
「わたしね。最後に浩之ちゃんに会えて、本当にうれしい」
そっと体を離すあかり。
「幸せだよ。とっても……だから、これで終わりにしたい」
そう言い、あかりは自らのこめかみに銃口を当てる。
「あ……あかりっ！　なんでだよっ！」
「わたし……汚されちゃったんだ。だからもう、浩之ちゃんとはいられない」
どういう事だよ……。言葉を失う浩之。
「イヤなことがたくさんあった。だから、今、幸せなうちに、終わりにしたいんだよ」
カチリ、と戟鉄にあてた親指を動かす。
「やめろよ！　どんなになろうと、俺は……おまえが好きなんだ！　それじゃぁ、ダメなのかよ！」
そう言う浩之に、あかりは涙を流しながら笑顔を

向ける。
「ありがとう。わたしも大好きだよ。……さよなら」
そう言って……引き金を引いた。
「あかりぃぃぃぃぃーっ！」

「大丈夫なんやろな」
そう、つぶやく智子。
「はい。渡す前にちゃんと抜いてあります」
「そうか……」
言って、あかり達をみつめる智子。目を細める。

「……どうして……」
泣き崩れるあかり。
「ばか、死ぬやつがあるか！」
ひざまづいたあかりを、浩之が強く抱きしめる。
「俺だって汚れてる。この両手は。たくさんの血で」
その両手を握り締める。
「償わなくちゃいけない。そしてなにより、おまえを一人にしてしまったことを……」
少し身体を離し、あかりの目を正面に見据えながら、言う。
「償わせてくれ。俺は、お前を守る。どんなことがあっても」
「ひろゆきちゃん……」
「だから、今は俺に、おまえの命をあずけて欲しい。な、あかり」
「ひろゆき……ちゃぁん」
再び抱き合う二人、深く、深く。
そして少年の決意も、深く、力強いものだった。
「……行こか、マルチ」
「えっ⁉　お二人に会わなくていいんですか？」
遠目に浩之たちを見やりながら、智子は言う。
「人の恋路をジャマするやつは……って言うしな。二人きりにさせとこ。それに」

マルチの頭をかいぐりと撫でる。
「今のあんたは、結構頼りになるしな。うちら二人でもなんとかなるやろ」
智子から初めて褒められて、顔を赤くする。
「あ、ありがとうございますぅ」
「生きとれば、また出会えることもあるやろ。だから、行こうや」
「はいっ！」
返事をし、アクセルを踏み込む。
……クマのぬいぐるみと、そして幾許かの銃弾。
それだけを残し、ジープは海岸から去っていった。

281　後少しだけ、約束

「私の推理はここまでです……そうは思いませんか？　牧村——南さん」
すべてを話し終えた楓の声が、響く。
まるで、名探偵が話の最後に犯人に話しかけるかのように。
（楓……ちゃん？）
不安そうに詠美が和樹の腕をつかんだ。
（……よく状況がつかめない……）
和樹はただ何も言えずそれを見守ることしか出来なかった。
「……」
沈黙の時が続く。
南は、何か思案するように一人一人に視線を向けた。
「……そうですね……」
南が再び楓に視線を移す。
「すごいわ、楓ちゃん。私にはそこまで分からなかったもの。まるでシャーロック・ホームズのように——」
「もう、やめませんか？」
楓が、南の話を遮る。
気がつくと南の顔からも微笑みが消え失せていた。

「……初めから気づいてました、南さん。あなたも……私が疑っていること知ってたと思います」
「……」
「答えてください……あなたは……主催者側の人間ですね？」
冷たい風が吹き抜けた――気がした。
「そうねぇ……どうしてそう思ったのかしら？」
はっきりと肯定こそしなかったが、その落ち着きぶりが、ただの楓の狂言ではないということを裏付けしていた。
「……証拠はないです。ただ、カマをかけただけですから」
と、楓は返す。
「すごいわね。きっと将来大物になるわよ……将来があれば……の話ですけど」
南の表情に再び笑みが戻る。だがその笑みはどこか冷たく残酷で――。
「ひっ……!!」

すぐそばにいた玲子が南から離れるようにあとずさる。和樹にも、今目の前で起こっている事が悪夢のように感じられていた。
「きゃあっ！」
玲子の胸が血に彩られていく。
胸に、銀色の手裏剣。
ほぼ同時に、南のいた空間は楓の鉄の爪によって引き裂かれていた。
「玲子ちゃん!?」
悲痛な楓の叫び。とって返すように玲子のもとへ――

ヒュッ！
手裏剣が楓の行く手を阻んだ。
「手裏剣の練習した甲斐がありました。ここまで使いこなせるようになったんですよ」
南が少し離れた場所で手裏剣を構えて立っている。
「……!!」
楓が憎しみを込めて南を睨んだ。

再び手裏剣がうなりをあげて飛ぶ。
キンキン！
楓が爪でそれを弾きおとし、一気に間合いをつめようと隙を窺う。
だが……
「か、かずきっ！」
詠美の泣き声。詠美と和樹にも手裏剣が飛ぶ。
楓がそれに飛びつくように体を踊りだすと、それを叩き落す。
腹から無様に着地する。
「……くっ！」
痛みに顔をしかめながら楓が南を見ると、いつの間に持っていたのだろうか……。
玲子の釘バットを振り上げた南の姿が眼前に広がっていた。
「よけないほうがいいですよ。後ろにいる玲子ちゃん……確実に死んじゃいますから」
楓は地面に転がったまま南を見上げた。
この態勢から反撃はできなくても、釘バットをよけることはできるかもしれない。
だが、楓のすぐ背後に玲子の姿。
よければ玲子を直撃してしまうだろう。
鬼の力をもってすれば玲子を抱えて飛ぶこともできただろうが——それどころか同時に南を切り裂くこともできるだろう——今は鬼の力なんてほとんど発揮できない。
「本当は千鶴さんの件があるからアレなんだけど……さようなら」
「——!!」
絶体絶命。楓は死を覚悟した。
そして南のバットが振り下ろされ——！
「動くな……動けば撃ち殺す!!」
南の動きが止まる。
和樹が、まだ使われたことのない機関銃を持って立っていた。
南が和樹に視線を移す。

「和樹さん……」
和樹は震える手で銃口を南に向けていた。
「嘘だろ……？　こんなこと……南さんがこんなことするわけないじゃないか……。誰でもいい……嘘だって言ってくれよ……」
だが、それに答える者はいない。
「頼む……撃ちたくないんだ……南さん、ここから何も言わず立ち去ってくれ……」
それは本当に悲痛な嘆願だった。
「……」
南が無言のまま、二人から離れる。
「せっかく強力な銃火器を持っているのに宝の持ち腐れですね。そんな甘いことではこの先、生き残れませんよ？」
そう言い残し、南は森の奥へと消えた——。
「玲子ちゃん、玲子ちゃん！」
楓がその顔が血で汚れることも構わずに玲子の傷口に口をつけては吸い出す。その機械的な作業をずっと続けていた。
手裏剣には毒が——塗られていた。
和樹は少しずつ呼吸が弱まっていく彼女の手を握りしめることしかできない。
詠美はただ、目の前の惨劇に嗚咽を漏らしつづけていた。
「ごめんね……あたし、楓ちゃんのこと……怖がってた……」
「玲子さん、もう、しゃべらないで」
玲子は手の甲で楓の涙を拭う。
「あたし、バカだから……一緒に、帰れなかった。ごめんね、約束……」
「……!!」
楓は何も言えずに玲子を抱きしめる。
「千堂クン、あたし……もう一度、こみパに行きたかったな……」
抱きしめた楓の腕に、どこか玲子の体が重くなっ

た気がした。

——どうして撃たなかったんですか？

楓はそう聞けなかった。
本当は構わずに撃ってほしかった。
おそらく巻き添えで自分も死んでしまうだろう。鬼の力を発揮できない今、弾丸をすべてかわすことなんて不可能なんだから。
楓には南と和樹の関係は分からない。多分、かけがえのない人なんだろう。それでも——そう思わずにはいられなかった。
（あの人は、また人を殺めるのだろうか。何食わぬ顔で別の人と行動するんだろうか？）
それは楓には分からない。
「これから……どうするんだ？」
和樹が楓に尋ねた。
もう和樹に、楓に対し気を許せないという感情はなかった。
「……生きて帰ります。たとえどんな悲しみが待っていようとも」
絶対に生きて帰る。それが楓に残されたもう半分の約束。
「……そうだな……生きて、帰ろうぜ」
「和樹さん達は自分の思った通りに行動して下さい。何かあったら……またここで」
「一緒に来ないのか？」
「すみません」
少し残念な気もしたが、冷静な楓のことだ、彼女にも考えあってのことだろうと深くは追求しなかった。

——何かあったらまたこの場所で。

悲しみに溢れたここで再会の約束を交わして。
そして、楓もまた南の消えた森の奥に消えて行っ

た。
「行こうぜ、詠美」
「ふみゅ？」
まだ泣き止まぬ詠美にそっと口付けする。
「生きて……帰るためにな」

七十番　芳賀玲子　死亡
【残り55人】

282　決意

森の中を、ゆっくりと進みゆく四人の姿があった。
前を行くのはスフィーと江藤結花。後ろには長谷部彩と来栖川芹香。
リアンと綾香を捜し始めたのはいいのだが、自分たちが逃げたルートを全く覚えていなかったせいで、あっちをウロウロこっちをウロウロと、実に不経済な移動をせざるを得なかった。
「もう疲れちゃったよぉ～」
スフィーが思わず道の真ん中に座り込む。
「何言ってんのよ！　私だって疲れてるわ」
「だってぇ～」
「大体スフィーが道を覚えてないからこういう事になるんでしょ！」
「結花さん、落ち着いて下さい……」
「……」
こういういざこざも、もう何度目になるだろうか。
長い距離を歩いたおかげで、四人の気分もすさみ始めていた。
その時、頭上の木がガサガサと変な音を立てる。
「！」
芹香が何かを感じ取った様を見て、他の三人も黙り込んだ。
そして、不意に頭上から声がした。
「あらあら、こんな所にいらっしゃったんですね」

そう聞こえたのとほぼ同時に、四人の前に音もなく人影が現れた……現れたというよりは、降ってきたとでも言った方がいいのだろうか。
「さっきはもうちょっとの所で取り逃がしましたけど、今度はそうはいきませんよ」
その声の主こそ、牧村南であった。
とっさの出来事に驚いた四人に向かって、南が手裏剣の雨を浴びせる。
四人は矢継ぎ早に飛んでくる手裏剣をよけるように、右側へスフィーと長谷部彩が、左側に来栖川芹香と江藤結花が、二手に分かれて逃げていく。
しかし、南はすぐさま右に駆け出し、あっという間にスフィーの前に立ちはだかった。
「そこまでですよ」
一瞬のうちにスフィーを抱きかかえると、首筋に手裏剣の刃を押し当て、
「皆さん、早く姿を現して下さい。そうしないと、スフィーさんの身の安全は保障しませんよ」
「南さん……やめてください……！」
「あら、長谷部さん？　こんな所でお会いするとは奇遇ですね」
「スフィーさんを、放してください……」
「いくら長谷部さんの頼みでも、そういうわけには行きません」
「南さん……、違う、いつもの南さんじゃない……！」
「いえ？　そんなことはありませんよ」
場の緊張感など全く感じていないかの様に、にこやかに南は答えた。
「長谷部さん、私がどうしてスフィーさん達を狙っているか、わかりますか？」
「……」
「この人達が、結界を破ろうとしたからですよ」
「結界……？」
「そう、私は結界を守るため、そして〝力〟ある者を倒すため、雇われたんです。スタッフとして」

「そんな……」
「だから、スフィーさん、そして芹香さんを……」
「もういいですっ……！」
振り絞るような声で、彩が叫ぶ。
「南さん……こんな事する人じゃなかったのに……。見損ないました」
彩の視線が、次第に鋭さを増す。
「私だって、人を殺したくはありません。でも、南さん、今の南さんを見ていると……」
彩は、ポケットからゆっくりとトカレフを取り出した。
「スフィーさんを放してください。そうしないと……、あなたを、撃ちます」
さっきまで持っていた南への迷いは、吹っ切れつつあった。ゆっくりと両足を開き、地面に踏ん張り、銃を南に向け身構えた。
「あらあら、長谷部さん。あなたに拳銃なんて似合いませんよ」
「……」
南の言葉にも、彩はトカレフを降ろそうとしない。
お互い無言のまま、時は流れる。
南は彩に狙いを定めるべく、スフィーに突きつけていた手裏剣を構え直した。その時、
「痛っ！」
南の横っ腹にスフィーの渾身の膝蹴りが入った。
一瞬の隙をつかれた南は思わずスフィーを放しよろめく。そして、
パァーン！
彩のトカレフが火を噴いた。
しかし、弾道はあさっての方角へ伸びていくだけであった。スフィーがいたからか、ただ手元が狂っただけだったのか。
そして発砲の衝撃に耐えられず、彩はその場に倒れこんでしまった。
南はスフィーの逃げた方角へいくつか手裏剣を放

ったが、動揺のせいか的をはずすばかり。手裏剣を諦めてスフィーを追おうとした南に、彩が叫んだ。
「南さん……私が相手です」
地面にうつぶせの彩が持つトカレフの銃口は、南に向けられていた。
南はゆっくりと振り向きながら、
「長谷部さんもいい度胸ですね」
「じっとしててくださいね。今すぐ私が楽にしてあげますから」
と言いつつ、懐に手を伸ばした。しかし、手裏剣は全て投げ尽くしていた。
「……あら、手裏剣切れちゃったみたい」
南はペロッと舌を出しながら、
「でも、こういうのも用意してあるんですよ」
背後から取り出したのは、ビッシリと釘が打たれたバットだった。

283　感染報告

黒服が進み出る。少し厚めのレポートを渡された高槻は、ちょっと意外そうな顔をしてみる。
「ここんとこ、なんか大きな動きあったかあ？……ってお前は？」
椅子にだらしなく腰掛けて、くるくる回す音がきいきいと耳障りだ。
黒服は肩をすくめて言葉を濁す。
「例の、爆弾を仕掛けなかった二人、と申しますか二体の件なのですが……」
ぴたり、と回転を止めて、不快そうに顔をしかめる高槻。
「あー、お前は来栖川重工の？　アレか？　ありゃあ上手く行かないもんだなあ、ポンコツのほうは日常データが多すぎて挟み込めなかったし、マトモなほうはさっさと壊されちまったしなあ」

最後は再びくるくると回転しながら、おどけてみせる。
高槻の仕事振りには、やたら手回しはするくせに熱心ではないという、手慰み同然のいい加減ささえ感じさせる。
「いえ……その日常データを切り捨てて、例のウイルスを取り込んだようなのです。勿論発症するかどうかは、データ不足なので、断言出来ないのですが」
またもや回転を止める。
「ほ？　ほおー……そりゃあ、また……」
上機嫌そうに気取って、立ち上がる。
くるりと一回転。
「自殺行為、いや、他殺行為になるかな、そりゃあ？」
はっはっはと高笑いし、手を打ち鳴らす。
いいぞ、いいぞう、と喚き散らす。
思わぬ展開に、高槻は絶好調だった。

284　誰がために君は泣く

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」
あれから——どこまで走ったんだろう。
私は、どこまで来たんだろう。
もう、そんなことも考えなくなってしまった。
ただ黒い想念で心がいっぱいになっていること、——それだけははっきり分かっていたと思う。
兄さん、冬弥くん、由綺……。
信じていた人は、もう皆いなくなってしまった。
希望なんて、やっぱり見せかけに過ぎなかった。
生きる糧にはなってくれなかった。
現実は……どこまでも冷たい。
私は……どこまでいっても独りで。
だから、もう闇を怖がらない。
だって独りだから、どこまで堕ちても一緒のこと。
差し込む光なんて要らない。

ただ、あの女を殺せるだけの力があれば良い。
縋るものは、武器。
私は絶望に向かっている。
心を、憎悪で満たして。
その先になにがあるかなんてもうどうでもいい。
どこだろうと、きっと兄さんが迎えてくれる。
だったら、そこがどこだって構わない。
天国じゃなくていい。
地獄だって構わない。
唯、そこに私を抱きしめてくれる両手さえあれば。

——森を抜ける。

敵討ちって、どうなんだろう。
忠臣蔵は、古い映画で観たことがあるから話を知っている。
日本で一番有名な敵討ちの話だ。
自分の国のお殿様が理不尽に殺されたことに怒りを覚えた家臣が、敵の男を集団で追い詰めた。
そして、見事に仇を討った。
彼らはその後、みんな切腹させられた。
でも、それは最初から分かっていたことで。
彼らは皆覚悟していたんだろう。
でも、死を恐れず、唯、主への忠義の為に。
今の私を支えている全てが、きっとそれだと思う。
でも、敵討ちってどうなんだろう。
私は兄さんを殺された。
大事な人だった。冬弥くんや由綺と出会うまで、私の全てを見守ってくれていた人だった。
それが、時に鬱陶しくもあった。
……でも、好きだった。
大好きだった。愛してさえいた。
誰であろうと、兄さんの代わりにはならない。
冬弥くんも、由綺も……みんなかけがえの無い友達、いえそれ以上の人たちだったけど、それでも、兄さんの代わりにはなれない。

私が生まれる前から私のことを知っていた人。
私が生まれる前から私を守ってくれていた人。
私が生まれる前から私を愛してくれていた人。
……私の前からいなくなるなんて、考えられない。
涙が零れる。
枯れるくらい泣いたはずなのに、また零れる。
どうしてこんなに悲しいのか。
もうこれ以上無いほど悲しんだのに。
どうしてまだ尽きないのか。
汲んでも汲んでも……尽きることを知らない悲哀。
どうしてこんなに寂しいのか。
生まれて初めての孤独。
私は……私は……私は……。

——歩道を渡る。

私はもう死んだんだ。
あの時、銃を向けられた瞬間？

……ううん、違う。
多分、兄さんの死を、自分が認めた瞬間に。
それまで、ずっと見苦しくしがみ付いていた日常に別れを告げた。
だから、死んだ。
結局、その時私は歌を捨てた。
歌では人を殺せないから、だから捨てた。
——今までの私を否定した。
あの女なんかのせいじゃない。
私が私のことを自分でとどめを刺したんだ。
だから、これ以上無いまでに私は死んだ。
……あの女を殺すために、自分を殺した。
兄さんのせいには出来ない。
敵討ちなんて、美しい呼ばれ方は要らない。
私が、私の意志で、あの女を殺す。
それが果たせればいい。
他にはもう何もいらない。
……違う、もう私には何も残ってないだけ。

だから、この先、生きていかなくたっていい。
全部終わったあとに、兄さんの許にきっと逝ける。
……その祈りだけ。それだけ、許してください。
……神様。

——焼け野に出る。

もう結構な距離を経ていた。
足が痛む。
もしかしたら、気付かないうちにひねっていたのかもしれない。
でも、立ち止まれない。
私自身のことを顧みる余裕なんてとっくに無い。
認めたら、きっと立ち上がれない。
痛い。
痛い。痛い。
痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。
痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。痛くない。
だから、痛む足をこらえて、ずっと走っていた。
ああ、胸が苦しい。
でも、まだ走り足りない。
あの女のところまで辿り着いてない。
だけど、私の体力じゃもう走れない。
仕方なく立ち止まる。
……そこは、見たことも無い場所だった。
「……ああ」
呻き声をあげる。
体の苦しさに耐えかねたのでも、どこかを痛めてたのでもない。
私の周りは、惨状だった。
焼け焦げた地面。
吹き飛んだ歩道。
黒ずんだ何かの塊。

視界に入ったものはそんなものだった。
……ボロボロだ。でもそのボロボロさに、不思議な親近感と……そして言い様の無い嫌悪感を覚えた。
嫌ぁ。
何で？
何でこんなもの見せるの？
生々しい肉片や血痕が残っているわけでもない。
あからさまな凶器や遺品が残っているのでもない。
でも、これ以上無く気持ち悪い。
やめてよ……。やめてよ……。
こんなのまるで……まるで…………………………
……私の心の中みたい。
「……うっ、おえぇぇぇぇえうぇぁうっ」
私はその場にうずくまる。
苦しい。
昨日は結局何も食べていなかったから、胃の中は空っぽだった。
痛い。

痛い。
痛い。痛い。痛い。
黄色い胃液が、何度も私の喉からこぼれる。
「……うっ、うっ、うっ」
肺が引きつる。
痛い。
痛い。
何も考えられない。
頭が真っ白になりそう。
次第に……意識ががたがたになる。
視界が……ふらつく。

——何か、光った。

私は、もうずいぶんボロボロになってしまった体を引きずって、それを確かめに行った。
「……これ……は……」
やけに重そうで、それでいてすごく乱暴な印象を

受ける……。
……ナイフ。
私はそれを拾い上げた。
見た目どおりに、いやそれ以上にそのナイフは重かった。
「神様……？」
見ていてくれたのだろうか。
聞き届けてくれたのだろうか。
私の願いを。
それとも……。
「兄さん……？」
兄さんが、私の道行きを手助けしてくれたのか。
やはり、彼も敵をとることを願っているのか。
ナイフは、厳然としてここに在る。
何も語ってはくれない、しかし確かな重み。
どうでもいい、唯、力が手に入った。
その事実が、たまらなく嬉しい。
マイクは、私を勇気付けてくれた。

でもそれじゃダメだった。
奪うための力が、傷つけるための力が必要だった。
素手じゃ、無理だったかもしれない。
私は両手でそのナイフを抱えた。
でも、これでならあの女を殺せる。
大好きな兄を殺した、あの女を。
私はナイフを胸に、そっと祈った。
どうか、あの女と遭遇できますように、と。
――歪んだ願いだった。
そして、再び歩き出す。

なぜか、頬から流れ落ちる雫。
気づいていたのか。
気づいていなかったのか。
それは随喜のものでも絶望のそれでもない。
拭うことも出来ない。
止める事も出来ない。
全部が、私。

ナイフを抱えて、傷ついた体を引きずって、
唯、ひたすら、あの女を追いかける。
――これがありのままの自分。

285　信じられずに手にする武器を

祐一が。
誰よりも信じていた祐一が……。
『もう、いい。俺の前から消えてくれ。でないと、俺、おまえに何するかわからない……』
どうしてだよ。
祐一の為にしたことなのに。
どうしてだよ。
もう、誰も、信じられないよ……。
……誰も信じなくて……いいの？
「あ……名雪さん！」
琴音は、血にまみれた名雪の姿を見つけ、立ち止まった。
既に日は傾きかけている。
一度はぐれた人とこんなに短時間で再会できるとは思ってもいなかった。
「名雪さん、どうしたんですか!?」
「……」
名雪は答えない。虚ろな目を、琴音に向けるだけだった。
そして、琴音は気付いた。
名雪の右手に、血の滴るナイフが握られていることに。
「……名雪、さん……？」
一歩下がる琴音。
そこで始めて、名雪が反応を返す。
「……祐一の為にあの子を刺したのに。
……祐一が、私に銃を向けたんだよ。
……私、どうすればいいんだよ。
……私もう、笑えないよ。

「……笑えなくなっちゃったよ……」
その声は、闇よりも深く染められていて。
琴音は、その言葉だけで事情を察したようだった。
「名雪さん……」
「琴音ちゃん……一緒にいてくれる？」
琴音の方を向き、哀しそうな、哀しそうな顔で、微笑む。
その笑顔が痛くて。
見ているのが辛くて、
「……はい、一緒に行きましょう」
琴音は、笑い、微笑み返す。
名雪はその返事に満足したように更に表情を崩す。

「嘘」

琴音は何が起きたのか、一瞬に理解することができなかった。
そして気付いた時には、ナイフを持った名雪の右手が、自分の左肩に伸びていて。
ナイフは自分の肩を抉り、傷口からは、鮮血が流れ出ていた。
「い……きゃぁぁぁぁぁぁ!!！　あ、あ、あうっ、あっ、あっ……ひ、い、いたい……いたいぃ……」
悲鳴を上げ、琴音はその場を走り去った。
名雪はそれを満足そうに眺め、つぶやく。
「嘘だもんね。もう、誰も信じちゃいけないんだよね？　そうだよね、祐一……」
誰とはなしに言った名雪の表情は、驚くほどの笑顔で。
その顔は返り血を浴びて、異常な冷たさを発していた。
肩のナイフを抜き、琴音は走った。
ナイフは捨てない。何故かわからなかったが、捨てなかった。

――裏切られた。

――名雪さんに、裏切られた。
――なんて馬鹿だったんだろう、やはり誰も信じちゃいけなかったんだ。
――そう、信じられるのは。

浩之、あかり……何人かの顔がよぎる。

――早く、あの人達に会おう。
――他の人は、狂っている。
――名雪さんみたいに、狂っている。
――だから、コロソウ。

立ち止まり、自分の持つナイフを見つめる。
本能が、その武器を捨てさせなかったのかもしれない。
だが、これだけでは心許ない。
「銃があれば……」
知らずのうち、言っていた。

「銃が欲しいですか？」
突然の声に、凍り付く。
声も出なかった。
「あぁ、私は管理側の人間です、危害は加えませんので、心配なく」
その声の方を向く。
黒いコートを着た男が、小銃を手に、立っていた。
「もう半分くらいの人数になっていましてねぇ。この状況で銃がないのは、少々厳しいでしょう。そこで、我々からのサービスですよ。ゲームを公平に進めるための、ね」
男の言葉が真実がどうかはわからなかった。
そんなことはどうでもいい、武器が手に入るのだったら。
ゲームの参加者だったら、こんなこと言ってないでさっさと殺しているはず。
この男は……ゲームの管理側だ。
琴音はそう判断して、答える。

「……お願いします」
その声に迷いはなかった。
琴音は、強くなった。
それが正しいと信じて、曲がった方向に、強くなってしまった。

286　訓練

仲間を探し、そして本当の敵を討つ――
とはいえ、アテもなくさまようには限界があった。
蝉丸には問題無いだろう。鍛えられた軍人であり、このような環境であっても冷静に落ち着いて行動できるだけの経験がある。
だが、月代にとってはそうではない。
「(･∀･)蝉丸ぅ～ちょっとだけでいいから休ませて……」
いかに運動神経がいいとはいっても、やはり一般人だ。
ただでさえこの島は死の匂いが濃いのに……。
月代の体力は限界に近いだろう。
（いかん……月代の事も考えてやらねば）
蝉丸はあたりに人の――敵の気配が感じられないのを確かめると、近くの岩場に腰を下ろした。
「いや、少し……しばらく休憩してから行こう。体力は大事だ」
「(･∀･)ありがとう……蝉丸」
「(･∀･)蝉丸、休憩して無くていいの？」
月代の休憩中にも蝉丸は鍛錬を怠らなかった。
強化兵ではない今、蝉丸とて生き残れるかは分からない。
「大丈夫だ。……こうしているほうが落ち着くのでな」
「(･∀･)……私も何か手伝う！」
「しかし……」
「(･∀･)走らないだけで休憩になるよ。私も……蝉丸の

力になりたい」
「む」
月代の顔は真剣だった……ような気がする。
「分かった……では」

月代に少し離れた場所から小石を投げさせる。
対銃戦闘への訓練だ。
「いくよ〜！」
もちろん見てからよけるのではない——というか、強化兵でもすべてよけられるものではない。
撃たれる前に、弾道を読むのだ。
小石が放たれる瞬間から蝉丸はそれをよけ続け、月代に近づいていく。
蝉丸の体術は見事なものだった。
その距離が三メートル、二メートルと近づいても小石程度ではかすりもしない。
そして……
「(・∀・)ばーーん！」
月代が体ごと突っ込んでくる。蝉丸がその体を受け止めた。
「何事だ、どうした？」
「(・∀・)ダメだよ〜よけなきゃ。私がナイフ持ってたら死んじゃうよ？」
「む」
少々面食らってしまったが、思わず苦笑する。
「(・∀・)でもさ……嬉しいかな？　蝉丸が、私のこと……受け止めてくれて」
「む」
月代の顔が赤く……なってるような気がする。
蝉丸は泥沼に腰までつかって抜けられないような思いに駆られた。

287　嫉妬

「笑えない私笑えない私笑えなくなっちゃったよ

……」
　名雪は呟きながら歩く。
「何で何で何でこんなことになったの、何が悪いの教えてよ祐一……。私悪くない悪くないよ、祐一を守ったんだよ祐一のためだったんだよ……」
　名雪の呟きは止まらない。
「またなの、また私の思いを踏みにじるの、祐一」
　名雪の脳裏に叩き潰された雪ウサギが浮かぶ。
　それは七年前、傷ついた祐一のための名雪の精一杯の気持ち。
　踏みにじられた気持ち。
　あの日の夜も名雪は布団に包まってこんな風に呟きつづけていた。
　何が悪いんだろう？
　何でこんなことになったんだろう？
　何で祐一は私に振り向いてくれないんだろう？
　何で私はたった一週間ばかりしか過ごしていない女の子に負けたんだろう？
　あの子にあって私にないものはなんだろう？と、あの日から、名雪はずっと考えつづけてきた。
　何度も眠れぬ夜を過ごしてきた。
　それでも、祐一は帰ってきた。あの子はもういない。
　今度こそ祐一は私に振り向いてくれるだろう。自分でいうのもなんだけど、私はきれいになったと思う。きっと祐一は私に振り向いてくれる。
　だけど、またあの子が私たちの前に現れて……
「そっか、悪いのはあの子なんだね」
　祐一が私の思いを踏みにじったのも、私の前からいなくなったのも、全部全部。
「クスッ、泥棒猫さんだよ、あゆちゃん」
　みんなみんな嫌い、誰も信じられない。だけど、その中でもあの子だけは許せない。
「また、祐一もあゆちゃんにだまされちゃって……紅しょうがぐらいじゃ許さないからね」
　名雪の声が次第に明るいものになっていく。

「そうだ！　まずはお母さんを探さなきゃ」
誰も信じられない、誰も信じられないけど、お母さんは別だ。お母さんだったら私のお願いをきっとかなえてくれる。いつものようにやさしい顔で、手に頬を当てて、「了承」って言ってくれる。
「お母さんならあゆちゃんと祐一に『お仕置き』をしてくれるよね」
名雪は弾んだ声でそう言った。

288　(・∀・)ヨクナイ！

——拝啓おふくろ様
もう、あなたに文を送るのはこれで最後にします。それというのも、便りが無いのはなんとやら、という言葉にあやかろうと思い立ったからです。愚かな考えではありますが。
さて、バカ息子潤の近況をお話いたします。
かのバテレン製らしきヤンキーともずくを摂取していましたところ、突如として脳天を頑丈なノートパソコンに直撃されました。
そしてその折、あなたをこの世に送り出したわがグランドマザアなどに再会致しました。周囲にはなぜか、ラッパなどを吹く羽の生えた子供などもおりました。
今にして思えば、あれが臨死体験というものでしょうか。
その後、その天からのプレゼントであるノートパソコンを起動いたしました。女の子に変形しないことには並々ならぬ不満を感じましたが、私はもう大人ですので我慢致しました。誉めてやって下さい。
ＣＤドライブ（先ほどの横文字といい、敵性語を使う不忠義をお許し下さい）を覗いてみましたところ、果たして純白のＣＤが入っておりました。
私は海綿体に熱き血潮をたぎらせ起動してみましたが、何も起きませんでした。
改めてＣＤの内容を覗いてみると、残念ながら性

的欲求を満たすようなものは入っていない事が判明致しました。
　日頃信仰している大ガディム神は、なぜかくも酷な仕打ちを潤になさるのでしょうか。
……とりとめが無くなってしまいそうですので、名残は尽きませぬがこの辺で。
　どうか潤が帰ったおりには、もずく以外の食事でお迎え下さい。
　では。

「宮内さん。このまま黙々と進むのも何だし、何か話でも」
「そうですネ。気を紛らわせるのも必要デス！」
　俺は、彼女に振れそうないくつかのネタを頭の中から検索した。
「ねえ宮内さん、やっぱ一日の回数は多いの？」
　――自慰の。
「ねえ宮内さん、やっぱ経験豊富なの？」
　――性交の。
「ねえ宮内さん、やっぱ人気ないの？」
　――アンタの。
（いかんぞ。なんかヤバいネタばかりじゃないか）
　俺は焦りの雫を垂れ流し、ちらりと宮内さんの方を見た。
（そうだ。何か彼女の長所についての話題を振るんだ！）
「ねえ宮内さん」
「What?」
「ズったら気持ちいいでしょうね、その胸」
「……」
　なぜか、宮内さんが沈黙する。
「いえ。俺の知り合いもあなたほどではありませんが、やはり立派な胸をしていまして。男には『頼みづらいプレイ』ではありますが、やはり宮内さんには欠かせないかと」
「……」

ガシャキッ、と宮内さんがウォーターガンを構えた。
「ぬ！　敵ですか⁉　宮内さん、さがって！」
俺はＢ級アクションムービーのように無意味に転がり、明後日の方向へ拳を構えた。
「どこからでも来い、ゲス野郎ども！　あうっ」
背中を水撃に打たれ、俺は仰け反った。
「……ワタシ、下品なネタは嫌いデス」
「す、すみません……」
俺は、何が悪かったか理解できないまま謝った。
おふくろ様。やはりメリケン製ヤンキーの考える事は潤にはわかりません。

289　壊れた小銃

（うまくいった……）
姫川琴音が走り去った後、彼女に銃を渡した男は内心ほくそ笑んだ。
あの小銃は『壊れている』。
撃ったらまず間違いなく暴発し、使用者の命を奪うはずだ。
銃の扱い方を教えた際、「残弾は少ないから」と言って試し撃ちをさせなかった。
そんなことをされたら、わざわざ壊れた銃を渡した意味がない。
そもそもあの銃は、焼け落ちた公民館から偶然拾った物だった。
だが、少し調べてすぐに、この銃は使える状態にないことがわかった。
銃の知識は、その程度には持っていた。
そこで男は思い付く。
少しでも自分の良心が痛まないように、誰かを殺す方法を。
自分が手を下す必要はない。勝手に死ぬように仕向ければいい。

（あの銃を使うか使わないかは彼女の判断だ。運が良ければ生き残るだろう。悪くない。自分は悪くない。悪くない。何も——）

一日目に百貨店から無目的に奪ってきた黒いコートをなびかせて。

男、巳間良祐は、その場を後にした。

残された空間には、ただ、乾いた風が吹くばかりだった。

琴音は走る。

壊れた小銃を手に。

ターゲットがどこかにいないかと、探りながら——

290 おしゃべり南さん

〝ゆらり〟

南は釘バットを大上段に構えた。

彩との距離は五メートルあまり。

彩の顔に怯えの色が走る。

地面に伏せている自分にとってこの高さから振り下ろされるバットの打撃は、間違いなく致命傷になる。

（もし外したら……）

血まみれになる自分の顔を思い浮かべ、銃把を握る手に汗が滲む。対照的に南の口元には余裕の笑みさえ浮かんでいる。大上段の構えのまま世間話をするかの如く、彩に話し掛ける。

「そういえばですね、さっき和樹さんと詠美さんに会ったんですよ」

「……？」

彩の脳裏を名前の二人がよぎる。憧れの人（和樹）と大切な同人友達（詠美）……。

南は言葉を続ける。

「二人、こんな状況でもまだ諦めてませんでしたよ。和樹さんは瑞希さんが、詠美さんは由宇ちゃんが亡くなったのにね」

「……」
「守らなければならない存在ができたのかも知れませんね。和樹さんと詠美さん、お互いを見る目がいつもと違いましたし……」
「……（え？　何……）」
彩は南の言葉から耳を離せなかった。
〝じわり……〟
彩が気付かぬうちに南は半歩前に出た。
更に南の話は続く。
「――恋人？　そう、そんな雰囲気でしたね～。あんな状況ですから、恐怖を忘れるために一時の快楽に身をまかせて～」
「……（恋人？　快楽？）」
彩にとって堪えがたい言葉が次々と投げかけられる。
憧れの人と友に対しての侮辱……。
あと四メートル。

話は佳境に入った。
「まぁ、こみパで外壁常連の大手は大手とくっつくって事かしら？　島中常連の長谷部さん？」
……そして自分への侮辱……。
「……許せません！」
銃把と引き金に力が入る。

あと三メートル半。

結花は動けなかった。
スフィーを芹香に任せ彩を援護すべく、すぐにでも南に跳びかかるつもりだった。
が……動けない……。
釘バットを取り出す際に見せた南の笑顔。
〝すぐにでも貴方達を殺すことができるんですよ〟
そんな言葉がついてきそうなあの笑みが頭に浮かび結花の心を挫く。また、そんな自分の弱さに焦り、苛立ち、いつしか足は鉛になっていた。

〝動け、動いてっ、何で動かないのっ！〟
あと二メートル。
「うふふ、安全装置が掛かったままよ」
「？」
完全に南のブラフだった。
しかし一瞬、ほんの一瞬だが彩は視線を南から切ってしまった。
〝ビュン〟
〝パンッ、パンッ！〟
風切る音と自分の拳銃の発射音を聞いたのを最後に彩の意識は途切れた。
〝パンッ、パンッ！〟
「くぅっ！」
彩の放った弾丸の一発が南の右手を破壊した。
そのぶん、軌道はややずれたが釘バットは彩の首の右側をとらえた。

〝ズシッ〟
手応えを感じたと同時に、南の右手に激痛が走る。
が、すかさず左手に持ち替え彩の動かない頭に向けて止めの一撃を――
その瞬間、腹に強烈な風を受けて南は吹っ飛ばされた。
そしてそれが風で無い事に気付いたときには、目の前に猛スピードで振り下ろされる踵が迫っていた。
「うぁぁぁぁーーーーっ！」
叫び声と共に跳び出した、結花の胴タックルが南を吹っ飛ばし、踏みつけが南の顔、上半身を襲う。
〝グジッ、グシャッ、グシャッ、グシャッ……〟
眼鏡が粉々に砕け、前歯が消えた。
釘バットを握ったままの左手は砕けた骨が見えるまで踏みつけ、最後に釘バットで南の両膝を砕いた。
「彩ちゃん……彩ちゃん……」
南を再起不能状態にした結花は彩に懸命に声をかけた。彩の首は力なく揺れ、呼吸も弱々しくなりつ

つある。
かけつけた芹香、スフィーにも手の施し様が無ぃ事は明らかだった。
「……ねぇっ、彩ちゃんの絵本、まだあたし見せてもらってないよ！　壁さーくるってのになるんでしょ？」
彩はすまなそうに笑い結花の手をそっと握り締めた。
「ゆ、か……さん……ごめん……さい……」
「ねぇ、お願い、起きて！　……絵本、見せてくれるって……言ったじゃない……」
結花の涙が彩の顔にぽろぽろ落ちる。
最後にもう一回結花の手を握り、彩の瞼は閉じた。
「ごめん……ごめんよぅ……彩ちゃん……」

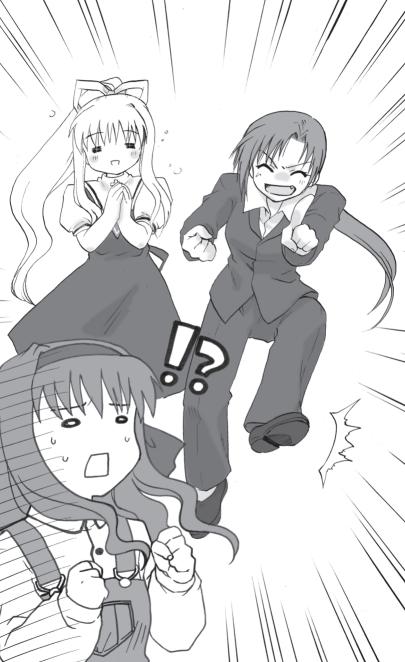
七十一番　長谷部彩　死亡
【残り54人】

291　黒船来襲

「明日は競馬や、ダービーやで、みすず！　って、ここに場外馬券売り場なんてないから買えへん……残念や。せやけどなー、買ってたらあたってんねん。間違いなくあたってたってんねん！」
「なんでそんなに自信あるかなぁ……」
「いや、ジャングルポケットは勝つねん。角田、がんばんねん。とにかく、ジャンポケやねん。一番人気でもええねん。金はふえんねん。今、実はウチ生活くるしいねん。給料低いねん、うち。橘家は全然金くれんし。いっそここで死んだほうがうち楽かもしれへん。どうや、みすず、死なんか？」
「おかあさんといっしょ！」
「えぇ、それええで、みすず。じゃじゃ丸、ぴっころ、ぽろりやな」
「うん、にははっ」

ともかくここでは平穏に時は流れてました。
「と、そこの、ちょっとこっちきぃ」
急に振られて少し（というか相当）、あさひはどきりとした。
「あ、はぃ……えっと、なんでしょう？」
そういってあさひは神尾晴子のほうにゆっくりと、物怖じするうさぎのように、寄っていった。
「あんさん、声優やっとんねんてなぁ？」
「あ、はい…。一応……」
「実況できるか？」
あさひはキョトンとした眼で晴子の目をみた。
晴子の目は、真剣だった。
え、実況？　なんで？　というかなんでここで？　それ以前に実況ってアナウンサーの仕事なんじゃ……？　えぇぇぇっ？
「あの、そのですねぇ……」
「なんや？　できんのか？」
晴子がキッっとこっちを睨んで、そういった。
「ひっっ、いや、できないわけじゃないわけじゃないんですけど……」
そういうと、晴子の顔が、にかっ、と明るくなった。
「よっしゃぁ、それなら善は急げや、みすず、紙だし！」
「はい、お母さん」
神尾観鈴はポシェットから、メモ帳とペンをだして、晴子に渡した。
「えらいっ、さすが我が娘や、ちゃんとペンまで出しとる」
「にははっ、みすずちんえらいっ」
数分間、神尾晴子は紙に向かって何かを書いていた。そして、今、
「でけたっ！　完成や！」
今書きあげたメモ帳五枚に渡る大作をあさひの目

の前においた。
「よろしくたのむでー、嬢ちゃん」
仕方ない。そうあさひは観念して、メモ帳に眼を通す。
「では、いきますっ！」
「さあぁっ、今年もついにこの日がやってきましたーっ！」
「ストップ！」
あさひが一行読み始めた直後に、ストップがかかる。
「へっ？」
「ちゃう、違うんや、そうやない」
「さぁ、今年もついにこの日がやってきました。って淡々と読むんや！　あんたのならアイドルのコンサートみたいやないかっ！」
あの、私、一応声優アイドルなんですけど……。
アナウンサーじゃないんですけど……。

ともかく、ここは平和だった。
神尾晴子のアナウンサー教室が開講して、一時間。いまだにそれはまだ、続いていた。
「ちゃう、そうやない。もっと気合いれぃ！　今、女性実況アナなんかおらんで？　あんたがその一号や！　フジでも関テレでもたんぱでもテレ東でもどこでも勤められるでっ！」
神尾晴子は、鬼コーチだった。
「あさひちゃん、ふぁいとっ！」
神尾観鈴は何故か応援してくれていた。
わたしは思う。
現実を忘れるってことも大事なんだな。
これは、きっと神尾親子の気遣いなんだな。と。
いや、えっと、忘れちゃ駄目なことがなにかあったはずなんだけど……。
あさひはそれが何か、思い出すことはできなかった。

それから一時間、更にトレーニングは続いた。
「完璧や、完璧すぎや、嬢ちゃん」
「あ、ありがとうございます、コーチっ！」
桜井あさひは完璧に数時間でやりとげた。
ダービー（晴子仮想、ジャングルP勝利）の実況を。さすが天才声優アイドル、桜井あさひ。
「そうだっ、忘れてましたっ！」
「ん？　なんや？　あさひちゃん？」
あさひは急にいままでと違う雰囲気にのまれていった。それを察したように、晴子の顔から、笑いが消えた。
「あの、いきなり現実に戻すようで悪いのですが……その……」
そこで、あさひは下を向いて、その後の言葉を出すことができなかった。
「なんや？　あんたが今言うことならなんでも受け入れられるような気がするから、なんでもいい。えぇ、ウチが好きやったら抱きしめてくれてもええんや。そんかわし、観鈴おらんとこでやろなっ」
晴子はそういって、また、笑った。そして、
「ちょっとこっちきぃ」
あさひの腕を軽くひっぱり、木陰にもぐりこむ。
「ん？　お母さんどこいくの？」
応援に飽きて、近くに咲いていたたんぽぽで花輪を作っていた、観鈴が二人のほうを向いてそういった。
「ちょっとな、トイレや、トイレ、すこしまっといてーな」
「うんっ、まってる」
そう言って観鈴はこっちにお尻を向けて、又、花輪を作り始めた。
「えっ……、ええっ、違うっ……、そうじゃなくて、その、えっと……」
あさひは顔を真っ赤にしながら、慌てふためきながら、晴子のなすがままに、ひかれていった。

「もうこの辺でいいやろ。あんまり離れすぎても、アレやしな」
晴子は脚を止め、あさひの手を離して、
「誰か、死んだんやな？」
晴子は続けた。
「誰や？　居候か？　それとも、敬介、か？」
「……私が知っているのは、後者、です……」
そういって、あさひは目を閉じて、頭を地面に向かって、下げた。
「えぇ、どんなことがあっても仕方ないわ。この状況や。どんな状況で死んだ、とかそんなことはどうでもええわ。ともかく、伝えてくれてほんまありがとう。それに、うちは敬介の妻やないしな。別にあいつが死にやってもあんまり関係ないんや」
でもな、と言って晴子は続けた。
「観鈴の父親なんや。アイツは。だからな、一応や。観鈴は、アイツのこと、ロクにしらんかもしれへん。でもな、一応アイツの前ではいわんといてくれんやろうか、お願いや」
「……わかりました。でも、そのです、本当に、その……あの……わたしっ、なんといっていいか……」
あさひの目に、涙が溢れた。
「えぇ、ほんとええから。そんかわりや、あと、もうひとつ、あさひちゃんに頼みたいことがあるんや」
「……はい」
「観鈴の、友達になったってくれんか？　あの子な、ロクにいままで友達おらんねん。だから、な？　これがお願いや」
「……はい、判りました……ありがとう、ございます」
あさひが崩れ落ちそうになるのを晴子は抱きとめて、
「そろそろ戻ろうか、みすずが心配や」
そうして二人はさっきまでいた場所に向かって歩

き始めた。
「ほら、これで涙ふきや。そんな顔で帰ったら、観鈴、驚くで？」
あさひは、晴子から手渡されたハンカチで、涙を拭いた。

292　水瀬親子マーダー化計画

「お姉ちゃーん、真琴お姉ちゃーん」
椎名繭（四十六番）は先ほどまで、眠りにつく前まで一緒だった少女の声を呼びながら歩きつづける。
「真琴お姉ちゃーん……みゅー、いない……」
あのつり橋脇の草群でずっと眠っていた繭だったが、島全体に放送が流れ、その音で繭は目を覚ました。
そして、自分が一人きりなのに気付いたのである。
「みゅー、お姉ちゃーん、ぐすっ」
一人きりは怖くて、心細くて、でも、繭は泣くのをこらえていた。
それは面倒を見てくれた真琴が、自分の前で泣くのをがまんしているのを繭もなんとなくわかったからである。
だから、繭は泣かない。泣かないで真琴を探している。
『繭にもぴろを抱っこさせてあげる』
そんな風にお姉ちゃんは約束してくれたのだから。きっとまた会えるはずだ。
「ぐすっ。真琴お姉ちゃーん」
だけど、そんな風に大声をあげながら歩くことはとても危険なことで、その呼びかけに応えた人は、真琴ではなかった。
「真琴？　真琴を探しているの？」
「みゅ!?」
背後から声をかけられて、繭は振り返った。
視線の先にいたのは長い髪をしたちょっとのんびりしたかんじのきれいなお姉さん。

「君は、真琴を探しているのかな？」
その声はとても穏やかで間延びした声なのに。
「みゅー……うん……」
なのに繭はその人が好きになれなかった。
それは　その人の髪が多少乱れているせいかもしれないし、その目が少しうつろだったせいなのかもしれない。
「ふーん。えっと、お姉さんに名前教えてくれるかな？」
その人は繭の方に近づいてくる。
「……繭……」
「繭ちゃんだね。私は名雪、名雪だよ」
その人はそう名乗って繭のほうへ両手を伸ばす。
「繭ちゃんはなんで真琴のこと探してるのかな？」
名雪の両手が眉の頬に触れる。
「みゅー……猫さん抱っこさせてくれるって約束してくれたから……」
「ふーん、猫さん？　お姉ちゃんも好きだよ猫さん。でもね」
そのては繭の頬をなでるように下におりて。
「約束を守るのは無理だと思うな。だって……」
あごを通過して首筋へ。
「あの子は私が殺しちゃったから」
そして、その手に力がこめられる。
悲鳴をあげようとする繭、だけどつぶれたような声しか出なく、それにもかまわずギリギリ、と名雪は力をこめる。
「あの子がいけないんだよ、私悪くないもん、あんな子死んで当然だもん」
その声は穏やかなままで、その顔はとてもきれいなままで。
「繭ちゃんもそうでしょ、きっと私を傷つけるんだ」
抑揚のない声で名雪はしゃべりつづけるが、その声はもうほとんど繭には届かない。
もう、ほとんど名雪の顔が見えない。

だけど、次第に暗くなっていく視界の中で、横から何かが飛んできて、名雪の頭に直撃した。

天沢郁未（三番）は森の中を泣きながら走っていた。葉子を探すために耕一たちのところから衝動的に飛び出して、自分のバッグを引っつかんで走りつづけている途中で聞いていしまったのだ。自分の母の死を告げる放送を。
（お母さん、お母さん、お母さん、お母さん）
心の中で叫びながら、郁未は走り続ける。
もう息は上がって、足もそろそろ限界で、そもそもこんな風に無防備で走りつづける事が危険だとわかっているのに、それなのにこんなふうに走っていなければ自分がどうにかなってしまいそうで。
（むちゃくちゃだ、私）
今まで共に行動してきた仲間をほっぽりだし、怪我している由依のことも考えず、何のあてもなく葉子さんを探す。
『刹那的な感情で行動するべきではないよ』
かつて少年にそういわれたのに。
（どうしたらいいの、ねぇ、どうすればいいの）
そんなふうに走る郁未は、危うくその光景を見逃すところだった。
「……！　冗談でしょ!?」
一人の少女がもう一人の少女の首をしめている、その光景がとりあえず郁未の心を静めてくれた。
方向を変えてそちらのほうへ向かう郁未、だが、間に合うかわからない。
郁未は走りながら地面から手ごろな石を拾い上げると、首を締めている少女、名雪のほうに投げつけた。
ゴッ、
牽制ぐらいになってくれればいい、と思ったその石は、しかし名雪の側頭部に直撃し、そんな鈍い音を立てる。

グラリ、と体がゆれて、名雪は横向きに倒れた。
郁未はそれでも油断せずに自分のバッグから手斧（未夜子があの時置いていったものだ）を取り出すと、それを構えて二人の前に立つ。
長い髪のきれいな女の子の方は頭から一筋の血を流して倒れている。ピクリとも動かない。
「うそ……殺し、ちゃったの？」
あんな石があたるとは思えなくて、自分の力加減がどうだったかなんてもう思い出せない。
「みゅ……」
呆然としていた郁未は、その声に慌てて振り返る。
「みゅー……けほっ、けほっ」
もう一人のもっと小さい女の子の方は激しく咳き込んでいる。意識も失っていないようだ。
「あなた、大丈夫なの!?」
郁未はその子に手を差し出すが、
「みゅ！」
その子は驚いて後ずさりをする。
「おびえているみたいね……無理ないわ。でも無事でよかった」
郁未は一息つくとバッグと手斧を置いて、幾分かの冷静さを取り戻してもう一度倒れている女の子の方に向き直る。そうして、その子に手をかけようとして、その場の空気が凍りついた。
「いったいこれは何の真似かしら」
その声と共に。
「誰……なんですか……あなたは」
声がかすれてうまくしゃべれない。
足が震えてうまく立てない。
手斧を拾って構えようとするけれど、手が汗ばんでうまく行かない。
それは恐怖、威圧、戦慄。
目の前の女性……少女とはいえないが中年というにはどこかためらわれる、そんな美しい女性に郁未は圧倒される。
「聞いているのは私よ。一体これは何なのかし

ら？」
その人は頬に手を当てて、微笑みを浮かべたまま聞いてくる。
なのに、恐い。死んだ方がましだって思えるくらい恐い。
それは藺も同じ事だった。地面に座り込んだままガタガタ震えている。
「正当……防衛です」
この人を納得させるような弁明ができなければ、おそらく自分は死ぬ。
その認識が郁未の口を開かせる。
この状況下でそれが出来るというのは、賞賛に値するといってていいだろう。
「この人は、この女の子の、首を絞めていて、私は、それを、止めるために」
その時、ガリッ、という音とともに、女性の指がその頬に食い込んだ。
「そう……了承しました。それは災難だったわね」
その微笑みは消えることなく、けれど頬に赤いものが滴って。
「名雪もまいっていたから……ひょっとしたらこんなことになるかもしれない、とは思っていたわ」
頬に食い込む指はぎりぎりと音を立てて徐々に下に降りていく。その女性の美しい顔を汚していく。
まるで、その部分だけが他から貼り付けられたような光景。
「なのに、一人にしてしまって。だめな母親ね、私」
「母……親？」
かすれた郁未の問いに、
「けどね、あなただって悪いのよ？　天沢郁未さん」
その人はそう応える。
徐々に郁未との距離を縮めながら。
「なんで、私の、名前……」
「あら、あたったの？」

その人はちょっと笑って。
「そっくりだもの、母親に」
「お母さんに⁉　あったんですか⁉」
「ええ、あの人がいなければ私もすぐに名雪の後を追えたのですけどね」
そこで、その人はぱっとしゃがみこんで何かを拾ってそれを郁未の方へ投げつけた。
郁未はすんでのところでそれ、石をかわす。けど、それでそのひとを一瞬見失ってしまって。
「ひっ⁉」
横手の風きり音に、郁未は悲鳴とともにしゃがみこむ。
その上を小太刀が通過して、それをかわしたと認識するよりも早く、低くした郁未のあごに蹴りが飛んだ。
「ぐあっ⁉」
蹴り飛ばされる郁未。
けれどそうされながら反射的に郁未は手斧を横に振った。手斧を手放さなかったのは奇跡といっていい。
その動きは女性にとっても多少の驚きではあったのだろう。軽く後ろに飛んでそれをかわし、郁未との間合いをあけた。
(殺される、私殺される、なんで知ってるのお母さんの事。殺される、お母さん、私殺される、お母さんひょっとしてこの人に……)
恐怖と疑問で郁未の頭は飽和寸前。そして、
「あら、母親よりは反応はいいようね」
その声で郁未の頭は真っ白になった。
「あの……お母さんの……ことなんですけど……」
秋子は郁未の声に今までと違う響きがある事に気づいた。
「あなたが、お母さんの事、殺したんですか？」
途切れ途切れに郁未はそういいながら、しゃがみこんで前に手をつく。
秋子は郁未の問いに、「ええ、そうよ」と応えた。

未夜子に与えた傷が致命的なものだったとは思えないが、死んだという事はそういう事なのだろう。
「そうですか……」
郁未はしゃがんだまま腰を上げて、極端な前傾姿勢をとる。それは、クラウチングスタートの姿勢に良く似ていた。
違うのは手に斧を持っているという事だけ。
「あなたが、殺したんですね」
その声に秋子は自分が震えている事に気づいた。
(おびえている？　私が？)
「あなたがあああああああああ!!」
裂ぱくの気合というには猛々しすぎる雄叫びを上げて、郁未は放たれた矢のごとく飛び出す。
その加速に乗った手斧の一撃は、重く、強く、速く。
ギイインッという激しい音、飛び散る火花、金属破片、ガードした秋子の小太刀はいともたやすく破砕する。
それでも、秋子はその渾身の一撃をかろうじて流す事に成功した。だが、小太刀は手から跳ね飛ばされた。
突進の勢いで激突する両者。
秋子は痛んだ手で、二撃目が来る前に郁未の手首をつかんだ。
ギリギリギリと互いの歯ぎしりが聞こえそうな距離で、両者は腕に力を込める。睨み合う。
とても醜い顔、秋子はそう思った。
怒りと、恐怖が郁未の顔を醜く歪めている。
自分もきっと同じような顔をしているのだろう。
いまや、二人は対等だった。
対等な力量。
対等な恐怖。
対等な威圧。
対等な怒り。
対等な憎悪。
「私は……あなたを……死んでも……殺したい」

食いしばった歯のあいだから郁未は言う。
それは私も同じよ。秋子は声に出さずそう応えた。
そう、その殺意も対等。
そのような二人が戦うならば、
(どちらかは必ず死ぬわね？　郁未さん)
けれど、次の郁未の声は秋子の予想に反したものだった。
「あなたを……殺すためなら……死んだっていい……けどっ……私、死ぬ訳にはいかないんです!!」
秋子はもう一度郁未の顔を見直した。
「怪我している友人がいるんです、まだ会っていない友人がいるんです、会って確かめなきゃいけない人がいるんですっ!!」
その顔は未だ醜く歪んでいたけれど、瞳には確かな強い理性の光があった。
「了承」
秋子は低くつぶやいて、体を沈め、郁未の体が前につんのめるように引っ張った。巴なげだ。
「……!?」
投げ飛ばされる郁未、けれど手斧は手放すことなく慌てて立ち上がる。
だが、秋子はその間に郁未から距離を取っていた。
「了承しました。確かに私もここで死ぬ訳にはいきません」
秋子は名雪の方へ視線を走らせる。
息はしている。生きてはいる。
だが、その傷が重傷か軽傷かは分からない。
「だからここは私も退きましょう」
秋子は吐き出すように言う。もはやその顔から微笑みなどとうの昔に消えている。
「自己紹介をしておきましょう。私は水瀬秋子、この名雪の母親です」
郁未を睨んだまま秋子はさらに続けた。
「今は、私は私のなすべき事を、あなたはあなたのなすべき事を……。私は、これからどんなことをしても生き残ります。そうして、もしもう一度互いが

「再び出会えたならば、その時」
一度区切ってそして、
「決着をつけましょう」
そう言う秋子に郁未は軽くうなずいて、十分な距離を取るまで後ずさり、
自分の荷物をつかんで木立の中へ消えた。

繭は木立の中を闇雲に走る。
そのスピードは彼女にしては速いほうだ。
彼女は泣いていない。でもそれは真琴がくれた勇気のおかげではなく、絶対的な恐怖、涙すら凍る恐怖、そのせいだ。
あの時繭は、手斧と小太刀のぶつかる音で金縛りがとけて、荷物を引っつかんで一目散に逃げ出した。
そして、今も走っている。

恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い恐い……
後ろから何か追ってきそうで、前に何か待ち伏せしてそうで。
繭は今始めてこの島がどんなところかを理解した。
恐い……。

繭の小さなからだを占めているのはそんな思いだけで、そんな繭が、あの時つかんだバッグが郁未のものだなんて事に気づくはずなかった。

293　一歩、前へ

ひとりきり、悪い夢に取り残されたようで。
自分以外はみんな敵に思えて。
人の心なんて解らないから、怯えることしかできなかった。橘さんと同行しているときでさえずっと、

私はいつ殺されるんだろうと思ってた。
『君は逃げるんだ。ここは僕が食い止める』
決して折れない強さを持ったその声を聞くまでは、ずっと。

……今のあたしには、目的がある。

彼の言葉を伝えなくちゃ、生き延びた意味がない。

怖くない。怖くない。怖くない。怖くない。怖くない。

考えちゃダメだ。何も何も考えちゃダメだ。

立ち止まったらおしまいになる。また弱いあたしに戻ってしまう。

うずくまって耳を塞ぐだけのあたしにはもうなりたくない。

だから泣いたりしない。何度も首を振る。怯えた心を追い払う。

前だけ視て、瞳を凝らして、少しの変化も見逃さないで、走らなくちゃ。

そして誰かが行く手にいるのなら。

「あ、あの、神尾さんという人を見ませんでしたか……!?」

せいいっぱいの声で、信じて、訊くだけ。

突然の来訪者……あさひは、橘の伝言を受け取っただけで、死に目を看取った訳じゃない。

それなら彼は生きているのだと、信じ込みたかった。

あの時の爆発音は、現場から遠く離れた自分たちの元にも届いていたから。

爆心地に居て無事なはずがない、とか。当たり前

すぎる理屈はどうでもよかった。
　自分も、あさひも、細い糸のような希望に縋って、ただ信じることしかできなかった。
　なら自分はばかみたいにいつも通りに過ごしてやる。笑って、ボケて、突っ込んで、なんの変哲もない日常ごっこを敢えてやってやる。
　見知らぬ島でも、殺し合いの場だとしても。
　そうしていれば必ず、あいつはひょっこり顔を出してくる。この「場所」に帰ってくる。
　照れ隠しにつまらない冗談でも言いながら。
　ここへ、

「…………以上だ。ペースアップしてきたじゃないか……この……調……で……」
　この地域一帯の放送設備が、少々破壊されているのかもしれない。

　雑音混じりの、耳障りな声。
　聞きたくなかった。知らなければ良かった。
　それでも、容赦なく。逃げることもできず、声として事実は突きつけられる。
『橘さん』は帰ってこない。死んでしまったから。
　みんなが何も言えないうちに、呆気なくその放送は終わった。
　風はやわらかいまま、空は青いまま。
　空にはまるでにせもののような太陽。
　じわじわとゆがんで溶けていくだけの虚ろな白。
　眩しすぎて見ていられないから、ぎゅっと目を閉じる。
　ワンピースに、雫が落ちた。
　ねえ、お父さん。
　わたし、お父さんの顔もはっきり思い出せない。
　でも……名前は、まだ覚えてたんだよ。

「あいつ、最後まで格好付け、やったんやな……」
たった数分の、けれど数時間にも感じられる沈黙の後、ぽつりと呟きが漏れた。
『すまなかった』と。伝えられた簡潔な言葉はあまりにもストレートで。
だからこそ、もう取り返しがつかない。
観鈴とあいつと、三人で水族館に行く約束。一緒に食事をする約束。
長年のしがらみを越えて、ようやく笑えるようになったかもしれない矢先。
「アホちゃうか……ホンマもんの、筋金入りのアホやないか」
死んだらなんにもならない。前に進めない。
だけど、なあ、アホは自分らなんかな。
子供みたいにはしゃいで。
みんな怯えながら殺し合っているのに、ぬくぬくと日常の真似ごとに浸かっていた。
その罰なんだろうか。
無茶苦茶な思考展開だと分かっていてもそれでも、
「……あんまり、自分を責めないでください」
あさひのよく通る声に、思わず顔を上げた。
彼女は唇を噛んではいたものの、その表情には何か決意のようなものが見えた。
「橘さんは、私を、ちゃんと守ってくれましたから。不安で怖くてダメになりそうだった私を、この世界に引っぱり上げてくれた。それから晴子さんたちに会えて、私また笑えるようになりました。観鈴ちゃんと晴子さんに会ってなかったら、とっくに壊れてたかもしれないです。あなたたち家族が居なかったら、こうやって話すこともきっと出来なかった」
ゆっくりと優しい声で、あさひは話す。子守歌のような声。
「ありがとう、って……本当に、感謝してます」
野に咲く小さな花にも似た、笑顔と合わさってますます輝きを増す、聞く者の感情をぐらぐらと揺らす、彼女の声の力。

「あさひちゃんは、すごいね」
ふと気づけば。
顔を涙でぐしゃぐしゃにしながらも。
「あさひちゃんは強い子だよ。わたしよりずっと」
観鈴が……笑っていた。
「ぶいっ、だね」
声優って、ホンマに……人の心、動かせるんやな。
せやったらうちらももう一度前見て、歩けるかな。
諦めんと、頑張れるんかな。

「……なぁ、あさひちゃん。信じてる人、おるん？
この人だけは助けたい、この人にだけは会わないと悲しい、そんな人」
「え？」
突然振られた急な言葉に、あたしは間の抜けた声を出すしかできなかった。

「うちと観鈴にはおるんよ。ちょっとの間やけど、一緒に暮らした居候が」
「すごく面白くてね、ちょっとヘンだけど優しい人だったんだよ」
えっとね、飛んでるセミも取れるし、力持ちだし、宿題も手伝ってくれるし、テレビも見たし。
まくしたてる観鈴ちゃんに、ちょっとびっくりしていた。
「で、これからな、そいつ探してみよかー、て思いついたんや。どうせ誰かにやられてまうんやったら、せめて悔いなく生きたいやろ？」
「…………うん、できることしたいよね」
そこでようやく、唐突な話の意味が、なんとなくわかった。
こんな女の子まで、生き抜くことを決めたんだ。
「あさひちゃんも一緒に行こう。きっと一人より楽しいよ」
「観鈴の言うとおりやで。旅は道連れて言うし」

さっきまでの沈痛さが嘘のように、二人は明るく話す。
　気を遣ってくれてるんだ。もうこれ以上悲しくならないように、努めて元気に。
「な。ここの台所で食べられそうなもん探して、そしたら三人で行こ。あんたもうちらの仲間や。今さら嫌やなんて水くさいこと言わせへん」
　嬉しかった。
　こんなに優しいこの人たちに会えて。こんなに、温かい言葉をかけてもらえて。
「ね、もうお友達だよね」

　そういえば。
　ファンレターをよくくれた珍しい名前の彼は、もういないけど。
　あたしを好きだと言ってくれた彼は帰らないけど。
　伝えてくれた思いは心の深いところに残るから。
　私は彼の分まで、橘さんの分まで、出来るところまで頑張って生きようと思う。
　この家族と一緒に。
「はい。……私で、良ければ」
　頷きながら浮かんだ大事な人の姿は。
　即売会で出会った、あのやさしいひとだった。

294　優しい嘘

「………」
　楓がそのままの姿勢で女を見下ろした。
　――この島でこの状態ではもう助からないだろう
　それほどその人は傷ついていた。
「あら、あなた……追ってきたの？」
「はい……あの話を知っているあなたが生きている

のは……都合悪いですから」
「……そう」
南がいつものように、笑って。
「ただね……夢を叶えたかったんですよ。私の夢をね。こみパのような、大きな即売会を――」
南と主催者の間で、どんなやりとりが行われていたかは分からない。
だが、南の表情は終始穏やかなまま。
「ひとつだけいいですか？　どうせ死ぬんですから、どうだっていいと思います。嘘も方便ですし。私は改心した、そう思ってくれませんか？」
楓が無表情に頷く。
「別にどうだっていいんですよ。私は……どんな理由があろうと……ジョーカーなんですから」
「……」
「ただ、最後には……夢を見させてあげたいじゃないですか」
「……そうかもしれません」

南が最後に、彩の最後に果てた場所を一瞥し――。
傷つきすぎたその表情は、もう楓には分からなくて。
「殺るんでしょ？　どうぞお好きに。この状態じゃ、どうせ助かりませんから。このまま生き長らえてもつらく、痛いんですよ……」
本当に最後まで変わらぬ口調。
「はい」
楓の鉄の爪が光る。
「和樹さん達にも嘘をついてくださいね」
ドシュッ！
同時に楓の爪が南の胸に深く食いこんだ――。
（……本当は誰よりも哀しい女性だったのかもしれませんね）
楓は南の亡骸に軽く会釈して、また森へ消えた。

八十番　牧村南　死亡
【残り53人】

295 relay

江藤結花・来栖川芹香・スフィーの間には、何とも言えない重い空気が流れていた。この島に来てからまだ人が死ぬ場面を見てこなかった三人にとって、長谷部彩の死は、苦楽を共にしてきた仲間の死という事実以上に、受け入れがたい現実として三人の胸に深く刻み込まれていた。

うつろに歩く三人の進む道、その道の脇に、一人の少女は息絶えていた。

もう何度も見た光景。これまでは無視して通り過ぎていたのだが、その少女の横顔を見た結花が、

「あっ、この人……」

ゆっくりと歩み寄り、顔をのぞき込む。

「やっぱり……、そうだ」

静かにつぶやく。

「昨日の夜中、私を斬りつけようとした人」

深山雪見の事だった。ただ、結花も他の二人もその名前は知らない。

結花は、昨日の出来事を思い出していた。

あの時は、切羽詰まった表情で、私にサバイバルナイフを向けていた少女。でも今の表情は、どことなく穏やかで、落ち着いた感じ。

そこに、少しだけ救いを見た気がした。

「この子も、誰かに殺されたんだ……」

「……」

「もう、私たちには止められないのかな。このゲーム」

「そんなことないよ」

とスフィー。

「私、許さない。このゲームを動かしている人も、それに乗って人殺しをしている人も。だから、早く結界を解こうよ」

「うん」

「……」
すぐ近くに生えていた花を二、三本ちぎり、そばに手向ける。
脇に落ちていたライフルと、荷物を手に取った。
「誰が殺したか解らないけど、この仇は私たちが取ってあげる。きっとね」
「……」
「そうだね。ゲームを早く終わらせよう」
三人はゆっくり立ち上がり、決意も新たに歩き出した。

296 反転

緊張感は、長くも続くはずはなく——
「みゅーっ、おなかすいた……」
林の中で座り込み、繭はぼやいた。
幼い精神構造をしている繭にとって一時の感情というものは長く続かなかった。
新たに押し寄せた空腹感に恐怖が負けていた。
「みゅーっ……」
困り果て、鞄の中を探る。
中に五つのキノコが入っていた。
「……うー」
先程までの自分の鞄に、こんなものが入っていたのか？
そんなことはどうでもよく、キノコをこのまま食べるかどうか、悩んでいた。
「……」
しばらく、キノコとにらめっこ。
やがて、意を決したようにキノコを手にとり——
「ぱく」
口の中へ放り込んだ。
「さて……これからどうしようかしら」
繭はひとりごちた。
その声に、先程までの幼さは、全くない。

（とりあえず、この馬鹿馬鹿しいゲームから、生きて帰らないと。でも、そのために人を殺すなんて……最低ね。何人かで集まれば行動のとりようがあるかもしれないけど。見ず知らずの人間を信じるほど、甘くもなれないしね。浩平さんや瑞佳さん七瀬さん。確か見覚えがある。探そう、この人達を。それ以外の人には、絶対に見つからないように行動しましょう。私には、武器がないのだから――）

数秒で今後の方向性を決める。

そんな自分の思考に違和感を感じることはなかった。

続いて周囲の木々を見渡し、そのうちの一つに近付いた。

（こっち側だけに苔が生えている……ということは、太陽の当たらない北はこっち……）

方角を特定し、木々の間から覗く太陽を見た。

（この季節でこの太陽高度。時刻は三～四時ってところかしら）

ある程度の目安をつける。この間、わずか十秒。

荷物から地図を取り出し、林の場所と島の位置関係を頭にたたきこむ。

（さ、そろそろ行こうかしら。浩平さん達、無事だといいけど）

現在位置と時刻を特定してから、荷物を持って立ち上がった。

（それにしても……私ってこんなキャラじゃなかったわよね。このキノコを食べたから？　そうとしか思えないけど、非現実的すぎるわよ。とにかく、効果が切れることもあり得るから、大事にとっておかないとね）

297　傀儡は踊る

（なんて、無様な！）

孤影が駆け抜ける。速い。

少し近付けばそれが、長身の女性だと判る。手には散弾銃。更に近づけば、冷たい美貌を苦悩のために歪ませているのが判る。
彼女の名は篠塚弥生（四十七番）。
彼女は常に人生を己の力で――わずかに例外もあるが――切り開いてきた。素質もあったろうが、そのための努力を惜しまなかった。高度な知性も、運動能力も、克己心なくしてここまで鍛え上げられはしなかっただろう。
それが今では、下らぬゲームのために利用されている。猟犬として。
他人はドーベルマンのようだと言うかもしれない。だが彼女は、狼でありたかったのだ。首輪も、檻も必要ないのだ。
しかし今、彼女はあえて首輪をはめている。
（九人、殺す）
罪を犯すのは、怖くない。
今までだって、日向ばかりを歩いてきたわけではない。
自らの夢のために。あえて私は、傀儡となった。
『あ、来た来た、やっと戻ってきたわよあのアホ』
少女の声に足を止める。
木陰に身を隠し声のほうを見ると、そこには二人の少女が立っていた。手前の一人は本を、奥の一人はタライ（？）を携えて道の奥を見ている。
視線の先、はなれた所に少年。銃を持っているようだ。
目を瞑り、大きく息を吸い、シナリオを考える。
今ここで、少女たちを始末するのは簡単だ。
しかしそれ以上を狙えば、次弾装填の間に少年に撃たれるだろう。
可能ならばここで、三人殺しておきたい。
少女二人を殴りつけた隙に少年を撃つ。これはどうか。手前の少女を後から蹴りつけ、奥の少女もろ

とも転倒させる。少年にとっては少女達の背後から起こる出来事だから、感知されにくいだろう。
少女達は、少年のあとで始末すれば済む。本やタライ(?)に後れをとるとは思えない。
ゆっくりと息を吐き、再び大きく吸い――息を止める。目を開く。
不確定要素は多いが、迷いはない。
自分を信じて行くのみだ。
(――よし!)
弥生は飛び出した。ひとつの殺人機械として。

(くそう、高槻め!)
泥だらけになりながら、獣道を行く黒い影。
ここに来て何度思ったか知れぬ台詞を、こころの中で繰り返す。
高槻の放送により槍玉に挙げられ、全員に狙われる獲物として怯え、殺し、騙し続けて、今を生きている。

この憐れな男の名は巳間良祐(九十三番)。
彼は教団に身を投じ、熱心な信徒として、優秀な研究者として貢献した。過去を捨て、家族を捨て、我が身も捨てて教団のために働いた。それが今では、ゲームの駒。主催者の、高槻の傀儡。
(高槻、俺の事がそんなに気に食わなかったのか?)
総じて高槻以上のポテンシャルを示しつづけてきた良祐だが、教団の覚えはさほどめでたくない。高槻ほど、世渡りが上手くなかったのだろう。
(それなら、お互い様だよな?)
薄く笑う。自分はこんな笑いをする人間だっただろうか? 晴香と一緒に笑っていた頃は――どうだっただろう?
(もう、忘れたか……)
とにかく、今は生き残る事だ。そのために、殺すことを躊躇わない。どうせ皆、自分を殺しに来る。殺し殺して、高槻をも殺す。それでいい。

良祐は様々な可能性を考慮した。
まず危険なのは銃を所持する者だ。自分の銃を見つめながら考える。これがなければ、今までだって一人も殺せなかっただろう。
それから、能力者。そして訓練を受けた者。これらの者達と正面から戦うのは不味い。なるべく不意打ちやだまし討ち、もしくは混乱に乗じて殺すように計画しなければ危うい。
ズドン!!
銃声。大きく、近い。重ねて悲鳴が上がったような気もする。
『ふざけんじゃないわよオバサン!』
ドスの聞いた声が聞こえる。どうやらこのまま進むと林道に出るようだ。
少年が倒れている。離れたところに銃。
これは、チャンスだろうか?　上手く立ち回れば、多くの危険要素を排除できるようだ。
何より銃が手に入るのは、見逃せない。
(落ち着け、そして間違うなよ、良祐)
自分にそういい聞かせ、握った拳銃を隠しながら、良祐は林道へ踊り出た。
運命の悪戯だろうか。
二人の傀儡は、ほぼ時を同じくして浩平たちに襲いかかったのだ。

298　形而下の闘い——前哨

正直言って、強がりだった。
ただ、私がめそめそしていたら、相沢君はなかなかここを離れられなかっただろうから。
私は、彼の背中が遠くなっていく様を、ぼおっと眺めている。
「……い……ない」
すると、横から少年が語りかけてきた。
「……ここで立ち止まっちゃいけない」

私にだけ……他には誰にも聞こえないくらい、密やかに。
「確かに友達が殺人を犯した、なんて言われたら落ち込むのが普通なのかもしれない。……だけど意味が無い生が無ければ、意味がない死もまた無い。誰もが、世界の礎になっていくんだ。綺麗事じゃなくて、真実としてそうだ。今、この瞬間の僕らだって、そういう風に死んでいった彼らによって生かされているのと同じ。……そうでなくても常に人間は、いや、生命は何かを犠牲にして生きているものさ。それが今のようにより分かりやすい形になっただけ。だから……もっと前向きになっていい。君にとって本当に大事なことを追いかけて構わないんだ」
「私にとって……大事なこと……」
小さくなっていく背中に、響いてくる囁き。
「傷ついているのは誰なのか。苦しんでいるのは誰なのか。……君が本当に助けたいのは誰なのか。その気持ちに忠実でいい。誰にも文句を言われる筋合いは無い」
「私にとって……大事な人……」
「それに……君がそんな表情をしていれば、その子が戻ってきたとき、きっと悲しむよ」
――茜。
「その子が傷ついているのなら、君はそれを癒してあげなきゃいけないはずさ。違うかい？」
まるで、見透かされたように、少年の言葉が心の奥底で響いた。
少年がこっちを向く。変わらない、笑顔のままで。
……違ってない。全然違ってない。
私が茜を好きだって言う気持ちに、これっぽっちも偽りはないし、これっぽっちも揺らぎは無い。
「――私は、茜の帰ってくる場所になりたい」
涙が、零れた。
――それは相沢祐一と別れてすぐの、二人の会話。

「……ま、そう浮かない顔をしてるものじゃない」
え、と私は振り向いた。
相沢君が立ち去って、その姿が見えなくなって、少年の囁きを聞いて……それからさらに後のことだ。
少年が私を覗き込むようにして笑っている。
浮かない顔……していたのだろうか。よく分からない。
少なくとも、自分では気持ちを切り替えたつもりだった。でも、表情までは上手く切り替わっていなかったみたいだ。
少年はちっちっちっ、と指を振る。
「こう言っちゃなんだけど、見え見えだよ」
……と、言うよりも、あれだけ大泣きしたんだから、そりゃあちょっとやそっとじゃ変わらないよ。
……そう言い返してやった。
「なんだ、自覚はあったんだ」
「うっさいわね！」
私は顔を赤くして彼に叫んだ。
……人前で声を上げて泣いたことなんて無かったもの。しかもよりにもよって相沢君の胸の中だなんて……。
「相沢君ファンの子に殺されちゃうよ……ホント」
あえて茜とは言わない。ううん、言えない。だって、全然シャレにならないんだもん。
「ふうん、彼、人気があるんだね」
少年が感慨深げに唸った。
「さあ？　どうなのかしらね。相沢君とは一年しか一緒にいなかったし、まぁ……」
私はあさっての方向を向いて言った。
「少なくとも、他の人よりほんの少しは仲良かったかな」
「茜、……っていう人も？」
私は、その台詞に思わず口ごもる。
「……そうだね。でもほら、茜はあんなだから、ちょっと初対面の人だととっつきにくいところがあってね……って、そう言ってもあなたには分からない

よね」
「そうだねぇ」
少年は、ははっと苦笑いをした。
「まあ、そういう人なの。それで……まあどうして相沢君が茜のことを気にしだしたのか、未だに分からないんだけど、でも」
私は空を見上げた。
「嬉しかったな。だって、その頃茜を名前で呼んでくれる友達はいなかったから」
……中学を卒業してから、茜はより他人というものを拒絶し始めた気がする。その理由は分からない。まさか、相沢君の転校のせいだったなんて言わない。……でも、違う高校に進んだ私に出来ることは、せいぜい授業をサボってあの子の学校へ遊びに行くことくらい。……そのくらいしか出来なかった。
「どうなんだろう。私、ずっと茜とは一緒だったけど、そのくせ全然あの子のこと分かってなかったのかもしれない」
大事な時はおいてけぼり。あの子が一番苦しい時に、私は傍にいて上げられない。……今だって。
「……つらいかい？」
「……つらくない」
……わけ無いでしょ。言葉にならなかった。
「……ごめん。元気付けようと思ったんだけど、どうも失敗したみたいだ」
そういって、少年は決まり悪そうに頭をかく。
「どうも女の子って苦手なんだよね。いや、別に男の子に慣れてるってわけじゃないよ。変な目で見ないでよ、僕はノーマルだよ」
別に、私はそこまで思考が追いついていないのに、この少年は勝手に喋って勝手に狼狽している。その様子が……なんだか、とても珍しいような気がして……私はほんの少し、口元に手を当てて笑った。
「笑わなくったっていいじゃないか、こっちは真剣に弁解してるって言うのに」
——ほら、こんなとんちんかんなこと言ってる。

「全く、さっきみたいに黙ってれば良かったよ。僕はあまり話をするのは得意じゃないんだ」
そう言って、今度はほんの少し怒った素振りを見せる。
「分かった……分かったから」
私は少年をなだめた。目尻には涙が溜まっていた。
「なんだ、君は僕のことを見て泣くほど笑ってたのかい？」
「いや、そんなことないよ。ホントに」
本当に、どこまで本気なのか分からない。
……でも、ほんの少し救われた気もした。
「ま、いいよ。元気はでたかい？」
「出たよ、ありがと」
「どういたしまして。道化を演じるのはうまいもんだろう？」
そんな感じでこんどは少年はすまして見せた。
「まだ演じてるつもり？」
私は笑ってそう言った。

「心外だな、これは演技じゃないよ」
そういう彼の口調はほんの少し不満そうだった。
「じゃあ今度は君が話の続きをしてよ。何度も言うけど、僕が話が苦手なのは本当なんだ」
「しょうがないわねぇ」
私はふぅと息を吐いた。
「でも、もうあまり話すことは無いかもね。高校に入ってからは、さっきも言ったけど別々になっちゃったから。それでもまとわりついたけどね」
「あはは、頑張ったんだね」
「そりゃそうよ、なんたって茜には私がついていないと」
——逆だったかもしれないけど。
「でも高校に入ってからは案外楽しかったのかもね。折原くんとかとも知り合えたし」
「折原くん？」
「あ、うん。男の子でね。なんていうか……そうね、一言で表すなら、ずばり変な子」

「うわぁ」
少年は不可解な顔をした。……的確だもん。
「おもしろい人だよ。うん……この島にもいる。もしかしたら、どこかで遇えるかもしれないよ」
ちょっと、自分でも分かったけど、声が沈んだ。
「そっか……」
少年は頷いた。……この人とだったら、きっと折原君も仲良く出来ると思う。……心から。
「ま……彼も大切な友達だよ。茜のことを名前で茜って呼んでくれる貴重な……ね」
少年は、黙って聞いていた。
「……その、茜さんは、なんて苗字なのかな」
「茜？　さ…………………………………」
「さ？」
「……………………………………止めた」
「はい？」
「苗字教えたら、絶対あの子のこと苗字で呼ぶでしょ」
「え？　え？　え？」
少年は困った顔をしている。私はそれを見てちょっと楽しくなった。
「だから教えてあげない。あの子のこと名前で呼んであげて。茜、って」
「いや、でも」
「何よ、嫌だって言うの」
「いや……」
「ほら嫌って言った！」
「いや、これは違うって……」
「何よ、はっきりしなさいよ」
私はつん、とそっぽを向く。……もちろん演技で。
「いや、僕はその茜って子とは面識が無いし」
「私とはあるでしょ」
「え、あ、う、うん」
「じゃあ問題なし」
「ど、どうしたらそういう結論になるのかな」
「もう、私の友達は茜の友達、茜の友達は私の友達。

故に呼び捨てＯＫ、これ定説よ、知らないの？」
　そんなの知らないよ、そんな感じの反論が来ると思ってた。でも違った。
「友達……？」
「そうよ」
「……僕のこと、友達と呼んでくれるのかい？」
「え、……あ、うん。……ダメ？　もうすっかり私はそのつもりだったんだけど」
　今度は私がしどろもどろする番だった。思わず、両手を背中で組んでもじもじしてしまう。
「そう」
「そう……ってそれだけ⁉」
「ありがとう」
「っ……」
　……不意を突かれた。彼は、私の目をまっすぐ見つめてくる。
　……頬が、赤くなるのを感じた。
「……僕、何か変なこと言ったかな？」
　不安気……と言えば一番近いんだろうか、なんとなく余裕の無い表情で彼は私を見る。
「……変よ、友達だって言ったくらいで、そんな」
「そうなんだ」
　少年はそう言うと、足元にあった小石を蹴った。
「僕には、今まで友達なんて呼べる人はいなかったから」
「うそ」
　私は思わず反射でそう言った。
「ホントだよ。同居人はいたけど、でも友達と呼べるような人は僕にはつくれなかった」
　不器用なのかな、そう言って少年は笑った。今まで見た中で一番愁いを帯びた笑いだった。
「そう……じゃあ私があなたの友達第一号って訳ね」
「そうなるかもね」
　少年は肩をすくめた。
　どうして、とは聞けない。彼のことを気遣ってと

いう訳ではない。ただ、彼の心の中にあるものを知って、それを背負えるだけの自信が無かった。
……でも、それを覗きたい気持ちも十分にあった。
「いいじゃない、光栄よ」
私はそう言って右手を差し出す。
「……ん？」
「右手」
「右手？」
「出すの！」
ホントに、どうしてこの辺りのことに要領が悪いのか。
「あ、うん」
そう言って少年があわてて右手を出す。私はそれを握った。
「握手」
「……」
「これからも、よろしくね」
……ちょっとだけ、恥ずかしかったかもしれない。

でも。
「……うん」
……彼は、ちゃんと握り返してくれた。
その温もりが、たまらなくいとおしく感じた。

299 剣風

「あ、来た来た。やっと戻ってきたわよ、あのアホ」
辛辣な口ぶりとは裏腹に、大きく手を振る七瀬。
「もう、そんなこと言うとまた喧嘩になるよ〜」
苦笑を浮かべ、共に浩平を迎える瑞佳。
この劣悪な環境下においても。
三人寄れば心強く、そして平和な日々と変わらず生きていけた。
そんな七瀬と瑞佳の前に。否、背後から。災いが襲いかかってきたのだ。
「きゃあっ！」

「ぅわっ！」
無防備に立っていたところを、腰に強烈な蹴りをくらい、吹き飛ばされる瑞佳。
巻き込まれる七瀬。
ズドン!!
そして銃声。
何が起こったかわからない。しかし、そこにいる人物は危険だ。
七瀬は瑞佳に巻き込まれ倒れながらも、その人物を視認していた。女だ。
あの大きな銃を撃った!? 折原は無事!?
しかし、それ以上の心配をする余裕はなかった。
発砲するなり、女は銃を振り上げ——叩きつける気だ！
「ふざけんじゃないわよオバサン！」
咄嗟に手にあったタライを投げつけ、混乱と痛みで行動不能に陥っている瑞佳をどけて、転がる。
手近な枝を拾い、素早く立ち上がる。
女は弾を装填している。今、戦わねば全員死んでしまう！
間合いは三歩。
そう、今なら「間に合う」はずだ。
七瀬は現在の乙女チックな外見に扮する以前は、剣道をやっていた。故障がなければ、未だトップクラスだったかもしれない。この間合いなら、普通の人間に負ける事はない、はずだ。
「せやッ」
鋭く踏み込み、顔面にフェイントをかけて脇腹を痛打する。
計算外の反撃に、女は顔を歪ませる。
しかし、装填は完了している。つまり、引き金を引かせちゃいけない。
休んじゃいけない。休めない。
折原が来るまで——折原が無事なら、だけど——休まない。

手打ちで構わない。とにかく速く打ち込む。
しかし女は銃身で受け止め、かわし、時折打ち返しさえしてみせる。この距離ならば私が優勢。けれど一度離れればお終い。
私は、この女に勝てるのかしら？
ブランクが七瀬を弱気にする。
「う、ううーん」
背後で瑞佳の声がする。
そうだ、少なくとも瑞佳だけでも逃がさないと。
折原は何をして、いやそもそも無事なの？
ガキン、と音を立てて枝と銃身が交差する。互いにぐぐっと力をこめる。
「瑞佳！　折原のところへ走って！」
振り向かずに、視線は女のほうに向けたまま叫ぶ。
「な、七瀬さん！」
「早く！　早くあのバカ呼んできて！」
いつもだったら呼ばないでも現れて、おせっかいかますあのバカ。今、乙女のピンチに現れないで、どうするっていうのよ？
「う、うん！」
瑞佳の走り去る音がする。
――これって、また貧乏くじ引いてるのかしら？
七瀬は今更のように、そう思った。
でも、構わない。あたしだけ生き残って、それでどうするっていうのよ？

300　さよならは別れの言葉

林道を、小走りに進む浩平。
迎える長森と七瀬が手を振っている。
仲間が増えた。しかも強そうだし、先行きの展望もある。助かる可能性が増えたというものだ。
行く手で二人が手を振っている。俺はあの二人を

守る、そう心に決めてどれほどの時間が経っただろう。
きっと三人揃って、帰れるさ――そう確信していた。
二人が、倒れるまでは。
突然長森が前のめりに倒れこみ、七瀬を下敷きにする。後に女が立っていて――銃口がこちらを向いていた。
（マジか⁉）
咄嗟に左へ跳び、銃弾をかわそうとしたが、バラバラと右手を中心に弾が食い込む。散弾だった。
「ぐあっ！」
鮮血を振り撒き、銃を取り落とし、浩平は倒れた。
（く、くそったれ……！）
打撃音が遠く聞こえる。誰かが戦っているのだろうか？
撃たれ、混乱し、体が上手く動かない。
耳がいかれているのか。だが、今立たねば。
そうだ、長森が、七瀬が、危ない！
落とした拳銃に目をやる。
こいつがあれば、みんな助かる。
しかし。
希望を絶つかのように何者かが拳銃を踏み押さえる。
「⁉」
黒いコートの男が立っていた。なんだって管理側の人間が邪魔しやがる？
怒りが浩平に力を与えた。一息で立ち上がり、無事な左手で男の胸倉を掴む。
「てめえ、何しやがる⁉」
男は意外そうな顔をしたが、余裕を見せて言った。
「ふむ。生きていたのか」
「何だと⁉」
興奮する浩平を現実に引き戻すようにカチリ、と金属音が響いた。

コートの下に拳銃。これは、よけられない。
「それじゃあ、これでさよならだ」
額に汗が、右手に血が、つうっと滴り。
顎と、指先から、ぽとりと垂れ落ちた。
そのとき声がした。
「浩平ー！」
コートの男が動揺する。慌てて長森のほうを見る。
一瞬の隙。
「こんの野郎！」
被弾した右手で、力任せに殴りつける。
コートの男を吹き飛ばし、転倒させるが、自らも痛みに怯む。
それでもどうにか拳銃を拾った。
「浩平！　七瀬さんが、七瀬さんが！」
駆け寄る瑞佳は、明らかに混乱していた。
「来るな長森！　こいつは銃を持っている！」
浩平は長森を制して叫ぶ。狙いが遅れる。
ドドン！

倒れたまま男が発砲し、遅れて浩平も発砲する。

この距離ならば。
外れるわけは、ない。

(最悪ね……)
七瀬は徐々に受けに回っていた。
そもそも枝は太く、握りにくいため握力を消費する。銃撃のプレッシャーに怯えながらの戦いは、精神を消耗する。乙女生活によるブランクは、スタミナを奪っていた。
そして何より、古傷が痛み始めていたのだ。
もしここで、間合いを離されたら。
もう、飛び込めない。
般若のような形相で攻め込み始める女の打撃を、どうにかそらしながら、七瀬は焦りを隠して応戦する。

ガシン！

何度目かの鍔迫り合い。だが、今までのようには力が入らない。
押し込まれ七瀬は苦痛に顔を歪める。
そのとき。
ドドン！
重なる銃声が届く。ついに七瀬の集中が切れた。
「折原⁉」
叫ぶ七瀬に女の脚が上がる。左脇に蹴りが入り、よろめく七瀬を残して女が後に飛ぶ。
ついに、間合いが離れた。
「貴女を評価しなかったのは、私の失策でした」
そう言いながら、女は息を整え散弾銃を構える。
「でも、これでお別れです」
負けた——肩で息をしながら、腕を下ろす。もう、動けない。
「オバサン、なんであたしを殺すのよ」
今更尋ねても、どうにもならないけれど。なんとなく口にした。

しかし女は意外なほど真剣に考え、答えた。
「大切な人の——二人の、幸せのために」
ちょっと驚いた。七瀬は諦めの苦笑交じりに呟く。
「なによ、それじゃあたしと同じじゃない」
今度は女が驚いた。異常なほど、驚いていた。
「七瀬ええええ！」
ドン！　ドン！
その虚をつく形で折原の声、そして銃撃。
今だ！　動け動け！　動け身体！　そう念じて踏み込み、小手を打つ！
「せいッ！」
バシン！
紫電の速さで右手甲を叩く。散弾銃が跳ね落ちる。
七瀬は即座にそれを蹴り飛ばし、緊張の過ぎた震える手で構え直す。
もはや虚勢でしかない威嚇だったが、そうする他になかった。

「くそおおお！」
折原が叫び、泣いていた。何故泣くの？　その意味は？
七瀬の迷いを他所に、女が溜息混じりに呟いた。
「ほんとうに、失策でした」
今度こそ、これ以上動けない。今でも女のほうが余裕がありそうだ。
頭が回らない。だから、七瀬はただ答えた。
「そう、みたいね」
その言葉の、何が面白かったのか。女は小さく笑い、身を翻すと去っていく。
「さよなら。生きていたら、また逢いましょう」
「……あたしは二度と、遭いたくないわ」
七瀬は、枝を取り落とした。

301　その頃綾香は……

「……まいったわね」
――あとで山を降りたところで落ち合いましょう！　絶対来るのよ！
自分の言葉を思い出す。
だが、いつまでたっても彼女達は来ない。
「今ごろ何やってるのかしら……」
最悪の結果を考えないようにしながら綾香はひとりごちる。
山のふもとのそれほど深くない洞穴……
危険を避けるために、芹香達を探す時など外に出る以外はここに隠れ潜んでいた。
「この島にまだこんな所が在ったなんて……まあ、感謝しなきゃならないのかしら？」
綾香の足元に倒れたまま動かない一人の女の子。
仲間と散り散りになった際、綾香はリアンだけを連れてここまでやってきた。
リアンの容態は、正直良くない。
それほど深くないはずの傷だったが、少しずつ傷口の周りが変色すると共に、生きているのが不思議

なくらいの高熱に見舞われていた。
「毒でも……塗られていた？」
綾香は残り少ない飲料水を手持ちのハンカチに染み込ませる。
南の手裏剣を思い出す。
今確かめる術はないが、それならば今のリアンの症状も合点がいく。たっぷりと水を含ませたハンカチでリアンの汗を拭き取り、そのまま額にそれを乗せる。
「そうだとしたらどんな毒なのかしら……」
見よう見まねだが、リアンの腕の傷口から上を、手ごろな布できつく縛る。
――手ごろな布……そんなものが洞穴にあるはずもないので、綾香のスカートを破りとっただけの代物だ。結構丈夫なのが救いか――
「解毒剤――そんなものが都合よくあるはずもないか……。私、なんて無力なんだろう……こんなとき格闘技なんてなんの役にも立たないじゃない。スフィー、舞さん達……そして姉さん、早く来て……！」
葵は、もういない。綾香の絶望と不安は既に頂点に達していた。
綾香はまだ知らない。舞が、そして佐祐理が、もうこの世にいないということを。

302　最後のことば

「おおおおお！」
号泣が、聞こえる。
七瀬は痛む腰を押さえ、のろのろと散弾銃を拾った。
このゲームの現実を、ようやく体感したのだと思った。
振り向けば、浩平が地を叩いている。
涙を流していた。

号泣が、聞こえる。
その奥に黒いコートの男と、瑞佳が……倒れていた。
視界が暗転する。ぎりりと奥歯をかみ締める。
涙が溢れていた。

号泣が、聞こえる。
二人の目が合う。
七瀬は震える膝を意志の力で抑えつけると、大股に浩平に歩み寄り、引き摺り上げた。
そして胸倉を掴み、叫ぶ。ちょうど浩平が、良祐にしたように。
「何やってんのよ、このバカッ！」
「ななせぇ……ながもりが、長森が……俺を、俺をかばって！」
「うるさいッ！　泣くな！　聞きたくない！」
手を離し、浩平をひっぱたく七瀬。
その七瀬も、ぐしゃぐしゃに泣いていていた。
「バカッ！　バカッ！」
何度も何度も、ひっぱたいた。
やがて浩平は膝をつき、七瀬に抱きついて、泣いた。
七瀬も浩平の頭を抱いて、泣いた。

号泣が、聞こえる。
その悲痛な叫びに、小さく細い声が重なった。
「こう、へい……？」
二人はぴたりと泣き止む。
「長森!?」
「瑞佳!?」
微かな希望の光に、二人は慌てて駆け寄るが……同時に歩みを止めた。
血を吐いていた。目に光がない。
これは助からない。そう思った。
「こう、へい？」
「お、おう」

「いつも、いつも、ありがと……ね。待っててくれたとき、うれし、かった……よ」
「なんだよ、それ」
「もう、駄目、みたい、だから……ね」
「何言ってるんだよ、ばか。お前がいなくなったら、毎日遅刻しちまうじゃねえか」
「だいじょぶ、だよ。ななせさん、が、いる……もん」
　七瀬が息を飲む。
　どんなに瑞佳を見つめても、視線だけが合わない。
　もう見えていない。そう感じた。
「ね……？　だいじょぶ、だよ、ね？」
「瑞佳が大丈夫なら、大丈夫、だよ……」
「そうだぞ、コイツには無理に決まってるだろ、このばか」
「ええ、ずるいよ、そん、なの」
　ごぽ、と音を立てて、血を吐く。

「長森！」
「瑞佳！」
　呼吸が、浅くなっていく。
「ね、こうへい？」
「お、おう」
　血が、止まらない。
「大好き、だよ？」
「おう、おう」
　そして、最後に。
「——ぎゅって、して……」

六十五番　長森瑞佳　死亡
九十三番　巳間良祐　死亡
【残り51人】

303 ―――漸行

……なんというか、不思議な感じだった。
この少女と出会ったのは本当に偶然に過ぎなかったんだけど、しかし――
「ねえねえ」
くいくいっと服のすそを引っ張られる。
「ん、なんだい」
「お腹空いた」
――と、まるで十年来の友達のような気安さで。
そう、本当に不思議だ――
「まあ、あれだけ走ったり泣いたりしてたら、そりゃあお腹も空くだろうね」
「なによー」
ぷくーっと詩子は頬を膨らませる。
――不思議と、心地良い。
こんな気持ちになったのは、初めてかもしれない。
郁未と出会った時は……ＦＡＲＧＯという籠の中だったからか、こんな気持ちにはならなかった。
……それ以上に、彼女は悲痛だったからか。もちろん、あそこでは彼女に限ったことではなかったが。
「ごはんごはんっ」
「……はいはい」
僕は辺りを見渡してみる。すると、丁度脇道の先にひらけたところが見えた。
「じゃあ、あそこで休憩しようか」
僕はその方向を指差していった。
「はーい」
言うや否や詩子は駆け出して行った。
……奔放な女の子だ。でも、これがきっと普通なんだろう。僕はそういうことを何も知らない。
「はやくはやく」
着いた先で僕のことを手招きする。
「はいはい」
言われるままに、僕も少しだけ早足になる。

「君、まさか自分の食糧食べ尽くして、僕にたかろうとか思ってないよね？」
「失礼ね、ちゃんと残ってるわよ。詩子さんはそんなに大食いじゃないもん」
ま、別に僕の分をあげることにはやぶさかでないんだけど、とりあえず黙っていよう。
特に僕は食べる気も無いし。
「それならよかった」
そう笑っておく。そうするのが、この場では相応しい気がした。
そして僕らはそこに座る。つかの間の休憩を謳歌するために。

「ねぇ……、ちょっと気になったんだけど」
座るために僕が鞄を下ろしたとき、彼女がふとそう尋ねてきた。
「なんだい？」
「何であなた鞄二つもあるの？」
詩子の質問に、思わず少年はきょとんとした。
「ああ……」
ようやく合点がいった。
「歩いているときに、何か僕のほうをちらちら見てくると思ったら、それが気になっていたんだ」
「う、まあね……」
ちらちら見ていたことがばれていたと知って、詩子はちょっと口ごもった。
……まあ、当然か。
「落ちてたのを拾ってきたんだよ。誰も使ってないのなら僕が使ってもいいかなぁって」
僕は苦笑いをして言った。……わざと嘘をついた。
何で、そんなことを言ってしまったのか。
詩子に無駄な負担をかけたくなかったから？
……別に、言ってしまってもよかったんじゃないか、この鞄が形見だって。
でも、はばかられた。
確かに、僕が殺したわけではない。

……でも、これは僕の殺意の証明でもある。
そんなものをさらけ出して、この空気を壊してしまうことが、ひどく……惜しく思えた。
偽善、だろうか。
確かに、僕は彼女に隠し事をしてしまった。
でも、……それでも、言わない方が、いいような気がした。
「そうなんだ、もったいないことをする人もいたんだね……」
詩子は素直にそう言った。
……納得したのか、この子は？
「だったらさ、二個も鞄持ってる必要ないんじゃないの？」
「え、そうかな？」
「どうせ中身はほとんど一緒なんでしょ。そんなにかさばるわけでもないし、だったら、一つの鞄に全部詰め込んじゃおうよ」
詩子の提案は至極もっともなものだった。
でもね。
僕は心の中で苦笑しつつ付け加える。
僕はまだ、二つとも鞄を開けてないんだよ……と。
「ねぇ、やっとこうよ。私も手伝ってあげるからさ」
詩子はうきうきした様子で鞄に手を伸ばす。
なんだ、君がやりたかったんじゃないか。
僕は思わず苦笑した。
少し汚れていて、少し重い。
そんな鞄を見ていて僕は思う。
ところで……、どっちがもともとのボクの鞄だ？
「え〜とこれは水ね。でこれが食料……、ってちょっと、あなた何も口つけてないじゃない、一日飲まず食わずで歩いてたの!?」
詩子は、手近にあった鞄の中身を出しつつそう言った。
そりゃ開けてすらいないからねぇ……。
詩子は僕の葛藤になど気付きもしない

「あ……、うん」
詩子が突き出してきたパンを、少年は受け取った。
「食べてる間に、私が片付けておいてあげるから」
にっこり笑って、詩子はまた鞄とのにらめっこを始めた。
そんなにかさばるものはないと思うんだけど……。
「うわ、何これ⁉」
詩子が大きい声をあげた。
……僕の鞄の方を開けたか。
ちょっと頭を抱えたくなった。
もしかしたら気づいていないだけで実際に抱えていたのかもしれない。
「お、重いよ」
詩子が両手で取り出したもの、それは厚い辞書のようなものだった。
「……君の力で扱う分にはね」
嘆息して僕は言った。
「これ……本なの？」
「あ……。いや、水分は補給したよ。水道とか見つけたから」
詩子のセリフに驚嘆……というよりどうも非難の色が強いように思えた僕は、とりあえず自分を弁護しておくことにした。
「ダメよ！　折原君じゃないんだから二日も水だけで生活してたら死んじゃうんだから」
折原君？
……と、さっきも聞いた名前だ。
参加者名簿にも名前があったか。番号が早いせいか聞いたような覚えも無きにしも非ず。
どちらにせよ、なかなかひどい扱いを受けているようには思えた。
もちろん僕ではなく、その折原君、とやらが。
……最近苦笑することが多いな。
そういえば、名簿を見れば茜……の苗字も分かる……と思うが口にするのはやめておこう。
「ん」

「まあ……一応ね」
詩子はそれを少年に渡そうとした。
少年はそれを片手で軽く受け取る。
「辞典？」
「惜しい」
少年は苦笑した。詩子はちぇっ、と指を鳴らした。
「これはさ」
少年は表面のほこりを払いながら口を開いた。
「かつて教典と言われたものを模した、即ち〝偽典〟という奴さ」
ぱらぱらと本のページをめくりながら僕は言う。
詩子に向けたにしては、やや小さすぎる声だったかもしれない。
「な……、なんだかよく分からないんだけど、それって凄いの？」
驚き混じりに詩子が言う。
「さあ、どうだろうね」
僕はあっさり即答する。
「どうって……」
「まあ、ほら、教典だから。その宗教を信じていない人には無用の長物なんだよ」
それもそうね、と詩子は頷く。
「だから僕にとっては別に内容に興味なんか無い、だけど」
パタン、とページをめくる手を止め、本を閉じる。
「――これが、僕の武器なのさ」
少しだけ、誇らしげに言った。
「えー、これが武器なの？」
詩子が胡散臭そうに本を眺める。……次に僕を。
「……ね、念仏攻撃？」
「違うって」
僕はパタパタと手を振って否定する。
大体、仏教じゃないんだから。
「み、耳元で囁いて苦しめるとか……」
「……そりゃ、それで引き下がってくれるならいくらでも読んであげるけどさ」

そんな都合の良い敵はいないと思う。
詩子はまだじっと本を見ている。
「何、読んでもらいたいわけ？　君は」
「ごめんなさい、いいです、ごめんなさい」
泣いて謝られた。トラウマでもあるのだろうか。
「……まあもっとも、これで直接人を傷つけるには、角のところで思いっきりぶん殴るくらいしかないかもしれないけどね」
僕は角で人の頭を殴るジェスチャーをして見せた。
「うえぇ」
痛そう。と、詩子はあからさまに嫌な顔をして頭を押さえた。
「別に君のことを殴ろうってわけじゃないよ」
僕は微笑した。そしてそれを片手に持ったまま、さっき手渡されたパンを口に入れた。
「む」
詩子は僕の行動を見て、自分が何をしていたのか思い出したようだ。いそいそと鞄の整理に戻る。
「じゃあ、こっちの鞄に入れるよー」
「あぁ、うん。ありがとう」
詩子はその返事を聞いてから、もう一つの鞄に手を伸ばした。
「こっちの方もなんだか空だね……、あら？」
詩子が鞄の奥底に何か見つけたようだ。
「これは……写真かな、ほら」
詩子は薄い紙切れのようなものを差し出した。
なるほど、確かに表面処理がされてるようで写真には違いない。
僕は手に持っていたパンを全部口にかきこむと、空いた手でその写真を受け取った。
これは――何だ？
何か……建物が写っている。
やけに巨大で、それでいて鋭角的に聳え立っている。その建物をバックに。数名の人間が集まっている。
さしずめこれは記念写真なのだろうか？

全員見たことの無い顔――いや、一人を除いてか――だった。
真ん中には少し背の高めの青年と、小さな少女――郁美ちゃん――が、寄り添って立っている。
瞳に強い輝きを秘めた、何かを成し遂げた男の目だった。それを取り囲むように、ポニーテールの女の子が、緑髪でギザギザメガネの少し危険な笑みを浮かべた青年の横に、複雑そうな表情で立っている。
その隣では、なにやらゲームか何かの扮装をした女の子が、エプロン姿の小さい女の子とメガネにデニムの服を着た女の子と楽しそうに笑い合っている。
そうかと思えば反対の方では、なにやらちょっと豪勢なコートを着た女の子と、赤い上着にメガネ、なおかつハリセンまで装備した女の子が、おとなしげに佇んでいるもう一人の女の子をはさんで、激しく言い争っているようだ。
脇ではやたら体格がいい学ランを着た男と、穏やかに微笑んでいるなんだか……インカムやら一揃えの制服のようなものを着た女性も立っていた。
『――200×年×月×日こみっくパーティーにて』
「……何かのイベントの後みたいだね」
横から写真を覗き込んでいた詩子がそう言った。
「そのようだね……」
「へえ、なんだか皆楽しそうだね」
そう言っている詩子も、写真に感化されたのか楽しげな口調だった。
――本当にそうだった。
すこし揉みくちゃにされてはいたが、その写真からはなんだか溢れんばかりのパワーを感じた。
そう。まるでいても立ってもいられないほどに。
この写真の彼らは今を全力で生きていたのがよく分かる。
在りし日の……姿とでも言うのか。
僕は、涙が出そうになる自分を、懸命に堪えた。

……考えられない反応だったと思う。
「どうしたの？」
詩子は、今度は少年の顔を覗き込んでいた。
「…………いや」
僕はあさっての方向を向いて言った。
「ちょっと……まぶしかっただけさ」
「？」
詩子は不思議そうな顔をした。
生きることは……こんなにも輝いていたんだな。
……
…………
……………
!?
突然、振り返る。
「え……何？　どうしたの？」
荷物を詰め終わった詩子が言った。
「今……聞こえなかったかい？」
詩子のほうを振り向きもせずに少年は言った。
「聞こえた……って何が」
「……銃声」
……詩子の表情が凍りつく。
「……聞こえなかったけど……聞こえたの？」
「……」
僕は、応えない。
ごくり、と生唾を飲む音がした。
——はたしてそれは少年のものだったか、それとも少女のものだったか。

304　走る

七瀬が泣いている。オレの手の届かない遠くで泣いている。さっきまでオレを叩いたり怒鳴ったりして叱咤してくれた、強い七瀬の牙城は砂の山のように崩れかかっている。当たり前だ。友達が死んでい

く様を見つめることを余儀なくされたのだから。ただの女の子である七瀬が苦しまない訳がない。
目の前で幼なじみが逝く姿に直面したオレは、ひどく遠いところで七瀬が泣く声を聞いている。
「瑞佳ぁ……っ」
幼子のように長森の身体を抱きしめて泣き続ける七瀬も、目を閉じたままの、血で汚れているだけでとても殺されたようには見えない長森も、まるで夢の中に広がる物語のようだった。もっと言うなら、——言ってしまって良いのなら、自分たちが巻き込まれた戦いも、すべてが幻想のようだった。ただ一言七瀬に「泣くな」と慰めも言えない場所にいる。
認めてしまおう。自分たちには違いなく危機感が欠けていた。非日常の中にいることは理解していた筈なのに、それでもなお、自分たちだけは決して死ぬことなんてない日常の中にいるような、そんな無様な錯覚を感じていた。自分たちが夢物語の主役で、だから自分たちは必ず生きて帰れるのだと、心の深いところで思っていたのは事実だった。
結局のところ、残酷で冷酷な非日常と遭遇するまで、オレ達は日常から抜け出す事が出来なかった。
オレは思う。
結局、護ってやれなかったんだな。
何があっても護ると決めていた。世界で一番大事な人を、オレは何が遇っても護ってやらなければいけなかった。銃だって撃つ、人だって殺す。それが長森の為になるなら、躊躇うことなどなかった。実際、オレは人を殺した。長森の横で血を流し倒れている、黒いコートの男を。微塵も後悔していない。そんな自分を鬼畜だとも化け物だとも思わない。すべてがすべて長森を護る為の行為だったのだ。
けれど、あくまで長森を護るために殺した筈なのに、どうして長森までいなくなっている。
「折原、」
七瀬が真っ赤に腫らした眼でオレを見る。何かを言いたそうに。何かを言ってほしそうに。七瀬の顔

を、オレは真っ直ぐ見ることが出来なかった。
一歩踏み寄る。冷たくなった長森の傍に、オレは再び跪る。七瀬が何か言っている。けれど微塵もその声が聞こえない。長森の手に触れる、ずっと離さないでいたいと思っていた手。こんなに小さかったんだ。こんなに小さな手で、どうしてお前はオレなんかを守ろうとしたんだよばか。
「……畜生」
長森の手に残っていた蝋燭の火のようにかすかな熱までもが失せてゆく。喪失感がオレの魂に刀となって突き刺さる。
ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、長森。約束したのに——死んでも護ってみせるって。一緒に帰って一緒にまたバカをやって、幸せな年月をずっと一緒に過ごすって決めていたのに。
「瑞佳、みずか、瑞佳……っ」
また涙が零れ出す。魂までも枯れると思う程に流した涙がまだ流れる。瑞佳の笑顔。ずっと傍にあると願っていた笑顔。長森瑞佳は、本当に手の届かない場所に行ってしまったんだ。
「折原、……もう、あたし、イヤだよ、なんで、あたし達、こんなところにいるの？　帰りたいよ、イヤだよ、ねえ、」
永遠なんて何処にもなかった。そんな事はずっと前から知っていた。けれど、終わりがこんな形で訪れるなんて、想像もしていなかった。あるべき未来はもう潰えた。ならば、これからの未来はどんな未来になってしまうんだろう。
「もう、イヤだ」
七瀬が呟く。
「どうして？　どうしてあたし達は、ねえ、何してるの？」
オレは七瀬の、何かの冗談のように潰れ切った声に驚き、思わず彼女の方を振り返る。涙と涎と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔で、あらぬ方向を見てい

る七瀬がそこにいた。焦点の合っていない目でぶるぶると唇を振るわせて、あの張りのある高い声が百万年の昔のことのような壊れ切った声で、身体の震えも微塵も隠さず、己の細い肩を抱いて。
「――七瀬？」
「何で、瑞佳、倒れてるの？」
「七瀬、」
次の瞬間だった。
オレの心は氷の如くに凍てつく。
「――あは、そっか、そうなんだ」
突然七瀬に笑顔が戻ったのだ。ずっと泣きっぱなしだった七瀬に今までの涙が嘘っぱちだったように。けれど、オレは、こんな陰惨な笑顔をする七瀬留美を知らない。もっと言えば、こんな笑顔をする人間をオレは知らない。
「これは夢だったんだね。そっかそっか道理で。えへへ馬鹿げてるわよね。さすが夢だわ支離滅裂ね。夢みてるんだあたし。折原と二人きりの夢見てるよ。あたしこんな夢見るの初めてだよ。瑞佳殺しちゃったのは罪悪感でいっぱいだけどいいよね。大好きな折原とふたりきりでいられる夢なんだから。あたしの夢だもん瑞佳だって許してくれるよね？」
「何、言ってんだよ、七瀬」
「あはは。折原が夢の中なのに折角の二人きりなのに泣いてるよ。泣かないでよもうみっともない。あんたはあたしの王子様なんだよちゃんとしてよもう。てゆうか夢の中でくらいあたしのこと名前で呼んでよ。ねえ折原。あたしもあんたのこと名前で呼ぶからさあねえ浩平。留美って呼んでよお願い夢の中でくらい言うこと聞いてよ」
七瀬は、心底愉快そうに笑う。まったく焦点の合わない目で、オレの方を見ようともせずに。真っ青に染まった絶望がオレの心を支配する。見つめたくない現実が七瀬とオレとを襲う。
「七瀬！」
「大声出さないでよ夢の中でまで。でもそこらへん

が浩平らしいわ。あんたすごいバカだもんね。でもあたしはあんたのそんなとこがたまらなく好きだよ」
呆然とした顔でオレが見つめるのを、七瀬は楽しげな顔で笑う。――オレの声が届いているとは到底思えなかった。青い絶望が、瑞佳を失った喪失感の傷跡を、深く深く刻る。泥まみれの思考の中、(これでもう君は終わりなんだよ、ゲームオーバーなんだよ。三人のうちの一人でも死ねばこうなっちゃうってことくらい解ってたでしょ？　ヒロインを守れなかった時点で君が主役になることはなくなったんだよ)、そんな誰かの声がする。その声が子供の頃の長森瑞佳のものだと気付き、自分まで狂ってしまったのかと思う。
この世には永遠などない。すべてはいつか壊れていくもの。瑞佳が敢え無く壊れたのと同じように、七瀬もまた、
オレは堪らず七瀬を抱きしめる。もう二度と熱を生まない瑞佳の手と違い、七瀬の身体は熱かった。
「わわ。最高の夢ね。浩平が抱きしめてくれるなんて素敵な夢なんだろ。夢だって解ってるけど一生覚めたくないな。ねえ浩平。名前で呼んでよ」
馬鹿。
「もう。バカはあんたよ折原。あんたが名前で呼んでくれないならあたしだって名前で呼ばないからね。ったく夢の中でまで人をバカにしないでよー」
当たり前だろ、馬鹿なのはオレさ。オレは歯軋りしながらそう呟く。七瀬の耳元で、子供をあやすような静かな声で。そうさ、馬鹿なのはオレだ。結局オレは誰も守れなかった訳だからな。長森も、七瀬までも。何のために一緒に行動してたんだ。こいつらを危機から守るためじゃなかったのか？
手に力が入らない。思考が狂う。内からは長森の声、(すぐに七瀬さんの肩を抱いて慰めてたら七瀬さんはきっとこんな風にはならなかったよ、きっと七瀬さんだけは救えたのにね)、畜生、黙れよちく

しょう。意識が虚ろになっていくのを実感する。魂が弾けるような火で灼けて溶けていく。失血のためか。くそ、なんだこんな傷くらい、こんな傷くらい、ダメだ、眩暈を隠し切れない。実感する。自分自身の死も遠くないところに来ている事を。吐き気がする。眠気が襲ってくる、ああ、今目を閉じてしまえば楽になるだろうか。もしかしたら、今なら、永遠の世界に行けるだろうか。もうオレのことを強く思う人なんていないんだから、それにあの居心地の良い世界に行けば長森に会えるかもしれないんだから、そっちの方が余程幸せかもな、(そうだよ、こっちへ来なよこうへい、こっちにはみんないるよ、みんなみんないるよ)、ああ、そうだな。オレをそっちへ連れてってくれるか、なあ、

七瀬が笑っている。オレのすぐ傍で。

——オレを強く思う人なんていない？

まだだ。まだ、目を閉じてはいけない。歯を食いしばれ、寝言を言ってるんじゃねえよ。眠いとか死にたいとか甘えたこと言ってんじゃねえよ。この命は長森に貰ったものだぞ、どんなに無様でも長森が自分の命を捨ててまで守り抜いた命だぞ。オレはがむしゃらに、怒りのままに右腕の傷口を抉る。全身を走るショック死する程の激痛で目が覚める。

「七瀬。行こう」

オレは激痛を堪え立ち上がる。オレが立たないでいたら七瀬はどうなってしまう。こんなになってもオレのことを必死に思ってくれるこいつを忘れて目を閉じるだと、ふざけるなよ畜生。

「どして？」

白痴めいた返事をする七瀬。オレは七瀬に言う。

——立って、走って、走って、走るんだ。

右腕に走る激痛、そしてだらだら流れる血はたぶん今すぐはどうしようもない。止血するための医療品もないからこのままにしておく他はないだろう。

今はまだ大丈夫。けれどオレの身体も精神もいつ壊れてしまうか判らない。早くしなければいけない。目の裏側からひどい熱が漏れる。オレの中の恐らく最後の意志の塊だった。

誰か知り合いに会えば。茜でも詩子でも住井でも誰でも良い。さっき出会った青年でも構わない。オレがいない後の七瀬を護れる、知り合いに会えれば。オ誰でも良いんだ。——オレが倒れる前に。諦めが胸を支配してしまう前に。

「——————————————行くぞ、七瀬」

オレは死んでも、お前を名前でなんて呼ばない。ここは現実なんだから。

長森、今はオレは振り返らないぞ。今は。

オレはへたり込んでいる七瀬に手を伸ばす。

305　ひとつの心

おにぎりを平らげ、指についたご飯粒を丁寧になめ取ると、あゆは幸せそうに笑って礼を言った。

「ごちそうさまでしたっ！　美味しかったよ、ありがとう、梓さん」

「おそまつさま。空きっ腹抱えてるくらい不幸なことはないからね。食べられる時に食べとかないと」

おにぎりくらいでこんなに嬉しそうな顔をされるのも逆に気恥ずかしいな、と梓は思った。

でも、悪くない。梓にとって、料理は食べた相手に喜んでもらってこそのものだ。喜んでもらえたなら、純粋に嬉しかった。

と、つい今まで顔中ニコニコしていたあゆがふっと表情を翳らせた。

「あの、今日って何曜日かな？」

「曜日……？　えっと、どうだったかしら」

「えーっと」
梓は反射的に腕時計を覗き込む。
「そうだ、時計はイカれてるんだった……ここに連れて来られたのが昨日だから、確か……火曜日、かな？　にしても、なんだって曜日なんか」
「火曜日……あ、ううん、なんでもないよ。ちょっと気になっただけなんだよ」
あゆは笑って答えたが、すぐにその口元がキュッと引き締まる。瞳には、はっきりとした意志の光が宿っていた。
やがて、あゆはすっくと立ち上がった。
「一緒に、行こうよ」
「え？」
意外な展開に、千鶴と梓は目を丸くした。あゆは唇を噛み締め、言葉を紡ぐ。
「聞いたよね、さっきの放送……あの女の人、死んじゃったんだよ……」
名前も、姿も知らない少女。現状に警鐘を鳴らし、自分たちに進むべき道を与え、そして死んだ。
あゆの言葉に、否が応にも耳に先ほどの爆発音が蘇る。あの音とともに、少女は死んだ。
「千鶴さん。あなたは、もう誰かを手にかけちゃったんだよね……仕方ないで済むことじゃないし、許されることでもないと思う。でも、それで長らえた命を無駄にするのは一番いけないことだよ。ボクたちがあの子の言葉を聞いたのは絶対に偶然じゃないもん……だから、一緒にこのゲームを終わらせようよ。一刻も早く、一人でも死んじゃう人が少なくなるように。そしたら――傲慢かもしれないけど、千鶴さんが命を奪った人たちも、きっと……このままでいるよりは、救われると思うんだ」
「…………」
千鶴は視線を落とし、黙って自分の両の掌を見つめた。血で汚れた手。もう、同じく血を浴びた武器しか握れないと思っていた。
この手で、ゲームの終わりを掴もうとすることは、

許されるのだろうか。
「梓さん」
　あゆはさらに続ける。
「おにぎり、すっごく美味しかった。あんな美味しいんだもん、ボクたちだけで食べるなんてもったいないよ。だから……みんなにも食べさせてあげようよ。この島から出て、よかったねって言ってる時にみんなで食べたら、きっともっと美味しいよ」
　ボクも手伝うからね、とあゆは照れくさそうに言った。
　梓は、知らず知らずのうちに耕一や妹たちのこと、そして今までにこの島で出会った人々のことを思い出していた。佳乃……佳乃に襲い掛かっていた女医。その佳乃も、自分の首を締め、そのままどこかへ消えてしまった。
　今さらのように、このゲームの哀しさが痛いくらいに感じられた。この島にいるのは、今まで普通の生活を営んでいた一般人ばかりなのだ。それがどうして、お互い殺しあわなければならないのか。幾度となく自問自答した最も基本的な疑問に、またここでぶち当たる。
「時間が経てば、もっともっとたくさんの人が死んじゃう。だから、急いでこのゲームを終わらせなきゃいけないんだよ。一緒に……終わらせよう？」
　あゆが、二人に向かって手を差し伸べた。
　小さな、白い、綺麗な手。千鶴はチクリと心に突き刺さるものを感じた。
　梓に視線を送る。梓は、優しく——そう、普段はあまり見せることのない、とても優しい表情で——微笑んだ。
　そして、梓があゆの手を握る。
「千鶴さん」
　あゆが笑う。千鶴の手が、ゆっくりと重なった二人の手に近づいていく。
「えいっ！」
「きゃっ⁉」

あゆがいきなり手を伸ばし、千鶴の手を掴んだ。
ギュッと、握り締める。
「うんっ！　じゃ、行こうよ！」
「……ええ」
「わかった」
三人は、足並みを揃え、歩き出す。
(殺めた命は、戻って来ない……なら、私は、私にできることを全てやるだけ……それが、償いだというのであれば)
それぞれの想いを胸に秘めて。
(耕一、楓、初音……あんたたちをこのままにはしておかないよ……だから、絶対に死なないで……)
遠く霞むゴールに向け、歩き出す。
(うぐぅ、明日までに帰らないとＴＶ(シスプリ)見逃しちゃうよぉっ！　は、早く終わらせちゃわないと！)
三人の思うところは少しずつ異なってはいたが、それでも心はひとつだった。

306 ——落陽

「……逃げようか？」
それが、僕の第一声だった。

——木々のざわめき。
風のざわめき。
空のざわめき。
それが、戦いの前奏とも言うべき戦慄であることを、いつの頃からか僕は知っていた——。

銃声は……現時点まで三発。
もしかしたら、既に誰か撃たれたかも知れない。
……死んでしまったかもしれない。
それだけの危惧を持たせるのに十分な効果を、銃声という奴は持っていた。
僕も、引き金を引いたことがあると言うのに。

そもそも、不可視の力で人を殺すのも、拳銃で人を殺すのも、どちらも変わらないはずなのに。
……違うな。思えばここに来てからだ。殺すことが相応しいところに来て、まるで反転するかのようにそれを否定したがっている。
偽善的な振る舞いだ。

「——例え狙ってなくても、流れ弾に当る事だってある。そんなばかばかしいことで命を失うかもしれない。……僕は、君を危ない目にあわせたくないんだ」
「——ちょっ……待って！」
「——だめ、待てない」
——彼女が不平の声を上げる。しかしそれを聞くわけにはいかなかった。
「——どうして、そんなこと言うの」

走る……。ただひたすらに走る。
どこだ？　どこで交戦してるんだ？
僕はただ音がした、と自分が感じた方向に走っている。
だが……依然としてなにも見えてこない。
銃声は聞こえてこない。……もしかしたら、もう撃つ必要が無い状況なのかもしれない。
「く……そっ……」
走りながら文句を吐く。それでは、詩子に言ったことを違えてしまうことになる。
苛立ちだけが募る。
どこまでいっても、あるのは木だけだ。
人がいるのなら、そろそろ声が聞こえてきてもいい頃だろうに。
そしてそんな僕の葛藤をよそに、また残酷な音が響き渡る。

ドン！　ドン！

「！」
だいぶ……近くなったか。
だが、音の発生ばかりに気をとられて、正確な場所がよく掴めない。
どこだ？　どこなんだ!?
そんなことを呟いても、誰も応えてくれない。
銃声が消えたそこら一帯は、ずいぶんと静かに感じた。
もうこれで五発だ。
事態は、明らかにまずい方向に流れている。僕は立ち止まっていた足を再び走らせる。なるべく物音を立てないように繊細に……しかし全力で。

「――友達が……危険と隣りあわせだって時に……そうかもしれないときに……く……見過ごして……あとから後悔するのは……絶対に嫌……」
「――結局、戦っているのが君の友達じゃなかったら？」
「――それは……違ってて良かったねって」
彼女は笑う。満面の涙とともに。
「――それで……自分が傷つくことになってもかい」
「――だって……後悔……したくないもん……」
「――――――――――――そうか」
――どこまでも、優しい子だ。

……聞こえた。
銃声以外の異音、これは……何かを引きずる音だ。

ザ……ザ……ザ……

聞こえる。間違いない。何を引きずっている。
いや、違う。…………足音、か？
僕は再び立ち止まる。そしてあたりに気を配る。

木々のさざめきにごまかされないように、風の鳴り音に混じらせないように。
……捉えきれない。
ならば、
「誰か……いるのか!?」
辺りに通る声で、僕はそう叫んだ。
……音が止まった。何かを引きずる音が、確かに今、止まった。
僕の姿は捉えられているのか？
奇襲のチャンスを狙っているのか？
…………構わない、それならばどこからでも。
僕は顔だけは油断無くあたりに注意を払いながら、左手で本をそっと開く。そして反対の手の指先で、そのページの一枚をぴっと取り外した。
……あたりは静まり返っている。そこには、風の音すら希薄になりつつある。
無音の静寂が流れる。
まるで、一瞬が永遠になったかのような、空白の瞬間が訪れていた。
姿無き襲撃者との根競べが続く。
僕は、微塵も身動きをしない。
……だが、いるはずのその人物からはまるで反応が無い。
「…………くっ」
そして、その根競べを制したのは僕ではなかった。
痺れを切らした僕は、瞬間にそこを立ち去った
——そうして、七瀬に手ひどく痛めつけられた弥生は、何とか少年と対峙することなくその場を離れることに成功した——。
「——君を巻き込ませるわけには行かない」
——僕は彼女の背後を一望する。
「——ここなら見通しもいいし、君の足ならたとえ誰が襲ってきても逃げられる。だから……」

そして、とうとうその場所へ抜け出た。
「これ……は……」
人が並んでいる。
並んで、倒れている。
――既に、事切れている。
片方は女の子だ。
僕は見たことが無い子だ。
優しそうな子に見える。
胸から血を流して……、恐らく、銃でやられたのだろう。
なのに、その死に際は、とても安らかに見えて。
そしてもう一人は、僕も知っている男だった。
「……巳……間」
黒いコートを着て、なにやらずいぶんと変わり果てた男が……そこにいた。
それは予想外の人物だった。いずれこうなるかもしれないことは覚悟していた。にもかかわらず、ここでの遭遇は想定外だった。

――ドドン!!
――三発目。
「――時間が無い。急がないと取り返しが付かなくなる」

……最後の頼りは〝匂い〟だった。
僕は辿る。硝煙の匂いを、唯只管に辿ってゆく。
流れてくる方角は、もうはっきりしている。
……目的地は……近い。
僕は、もはや誰かに気付かれることは構わず、ただただ全力で走った。
間に合うとか、大丈夫だとか、そんなことは考えなかった。
辿り着かなければならない、ただそれだけの気持ちで。

まさかお前がやったのか……。
そんな疑念がよぎる。だが、死者を疑うことになんの意味も無いことを僕は知っていた。
お前は、誰よりも自由を欲していたもんな……。
そんな良祐の無念を汲んでやりたいと思った。
——生きるために、良祐がやってきた非道も知らずに。
僕は良祐の死体に近寄ると、その胸元をがさがさと漁り始めた。
「……あった」
彼の首にペンダント状にかけられたもの……鍵。
「せめて、これだけでも持って行かせてもらう」
僕は今度はそれを自分の首にかけた。
——形見と言うには、少し月並みな気もするが。
僕は、そのあと少しの時間を費やして大きな穴を二つ、地面にあけた。
一つは名も知らない少女のために、もう一つは巳間のために。二人をその穴の中に仰向けに安置し、胸の前で両手を組ませた。
この島に来てから、なんだか弔ってばかりだ——。

「——知らない人のためには泣けなくても……私……あなたが死んだら……涙……止まらなくなるんだから……」
——その彼女の唐突なセリフに、僕は、
「——ふふ」
——思わず彼女を抱きしめていた。
「——大丈夫、まだ僕は死なないよ」
——どこかで、同じセリフを言った気がした。
「——また、きっと会える」

……ふと思い立ったように、片手に持っていた本を開いた。
「——かつて悩めた人よ、かつて憂いた人よ。我ら

は常しえにあなたのことを敬い続ける。我らはけして涙を零すことなく。我らはけして笑みを絶やすことなく。ただあなたの生きた証を辿り続けるだろう――」
偽典の中の一節。それを二人の死者に捧げた。
こんなところでこんなものが役に立つなんて……ね。
僕は乾いた笑いを浮かべた――つもりだった。
結局、僕は詩子に言ったことを守れなかった。
……二人の死に、間に合うことは出来なかった。
この子は、詩子の友達の一人だったんだろうか。
……今となっては、聞くことも出来ない。
使い終えた本を仕舞い、今度こそ二人を埋葬した。
命が燃え尽きたところ……、
その痕跡は、あまりにも静かで切なかった。

307　分離

『なつみ、なつみ……』
もう一人の私が、私を呼ぶ。
『私、やっぱり待てない。自分で見つけだす事に決めた。犯人を』
「たった一人で？　この刃物一本で？」
『自信を持ちなよ。私たち、人とは違うんだから』
「そんなの、無理だよ……」
『意気地なし！』
そう言って、ココロはぷいと後ろを向いて、
『もういいわ。私だけで十分』
そのまま窓から外へ飛び出していく。
「あ、待ってよ！」

【2日目・早朝】

朝日のまぶしさに目が覚める。
でも、結界はもう消えてた。そして、私のココロも消えてた。
あれは夢？　それとも……
「ひとりに、なっちゃった」
窓枠に手をかけ、外を眺めながら、なつみはつぶやいていた。もう一方の手で、支給された刃物をぎゅっと握りしめて。
夢の中で言ってたように、犯人を見つけて仇を取ったら戻ってくるかもしれないし、もしかしたらずっと戻ってこないかもしれない。
これからは、自分は自分でどう生き抜くか考えないといけないいんだ。

308　いつも笑顔で

水瀬秋子は痛めた右手に湿布を貼ると、少しくるくると手首を回してみた。
「……特に問題はなさそうね」
捻挫というほどではない。もう少し時間が経てば気にもならなくなるだろう。
郁未と一戦交えた後、秋子は気絶した名雪の治療と武器の調達のために森沿いの一軒家に忍び込んでいた。
名雪の治療はすでに完了している。
怪我はそれほどたいしたものではなかった。
頭部への強い打撃は後になって症状が見られることもあるが、少なくとも今は問題のないように見える。
現に名雪はもう目を覚ましている。
目を覚まして、ずっとしゃべりつづけていた。
「聞いて聞いてみんなひどいんだよ、みんなみんな私のこと傷つけるんだよ。私祐一守ったのに真琴から祐一守ったのに祐一私を守ってくれなくて、だから自分で自分の事守ろうと思って。琴音ちゃんも私のこと傷つけるつもりだったたから私琴音ちゃん刺し

たんだ。えらいでしょお母さん、繭ちゃんだってそう、私がんばったよ、がんばったのに……頭痛い頭痛い、祐一だよ祐一のせいだよ祐一が逃げるからいけないいんだよ。何で逃げるの祐一、あゆちゃんだねあゆちゃんのせいだね、あんな子のどこがいいの。許せないあゆちゃん許せないよお仕置きしてよ。もういや、みんなみんな大嫌い、みんなにお仕置きしてよ、ねぇ、お母さん……」

ずっとしゃべっていた。

そんな様子を見て秋子は理解しなくてはならなかった。

自分の娘が壊れてしまったということに。

しゃべりつづける名雪の顔は醜くて、先ほどの郁未のように醜くて、にっこりと笑う名雪の笑顔が秋子の密かな自慢だったのに。

(あなたのお子さんもきれいな子でしたね、未夜子さん)

未夜子と、先ほど自分が殺した人と、自分の娘のことで会話に花を咲かせたらどんなにいいだろうと、秋子は不意に思った。

こんな時、こんな所じゃなくて、そう大安売りのスーパーで並んでカートを転がしながら、

「まぁ、奥さんのお子さんも陸上部なんですか?」

「あら、じゃああなたのお子さんも?」

「ええ、名雪も一応部長なんですけど、あんなお寝坊さんで勤まっているのかしら……」

「まぁ、立派じゃないですか。うちの郁未も成績はいいようだけど、もう少し愛想ってものがないとねぇ」

「うちのは少しのんびりしすぎてますわ。あれでも陸上選手なんて信じられませんよ」

なんて、そんな会話ができたらどんなにいいだろう。

そうして、秋子はこっそりと思うのだ。

でも、どんなお子さんでも名雪の笑顔には敵わないわ、と。

（たいした親ばかね）
秋子は胸中で自虐的に呟くと、なおもしゃべりつづける名雪のほうを向いた。
「名雪、もっとかわいくしなくちゃ祐一さんに嫌われてしまうわよ？　ほら、笑って、ね？」
名雪は一瞬ぽかん、と顔をして、そうしてにっこりと笑った。
「うん、そうだね、お母さん」
その顔が、とてもきれいだと秋子は思った。
名雪には、いつもこんな顔をしてほしかった。
だから、秋子はこう言った。
「名雪、一つだけ約束して。いつもそうやって笑顔でいて。名雪がいつでも笑っているなら、お母さん名雪のためになんでもするから」
「ほんと！」
名雪は弾んだ声を出す。
「ほんとだね、お母さん！」
「ええ、約束よ」
「うん、約束だね」
（母親というのは本当に馬鹿な生き物ね）
それもいいでしょうと、秋子は思った。
秋子だって、名雪を見捨てた祐一が、名雪を傷つけた郁未が、名雪を壊したこの島の人達が憎かった。
でも、そんなことも、もうどうだってよく。
このまま名雪と共に壊れていくのもいいだろうと、
「えへへへ、じゃあまずあゆちゃんをね……」
嬉しそうにしゃべる名雪を見ながら、秋子はそう思った。

309　彼と彼女とキノコ

島の真上をさんさんと照らしていた太陽も傾き始め、夕闇の気配がゆっくりと擦り寄ってきていた。
この島の大部分を占める森の、その、更に奥深くに、彼は居た。
（何処だ……茜……）

ふと、ゲームが始まってから自分は一睡もしていないということに気づく。自分にとってどれだけ「茜」と言う存在が大きかったか、改めて思い知る。
気がつけば、体中が悲鳴を上げている。
心も、体も、とっくに限界を超えていた。
それでも、止まらない。
止まれない理由があった。
『茜は、変わってなかったよね？』
『あぁ、そうだな』
『……変えてあげてね？』
『あぁ』
彼の、そして茜の親友の言葉が、彼の足を前へと進ませる。そして何より、彼自身の強い想いが、立ち止まる事を許さなかった。
――俺は、もう一度、茜に会わなければならない――
だが。
彼が、出会った相手は……

普段の彼女を知っている人ならば、誰もが驚くであろう。何故なら、普段の彼女は、けしてこんな顔をしないからだ。口元は引き締まり、目は堅い決意に彩られた、その顔。
彼女が目指す先は、この島で唯一頼れる、優しい人たち。
どこに居るかは、まだ分からない。
だから、走る。音も立てずに。
その彼女の足が止まる。
――人の気配。
殺し合いなど本来まっぴらな上に、今の彼女には武器と呼べるものが何一つありはしなかった。
自分は身体的に他の参加者に劣る。見つかったら、殺される可能性はけして低くは無いだろう。
気配を殺し、去ってゆく人の後姿を見やる。
その、隙だらけの後ろ姿に、彼女の知っている、「優しい人」の姿が重なった。

どうして間違えようか。絶対に、あの人だ。間違いない。
絶対の自信を持って、少女は一歩を踏み出した。
だが。
少女が声をかけた、その相手は……

「ねえ」
不意に背後から掛かってきた声に驚き、振り帰る。
立っていたのは、一人の小さな少女。
外見とその落ち着いた声とのギャップに唖然とする祐一に、少女ははぁっ、と溜息をひとつついて言った。
「あなた、そんな隙だらけの背中で何やってるの？私がもし殺人鬼だったらどうするつもり？」
「なッ……」
祐一は混乱した。
突然現れた少女。
それが、声を掛けてきた。

そこまではいい。
なんで俺が、こんなガキに説教されてるんだ？
少女の言っている事は正論なのだが、年下に説教されるという事が、彼の癪に障った。
なので、口をついて出るのは、反抗的な台詞。
「うるせーな。なんでお前みたいなガキに説教されなくちゃいけないんだ？」
少女は、その言葉を聞き、顔を歪ませる。
……嘲笑に。
「お笑いね。年齢を問わず正しい意見は取り入れるものよ。私が子供だって言うなら、つまらない意地で自分を正当化するあなたのほうが余程子供よ」
「て……てンめぇ……」
祐一は怒りに身を震わせる。
この場合年上として正しい対応は目の前の生意気な少女を論理的に説き伏せる事なのだが、無念にも祐一の頭では反論出来る言葉が見つからなかった。
なので、年上と、そして男女の基礎体力の違いと

いう二つの利点を持って、
「どりゃぁーっ！」
祐一は力ずくで生意気な少女を黙らせようとした。無論、それは男として最低とも言える行為だ。よって、祐一はすぐに天罰を受ける事になる。
祐一が少女めがけて飛びかかる（こうして書くと誤解を招きそうだが）。
少女はすっ、と姿勢を低く落とす。
そして、祐一が少女に覆い被さろうとしたその時。
「がッ………」
祐一の動きが、止まった。
少女のアッパーカットが、祐一の股間を的確に捕らえていたのだ。もう文章では表現しきれない程の痛みに、祐一は地面をのた打ち回る。
少女はそんな祐一を見下して笑った。
「無様ね」
気を抜くと本当に気絶しかねない中、祐一が絶え絶えに言葉を発する。
「こっ、こういう時は……蹴りって相場が決まってるんじゃ……」
「あら、だって蹴りだと狙いがつけにくいでしょ」
そっけなく、少女は答えた。
成る程、もっともだ……
祐一は答えを聞き終えると、満足げな表情で気絶
——
「気絶してんじゃないの」
「あうっ」
それは、少女が許してくれなかった。
傾きかけた太陽は未だ沈んではいなかったが、森の中には光は僅かしか届かない。
すでに、辺りは薄暗くなりつつあった。
「……で、一体何の用だよ。殺せるチャンスをわざわざ逃してまで聞きたい事、あるんだろ？」
水を口に含みつつも、祐一は少女——どうやら、椎名繭と言うらしい、に問うた。
「まあ、殺せる武器も無かった、っていう方が正し

いかもね」
「なんだ、結構お前も考え無しじゃねえか」
そう言って祐一はニヘッと笑う。水を口に含んだままなので、水飛沫がとても汚らしい。
「……早く飲み込みなさいよ」
「まあそう言うな。汚い所走りまわって結構ノドが痛んでるんだ」
祐一がそう言うが、その度にまた水飛沫が飛ぶ。
繭は沸きあがる殺意を理性で押さえ込み、話を進めた。これもセイカクハンテンダケの為せる技だとも言える。
「――人を、探してるのよ。折原浩平、って人」
へぇ、じゃあ俺と一緒じゃないか、と祐一は口に出そうとする。
その前に、繭が続けた。
今の祐一にとって、一番聞きたくない名前を。
「……それと、沢渡真琴って人」
ぶっ、と思わず祐一はすでに生暖かくなっていた水を吹き出す。明らかに取り乱した祐一の様子を見て、繭が目を見開き、祐一を問い詰める。
「知ってるの!? 教えてよ、真琴さんの行方」
これまでの理性的で嫌味ったらしい態度は影を潜め、感情を露にして迫る繭。
祐一は一瞬本当の事を言うかどうか躊躇する。
だが、その悩みはすぐに打ち消される。
ここまで必死に真琴の行方を探してくれた人。
どんな理由があれ、ここで本当のことを話さないのは卑怯だと思ったのだ。
「……知ってるさ。だって真琴は……」
ゆっくりと、口を開く。
「俺の目の前で、死んだんだから」
繭の頬から、一筋の涙が零れ落ちた。
「しかし、やっぱ真琴は嘘を吐いてたのか」
先程から繭は俯いたまま、何も話そうとはしない。
辛うじて、一時期自分が真琴と行動を共にしていた

と言う事を喋っただけだ。
「変だと思ったんだよな、真琴が『お姉ちゃん』なんて」
「そんな事ありません」
「……っと」
間髪入れずに入った繭の声に、思わず祐一は態勢を崩しかける。
「真琴さんは、すぐに泣き出したり、我が侭を言ったりする私の面倒を優しく見てくれました。殺人鬼のような男に追われたときも、私を安全な場所に隠れさせて、ひとりで立ち向かって行ったんですよ」
祐一は穏やかな口調で話す繭を見て、
「……そうか」
と、自身もまた穏やかな表情で言った。
「真琴は、確かに『お姉ちゃん』だったんだな？」
もう一度、繭に問う。
繭は、揺るぐ事の無い表情で、
「ええ」
と、笑顔で答えた。
「……それにしても」
空になった水筒の底を叩き、何とか最後の一滴まで飲み干そうとしながらも祐一が繭に語り掛ける。
とても、間抜けな光景だ。
もうそんなのには慣れたのか、
「……何」
と、繭は素っ気無く訊き返す。
「なんでお前みたいな生意気なぐらいにしっかりしたヤツ相手に、真琴がお姉さん気取りできたんだろうなぁ」
繭は、「失礼ですね」と頬を膨らませたが、すぐに顔を落とし、言った。
「……私が、子供だった、というだけです。もし私があの時、もっと理性的な行動を取れていたら、真琴さんも……んぐっ!?」
繭の台詞は、そこで途切れた。
祐一が繭の口を手で塞いだのだ。

「……そこから先は言うなよ」
藹が見上げた祐一の顔は、これまでになく真剣で、辛そうで。藹は、出しかけた文句を、飲み込んだ。
「真琴はあれで臆病なんだ。その点、お前がいた事で辛うじて真琴は理性を保ててたって言える。真琴があんなに頑張れたのも、お前のお陰だ……だから、そこから先は言うな」
泣きそうで、苦しそうで。
そんな祐一の表情を見て、藹は軽はずみな事を言った自分を恥じた。
……でも。
ぎゅうっ、と祐一の手の甲をきつく抓る。
「ぎぇぇっ！」
「いつまで口塞いでるのよ」
それとこれとは、別だった。
「さぁて、そんじゃまぁ、俺はそろそろ行くかね」
祐一がゆっくりと身を起こす。
「……何処に」
座ったままの藹が、祐一を見上げて言う。
「俺も、探してる人が居るんだ」
「ふ～ん」
自分から訊いておいて、藹はその言葉を聞き流し、服の埃、土汚れを払う。
そして、祐一の方へと向き直ると、
「じゃあ、行きましょうか」
と、平然と言ってのけた。
「おう、じゃあ……ってえぇ？」
お約束の反応をした祐一も、藹の方へと振り帰る。
「だって私、武器無いし。ここは武器を持っている人と行動したほうが安全だわ」
「……俺が寝首かいたりするとは思わねぇのかよ」
祐一が吐き捨てる様に言った言葉に、藹は不敵に笑って見せて、言った。
「あら、あんな隙だらけの背中を見せているような奴にそんな事が出来るかしら？」

「ぐっ……」
出来そうに無かった。
「決まりね、行きましょ」
そう言って一人で歩き出す繭に、その後ろから祐一が言葉を投げかける。
「絶対にお前の事守ってやる、なんて口が裂けても言わねえぞ」
その言葉に繭は振り向くと、
「それで結構よ。危なくなったら容赦なくあなたを盾にさせてもらうから」
と、笑い飛ばして見せた。
祐一はチェッ、と舌打ちすると、
「わーったよ、行くぞ」
と吐き捨て、繭を追い越して歩き出した。
そして祐一は内心、自分は繭に頭が上がらなくなるんじゃないかと、先行きに不安を抱く事となった。
妙なコンビは歩く。

「……それで、お前はその」
「キノコ」
「そうそう、そのキノコを食べたから、こんな性格になっちまったと？」
水を口に含みながら、祐一が喋る。
ちなみに、水は余りにも「水、水〜」と見苦しい祐一に対し、繭が投げ捨てたも同然に与えたものである。
「そう。あと四つあるけど、食べる？」
そう言って繭は、ごそごそとバッグの中からキノコを取り出す。
いかにもって感じの色がヤバげだ。
「遠慮しとく」
見てるだけで吐き気を催しかねなかった。
「……それで、そのキノコを食べると性格が反転してしまう、と」
「そうみたいね」
……祐一は考えた。

「これを高槻に食べさせれば……うげ」
　想像してしまったらしい。
「くっ、しまった、忘れろ、俺の脳！」
「何やってんだか……」
　兎にも角にも、こうして相沢祐一と椎名繭という、妙なコンビが結成されるに至ったわけである。

310　（無題）

　凛とした空気の中、鳥の声だけが森中に響き渡っていた。深山雪見の死を看取りながら、往人は考えていた。
（俺はここまでできるのか。親友の敵を取るためだけに、ここまで……）
「俺はこのままでいいのか……？」
　誰に問うこともなくつぶやいてみる。
　自分の信念を貫くあまり、犠牲にしたものが大きすぎた。
　みちるも、遠野も守れなかった。
　聖も死んでしまった。
　何も考えたくなかった。それなのに……
『浜辺にいこっ』
『どうして』
『遊びたいから』
『遊びって何をするんだ』
『だから浜辺で遊ぶの、かけっこしたり、水の掛けあいしたり』
『そして最後に』
『また明日、ってお別れするんです』
「観鈴……！」
『わたしと往人さん、友達。にはは』
「観鈴……」
　もう一度繰り返してみる。

しかし……
俺に観鈴を守る権利はあるのだろうか。
すでに四人も殺めてしまったこの俺に……。
果てしなく続くかと思われた自問自答。
終わりは突然にやってきた。
がさっ
突然現れた黒い影に、目を奪われ現実に引き戻された。
「なんだおまえ……」
目と目が合う。
そこはかとなく不条理な空気があたりを包んでいた。

なんでこんな所にいるんだろう。
いつも笑いかけてくれる少女はもういない。
目の前にいるのは、黒い変な恰好をした男だけ。
ひどく落ち込んでるようだが、どことなく他人じゃ無いような気がするのは気のせいだろうか。

「なんだおまえ……」
ナンダオマエ
僕に向かって言ってるんだろうか？
お前とは失礼な。
むかついたので、蹴りを入れてやることにした。
バサバサ、どすっ
「くっ……ゴホッゴホッ」
ふ、見たか。電光石火のみぞおち蹴り！
「……カラスの分際で人間様にたてつくとは、見上げた度胸だな」
じゃき
……
黒い筒状のものを僕に向けてきた。
よくわからないが、直感で危ないモノと判断。
愛想をふりまく作戦に出よう。
バサバサ
「うお、肩に乗るなっ！」
なぜか振り落とそうと、僕の体をつかんで引き剥

がそうとする。いつもの少女は、これで喜んでいるのに、この男は嫌そうな顔をする。なぜだ。
とにかくこっちも振り落とされまいと必死になる。
バッサバッサ
「いてっ！　爪を食い込ませるのをやめろ！」
バッサバッサバッサ
「だあ！　わかった！　乗せてやるから爪を立てるな！」
バサバサ
ようやく落ち着いた。男はとても嬉しそうだ。
「こんな姿、他人に見られたらいい笑い者だ……」
よほど嬉しいらしい。
肩を振るわせ目を伏せている。
「まあいい、お前のおかげで踏ん切りがついた」
？　この男は何を言っているのだろう。
「待ってろよ。観鈴」
そう言いながら、手元の小さい箱状のものに視線を落とす男。
ミスズ、その響きは、僕に何かすごく懐かしいことを思い出させる。
あの少女の名前、だったか？　無性に興奮してきた。
バッサバッサ
「痛え！　爪を立てるな！」
男の声が森に響き渡っていた――

311　おもいで

「これで……人をコロセル……」
誰もいない住宅街。
人のいなくなった喫茶店。
「あなたは……私を裏切らないわよね……」
小銃とナイフを見つめながら夢心地で横へ言葉を投げかける。
白蛇。
みちるが――あの愛らしい少女が消える直前に残

した友達。
「人はもう、信じられません。やっぱり……信じられませんでした」
虚ろな瞳、もう流れることも忘れてしまった涙。
「秋子さんも……私を見捨てたんですね……」

『……琴音ちゃん？』
『……は、はいっ!?』
『名雪を、連れ戻してきてくれる？』
『ありがとう。それじゃ、お願いね』

秋子との言葉が思い浮かんだ。
あの時から、少しだけささくれのように涌き出た疑念。琴音は言葉どおりに名雪を探した。だけど……
(どうして、私だけ……一人で捜しに行かされたのですか？)

『大丈夫よ琴音ちゃん。私を裏切っても、名雪を裏切らない限り、あなたは私が守るから。そのかわり——名雪を手に掛けたときは、本当の恐怖を教えてあげます』

(秋子さんは、守ってはくれなかった……それどころか)
琴音は、白蛇のポチを握りしめる。
(名雪さんに……裏切られたんですから……)
ビチビチッ!!
苦しそうに、ポチが左右に体を揺らす。
「あっ……ごめん……ごめんね、ポチ」
琴音がポチを抱きしめる。今度は、軽く。
「やっぱり、動物だけは裏切らないもの……藤田さんが……あかりさんが、特別だっただけ」
唯一信じるに値する少年少女の顔を思い浮かべる。
「ポチ……私と……いっしょに行こうね。ずっと、いっしょに。みちるちゃんとの……約束だもんね」

琴音には、みちるがどうして消えたのかは分からない。だけど、みちるの名前が放送で呼ばれていた……それは――死。
「みちるちゃんもね……私をもう裏切らないもの。ポチ、人はね……みんな裏切るの。でもね、死んだらね、もう裏切らないの。みちるちゃんは、私とお友達だから……裏切らなくなったのよ」
ポチの頭を優しく愛でる。
「だからね、みんな死ねばいいの。そうすれば裏切られない。みんな、みんな、お友達になれるのよ？」
一語一句、言い聞かせるようにささやきかける。
「そして、藤田さんに……あかりさんに、ほめてもらいたいな。私はまた、人間不信に陥っちゃったけど……自分の力で元に戻りましたって。私は弱いから、だけどね……強くなりたいんだ」
決意を新たにして、琴音が立ちあがる。
「この喫茶店ともお別れ――少しの間でしたけど……楽しかった」
まだ聞こえてくるようなあの楽しかった笑い声。
『にょわ～っ、動いた動いたっ！』
『動物だから、もちろん動くと思います』
『琴音ちゃん、動物好きなの？　私もなんだよ！　ねこさんとか』
『名雪は、ねこアレルギーですけどね』
『う～、お母さん！　ひどい～ひどい～！』
「さよなら……行こう、ポチ」
白蛇を首に巻いて、喫茶店の入り口に立つ。
「あれ……なんか変だな……」
枯れたはずの涙が溢れて――
「こんな、はずじゃなかったのにな……どうしてこうなっちゃったんだろう……藤田さん、藤田さんに会いたい……」
少女の嗚咽は、楽しかったはずの喫茶店の中にず

っと響いていた……。

312　汗と涙と男と女

「かーずきっ！」
詠美が和樹に甘えるようになってからどのくらいの時間がたったのだろう。
「待たせたな！　詠美！」
詠美が建物の陰から姿を現す。
「どうだった？」
「いや……なにもなかったよ」
和樹がそう言って、詠美の頭を優しく撫でる。
「そっか……うん、次はどうするの？」
「とりあえずここから離れよう。ここには逃げ場が無い。話はそれからだ」
表情とは裏腹に、和樹の心は晴れない。
南の豹変――確かにそれもある。
だが、今の建物――火事があったのかしっかりと判別はできないが、おそらくはスタート地点の一つだろう。
その中にいくつもの死体が転がっていた。
全部で八人。全員同じような野戦服を着た男たちが倒れている。恐らくそれは主催者側の人間であろう。
武器はすべて奪われていた。
(俺達と同じように……主催者側と対立してる奴がいるのか？)
だが、もしも違ったら……そう、すでに理性を失い、見境いの無い殺戮者だとしたら……？
(南さんですら……)
和樹は果てしなく疑心暗鬼に陥っていた。
(たとえ、彩ちゃんやモモちゃん……いや、あさひちゃんであっても、もしかしたら……)
そして、正常であったとしても和樹のように人を疑ってかかる者だっているかもしれない。
(ちっ、やめようぜ……答えなんか……でないよ。

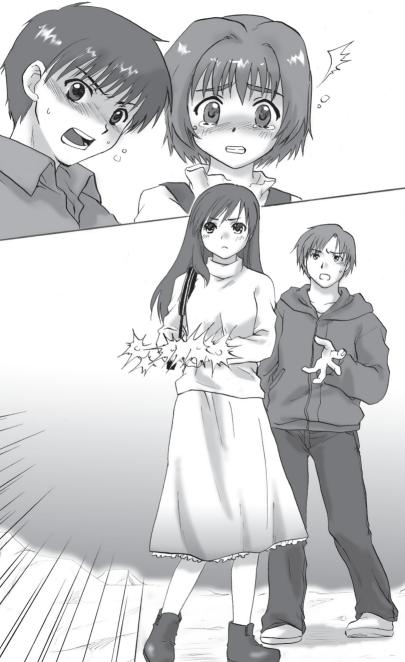
楓ちゃんなら……どうする？）
　別にここだけじゃない。
　とりあえず心当たりのある場所に手がかりはなく、冷たくなった躯だけしかなかった。

——何かあったら、またこの場所で

　途方に暮れかけた時、彼女の言葉が脳裏に浮かぶ。もしかしたら、彼女の単独行動は、何か心当たりがあってのことかもしれない。
「一度戻るか……これ以上闇雲に動いたって道は見えない」
　和樹が歩きながらそう呟いた。
「も、戻るの……？」
　不安そうな詠美の声。無理もない、それは血の匂いのする思い出の場所だから。
　たとえ、大切な友人の墓場であってもだ。
　——もちろん和樹達は玲子を簡易的にではあるが弔っている。
「安心しろ、俺がついてる」
　詠美を落ち着かせるようにそっと頬に口付ける。
「うん……」
（やっぱ調子狂うよな……）
　いつも生意気で悪態をついてばかりだった彼女、ここに来るまで、鼻で人を笑うような態度で本当の自分を隠してきた彼女。
　だけど、それでも——
（いつも顔を合わせるたび……だったからな）
　苦笑した。
　ザッ……ザッ……
　そして瞬間、人の気配。

「それでね……」
　由綺の声はいつも透き通るように綺麗で。
　ブラウン管の向こうの世界が遠く感じられてたあの頃。

だけど……
いつの間にか心よりも、遠くで聞こえる由綺の声。
それはここに来てから。だから、由綺の手をつかんだ。理奈ちゃんでなく、マナちゃんでもなく、英二さんでもない。
ブラウン管の向こうよりも遠い世界に行ってしまわないように、強く。
「弥生さんがね……ふふっ、おかしいの」
由綺がいつものように笑う、そこは日常だったから。だけどその現実は……由綺が本当に望んだ日常ではなくて。『おかしい』……そうかもしれない。
俺達は……いや、俺だけが狂っている。
俺は由綺の為に……すべてから逃げたんだ。
理奈ちゃんから、マナちゃんから、英二さんから、見知らぬ少年から。
そして、由綺を傘にして罪の意識から逃れようとしている。
(俺は……卑怯だよな)

由綺にとってここは、より日常だったんだ。ブラウン管の向こうで歌っていた――あの頃よりも。
(由綺は……俺が追いつめたんだ……)
本当に日常だった頃から、由綺の本当の心の拠り所になりきれなかったんだ。
「……誰っ！」
突然由綺が声を張り上げる。
(誰かいるのか……)
来ないでほしい。由綺がまた遠くに感じられてしまうから。俺はまた、由綺のせいにして罪を犯してしまうから。
近づいたら、由綺が、俺がまた――
「お、おい、ちょっといいか……？」
ドン！　ドン！
男の声と共に銃声…とは少し音色の違うニードルガンの音。
い、いきなり撃つか!?　俺の恋人よ……
射程距離が離れすぎてたのか、男の脇を、ゆっく

りと放物線を描き――地面に落ちる。
話し合いの余地も無い。
男は一瞬呆けた表情、だけどすぐそれは険しい表情に変わって……
物陰に潜むように身を隠れさす。
そしてそこから見えるのは……銃口――
俺の背筋に、何かはしるものがあった……
「行くぞ！　由綺！」
再度狙いをつけて戦おうとしている由綺の手を引いて、そこから離れる――
同時に、途切れることのない銃声。
「と、冬弥君!?」
先程まで俺達が存在していた空間に、熱線のような光がいくつも雨のように降り注いだ。
――死ぬ
強い意識が俺を包んで、怖くて。
だから、無我夢中で走った。後ろを決して見ないようにして。横で走る由綺の手だけは、絶対に離さないように――。
緊迫した状況の中だけど、右手に感じた由綺の暖かさだけが妙にはっきりと感じられて――。
場に不釣り合いな思い。
(俺、こんなときでも由綺だけは……)
少しだけ自分を誇らしげに思えた。
「な、なあ、由綺……」
「はあ、はあ……な、何？　冬弥君」
一、二キロは走ったかもしれない。
後ろから追ってくる気配はなく、ようやく走るのを止める。由綺と俺は流れ出る汗を拭いてようやく一息つく。
「いきなり……撃つのはやめないか？」
「どうして？」
きょとんとした顔で由綺。
「だってさ……今、危なかったじゃない。危険だよ」
「そうだけど……」

「だからさ……いつでも撃てるようにだけしておいて、撃つときは撃つみたいな……なんて言ったらいいのかな」
「だけど……」
「俺が死んじゃってもいいのか？」
俺はイヤだ。由綺が死ぬことも、俺が死んで、由綺が悲しむことも。
もちろん俺だって死にたくない。
「嫌っ……」
由綺が背中から俺を抱きしめる。
「うん、分かった、私、冬弥君死んだら嫌だもん……いきなり、撃つのはやめるね」
「ああ……」
いきなり撃つのは……俺だけでいい。
もっとも、飛び道具なんて持ってないけど。
「ふふっ、でも、冬弥君が危なくなったらどんなことしても守るからね……」
「ありがとう、由綺……」

だけど、どうしようもなく哀しくなって、喪失感が胸に込み上げて……
「ど、どうしたの？　冬弥君……泣いて、るの？」
由綺の日常の中で、俺は、泣いた。

「ふう……まさか、いきなり襲われるなんてな」
機関銃の熱を冷ましながら、和樹は溜息を吐き出す。
もう、敵の姿はない。
和樹達と同じように、カップルであったが故に生んだ油断だった。もちろん深追いする気はない。
和樹には殺人の衝動なんてないのだから。
(自分達の身に危険が及んだその時は……その時だけどな)
いざ脱出するときは、そうはいかないかもしれないが。
「かずき……みんな、狂っちゃったんだね……」
詠美の顔はまだ晴れない。

（この島にいる限り、心から笑ってくれることはないんだろうか）
武器の残弾、状態をチェックする。
（大丈夫みたいだな）
「平気だろ……今みたいのはごく稀なケース。俺も、詠美も……ほら、楓ちゃんだって正常だったじゃないか」
「うん……」
本当にそうなのだろうか。和樹の言葉は自分に強く言い聞かせる意味合いの方が強い。
「あそこに戻るぞ。結構経ったからな……楓ちゃんももう戻ってるかもしれない」
「うん……」
「別ルートから戻ったほうがよさそうだけどな」
別ルート。八人の死体があった建物を通りぬける。
「……きゃっ、ちょっと……何すんのよ」
和樹はいきなり詠美の膝の後ろと背中に手を忍ばせると、そのまま勢いよく抱えあげる。いわゆる漫画や映画でありがちな『お姫さまだっこ』というやつだ。
「俺を信じろ……俺がいいって言うまで絶対に目を開けるなよ」
「うん、わかった……しんじる」
（詠美がわざわざ建物の中の惨劇を見る必要はないからな）
詠美の持ち物……武器も実は和樹は知らない。
（詠美が戦う必要なんてないからな）
手を汚すのは、俺だけでいい。

313　（無題）

往人は飢えと緊張と戦いながら森を歩いていた。
手には、携帯電話をもっている。
九十番　水瀬秋子
三十三番　国崎往人

「さっきの女、名前だけでも聞いておくんだった」
意図して声を出しているのか、自分で気づかないうちに出してしまっているのか。
「そもそも機械は苦手なんだ」
呟きながら、順に番号を入力していく。
001、002、003、004、005、006……
しばらく続いた後、入力していた往人の手が止まった。
(017……近づいてくる)
まだそんなに近くない。考える時間は充分にある。男か女か、いやそれ以前にやる気があるのか無いのか。
名前さえわかれば、観鈴の場所を知る手がかりになるだろう。
いや、それよりも
観鈴かもしれない――
俺が三十三番、十七番が神尾の可能性だって充分にある。
「様子を見るか」
木陰に身を寄せながらつぶやく。
ここにいれば当分は見つかることは無いだろう。
それよりも問題なのは――

314　夢一時

「あはは、夢みたい。あたしこうして折原と手をつないで歩きたかったのよ」
「ううん、これは夢よね。だって瑞佳死んじゃったもの。現実にそんなことないものね。えへへ、明日瑞佳に会ったらどんな顔したらいいのかな」
七瀬は左手に持った散弾銃をぶんぶん振り回しながら心底愉快そうに言った。
「ああ、そうだな。七瀬おまえの言うとおりこれは夢だよ」
でもこの夢はな、永遠にさめないんだ

浩平の右腕からは依然として出血が続いていた。
血と一緒に浩平の命も流れ落ちてゆく。

早く誰か知り合いに会わないと
もう俺も長くはない
うん？
そういえば俺は長森が死ぬ前に
誰かとどこかで合流しようとしていなかったか？
くそ、血が足りない
もう、ろくに頭もまわらなくなってるな
ああ、長森、もうすぐおまえに会えそうだよ
こんどこそいつまでも一緒にいような

「折原、どうしたの？　そんな暗い顔して黙りこくって。わかった、瑞佳の事考えてたのね。そんなこと気にせずにあたしとのデート楽しみましょうよ。夢が覚めればあたしは折原とデートできないんだから。心配しなくてもデートしたことは瑞佳には言わないから、ね」
しかし、今の浩平にその七瀬の声は届いていなかった。

思い出せ、思い出すんだ俺
誰とどこで会うつもりだったのかを
――目の前が暗いな

「なあ七瀬、今日は日が暮れるのがやけに早いな」
「折原、なに面白くない冗談言ってるのよ。まだまだ日は高いわよ。瑞佳の所に帰りたいのは解るけど、でも駄目。帰らせてあげない」
その七瀬の言葉通り太陽は中天高く輝いていた。

目の前が暗い、もう駄目なんだな
ああ、なんだか喉が乾く
血液が足りないからだろうな
そうだ、川だ、川に行こう

そうすればなんとかなるような気がする

　もう浩平にはろくに前も見えず、右手の痛みも感じなかった。感じるのはただ左手の七瀬の温もりのみであった。それを力一杯握りしめる。まるで、残された生への執念であるかのように。そして水の流れる音と記憶を頼りに川に向かって歩き出す。
「ちょっと折原、いたいわよ。でもそんなにあたしを想ってくれるなんてうれしいな、えへへ」
　川へ。その執念だけが浩平の体を支え、前に進ませた。だから川辺にたどり着いたとき、もう浩平の体を支える物はなかった。
(長森、もう一度、もう一度おまえに会いたいよ)
　それを最後に浩平を意識を失った。
　霧が立ちこめていた。
　霧はゆっくりと流れているようで、足下すら見えないほど濃く立ちこめたかとおもうと、ふととぎれ、色とりどりの花が咲きみだれる岸辺や川面がすかし見える。
　それが浩平が目覚めたときの光景であった。

　どうして俺はこんな場所にいるんだろう？
　そうか、これは夢でそのうち長森が、
『ほら〜、起きなさいよ〜』
　と起こしに来て夢が――

　そうか
　そうだ長森はもういないんだ
　俺の目の前で死んだんだ

　その時声が聞こえた。それは浩平が今一番聞きたい声であった。
『浩平どうしてこんなところにいるの？　早く帰って』
「長森生きてたのか、よかった。おまえが死んだなんて嘘だよな、ただの悪い夢だよな」

『ううん、違うよ浩平。それよりも浩平、早く七瀬さんのところに戻って』
「いやだ、俺はもう戻らない。長森と一緒にここにいる！」
『――浩平』
「俺はもう嫌なんだ。突然あんな狂ったゲームに放り込まれて、本当はずっと怖かったんだ。でもおまえ達の、いや長森、おまえのために怖いのを我慢して精一杯気を張ってきたんだ。こんなの幻想だって。夢の中の物語だって。いつもと変わらない日常なんだって、そう錯覚するほど自分自身をごまかして……。俺がくじけたらみんな死んでしまう。そう思って必死に頑張ってきたんだ。でも、もう駄目なんだ。おまえがいないと、もう俺は頑張れないんだ――」
『――わかったよ、浩平』
「――」
『浩平がそんなに苦しい思いしていたこと解ってあげられなくてごめんね』
「――」
『本当はね、わたしも浩平と一緒にいたいんだよ。傷つき疲れ果てた浩平を抱きしめてあげたいんだよ。浩平はたくさんがんばったからもういいよね。休んでもいいよね。こっちに来て、浩平。わたしといつまでも一緒にいよう』
浩平が声のした方向に歩き出すと、川があった。川の中に一歩足を踏み入れたとき、また声がした。
『その川を渡ったら本当に戻れないよ、それでいいの――』
その声が聞こえなかったかのように浩平は前に進もうとした。しかしそこで彼の歩みは止まった。

この川を、この川を渡りさえすれば
あんな狂ったゲームなんかやらなくていいんだ
ずっと長森と一緒に暮らせるんだ
でも――

でも七瀬はどうなる？
あの壊れてしまった七瀬は
繭もどうなる
どこかで、一人みゅーみゅー泣いているだろう、繭

その二人を置いてゆくのか？
でも、俺は——俺は——

『どうしたの浩平？』
それからかなりの時間が過ぎ去った。その間流れる川の音以外なんの物音もしなかった。
「——駄目だ、長森。やっぱり俺はそっちにいけない。七瀬達を置いてゆけない。それに、おまえに助けてもらった命を無駄に捨てるなんてできない。——帰るよ、俺」
『よく言ってくれたね、浩平。それでこそわたしの大好きな浩平だよ』
「長森、最後にひとつ教えてくれ、俺達はまた会えるか？」
『うん、また必ず会えるよ。浩平が大人になって、恋をして誰かと結ばれて、子供を育てて、その子供が誰かと結ばれて、そしていつか浩平が天寿を全うする日が来たら、その時はきっとまた会えるよ。だからその時まで、ちょっとの間だけ、さようなら浩平』
　それを最後に浩平は目覚めた。

全部ただの夢だったのか、それとも——
いや、どっちでもいい
長森の声をもう一度聞けたから
そうだ、七瀬、七瀬はどうした？

「あっ、おにいちゃん、折原さんが気がついたよ」

315 ――間奏

「――逃げようか？」
それが、彼の第一声だった。
――置いて行かれてしまった。
「…………………はあ」
私は思いっきり溜めて息を吐いた。
もうこれで何回目だろうか。そんなに多くしていたつもりは無いが、数えるような余裕は不思議と無かった。
ぽつんと一人で佇んでいる。辺りは他に誰もいない。あるのは空っぽの鞄だけ。少年は私と一緒にそれも置いて行ってしまった。
彼に置いて行かれて、もう結構な時間が経つ。でも、それは私の気のせいなのかもしれない。
……一人になったら、なんだか時間が長く感じた。
追いかけていきたかった。でもそうできなかった。
少年の言ったことは正しかった。私には、何の力も無い。
……もしも彼が戦っていて、そこに私が入り込んだって、なんにもならない。殺されるだけだ。
もしかしたら、彼の気が散ってしまうかもしれない。私に注意がそれた隙に、彼が撃たれてしまうかもしれない。……それで死んでしまうかもしれない。
そんなのは、どうしたって御免だった。
そもそも私はこのゲームが始まってから、幸か不幸か一度もそんな場面に出くわしたことが無い。
……だから、私の口から出る言葉には、現実味が無かった。
ただ、漠然とした恐怖みたいなもの。それを追いかけていただけで。
……少なくとも、少年はもっと確かなビジョンを持っていたんだろう。拳銃に対して、このゲームに

対して、……死に対して。
彼は言った。二人も見殺しなんて、って。
……守ろうとして、守れなかった。そんなつらい経験をしたんだと思う。
だから、自覚の無い私の言葉が許せなかった。
……そのときは、頭に血が上って、全然そんなことは考えられなかった。
彼が戻ってくるかもしれない。だったらむやみに動かない方がきっといい。――そんな希望に縋って、私はここでじっとしている。
でも、……まだ彼は戻ってこない。
そうして私は、進むことも退くことも出来なくなった。
『ここで立ち止まっちゃいけない』
そんな少年のセリフが脳裏をよぎる。
……でも、結局止まってしまった。
あなたのせいだ。あなたが、あんなこと言うから。
私の周りは全て森だった。どこを見ても変わらない。出口も見えない。
……一人になったら、堪らなく心細くなった。
私は、意図せずに自分をごまかしてきたみたいだった。
半日程度しかないあの少年と過ごした時間。それが、どれほど私の助けとなっていたか。……救いとなっていたか。身に染みて分かってきた。
一人は、嫌だ。
一人は、寂しい。
――知らず知らずのうちに、私は体を小さくして縮こまっていた。
「――逃げようか？」
不意に、少年がそう言ってきた。
「え？」
「ここにいると危ないかもしれない」
彼は、その銃声のしたらしき方角を見つめている。
「で、でも」

「僕の耳に間違いが無いとしたら……相手は拳銃だ。もし襲い掛かられたら、僕は君を守れないかもしれない」

「そんな……大げさだよ、聞き間違いかもしれ――」

私は軽く笑いながらそんなことを言った。

「……多分、現実なんだ」

……でも、彼は全然笑っていなかった。

「で、でも、まだ私達が狙われたわけじゃ……」

「例え狙ってなくても、流れ弾に当る事だってある。そんなばかばかしいことで命を失うかもしれない。……僕は、君を危ない目にあわせたくないんだ」

そういうと、彼は私の手をとって、今まで歩いてきた方向へ引き返そうとした。

「ちょっ……待って！」

「だめ、待てない」

彼は、強引に私を引っ張っていく。

「……どうして、そんなこと言うの」

「……どうしてって」

「だって、すぐ傍で殺し合いをしてるんでしょ？ 私達それを見捨てて逃げちゃっていいの……？ それも、自分の命かわいさに⁉」

「それは……」

少年はばつが悪そうに目を伏せる。

「もしかしたら、先に行った相沢君が襲われているのかもしれない。もしかしたら、折原君が闘っているのかもしれない。もしかしたら、茜が闘っているのかもしれない。それなのに……、それなのに逃げるの⁉」

いつの間にか、私はそう叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。

「絶対にそうだと言う保障は無いだろ」

つられてか、少年の声も高くなる。

「違う保障も無いもん！ 私行く！ 行って確かめる！」

バチンッッ‼

頬が、熱かった。
「…………え」
私が、頬を叩かれたのだと気付くまで、少しの時を要した。
「綺麗事ばかり言って…………。君は只の女の子なんだぞ。自分のことだって……自分の身だって守れないくせに、知ったようなことを言うな。君は自分がどういうことを言っているのか、どういうことをしようとしているのか、本当に分かっているのか……」
少年が……振り上げた手もそのままに……私に言い放った。
「う……っく……ひっく……」
涙が、出てきた。
「武器も無い……防具も無い……体一つでぶつかって、それで……間違って君が死ぬことにでもなったら僕はどうすれば良いんだ！　二人も……二人も見殺しにしなきゃいけないっていうのか……」

彼の腕と……声の端が……震えていた。
「……そんなの……ひっく……ずるいよ……っく」
しゃくりあがって、上手く喋れない。
「みんな……同じ思いをしてるのに……っく……同じように……ひっく……傷を負っているのに……」
私は、少年を見つめる。
「私……そんないい子じゃないよ？　っく……そんな……知らない人の生き死にで……ひっく……泣いたりとか出来ない……けど」
……少年は黙って聞いている。
「友達が……危険と隣りあわせだって時に……そうかもしれないときに……っく……見過ごして……あとから後悔するのは……絶対に嫌……」
「……結局、戦っているのが君の友達じゃなかったら？」
「それは……違ってて良かったねって」
私は、笑顔でそう言ってみせた。
……涙でひしゃげてはいたけど。

「それで……自分が傷つくことになってもかい」
「だって……後悔……したくないもん……」
「…………………………………………そうか」
少年は、何かを決心したように顔を上げた。
「なら、僕が行こう。僕一人ならどうにでもなる」
「え……」
風が吹いた。私達の間を吹きぬけた。
「君は……ここで待っていろ。もし誰か来たのを感じたら、たとえだれが来てもすぐに逃げるんだ」
そう言うと、彼は積み直した鞄を背負った。
「ま、待って……」
「大丈夫、無益な戦いは止めてみせるさ。それにさっきも言ったとおり、君を巻き込ませるわけには行かない」
そう言って、私の背後を一望する。
「ここなら見通しもいいし、君の足ならたとえ誰が襲ってきても逃げられる。だから……」
急に、少年の顔が険しくなる。
「時間が無い。急がないと取り返しが付かなくなる」
そういうと、少年は私に近づいてきた。
そして、くっつくほど顔を寄せて、耳元で囁いた。
「君は彼女の帰ってくる場所になるんだろ。……だったら、間違ってもこんなことに巻き込まれちゃダメだ」
心臓が、早鐘のようになった。
「自分から危険に飛び込もう、なんて言った君だ。……一人でも、大丈夫だよね？　守れるよね？」
「……守れる……もん……、私……大丈夫だもん」
それだけ言うのが、精一杯だった。
少年は満足そうに、私の頭をぽんぽんと叩いた。同じくらいの背なのに、あまり違和感が無かった。
「……な……でよ」
「……え？」
「死な……ないでよ。知らない人のためには泣けなくても……私……あなたが死んだら……涙……止まらなくなるんだから……」

「……ふふ」
そう、微かに笑うと、少年は私の後頭部に添えていた手を背中に下ろして、私を優しく抱きしめた。
「――大丈夫、まだ僕は死なないよ」
そして、少年は私から離れた。
「また、きっと会える」
背中越しの言葉が、風に乗って伝わってくる。
「そのときまで……さよなら」
――それが、私と彼の永遠の別れとなった。

316 ――――背走

体が重い……。こんな疲労、未だかつて味わったことがあっただろうか。
本当に油断だった。ただの女の子だと思ってかかった私の失策だった。
――篠塚弥生は、傷ついた体を引きずって、森の奥へと逃げ込んでいた。食料も尽きかけ、武器も無くし、あまつさえ余計な手傷を負った。
「こんなところで、立ち止まっている暇は、無いというのに……」
深い森だった。それは私にとって有利に働いた。
――いや、果たしてどうだろう。
確かにこうやって身を隠せることはありがたいがそもそもの奇襲に成功していれば、そんなもの必要も無かった。
ただ、私はまだ生きている。ほぼ、五体満足に動くことは出来る。と、言うよりは、均等にダメージを受けていると言うべきか。いずれにせよ、今の環境でその状態を保持できたことは、正に千金に値するだろう。

『なによ、それじゃああたしと同じじゃない』

リフレインする言葉。あの少女――確か、七瀬と

か呼ばれていたか――の言った言葉だ。
同じ……そう言われれば、確かに同じだ。
誰かを守るために闘う。守るために傷つける。守るために――殺す。そんな人間は、私ぐらいのものだと思っていた。
だが……。

『あたしは二度と、遭いたくないわ』

――同じ目的で戦う人間がいるのなら、私はそれを打ち砕かなくてはならない。
それが、私の戦いなのだから。

ザ……ザ……ザ……ザ……
どうしても音が立ってしまう。この体では足音を絶つのも楽ではない。
だが、流石にこの状況で誰かに見つかるのはまずかった。ただでさえ女性は男性に比べて不利だというのに、体は傷つき、疲労が溜まり、あまつさえ武器までも失ってしまった。
だが……。
『誰か……いるのか!?』
そう、辺りに響き渡った。
黒い少年――。それが、私の目が捉えた声の主の姿だった。
大丈夫、私はそう自分に言い聞かせる。
足音だけだ、まだ自分の姿は捉えられていない。
無造作に歩いていた私の足音に彼は〝気付いた〟。
だから、もう足音は立てられない。
……動けない。もう何の音も立てられない。
出来うるなら、心音すらも止めてしまいたい。
あの少年に見つかるな、あの少年にかかわるな。
狩る側に回ってからすっかり鋭敏になった本能が、心の中で高らかに警報の鐘を鳴らした。
何故そこまで彼を恐れたのか？
……恐らく傷ついた体が、余計な戦いをするのを

拒んだのだろう。
永遠とも思えそうな瞬間が過ぎて。
『………くっ』
少年は、ここを立ち去っていった。
――この場を凌ぐことができたというのは本当に運が良かった、としか言いようが無かった。
歩みが刻まれる。一歩ずつではあったが、着実に。
……森の終わりは、すぐそこにまで来ていた。
「!?」
誰かいる！
弥生は即座に伏せて、自らの体を茂みに溶け込ませる。
誰だ……。
見えたのは、小さくしゃがみこんでいる女の子。
由綺……ではない。もちろん、理奈でもないようだ。どうやら、私の知っている人間ではないらしい。
これは、チャンスなの……？
弥生は自問した。
あの女の子の付近になにやら鞄がある。もしかしたらあの中には食料が……あわよくば武器が眠っているかもしれない。
あれを奪うことが出来れば、ずいぶんこの先の行動が楽になりそうだ……。
しかし……、さっきも女の子だと見くびってかかってこのような目にあった。
同じ徹など踏んでいられない。
なら……どうすれば……いいの？
一瞬の迷い。
狩る側に回った分際で、何を偽善的なことを考えているの？
あなたは今、見くびってかかった彼女にしてやられてことを認めた。でもそれは本気でかかればいつでも殺せる、ということの裏返しじゃないの？
十人殺さなければならないのに。
まだあと九人も残っているのに。
由綺さんを、藤井さんを守らなければならないのに。

——だったらもうやることは決まっているでしょう、弥生？
艶やかな笑みが浮かぶ。
ずいぶんと長い一瞬を経て、弥生は再び動き出した。

317　——折片

——蹲ったままの詩子にはまだ知る由も無い。自らを獲物と狙う修羅の存在を。
「少……年……」
口に出してみると陳腐な響きだ。いまいち、名前代わりに呼ぶにはしっくりこない。
結局、名前を聞きだすことが出来なかった。
そう思っては嘆息する。
少年はまだ帰ってこない。
「相沢君……折原君……少年…………茜……」

みんな、危険な目には遭っていないだろうか。
彼女は、今この瞬間に肉薄していた。
今しかない、そう思って弥生は走り出そうとする。
その瞬間に気付く不和。
「ん……ヒール」
あるはずのものが、いつの間にかなくなっていた。
無くなったら真っ先に気付きそうなものなのに、それさえも見落としていた。それくらい気を張っていたのだろう。
弥生は思う。このような身なりでは、由綺さんのマネージャーとして失格だ、と。
だがそのような姿も、もはや隠す必要は無い。
……隠すべき人も、今はいない。
これから死にゆく人物に隠してもしょうがない。
……だから行こう。もう、なにも気にすることはない。
弥生は、飛び出した。

遠くから足音が聞こえる。
ここからでもはっきり分かる。この足音の主は、まっすぐこっちへ向かってきている。
「少年⁉」
詩子は、期待に胸を膨らませて顔を上げた。
しかし――
「な……⁉」
――その期待は、あっさり裏切られた。
見知らぬ女性が、凄い勢いでこちらに向かって走ってくる。
その顔に浮かんでいる表情は、明らかな敵意。
幸か不幸か、詩子がいたのは空き地の中心。いずれの方向からでも、そこに近づくには少しだけ時間を要した。
詩子は反射的に立ち上がる。だが、弥生の気迫に一瞬動きが止まってしまった。そして、弥生はそこへ一気に接近した。
「はあああああああああああ！」
ヴン！
大きく振りかぶり、横凪に詩子を殴りつける！
「きゃっ！」
詩子はとっさにしゃがみ、幸運にもそれを避けた。
(外した⁉)
直撃させることが出来なかった右の拳、しかし弥生の攻撃はそれで終わらない。
「フン！」
ばすっ！
追い討ちをかけるように放たれた弥生の膝蹴り、それが詩子のことを吹き飛ばす。
「あぐっっ！」
体勢が不完全だったせいでこれも直撃はしなかった。だがその蹴りは詩子の腹に浅く入っていた。
やや間合いが開く。
詩子は、少し痛む腹を尻目に弥生をにらんだ。
「……なんなのよ、あなた！」
弥生は返事をしなかった。代わりに、間髪いれず

に接近しようとする。
(このままだと……やられる⁉)
詩子は手近にあったもう一つの鞄――中身の入った――を掴んだ。そして近づいてくる弥生に対抗してそれを振り回す。
「うわあああああああああああああ！」
絶叫して詩子は弥生に立ち向かった。
ガン！
振り回された鞄が弥生の左肩を捕らえる！
「くっ……」
どこかの傷に響いたのか、顔をしかめる弥生。
だがそれを無視して詩子に掴みかかる。
だん！
弥生が無理矢理詩子のことを押し倒した。
「放して……、放して……よ」
のしかかられた詩子は、苦しそうにそう訴える。
だが弥生は容赦なく詩子の首に手を伸ばす。
「死んで……頂戴！」

ぎゅうぅぅっ。
急激に詩子の首が締められる。
「うっ……ぐっ……」
呼吸が出来ない。
それどころではない。息の根を止めるどころか、今の彼女は首の骨を折りかねない勢いで詩子の首を絞めていた。
その表情は、まるで何かに取り付かれたように。
急速に意識が閉じていく詩子。
まずい……凄くまずい……。
詩子はまず始めに自分の首を捕らえている手をはがそうとした。
しかしそれはまるで万力でも使っているかのように固く、まるで歯が立たない。
では腕はどうか。片手だけ離して、詩子は弥生の肘あたりを掴んだ。
……両手は離せなかった。そうしたら、一遍に彼女の意識は飛んでいただろう。

詩子は歯を食いしばった。
首を絞める両手に耐えること、そしてその手をどけること、その両方のために。
……既に十五秒。このままでは、間違いなく私は……。
腕を押し上げる過程で、詩子の目に弥生の表情が映った。
目が血走り、口元は自分と同じように食いしばっている。
自分もこんな顔をしているのだろうか、こんなまるで、鬼のような形相を。
——殺される。
一気に、詩子の中に恐怖が広がった。
「うっ……がっ……ぁぁあっ……」
「ぬうううぅぅぅぅぅぅ……」
その二人の鬩ぎ合いは、傍から見ればまるで獣のようで。
弥生の服の肘部分を掴んで押し上げていた詩子の左腕が、過負荷に耐えかねて震えていた。
もうダメ……。
詩子の思考に、限界の二文字がちらついた。
『——君は彼女の帰ってくる場所になるんだろ？』
——別れたときの少年の言葉が響いた。
「ぁぁ……ぁあああっ……」
詩子は最後の力を振り絞り、左手を押し上げた。
弥生はそれに対抗するように、右腕を詩子の首に押しやった。
詩子の左手が、すっぽぬけた。
ギャリッ、と、音がしたような気がした。
「ぎああああああっ！？」
突然、弥生が詩子から飛び離れた。

……何故か、右目を抑えて。
「か……がはっ……げほっ……！」
拘束から解き離れた詩子はその場で激しく咳き込み、そしてその場に嘔吐した。首を締められたことで、一時的な呼吸困難に陥ったのだ。
「おのれ……」
弥生は呪いの言葉を吐いた。右目を抑えている手の隙間から、血が一筋流れる。
視界がぼやけ、遠近感が狂っていた。
何より、現状に対するショックが一番大きかった。
詩子は混乱しつつも、自分の状態を確かめる。
――左手に血が付着していた。
（逃げ……なきゃ）
詩子は、喉を押さえているのとは反対の手で鞄を掴むと、一目散に森へと逃げ出した。
……その少年が賞賛した俊足、傷ついた弥生には到底追えるものではなかった。
「大……失敗の……ようね」
置き去りにされた弥生が、ぽつりと呟く。
彼女は座り込んだまま立ち上がることが出来ない。
残されたのは、空っぽの鞄と数多の傷だけ。
――彼女はまるで、飼い主に見捨てられた子犬のように、ぽつんとそこにいた。

318　食卓

空は赤みを増し、そう遠くない時間には一番星が見えようかという、そんな時間。
人気の無い住宅街を歩く、二つの影。男と、女。
「……ねぇ」
女が、先を行く男に話しかける。
男は無言。
「……ねえったら」
先程よりやや上ずった声で、再び女が話しかける。
それでも、男は無言。
「…………」

いい加減しびれを切らした女は、実力を行使する事にした。
「人の話を聞きなさいよ！」
「ぎひぃ！」
女の蹴りが股間を直撃し、情けない悲鳴を上げながら男は倒れた。
「……不能に……なる……」
それが、男の最期の言葉であっ——
「勝手に死ぬな」
「ぐわっ」

薄暗い路地裏。
「……まあ、これを見てくれ」
男……祐一が自分のバッグを手に取り、女……繭へと渡す。
不思議な軽さに驚きながらも、繭はバッグのジッパーを開く。
「こ、これは……」
バッグの中身を見た繭が、呆然と呟き、祐一を見やる。
祐一はこくり、頷く。その眼は真剣そのもの。
繭は、信じられない、と言った表情で、
「……空じゃない」
祐一は、再度頷く。
「ああ、その通りだ」
「……つまり、どういう事よ」
当然繭にはどういう事か分かっている。だが、それでも聞いておかねば気がすまなかった。
そして、祐一の答えは予想通りで。
「水も無い食料も無い、腹減った」
バカにつける薬はないなあ、と、怒る気力も失せた繭は、ぼんやりとそんな事を思うのだった。
「……それはそれとして、確かに食料は深刻な問題よね」
繭の（実は郁未の）バッグには未だ結構な量の食

料があったが、それでもそう長く持つとは思えない。参加者がまだ半分以上残っている現状では、早期的な終結も望めそうに無い。勿論それは、最後の一人になるまで殺しあった場合、であるが。
「そうだな、もう食料が無いし」
祐一が同意する。
「あんたは考え無しに食べただけでしょうが」
それはキノコを食べる前の繭本人にも言える事だったが、繭は当然その事は口にしなかった。
間違ってバッグを持ってきたことに、多少後ろめたさを感じてはいたが、その事も考えない事にした。
小さく咳払いをして、仕切りなおす。
「……それで、つまりはこの住宅地になにか食料は無いか、と立ち寄ったわけね？」
「まあ、そういう事だ」
今後のことを考えるというよりは、今腹が減ったから来たのだろうが、食料を補充するということ自体は間違ったアイデアではない。
と、そんな事を考えているとき、祐一の腹が盛大に音を立てた。
沈黙。
「……お腹空いたなら、キノコ、食べる？」
「絶対に嫌だ」
間髪入れずに、祐一はそれを断った。
そしてまた、二人は当ても無く住宅街をさ迷う。
「うが～、腹減った～」
「五月蝿いわね……誰かに見つかったらどうするのよ」
繭が咎めるが、食べ物のことしか考えていない祐一には聞こえない。
と、突然祐一の動きが止まる。
繭はそれに反応しきれず、祐一の背中に顔を埋める事となった。
「な、何よ」
祐一は虚空を見て、うわ言の様に呟いた。
「飯の匂いがする……」

「はぁ？」
何言ってるの、とでも言いたげな表情で、藺が祐一の表情を見やろうとしたその時。
「こっちだ」
と、祐一は歩き出す。
呆気に取られる藺だったが、
「……ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
すぐに意識を取り戻すと、慌てて後を追った。
ああ、なんで自分はあいつの事を放っとかないのだろう。なんてお人好し。
そんな自分を、藺は呪った。
「ここか……」
一軒の民家の前。
成る程、誰かがこの家の中にいるというのは確かなのだろう。ほかの家と違って、カーテンがきっちりと締め切られている。
冷静に考えると、罠だろうが、残念ながら今の祐一は冷静ではなかった。
普通に門をくぐり、普通に家の中に入ろうとする。
「ちょっと待ちなさいよバカ！　これ絶対罠よ！」
声を潜めつつ藺は怒鳴る。当然祐一は聞き入れない。
「ああもう！」
それでも結局、藺はついていく。祐一を楯にする格好ではあるが。

かちゃり、と静かにドアを開く。開けた瞬間に不意打ち、というのは無かった。一安心。
音を立てないように、廊下を歩く。
「ん？」
藺の耳が、何かの音を拾う。
「電子レンジ……？」
間違いない、電子レンジの音。誰かが、居るのだ。台所に。
祐一に眼で合図する。流石に慎重になっている祐一もこくり、と頷く。

台所まであと五歩、四歩、三歩……
その瞬間、背後で水の流れる音がした。
二人の動きが止まる。
しまった、と繭は思う。台所に誰か居る、とは限らなかった。
勿論、誰か居るのかもしれないが、通り過ぎた、背後のトイレに、誰かがいる、のだ。
万事休す。やっぱりこんな奴についてくんじゃなかった、と繭は思った。
トイレのドアが開かれる。そして――

「何やってんだあ？　相沢」
暢気な声がかけられた。

「いやー、死んだかと思ったぞ」
「あんたのせいでしょうが……で、この人はあんたの知り合い？」
祐一に質問をぶつける繭だったが、先にその『この人』が答える。
「おうよ。俺と相沢は共に数々の戦場をくぐりぬけ――」
「ウソ言っちゃダメだよ、ジュン」
いつの間にか、その男の隣には金髪の女の人が立っていた。
「兎も角、腹減った……」
その二人の掛け合いなど耳にも入らない、といった感じで、祐一がぼやく。
バカばっかりだ、と繭は思った。

319　（無題）

お腹が空いた。
バッサバッサ
「……おいカラス、少しの間でいいからおとなしくしてろ」
大して怖くも無いが、妙な威圧感のある声で僕を

促す。さっきからじっとして、何をやっているんだろう。左手に持った『小さい箱』をじっと見つめたままだ。動くな、と言われた手前、体を動かさないように首だけ男の持っている箱のほうに向け覗き込んでみた。
　ピッピッピッ
　赤い点が、中心の青い点に向かって近づいていく。男はそれから目を離さない。
　息を潜め、右手には例の『危ないモノ』を構え、左手には『小さい箱』。
　人間のやることはよくわからない。心の底からそう思ってみた。
　ピッピッピッ
　静まり返った森の中、その音だけが響き渡る。よくわからないけど、僕まで緊張してきた。だんだん、赤い点が近づいてくる。
　男は動かない、僕も動かない。
　ピッピッピッピッピッピッピッピッピ……

　突如、音が途切れた。
　ぐう～……
「……」
　さっきとはうって変わって、これ以上無いくらい、情けない顔をして男は呟いた。
「……なにもこんな時に」
　なんだ、どうやら男はお腹が空いていたらしい。こいつ人間のくせに、動かなくてもお腹は空くことを知らないのだろうか。
　……いや、もしかして
　とてつもなく嫌なビジョンが頭の中に浮かんできた。
　――僕の首を握り締め、形容しがたい邪悪な顔をしながら男は問う。
『カラス、どうやって食われたい？』
　ぶんぶん、首を左右に振り。必死になって拒絶の意を示す。

『ここは、オーソドックスに焼き鳥か、それとも鍋に放り込んで茹で上がったところをポン酢で食うか』

……どっちも嫌過ぎる。

『この、カラステイマー国崎往人の体の一部になるんだ。光栄に思ってくれてもいい』

殺す気でいるのに、なんてえらそうな態度なんだ。

バッサバッサ羽を動かしてみる。

『まあいい、とりあえず邪魔な羽を毟らせてもらうぞ』

きゅぴーんと音がしそうなほど輝いた目をこっちに向けて、男の手が伸びてきた。

こんな奴に食われてたまるか！

バッサバッサバッサバッサ――

「痛え！　カラス！　おとなしくしろ！」

……男の声が響き渡る。ここは森だった。

妄想に入り込みすぎて、爪を立ててしまったらしい。これ以上男の機嫌を損ねないように音を立てないように羽をたたんでいく。

男は、言ってから我に返ったのか、『小さい箱』に目を落とす。

続いて僕も首を向ける。

点はまだ中心にきていない。

「聞こえてないか？　あと十メートルくらいか……」

安堵の溜息と共に声を漏らし、例の『危ないモノ』を構える。

その顔は、カラステイマーの顔じゃなかった。

320　救世主

「なに寝てんのよ、折原ぁ」

折原が倒れ伏す。

「夢の中でまで寝るなんて、折原ったら阿呆ねぇ。私と折角デートできるのよ？　現実じゃできないん

だから楽しもうよぉ」
折原を揺さぶる。
揺さぶる……。
起きない。
「なんて寝ぼすけ……」
揺さぶる。
揺さぶる。
揺さぶる……。
「ねえ……」
揺さぶる……。
「ねえ……」
揺さぶる……。
「ねえ！」

——ゴロン——

折原が仰向けになった。

血が出ている。
体に力が入っていない。
呼吸も……。していない？

おかしい。
幸福な夢のはず。
この血は何？
認めたくない。
夢であって欲しい。
でもあまりにもリアルだ。

「いやぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーー！！！」
現実感が戻ってきた。
「折原！　起きてよ！　起きてよ！　息してよ!!」
必死で揺さぶった。
「折原！　折原！　折原！！！」
どうしたらいいのかわからない。
揺さぶるのが正しいのかどうかもわからない。

こんなことなら保体の授業もっと真面目に聞いておくんだった。
そんな間抜けなことまで頭をよぎる。
泣き崩れた。
「折原……。折原……。う……、うぐ……」
なにもわからない。
こんなときどうしたら良いのかなど知らない。
一般人が知る由もない。
「おりはら……」
涙を流すだけ。

夢は現実。
現実は地獄。

目覚めてみたらそこは地獄。

でも地獄にも救いはあるのだ。
救世主はいるのだ。

「浩平君か!?」

女装マッチョの救世主。

321　これからを考えて

天沢郁未（三番）は走るスピードを少しずつ緩めて、周りを見回した。
「ハァ、ハァ、ハァ」
息がもう、完全に上がっている。
「ハァ、ハァ……あの子……見失っちゃったか」
水瀬秋子の元から立ち去って、郁未はあの首を締められていた少女を追いかけた。多少のビハインドあったとはいえ、足の速さには自信がある。追いつけると思ったのだが……
「方向を、間違えたのかな……それとも、どこかに、隠れたのかも……」
あの子の事は心配だった。あんな小さい子まで殺

し合いをさせられているなんて吐き気がする。できることならば保護したいと思った。けど、刹那的な感情で行動するべきじゃない、とあいつは言った。
他人のことに気をとられ過ぎると自分の目的が果たせなくなる、と晴香はいった。
それは正しい。今、この状況では確かに正しい。お母さんを助けられなかった、あの少女を保護できなかった、水瀬名雪を傷つけた。
もうそれは認めるしかない。どんなに辛くても、もうそれは過去のこと。変えることのできないこと。だから、いいかげん落ちついて、今からのことを考えないと。
水瀬秋子と対峙したとき、極限の怒りと恐怖の中で、郁末の口をついたのは友人達のことだった。
それが、多分、郁末の本音、郁末の核、郁末の今なすべきことだ。
水瀬秋子のことは今は忘れよう。
もう一度あったときなおも怒りが身を焼くならば、それはきっと刹那的ではない感情。そのときは殺しあえばいい。
とにかく今は、
「一休みね」
ブランクが長いとはいえ、陸上部の元エース。体力は結構自信がある。だが、もうそれも限界だった。とにかく今は腰をおろして何か口に入れないと。
(正直、食欲なんてないんだけどね)
木立の中細々と流れる川の脇に腰を下ろしバッグをあけた。
「結構食料は残ってたはずよね」
水のほうもたびたび水場を見つけては補充していた。一人暮らしの長い郁末は、その点結構目端の利くほうだ。
なのに、なかった。
目をこすってみて、もう一度中身をのぞく。
食料も水も、かけらもなかった。
数秒黙り込んだ後、郁末はようやく一つの理解に

達する。
「……あの、ガキ……」
川で水を飲んで、郁未は一息ついた。多少はらわたが煮えくりかえっているような気もするけれど。
「さて、これからどうするか……」
軽いストレッチをしながら、郁未は考える。
まず、由依。怪我をしているのにもかかわらずおいてきてしまった。
けれど……彼女は今耕一たちと一緒にいる。
耕一は強い。それに、おそらく合流したであろう折原浩平は銃を持っていた。
今、郁未が由依のそばにいても、それは唯一の戦力ということにはならないだろう。水瀬秋子という敵を作った今では逆にマイナスという考えもある。
「ごめん……由依」
郁未はちくりという心の痛みを無視して、由依のことを頭から締め出した。
次に、晴香。
「晴香だったら、どんな行動をとるだろう？」
おそらくは二つ。
兄の良祐を探すか、高槻に挑むかだ。
もし彼女が兄を探しているというのならば、彼女に合流するには、何のあてもなう島をさまよう以上のことはできない。
だが、もし高槻に挑むというならば。
晴香の場合なら、何の計画もなくただ突撃するだけ、というのはありえた。だが、その場合、晴香は失敗して死んでいるはずだ、高槻は死んでないのだから。
晴香は死んではいない、少なくとも前回の放送までは。ならばこの可能性も薄いか。
（いや、無理だと断念して晴香が引いた可能性も十分にあるか……）
あるいは、晴香にもっとクレバーな仲間ができて、今現在好機を狙っている可能性もある。それならば、郁未の助力は晴香にとって願ってもないことだろう。

「結局は、高槻を追えということね」
晴香に合流するつもりならばそれが一番可能性の高い行動だろう。
最後は……耕一たちのそばから離れることになった原因。葉子だ。
「まさか……葉子さんがジョーカーだなんて」
そりゃ確かに葉子さんはＦＡＲＧＯ一筋な人で、ＦＡＲＧＯに入会したのも消費税導入より前らしいけど……でも、ＦＡＲＧＯで別れたときのあの葉子さんの笑顔が偽物だったなんて信じたくない……
郁未は頭を振った。
「だめよ郁未、そんなふうに考えちゃだめ」
今は現実だけを見なくてはならない。今は感情は排さなければならない。甘い観測は捨てるべきだ。
問題提起。葉子さんはジョーカーか？
回答。わからない。
ならば問題を変えよう。自分がジョーカーだったとして、折原浩平に「高槻を倒す」などと嘘をつくか？ 私に伝言を頼むか？
回答。否。そんな嘘はつかないだろう。
この椅子取りゲームで殺し合いを加速させたいなら、出場者に人間不信を抱かせ、他人を殺すことでしか生き残れないと思わせるべきだ。
そこで、折平浩平達に高槻が死ぬかもしれないという希望を与えてどうする？ 天沢郁未という信頼できる人間を教えてどうする？
もし嘘をつくならば、もう既にマーダーがいるとか、ジョーカーがいるとかそういうことを言うべきだろう。
ここで確認。自分は甘い感情から希望的な観測を抱いてないか？
……否。今の考察は完全に理屈だけで行ったと断言できる。ＯＫ、では葉子さんはジョーカーではないとして話を進めよう。
問題提起。葉子さんは本当に高槻を倒しにいったのか？

回答。ＹＥＳ。葉子さんは高槻を倒しにいった。いくら考えても浩平たちに嘘をつく理由が思いつかない。
問題提起。では、葉子さんはどうしている？　なぜ葉子さんの死を告げる放送もなく高槻も死んでいない？
回答。……わからない。あまりに情報が少なすぎる。
ただ言えることはある。葉子さんは無謀な勝負をする人ではないということだ。
いや、葉子さんとて感情的になることは、多分ある。見たことはないが。だが、彼女は『約束』していったのだ。葉子さんは大言を吐く人ではない。ならば、
「勝算があったの？　それとも今もまだ勝算があるの？」
葉子さんがＦＡＲＧＯにいた経歴を考えれば、自分の知らない情報を葉子さんは持っているかもしれない。
これは、さすがに希望的観測かもしれないな、とは思う。だが、とにかく、
「結局は、これも高槻か」
ならば、最後の問題。高槻はどこにいる？
もし、島の中にいるというならば高槻は相当な危険を冒している。出場者だって結構強力な武器を持っているものもいるのだから。
無論、胃の爆弾を使えば自分のみは守れるだろうが、それならばこのエリアには近づくな、という指示ぐらい出るんじゃないだろうか？
（ひょっとして……高槻はもうこの島には……）
いや、やめよう。郁未は思った。
軽薄な推理は窮地を招くだけだ。それが元で耕一たちと別れることになったではないか。
「もう少し情報がいるか……スタート地点……あっちだったわよね」
郁未は疲れた体をおしてゆっくりと立ち上がった。

322　サバルタンは語れるか

「食った食った。やはりレトルトは偉大だな」
「あんた、ほんとによく食べるわねぇ……」
「早メシ、早グソ、早ブロは日本人の美徳だからな。大和民族のサラブレッドたる俺もこの因果からは逃れられんのさ」
「なによそれ。初めて聞いたわよ、そんなの」
相沢祐一（一番）は宮内レミィ（九十四番）の作ってくれたレトルトのチャーハン四人前を一気に平らげると、至福の表情を浮かべてすっかり満たされた自分の腹をさすった。一方で椎名繭（四十六番）は祐一の底なしの胃袋を目の当たりにしてか、いささか食傷気味になったらしく、ちびちびとこれまたレトルトのクラムチャウダーをつついてる。
「まだまだたくさんあるからネ！　おかわり、たっくさんしていいヨ」
キッチンの方からレミィが二人に声をかけた。幸運にも電気系統が生き残っていたおかげで、冷凍庫に納められていたレトルト食品も無事であったし、解凍するレンジも立派に役目を果たすことができたのである。
「いや、さすがにこれ以上は食えそうにない。ほんとにごちそうさんでした」
「オソマツサマデシター。それじゃお茶いれますネ」
「…………」
とたとたと愛らしくキッチンを駆け回るレミィを見て、北川潤（二十九番）は目を細めた。その北川とテーブルを挟んだ向かいに座る繭は横の祐一を肘で軽く突っつくと小声で彼に尋ねた。
「ね、祐一。あの人達と知り合いなんでしょ？　そろそろ紹介してくれない？」
「ん？　おお、そうだった。腹減ってて、んなことすっかり忘れてたな」

繭に促されると、祐一は歯をせせってた楊枝を折って、ガラスの灰皿に捨てた。
「ヤツは北川潤。俺と共に幾多の死線を潜り抜けた……」
「知ってるわ。あんたの戦友の北川さんでしょ」
「ま、そうだ」
そういうことを聞いてるんじゃないの、と繭は祐一を咎めるように睨んだ。
「まあまあ、そんな顔をなさりなさんな。俺が転校してから最初につるんでそれ以来のつきあいなんだ。アクの強いところはあるが、信頼できるヤツだ」
北川も笑顔を作って繭に言った。
「そうなんですよ可愛らしいお嬢さん。相沢とはどんぶりでフルーチェを作って一気飲みしてみたり、夜な夜な街に出没しては見境無く地球を大切にしたり、巨人ファンの集まるレフトスタンドで『俺は藪が好きだ』とカミングアウトしてみたりと、マクロファージの入り込む隙間も無いほど固く結ばれた仲だったりするんですよ」
「へぇ……どんぶりでフルーチェをねぇ」
あまり興味のなさそうに返事をすると、値踏みするかのような目で繭は北川を見た。繭からすれば、どうも甘っちょろいハンサム以上でもそれ以下でもないように、彼は映るのであったが。
「そして、俺達にメシを作ってくれた彼女の方は……」
「ああ、それは相沢も知らなかったよな」
北川は表情を戻すと、キッチンの方に顔を向け、ティーカップを並べているレミィをあごで指した。
「彼女はガルベス。バンビーノ・ガルベス・ヘレン・ミヤウチだ。ここ数年ローテの柱だったが、頭に血が上るとすぐに外角高めの直球を投げるのが玉に瑕だ」
「ほう、よくわかったようなわからないような」
「ガルベス……ね」
あまり得心が行かぬようであったが、とりあえず

祐一と繭は頷いた。一方のそのガルベスといえば、気持ちよさそうに鼻歌を歌いながらティーパックの紅茶を淹れるのに専念してるのか、彼らの話は聞こえてはいないようである。
「それで相沢。そちらの可愛いお嬢さんだが……」
「うむ、こいつは椎名繭。わけあって予の肉奴隷を……」
最後まで言い終える前に、神経質な金属音と豪快な衝撃音を轟かせて、祐一はテーブルの下に沈んだ。見れば繭が手に大皿をもって肩を震わせている。
「改めて訂正を求むわ」
「は、はい……こちらは椎名繭様。逆三顧の礼でこの度私めを奴隷として雇って下さった高邁潔癖にして賤しからず、蛮勇無能の獣たちの中でただ一人、赫々たる君子の亀鑑これあるお方にございます、はい」
「よろしい」
繭はテーブルの上に皿を置くと、何事もなかったのようなすました顔に戻った。
「ふむ、その年で手に職をつけたか。将来設計も万端だな。輝かしい未来と明るい老後か、見直したぞ相沢」
「結構、最高の賛辞だ。ここはひとつ北川氏にも小生を見習って、努力と研鑽を積んで立身出世の階梯を歩んで頂きたいところですな」
いつも通りの軽口を叩く祐一の表情が、わずかに翳りを帯びたのを北川は見逃さなかった。

夕風の当たるベランダ。手すりに背をもたれかけて北川と祐一は空を仰いでいた。
互いの近況を説明しあっていた二人であったが、知己の死や別離、そして変心と、自分たちとそれを取り巻く状況を再確認するにつれ、最初はいつもの調子で言葉を交わしていた両者も、次第に気まずさと居心地の悪さと説明しようのない不快感が心を蚕食し始め、今では重苦しい沈黙が場を支配していた。

「でだ。相沢、おまえはどうしたいんだ」
やがて口を開いたのは北川の方であった。
「その、元クラスメートさんとやらを」
「もう一度、いや、何度でも説得して、なんとしてでも救い出す」
ゆっくりと、だがはっきりと祐一は答えた。
「しかしなぁ、相沢センセ。そいつは一筋縄じゃいかんな」
焦慮のうちにどういう表情をしていいのかわからず、北川は掌で顔をなでた。
「その子はすでに乗ってしまった人間なんだろう。現に人を何人も殺めているし、おまえさんの説得に耳も貸さずに銃を突きつけて、挙げ句の果てにビルバクを敢行したわけだ。言葉は悪いが、俺だったら自制を失ったヴァルキリーとランデブーする気にはなれない」
「…………」
祐一は言葉に詰まった。彼は北川に累が及ぶ可能性を考えると里村茜という名前も口にするのが憚られたし、ましてや茜こそが美坂姉妹を手にかけた下手人であることなど、口が裂けても北川に伝えられなかった。
「お前の言葉がその子にどこまで届いたかわからんが、少なくとも心の錠まで解けなかった。次に出会うことがあったとしても、その時はそれこそ返答の代わりに鉛玉が飛んでこないとも限らないんだ。なぁ、相沢。そんな今まさに悪鬼羅刹に身をやつしつつある彼女を、おまえは昔の思い人として救い出せるのか」
そしてどうする。おまえは彼女の十字架を背負って歩いていけるのか。いや、それだけならまだしも、おまえまで彼岸の扉を開けて奪う方に回ってしまう事が無いという保証はあるのか。
思っていたことの最後は言わずに北川は黙って飲み込んだ。事が事だけに迂闊なことは言えない。場末の深夜ラジオ番組に届いた「ボクの好きな人は元

クラスメートで、しかも殺人鬼なんです」なんてハガキに対して、うだつの上がらないＤＪのように「何も考えずにまずソープへ行け。自分に正直になって癒されてこい」などと小学生でも言えるアドバイスを進呈するが如きは、無論北川には許されなかったし、第一この島にソープやヘルスなどといったテーマパークを期待するのはお門違いであろう。
「もう、決めたんだ」
　香里や栞を見捨て、さらに真琴を失い、その手を血に汚した従妹を半ば裏切るような形で拒絶した。茜と彼女たちを自分に都合のいいように天秤にかけた結果がこの様だ。たとえ茜を懐へ抱き寄せる事が叶ったとしても、それは彼女たちの屍や涙や絶望の上に築かれた、誰からも祝福されない血まみれの握手、背徳の抱擁だ。道化の方が幾万倍もましだろう。
だが……。
「全てを手に入れようとする事は何も手に入らない事と同じなんだ。駄々をこねれば何でも買ってもらえると勘違いしてる子供よりタチが悪いな。だから、俺は自分の腕に抱えきれるエゴだけを貫き通す。そう決めたんだ」
　デタラメ一歩向こうの罪深い宣言だ。与える一方の恋と、奪うだけの愛。たとえ触れあっても両者は溶けあわずにかき消えてしまう。なんて剣呑で皮肉な恋愛だろう。危険すぎる、と北川は考え込まずにはいられない。
「稀代のラフメイカー相沢センセにしては出来の悪いジョークじゃないか」
「ご期待に応えられなくて残念だが、俺は本気だ」
　結局、北川が言えたのは嘆息混じりの空疎な皮肉だったが、それも今の祐一の前には何ら感銘を与えることなく表面をかすめただけに終わった。言い終えるとそのまま祐一はリビングへと降りていった。
「僕がロミオで君はジュリエット。こいつはまさに……」
　去っていくその背中を見やりながら北川は半ば独

り言のようにつぶやいた。

323　嘘をつくこと、信じること

別の道を辿り、誰にも会わないように願いながら約束の地へと急ぐ。
(笑っちまうよな……早く味方を見つけて……協力したいと思ってるのにな)
心の矛盾。
だが、度重なる出来事で確実に他人との遭遇を恐れるようになっていた。
大志の裏切り、瑞希の死、詠美を助ける為に死んだ由宇、放送で知らされる仲間達の死、再会した南の豹変、遭遇したと同時に襲って来るカップル。
横で力なく笑う詠美を腕で抱きながら和樹は歩く。
「ここら辺だな……着いたぞ、詠美」
玲子の消えた場所――島の最北の森の中に存在する小さな広場。便宜上、和樹達はここを『北の広場』と呼んでいた。
そこに、既に一人の影……
「誰だ!?　……楓ちゃんか……」
和樹が構えた機関銃を下ろすと同時に楓がこちらへ向かってくる。
「……どうでしたか？」
「いや、収穫なしだ。スタート地点を含めて怪しいとおぼしき場所を見て回ったけど」
「そうですか」
楓の声に落胆は見られない。
「結構冷静だな。こっちは何もなくて結構ゲンナリなんだぜ？」
「いえ……そこを探したことに意味はあります。次は違う処を探せばいいんです。そこになにもないと分かっただけでも収穫はあったと言えませんか？」
「本当に冷静なんだな……」
「ただ前向きなだけです。そう考えた方が後々の為ですし……それに元気が出るって思います」

「……」
感心した風に和樹が短く口笛を鳴らす。
同時に楓から何か物を投げつけられ――
「おっと……」
放物線を描いてゆっくり飛んでくるそれを和樹は片手でキャッチする。
「これは……リンゴ？」
「食料です。向こうの山に少しだけなってました。おいしいと思いますよ」
詠美にリンゴを手渡す。遅れて楓からさらにリンゴが飛ぶ。再びそれをキャッチして今度はそれをそのまま口に運ぶ。
乾いた口内に酸味が広がって――
「ちょっと酸っぱいけど……おいしいな」
詠美も、和樹が食べたのを確認してからそれにかじり付いた。
「うん……少しすっぱい……」
「良かったです」
楓が遠慮がちに微笑んだ。
「一応持っといてください」
自分の分を二つ残し、計四つのリンゴを手渡され、和樹はそれを大事に鞄に詰め込む。
「ああ……今、楓ちゃんは食べないのか？」
「私はその場で食べたから大丈夫です」
「そっか……」
少し会話が途切れ、沈黙があたりを包む。
「そう言えば……楓ちゃんはどうだったんだい？なにか手がかりは……」
「……何もありませんでした。どこかに地下へと続く道があると踏んでるんですが」
「……なんでだ？」
楓は一部始終を話した。玲子と共に脱出の為の手段を探そうとしていたこと、玲子が言い出した地下通路の可能性、そして住宅街のマンホールはすべてコンクリで埋められていたこと等。
「……海岸にある祠の中に隠された海底通路があっ

たりしないかな？　と思いましたが、そんな都合のいいことはありませんでした」
　というより祠がない――少なくとも楓は見つけられなかった。
「マンホールはコンクリで固められてたのか……ダイナマイトでもあれば壊せるかな？」
「そうかもしれません。ですが、すべて想像の域をでない話ですから」
「まあ、そうだけど……でも秘密の通路があるっていう線は捨てがたいな」
「はい……」
　そこで、楓の顔が曇る。何か言いづらそうに二人の表情をうかがう。
「……どうした？」
　和樹の言葉に、今まで黙って耳を傾けていた詠美も楓を見やる。
「……言わなければいけないことがあります……」
「言わなければ……ならないこと？」
　和樹の言葉に少し躊躇して、それでも控えめに頷く。
「南さんのことです……」
「『南さん……の？』」
　場に緊張が訪れる――
「私が……殺しました。私が……この手で殺したんです……」
　そのとき生暖かい風が吹いた――
「私が……殺しました。私が……この手で殺したんです……」
　ゆっくりと、言葉の意味を噛みしめるように楓。
「う、そ……嘘……だよね……」
　詠美の言葉。三人の耳にやけに遠く響く。
「嘘でしょ……嘘だって言ってよ！」
「南さんの最期の言葉……南さんは最後に……元にもどってくれました」
　辛そうに、何かを思うように楓が言葉をしぼりだす。

「だったら……なんで……なんでころしたのよ！　どうして、どうして……!?」
詠美が楓の胸倉を掴みあげ、問い詰める。
「言い訳は……しません」
楓が、それだけをようやく口に出す。
「どうして……人を、殺しておいて……どうしてそんなことが言えるのよっ！」
詠美が、その白く細い首に手を回し……
「――っ！」
締めあげる。
詠美が小さなその体を宙に持ち上げるように全力で力を込めて――抵抗らしい抵抗もせず、楓の腕が力なく下がって――
「……ば、や……やめるんだ詠美！」
放心状態だった頭を激しく振って、詠美を後ろから羽交い締めにする。
「殺してやる……殺してやるのぉっ！」
錯乱状態の詠美を力任せに楓から引き剥がした。
ようやく開放された楓は苦しそうに喉を押さえながら地面にへたり込む。
「うっうっ……みなみさん……みなみさんっ……！」
詠美がその場で激しく泣き崩れ落ちた。
「えいみ……」
目の前の現実――それはあまりにも辛くて……
和樹の瞳から、涙が一滴、地面へと流れた――
泣き疲れたのか、詠美はそのまま眠ってしまった。ただ、無言で時を過ごす和樹と楓。
「なあ……どうしても話してくれないのか？　その理由ってやつ……」
やがて、和樹がそう切り出した。南を殺した、その理由を。
「……ごめんなさい……」
楓もようやく落ち着いたのか、いつもの調子でそう答えた。

「みなみさん……」
詠美の錯乱状態が激しすぎたのが原因か、和樹にそのことのショックは少なかった。
むしろ、どうしてそんな悲劇が起こったのか……それが気になって。
「……すまなかったな……詠美も、普段はこんなことする奴じゃないんだ」
「分かってます。それに私は、殺されたって文句は言えません。詠美さんの……和樹さんの大事な女性を……奪ったんですから……」
「ほんとうは……理由……あるんだろ？　なんとなくだけど、そんな気がする」
「……ないんです……」
だけど……楓の表情はそうは見えなくて。
「全部一人で背負い込もうとするなよ……な？」
楓の頭に手を乗せ、諭すように和樹。
「だって、だって……」
「楓ちゃん……」
「だって……だってっ……！」
彼女が今まで必死に堪えていた一線。
それが、崩れた――
「うああああ――かずきさん――わたしっ――わたしっ！」
和樹の胸の中で、その感情が溢れて――
「……」
泣き疲れて眠るまで、和樹は彼女の頭を撫で続けていた。
「……漫画描きとして徹夜に慣れておいて正解だったのかな」
涙の跡を残したまま眠る二人を見守りながらぼやく。
「和樹選手、修羅場モード突入！　……なーんてな」
それに答える者はいない。
「ふう……こんな子供にまで……無理させちゃたよ

な……」
　楓の寝顔を見つめ、一人苦笑する。
（まだ中学生位……だよな？　……本当はまだ誰かに甘えたい年頃なのにな）
　和樹もまた、心の何処かで楓を頼っていた自分を恥じた。何も考えず、ただ闇雲に詠美を連れまわして。そして、楓が陰で傷ついていたことにも気がつかなかった。
（知らず知らずに……俺も、この二人を追い詰めてたんだな……）
「頑張って……島から生きて帰ろうな……」
　誰にでもなくそう自然と出る言葉。楓は結局何も話してはくれなかった、それでも――
（たとえ詠美が……他の誰もが信じなくても……俺は楓ちゃんを信じよう――）
　心にそう誓った。
　もうすぐ太陽がまた沈み、夜がやってくる――

324　第五回定時放送

「二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー。

四番　天沢未夜子
十五番　杜若きよみ
二十七番　川澄舞
三十五番　倉田佐祐理
五十一番　住井護
六十五番　長森瑞佳
七十番　芳賀玲子
七十一番　長谷部彩
八十番　牧村南
九十三番　巳間良祐
九十六番　深山雪見

以上十一人、残り五十一人だ。

ようやく半分になったなぁ、おい。
それと、不用意にこのゲームを妨害しようとした奴がいるから、俺が殺しておいた。お前達の腹に入れた爆弾は冗談じゃないことが、よくわかったな？あまり調子に乗った行動を取らないように、以上だ」

325　二人の選ぶ道（前編）

その放送は、その場にいた四人中、三人を凍りつかせるのには充分すぎた。少しの間を置いて祐一は無言で立ち上がり、玄関の方へ歩いて行く。
「……どこへ行くのよ、祐一」
祐一の方を見ないで、繭は言った。
その声にも、祐一は止まらない。ただ静かに、玄関のドアを開けようとする。
「祐一!!」
今度は叫ぶ。その声にようやく、祐一は動きを止めた。
「……何か言いなさいよ」
繭が言う。
掠れた声で、震える声で。
それは何も言おうとしない祐一に対する怒りか。
残酷な放送に対する悲しみか。
その両方か、他の何かか。
この場にいる人間にも、繭自身にも、わからなかった。
「早く、茜を探す。茜に死なれて、たまるものか……。忘れていた。呑気にしてる時間は、俺にはなかったんだ」
「さっきの放送で、誰か知り合いがいたの？」
幾分か落ち着いた様子で繭は問いかけた。
「……」
「先輩が二人いたんだよ」
答えない祐一のかわりに、北川が呟く。
「な？」

座ったまま、窓の外を覗いたまま。
不自然なくらい静かだった。まるで装っているかのような。その様子が繭には気がかりだったが、気にしてる状況ではない。
「そう。でも、今はやめなさい？　まだ太陽が出てるからいいけど、近いうちに夜になる。夜動くのは、得策じゃない。折角ここには信頼できる人がいるんだから、夜明けまで休みましょう？　いい加減疲れてるでしょう？」
極めて冷静に、繭は言った。
正しかった。僅かな休息をとったとはいえ、この状況下ではまだ足りない。回復を待つことは重要だ。それに夜も良くない。理解の及ばぬ速さで、人が次々と死んでいるこの島。ゲームに乗っている人間は確実にいると思った。真琴、名雪、自分の身に降りかかった悪意のある偶然に誤解。そんなものだけでは、この死人の数は説明できない。意志を持った殺人者は必ずいる。そんな危険な人間の存在を考えると、夜は危ない。夜闇に紛れることは、気付かれる可能性を下げると同時に、気付く可能性も下げてしまう。可能性には自分の命が懸かっている。繭の言うことは確かに正論だった。
「だからどうしたっ！」
今にも跳びかかりそうな勢いで、祐一は叫ぶ。
「こうしている間にも、どんどん人が死んでいるかもしれないんだ！　次に名前を呼ばれるのは茜かもしれないんだ！　そんなことになる前に、俺は会いたいんだ！　会わなきゃいけないんだ！　お前にわかるかっ!?」
そうだった。何よりも惜しいのは時間だったのだ。いかに早く茜と会えるかが問題なのだ。繭の言うことは正しい。夜は危険だ。だからといって昼が安全だというわけでもないのだ。昼は周りの様子を察しやすいかもしれないが、それは殺人鬼にしたって同じこと。気付く可能性も上がるが、気付かれる可能性もまた同じ。危険なことに変わりはない。体力が

何だ、気力が何だ。そんなものは根性でどうとでもなるものだ。速やかに目的を達成するために、この程度の範囲で手段なんか選んでいられない。こいつは頭の回る小娘のくせに、そんなこともわからないのか。
「わかるわよ……私にもわかるわよ、そんなことっ！　私だって、あなたと同じなんだから！」
それが、心の堰が外れる、瞬間だった。
祐一も、藺も、どうしようもなく子供だった。

「さっきの放送に入ってた。瑞佳さん。私のお姉さんのような存在だった！　出来の悪い私にかまってくれて、いつだって優しくて。皆の人気者で。真琴さんとは全然違うお姉さんだけど、私は瑞佳さんが大好きだったんだ！」
涙が流れる。止まらない。その雫を拭おうともしないで藺は続ける。
「会いたかったのに……会いたかったのにぃ……瑞佳さぁん……」
「藺……」
「でも、でもね……」
嗚咽混じりに続ける。
「浩平さんは……七瀬さんは生きている。私はあの人達を信じてる。あの人達は、そう簡単に死んだりしない。死なれてたまるものですか」
その言葉で、自分を納得させるように。
「私が死んだら、あの人達も悲しむ……きっと悲しむ。だから、私も無事でいなくちゃいけないんだ。無事に、会わなければいけない……あなたも……そうでしょう？」
藺は祐一を見上げた。その目で、きっと睨んだ。
その視線に負けそうになる。自分はひょっとして、残酷なことを言ってしまったんじゃないか。この娘だって、きっと早く、自分の知らない誰かに会いたいんだ。だけど頭のいい彼女は自身の判断で留まることを選んだ。相手を信じて、自分の

安全を取った。
時間が惜しいのは彼女だって同じだったのに。
そんな彼女に何を言った。選択肢すらない自分の身勝手な理屈をつきつけて、相手が悩んでいることなんて考えもしないで。その上、猪突猛進な俺の心配までさせて。
子供で、大人で。
だけど、
「それでも、俺は――」
「こんなに冷静に考えたくないよ……。こんな理屈に縛られたくないよ……。こんな『アタマのよさ』なんて、もういらないよぉ……」
祐一は、もう、言葉を続けることはできなかった。
――それでも、俺はここを出る――
そんな言葉を。
ここを出る。
だけど、この子の前でそれはやめよう。眠っている間に出て行こう。やってることは同じだけど、悲しませるのは同じだけど、この泣き顔の前で、それはできないから。
残酷で臆病な自分を自覚しながら、祐一はその場に静かに腰を下ろした。

326　二人の選ぶ道（幕間）

やがて、日は沈み、夜になった。
「じゃあ、電気はつけないこと。ここにいること、誰にも悟られないように。寝静まった所に爆弾でも投げ込まれたらおしまいだからね」

涙枯れるまで泣き尽くし、既に落ち着きを取り戻した繭の指示が飛ぶ。先程までのやりとりなど、まるでなかったかのような。
「見張りを交代で二人ずつ立てましょう。交代で寝て、休みをとる。いいわね」
繭、北川、祐一、レミィという順番に、八時から二時間で一人ずつ交代していく。
やがて室内の時計が八時を指す。繭と北川を残し、祐一とレミィは眠りについた。

＊

何事もなく八時からの見張りを終える。
「じゃあ、お先に休ませて貰うわよ」
「おう。お疲れ」
「ほら起きなさい」
祐一の頭を軽く蹴り飛ばす。
「……ん、時間か」
「そ。後は任せたわよ」
「……おう」
「あ、それとさ」
床に寝転がりながら、北川を見る。
「何を考えてるのか知らないけど、割り切っていかないと、この先辛いわよ。おやすみ」
それきり目を閉じ、何も言わない。
「ふう。なんか見透かされてるな、俺」
溜息を一つ。
「何か、あったのか？」
「ちょっと、もずくがな……」
「いや、言いたくないんだったらいいさ」
「あっさり流すな」
祐一の反応に少しだけ不満を抱く。
そのまましばらく、無言。
静寂を破ったのは北川だった。
「従兄弟が死んだんだ。住井護、さっきの放送に入ってた」

「何だって？」
「昔からいろいろ悪さしてた。あいつは要領がよかったし、悪戯心満載で。俺もかなり影響を受けたと思うよ。今の俺がいるのは、あいつのおかげだと言ってもいい」
何を言うべきか迷う。思い返せばあの放送の時から少しだけ様子はおかしかった。川澄舞と倉田佐祐理。原因はこの二人だけではなかった。同じ学校の生徒、そんなのよりもずっと近く、ずっと親しかっただろう人が死んでいたのだ。
「はた迷惑な奴だったんだな」
結局雰囲気にそぐわないツッコミを入れる。北川はそれを綺麗に無視して続けた。
「そのあいつが、まさかこんな所で死ぬとはな」
「……」
「相沢。お前これからどうするんだ？」
「茜を探して、その後は知らない」
先のことはわからなかった。祐一にとって今大事なことは、何よりもまず、会うこと。
「お前の女か？」
「馬鹿言うな」
「そうか……俺達、どうなるのかね」
「さぁ、な……」
少年達の思いを置き去りにするように、夜はただ、更けていく。

327　二人の選ぶ道（後編）

「じゃ、お先にな」
祐一にそれだけ言って、北川はさっさと寝てしまい、暗闇の中、祐一は一人取り残された。
窓の外はあんなにも星が綺麗で、地上にいる自分達を照らしてくれる。いっそのこととこれから歩む道も照らして欲しかった。何も見えないから、がむしゃらに、ただ自分の信じたことをするしかなかった。

例えその先に、何があっても。

部屋の隅にある自分の鞄に手をかける。

中には、僅かな食料と水、カスタムエアーウォーターガン、予備タンク。幸運なことに、この武器を使ったことは、まだない。

ただ一度、名雪を威嚇するのに、口を向けただけ。

――名雪――

名雪はどうしているだろうか？

軽率だった。名雪だって、自分を守ろうとしての行動だったのだ。それはわかっていた。お前は悪くないと、声をかけてやるべきだった。

悔やんでも、取り返しはつかない。。

頭を振り、鞄を持ち上げた。

最後に繭を見る。

結局、この小さな女の子すら裏切ることになってしまった。こうやって多くの人を傷つけて、見捨てて、裏切って。後何人、自分はそうやって通り過ぎていくのだろうか。足を止めて、手を差し伸べて、そうできたらどれだけいいだろうか。

それでも――

（悪いな、繭）

玄関に向かって歩き、

「どこ行くつもり？」

声を聞いた。

「なんだ繭、起きてたのか」

「どこ行くつもり？」

「こんな時間に起きたりして、子供は早く寝ろ」

「どこ行くつもり？」

「肌が荒れるぞ？」

「どこ行くつもり？」

祐一の言葉をひたすら無視し、繭はただそれだけ繰り返す。バツが悪そうに頭をかく祐一に、軽い侮蔑の視線を送りながら。

「これだから……男ってやることが卑怯よ」
ガキが何を言うかと言いたくなるのを堪え、ただ、
「悪い」
と謝った。
「悪いと思うんだったら、最初からやるんじゃない」
「悪い。本当に、ごめん……」
頭を下げた。
「はいはい、わかったから。子供じゃないんだから、そんなことで泣かないでよ」
「……あれ？」
慌てて顔に手を当てる。そういえば、微かに目の前が滲んでいたような。
「嘘よ」
気のせいだった。

「で、やっぱり出て行くんだ」
「そうする。誰が何と言おうと、もう決めたから」
「……ねぇ」
そこで一旦言葉を切り、僅かに迷いながら続けた。
「どうして、かな？」
「茜を助けたいから」
即答だった。
「さっきお前の言ったこともわかるけど。だけどやっぱり、俺にはベストだとは思えない。ここに留まった時間だけ茜に会うのが遅れて、もしその時間で茜に何かあったら、俺はどうすればいい。今まで何度も後悔してきたけど、茜が好きで大切だから、それを失うような真似だけはしたくない。だから行くよ。自分が正しいと信じて、行くしかないんだ」
どれだけ先が暗くても、
どれだけ道に迷っても、
その先に光があることを信じて。

「わかったわよ。まったくもう……熱血なんだから」
諦めの視線を送り、そのまま部屋の隅へ。
キノコが入った自分の鞄を、肩に背負った。
「繭？」
「行くなら行きましょ。見張りは一人ずつの交代制でも充分でしょ」
軽口を叩く。
「お前、何で――」
「感化された。それだけ」
祐一の言葉を遮り、言い放つ。
その言葉には、何の他意もなく。
「いいのか？」
「いいんじゃない？」
思わず苦笑する。感化してしまったらしい。これでこの子を危険に巻き込んでしまったことになる。
傷つけて、見捨てて、裏切って、
それでもせめて、自分の手の届くところにいるうちは、守り通してやろうじゃないか。
もう何も言わず、祐一は玄関のノブを回す。
本当は起きていて、今の会話を聞いていたに違いない男に、挨拶を。
「じゃあ北川、悪いけど、行ってくる」
「おう」
「死ぬなよ。また、絶対に会うからな」

「行ったな」
「ジュン、行かせてよかったの？」
「どうせ行くだろうと思ってたしな。朝になったら俺も動くよ。このCDを集めてみようかと思う。
『2』ということは、何かあるはずだ。今の俺には、それしか出来ない」
「そう。応援するヨ！」
「あれ、一緒に来ないの？」
「もちろん行くヨ！　上手くいったらいいネ！」

「そうだな――」

暗くて遠くて長い道。
一人では辛い道でも、
二人でいれば心強い。
どれだけ先が暗くても、
どれだけ道に迷っても、
その先に光があることを信じて、
今は、ひたすらに未来を信じて、
二人は、夜の道路を駆け抜ける。

《葉鍵ロワイアル　第二巻　了》

端書

なんとか、第二巻の発行にこぎつけました。
今回の作業を通じて手順などもそろそろ固まりつつあり、後はいかに効率よく事を進めていくかという部分と、何処までクオリティー向上に時間をかけるのかという部分の、ある種のアンヴィヴァレンツとの戦いです。
まだまだ長丁場も序の口といったところですから、先述のことも色々と考えつつ、今後に向けて頑張っていきたいと思います。ご支援ご協力、宜しくお願いします。

それにしても、葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）が、こうして同人誌による単行本化が実際になされているというのはやはり随分と感慨深いことです。
私自身の本編執筆量は確かに全体の僅か数パーセントです。しかし、最初期からの参加ですし、本編に収録された内容に倍する没やアナザーも執筆しました。またそれ以外にも、ハカロワというリレー小説を盛り上げるべく、陰に陽にと働きかけてきた、という自負もありますし、ましてや、それらを現在、自らの手で編集しているわけで……。
ハカロワという存在は私の中で、随分と大きなものになったと言えるでしょう。
それにしても、ハカロワ最初期のあの加速度的な投稿スピードといったらありませんでした。

当時の書き手の多くが経験したであろう、『登場人物が被るシーンを先に挙げられてしまった為に泣く泣く没にした』ものも数多くあり、それらの出来事も思い入れに強い影響があると思います。
次こそはと勇んで書くが、下手なものは見せたくない。その為に練り込みの時間をとりたいが、そうすると先を越されて望んだ展開を書けなくなるかもしれない……。
初期の辺りは特に、多くの人がそんなせっぱ詰まった状態で書いていたはずです。
或いは、アイディアだけはあるのに外せない用事（例えば仕事）があるので、どうしても今書けない、などという状況で歯噛みした書き手も多かったでしょう。かくいう私もそうでしたし。
しかしそれもハカロワという、掲示板上で行われたリレー小説の醍醐味の一つでした。
中盤にもなると、ある程度はペースも落ちついてきて、ある程度じっくりと書く余裕が生まれ、長文の傾向が出始めますが、しかしインスピレーション命の書き込みもあるので油断は出来ません。
登場人物達が殺るか殺られるか、という状況であったように、書き手側は書くか書かれるか、という状況は終局まで変わりませんでした。
そんな、リレー小説というナマモノを扱う上で様々な困難もありましたが、その多くは既に思い出の中に消えていきました。
その中でも特に一つ。忘れえぬ事件があります。
葉鍵板の消滅がそれです。
結果としては一時的かつ短期間なものになりましたが、『2ちゃんねる、ひいては葉鍵板の消滅』という事件は当時、大きな衝撃でした。

物語も終盤を迎えつつあったあの時期、当面はずっとそこにあるのだと思っていたコミュニティーが消滅しようとするその現実に、例えようも無い喪失感があったものです。

『場』が消滅してしまったあとも、住人同士なんとか連絡を取り合い、善意の協力者（本当に助かりました）によって用意された避難所で連載は続き、やがて復活した葉鍵板（当時復旧に尽力された方々にこの場を借りて感謝します）に舞台を戻し、ついにハカロワは完結しました。

軽い冗談のような書きこみから始まったハカロワも、いざ終ってみれば八百話以上という大長編で、当時のネット上ではそれなりに騒がれたものです。

かくして一つの祭りが終わったわけですが、実はその完結した頃から、私や一部の友人の間で、この物語を同人誌で単行本化出来ないだろうか、という話はありました。

『自分達が作り上げた物語をしっかりとした形で手元において置きたい』という想い。

或いは、一巻で瀬戸が語ったのと同じく、『媒体をアナログに移すことでより多くの共感者を得られないか』という願い。

そして、『このハカロワという輪が何処まで広がっていけるものなのか』という興味……。

しかしながら、予想される困難を前に同人誌化は成されず。なったらいいのになぁという願望を抱えたまま、計画立案という砂上の楼閣を作っては崩し、作っては崩しを繰返しつつ、時は流れていきました。

そんなある日、『ハカロワを懐かしむスレ』に現ハカロワ出版企画責任者である瀬戸による、「全責任とあらゆるリスクは俺が負うから、紙媒体化しようぜ！」との書きこみが。

ぽっと出の彼による企画ということに、友人の書き手たちも疑心暗鬼でした。が、こんな酔狂な申し出をする人間は、そういません。それにひきかえ、こちらは計画だけなら何度も立てていましたし、ノウハウもありました。これこそ渡りに船というものでしょう。

かくして、『氏が企画に全面参加するなら』という声に推される形で企画への参加を決意、今に至ります。

単行本化の作業は、確かなやり甲斐と共に（やはりというべきか）執筆当時とは異なる苦労が伴います。

そんな中でも、このハカロワ単行本化という企画を喜び、応援して下さる声を耳にする度に思うのです。

――頑張らなくっちゃな、と。

そんなこんなで、無事最終巻の発行が出来るその日まで、ハカロワ出版企画一堂全力で邁進する所存です。

重ね重ね、今後とも宜しくいただければ幸いです。

最後に。

本書を手にとって下さった方々に、そして全てのハカロワ関係者に、感謝を。

平成十五年　四月　某日

セルゲイ＠Ｄ

葉鍵ロワイアル　第二巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
この場を借りて、お礼を申し上げます。

◎制作者一覧
制作協力：
104、111、Alfo、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、
いつかの書き手、独活大樹、静かなる中条、真空パック、
駄っ文だ、ないしょ、名無し達の挽歌、
名無しさんだよもん＠誤植指摘、ナナツさんだよもん、
観月、 林檎、『 。』、名無しさんだよもん

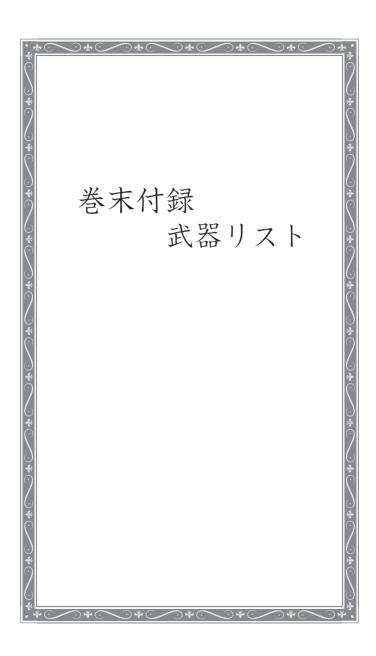
制作協賛：
５、Kyaz、MIU、NBC、感想スレＲの 142、葵原てぃー、
久々野　彰、シイ原、遥か昔の書き手、
七連装ビッグマグナム、暇人、日向葵、箕崎、祐一＆浩平、
名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、彗夜、
ダンディ、名無しcd、名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、
花と名無したん、ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、あり名無しさんだよもん、旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様
（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

葉鍵ロワイアル　（2）
二〇〇三年　　五月　五日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：みさき樹里
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

巻末付録
武器リスト

No.001 スペツナズナイフ　　柳川祐也
旧ソ連軍の使用していた発射式暗殺用ナイフ。鍔にあたる部分にあるスイッチを押すことで刀を前方に飛ばす事が出来る。

No.002 サバイバルナイフ　　里村茜
米空軍のパイロット用として使われているサバイバルナイフ。ブレードは反射防止のため黒く塗られ、革製のハンドルは濡れても滑らない。

No.003 バタフライナイフ　　住井護
可動式グリップが特徴的なナイフ。刃をしまえる機構を持つため、練習をすれば通常のナイフより安全性が高い。

No.004 投げナイフ　　神尾観鈴
投擲用に設計されたナイフ。飛ばしやすい反面、耐久力に劣る。

No.005 果物ナイフ　　立川郁美
果物の皮を剥くために用いるナイフ。殺傷能力は低い。

No.006 小太刀　　水瀬秋子
太刀と脇差の中間くらいの長さの刀。約61cm（２尺）。

No.007 短刀　　牧部なつみ
刃渡り30cmほどの短刀。その刃は錆び付いているため、殺傷力は低い。

No.008 日本刀　　巳間晴香
日本刀には大きく分けて「太刀」と「打刀」の二種類があるが、支給された物はすべて後者。敵を斬る際には、包丁を使うように引き切る動作が肝心。

No.009 日本刀　　河島はるか
武器としてだけでなく、工芸品、美術品としての価値も高い逸品。

No.010 日本刀　　遠野美凪
一見何の変哲も無い刀だが、その刃には猛毒が塗られている。かすり傷でも致命傷になるので注意！

No.011 手斧 & ぷち主　　天沢未夜子
片手で持ち運び出来る小振りの斧。主に木を切り倒したりするのに使われるが、人の頭蓋骨を叩き割ることも可能。日常に疲れた心を癒してくれるかわいいペット付き！

No.012 鉈　　姫川琴音
まき割り、枝打ち、くいを削るなどに用いられる刃物。

No.013 包丁　　砧夕霧
一般的な家庭で使われている洋包丁。炊事に欠かせない道具。

No.014 出刃包丁　　江藤結花
分厚い刃を持つ和包丁。その重さを利用して魚や鳥を骨ごと叩き切ったり、捌いたりするのに使う。

No.015 折畳式の槍　　鹿沼葉子
折り畳んでコンパクトに収納出来る槍。かさばりません。訓練すれば、高度一万米上空の爆撃機をも迎撃できるかも？

No.016 鉄の爪　柏木千鶴
手にはめて使う鋼鉄の爪。爪部分は指の動きに連動して可動する。これを付けたままで顔を掻かないように注意！

No.017 Colt M1911 A1　宮田健太郎
一般的にはコルトガバメントという呼ばれ方の方が有名。一九一一年に米軍に正式採用され米国政府が認証した、という意味でガバメント（Goverment＝政府）と呼ばれる。
口径：.45ACP　装填数：7+1

No.18 S&W M19(2.5" barrel)　雛山理緒
.357マグナム弾と共にデビューした通称コンバットマグナム。使い勝手が良く米警察機構で多用された。次元大介愛用の拳銃として有名。
口径：.357Mag　装填数：6

No.019 Desart Eagle .357 Magnum　倉田佐祐理
イスラエル製の大型拳銃。.357マグナム弾使用の初期型。
口径：.357Mag　装填数：9+1

No.020 Desert Eagle .44 Magnum　国崎往人
.44マグナム弾を使用。.357バージョンであったカートリッジのパワー不足が解消されている。安定した威力と性能を誇る。
口径：.44Mag　装填数：8+1

No.021 Desart Eagle 50AE　松原葵
拳銃弾では最大級の口径と威力を誇る50口径弾“.50 Action Express”を使用。その威力から、別名ハンドキャノンとも呼ばれる。本来は熊などの狩猟用を目的とした銃だけに射撃時の反動は凄まじい。
口径：.50AE　装填数：7+1

No.022 H&K Mk23　岩切花枝
別名ソーコム・ピストル。室内での拳銃の有効性を鑑みて開発された特殊部隊用の拳銃。オプション装備が豊富。
口径：.45ACP　装弾数：12+1

No.023 Beretta M92F　名倉友里
現代軍用拳銃の傑作のひとつ。15発と装弾数が多い。1911A1の後継として米陸軍にも採用された（採用名M9）。
口径：9mm×19　装填数：15+1

No.024 Walther P38　巳間良祐
第二次世界大戦期にドイツで開発された。安価且つ信頼性の高い名銃の一つ。日本ではルパンⅢ世の愛用銃として特に有名。
口径：9mm×19　装填数：8+1

No.025 Tokarev TT-33　猪名川由宇
ソビエト陸軍が採用していた拳銃。貫通力が高いが、人体への破壊力は低い。安全装置が全くついていないため、引き鉄を引くと弾が出る。
口径：7.62mm×25　装填数：8+1

No.026 SIG Sauer P230　神尾晴子
軍用拳銃では大きすぎるが、警察用拳銃では威力が足りない、そんな要求に応じて開発された拳銃。日本のＳＰに正式採用されている。
口径：9mm×17　装填数：7+1

No.027 CZE Cz75 (First Model)　折原浩平
人間工学を考慮したグリップは、まるで手に吸い付くようと評される。後期型と違い採算度外視で作られた芸術品。ラリー愛用の銃。
口径：9mm×19　装填数：15+1

No.028 S&W M29　月島拓也
通称『44マグナム』。映画「ダーティハリー」において主人公キャラハンが使ったことで一躍有名になったリボルバー銃。
口径：.44Mag　装填数：6

No.029 Hi-Standard Derringer　天野美汐
ハンドバッグなどに忍ばせたりする拳銃として有名。小口径だが、マグナム弾を使用する。トリガーが重い上に２発しか装填できずないため撃ち合いには向かない。メリルの愛銃。
口径：.22mag　装填数：2

No.030 富和工業 64式小銃　保科智子
日本国産の自動小銃。他国の銃と比べて数倍の値段がする高級品。命中精度は高いが、部品点数が多く整備面に弱点を抱えている。
口径：7.62mm×51　装填数：20+1

No.031 Colt M635　深山雪見
米軍正式突撃銃M16の発展型。使いやすいものの重量がかさむのが難点。
口径：9mm×19　装填数：32+1

No.032 H&K SMG II (MP2000)　藍原瑞穂
サブマシンガンの代名詞とも言えるMP5の改良試作型。マシンガンとサブマシンガンの違いは弾薬で、前者は専用の弾、後者は拳銃弾を使用。
口径：9mm×19　装填数：30+1

No.033 Ingram M10　千堂和樹
コンパクトなサブマシンガン。弾をばら撒いて敵を制圧するタイプの銃なので命中精度は悪い。射速が早く約２秒で弾薬を打ち尽くす。
口径：.38ACP　装填数：30+1

No.034 Remington M31　緒方英二
ポンプアクション式の散弾銃。小さな球弾を大量にばらまくので近距離ならかなり有利。
口径：12Ga　装填数：4+1

No.035 Benelli M3 S90　氷上シュン
ポンプアクションとオートマチックを切り変えることができる散弾銃。特殊部隊でよく使用されている。
口径：12Ga　装填数：7+1

No.036 Remington M870（ハンティングセット）　篠塚弥生
M31の後継として開発された、レミントン社の代表的なポンプアクション式散弾銃。それと、ハンティング帽と熊用の罠のセット。
口径：12Ga　装填数：4

No.037 ウォーターガン　宮内レミィ
子供のころ遊んだ水鉄砲の進化した物。空気圧で中の水を打ち出す。

No.038 硫酸入りウォーターガン　　相沢祐一
H_2Oの代わりにH_2SO_4が注入されている水鉄砲。おもちゃと思って油断してると火傷するので注意。

No.039 エアガン（FN Hi-Power）　　大庭詠美
銃を模した模型。トリガーを引くとＢＢ弾が発射される。当ると痛いが、もちろん殺傷力は皆無。元銃は銃器設計の天才と言われたブローニング最後の作品。ブローニング・ハイパワーの通り名の方が有名。

No.040 ショートボウガン　　石原麗子
引き鉄を引くことにより矢が発射される機械弓。通常の弓より簡単に打つことができるものの装填に時間がかかる。

No.041 オートボウガン　　藤田浩之
大型のボウガン。威力は増強されているが、その分扱い辛い。

No.042 ニードルガン　　森川由綺
無数の細長い針を打ち出す武器。射程は短いが殺傷能力は高い。

No.043 手裏剣　　牧村南
日本の忍者が使ったと言われる菱形手裏剣。刃の部分に遅効性の毒が塗ってある。使いこなすには熟練が必要。

No.044 火炎放射器　　御影すばる
可燃性の液体を圧縮空気にてスプレーすると同時に点火装置で着火して火炎を放射する装置。射程は短いが、制圧力は高い。

No.045 Ｃ４プラスティック爆弾　　セリオ
映画などでおなじみの高威力爆弾。マッチ箱ひとつ分でレストランを消し去ることが出来る。ガムじゃないので注意！

No.046 クマのぬいぐるみ　　神岸あかり
一見愛らしいぬいぐるみだが、その正体は小型爆弾。小さな建物なら吹き飛ばせるほどの爆発力をもつ。

No.047 小型爆導索 & 照準用レーザーポインタ　　来栖川綾香
鎖の先端に数珠繋ぎに小型の爆雷をつけた武器。敵を絡めとって爆薬を作動させれば、跡形も残らないであろう。

No.048 ダイナマイト腹巻　　名倉由依
ダイナマイトが大量に付いた腹巻。出入りや鉄砲玉のときのファッションはこれでウッボー（キマリ）。芸術は爆発だ！

No.049 手榴弾　　長岡志保
言わずと知れたパイナップル。安全ピンを抜き投擲する。

No.050 CD1/4　　塚本千紗
見るからに怪しいCDその１。ラベルには、1/4とだけ書かれている。

No.051 CD2/4 with PC and Chopsticks　　澤倉美咲
林檎のマークが有名な某社のノートパソコンに箸とＣＤまでついたお得なセット。本来の用法の他に、鈍器やまな板としても使えます。

No.052 CD3/4　柚木詩子
見るからに怪しいCDその３。

No.053 CD4/4 with 拡声器　杜若きよみ
見るからに怪しいCDその４。そして、片手で持ち運びが出来る、声を大きくする器械。

No.054 CD　新城沙織
見るからに怪しいCDその５。番号が振られていない。

No.055 スタンガン　広瀬真希
高圧電流を相手の体内に流し込み、手足の麻痺や弊症感覚喪失などを引き起こす武器。

No.056 伸縮式特殊警棒　藤井冬弥
世界中の警察官が装備している殴打武器。持ち運びの容易さの割に威力は大きい。

No.057 釘バット　芳賀玲子
バットに大量の釘を打ち込んだもの。

No.058 メリケンサック　美坂香里
指に嵌めて使う金属製の武器。

No.059 レーザーポインタ　観月マナ
玩具店などで売っている子供向けのおもちゃ。

No.060 鋭利なＧペン　長谷部彩
細い線から太い線まで引けるため漫画の主線を入れるのに多用される。このペン先は通常より鋭利にできているため人に投げるととても危険。

No.061 鉤爪ロープ　霧島聖
先端に三叉の鉤爪がくくられたロープ。急勾配を移動するのに便利。

No.062 レジャー・セット　来栖川芹香
アウトドアライフを満喫するための用品が満載。虫避けスプレー、消毒液、包帯、ジッポ。そして、痛みを感じなくなる薬まで。

No.063 ピアノ線　長瀬祐介
強強度ワイアーの総称。現在のピアノ線は最新技術によって恐ろしいほどの強度を獲得している。

No.064 パチンコ　沢渡真琴
ゴムの力を利用して小石などを前方に飛ばす原始的な武器。

No.065 フェイス・タオル　杜若きよみ（複製身）
手を拭いたり、人の首を締めたりとさまざまな用途に使用可能。

No.066 民明書房　柏木楓
中国古代の拳法のみならず、医学、歴史、民俗学、法学などありとあらゆる分野の解説書。

No.067 ハリセン　柏木初音
関西芸人の魂を食らってきた伝説の武器。ボール紙を段々に折り畳ん

だ構造をしており、叩くと気持ちの良い音がする。

No.068 防弾ファミレス制服　柏木梓
某ファミレスの制服に防弾処理を施したもの。メイドタイプ・スクールタイプ・アイドルタイプと三種類、お好きなものをどうぞ。

No.069 男用ブルマ　柏木耕一
穿きたいけど穿けない、そんな貴方に贈ります。大事な部分も鉄板で防護されている安心の設計。女性の方にもお使いいただけます。

No.070 防空頭巾　川澄舞
ガラス破片から身を守る布。しかしそれ自体に耐久性はないため、銃器や鈍器には全く効果が無い。

No.071 赤旗　太田香奈子
日本共産党の出版する新聞……ではなく、ただの赤い旗。

No.072 携帯カラオケ　月宮あゆ
ハンディマイクとスピーカーが一体化されているので野外などでも使う事が出来る。流行りのアニソンも入ってお買い得。

No.073 ハンディマイク　緒方理奈
少し前に流行ったマイク状のハンディカラオケ。

No.074 猫耳のヘアバンド　霧島佳乃
かわいらしい猫型の耳が付けられたヘアバンド。DEF=2。

No.075 木刀　桑嶋高子
練習用の模擬刀。十分な長さと重さがあるので鈍器として使用できる。

No.076 木の枝　上月澪
そこらへんに落ちているごく普通の木の枝。叩けばそれなりに痛い。

No.077 花火 & バルサン　椎名繭
日本の夏の風物詩である花火と害虫駆除剤のセット。くれぐれもいたずらに使用しないように！

No.078 札束　川名みさき
相手を買収するも良し。株成金の如く燃やして明かりにするのも良し。

No.079 金盥　七瀬留美
洗面や洗濯の時に使う平たくて丸い容器。上空から相手の頭上に落としたりして使用します。緊急時には頭に被ったり盾変わりに使うと効果的です。

No.080 ハンカチ　桜井あさひ
純白のハンカチ。降伏の意思を伝えることができる優れもの。

No.081 フォーク　七瀬彰
ただのフォーク。西洋料理全般で使用される食器。

No.082 もずく　北川潤
褐藻類モズク科。血液浄化、抗癌性などが指摘されており、注目を集めている。ノンカロリー。

No.083 目覚し時計　　美坂栞
目覚まし時計とは世を忍ぶ仮の姿。目覚ましの針を６時にセットし作動させせると大爆発！　油断大敵だネ！

No.084 白蛇（ぽち）　　みちる
突然変異種。古代より大陸などでは神聖な動物として崇められてきたという、ありがたいヘビだ。

No.084 猫（ぴろ）　　御堂
ふとしたきっかけから水瀬家に居候している猫。

No.085 犬（ぽてと）　　高倉みどり
白い毛むくじゃら。犬であると思われるが、その外見は我々の知る犬の常識を超えている。

No.086 鴉（そら）　　橘敬介
漆黒の鴉。鳥なのに空を飛ぶことが出来ないでいる。

No.088 (･∀･)ｲｲ! お面　　三井寺月代
(･∀･)ｲｲ! と象られたお面。不思議な力が宿っており、一度付けると外すことは出来ない。ショックを加えると何かが起こる。

No.089 魔術書　　スフィー
「朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み、非常の措置を以て時局を収拾せむと欲し、茲に忠良なる爾臣民に告ぐ――」

No.090 トぶくすり　　佐藤雅史
様々な麻薬を独自の製法でブレンドした特別品。トべます。

No.091 ノートパソコン　　坂神蝉丸
アメリカのビルさんの会社製のＯＳが入っているノートパソコン。

No.092 ダーツ　　高瀬瑞希
ダーツと的のセット。的の真ん中にある50点が最高点だと思われがちだが、内側にある輪の部分は点数が３倍になるので20に当てれば60点になる。

No.093 桜井あさひトレーディングカード全108種　　リアン
ファン垂涎のトレーディングカードコンプリート。通常では手に入らない特典カードも付いてる、マニアには垂涎の一品。

No.094 人物探知機　　水瀬名雪
携帯電話型の探知機。参加者に対応した番号が表示される。

No.95 コックリさんセット　　マルチ
東洋の魔術、神秘を記した小冊子に紙と鉛筆がついた入門セット。10円玉ひとつあれば、すぐにコックリさんを楽しむことができる。

No.096 毒入り瓶　　月島瑠璃子
毒が入った瓶ビン。ほんの数滴体内に入っただけでも人を死に至らしめる事が出来る猛毒。

No.097 セイカクハンテンダケ　　天沢郁未
食べた者の性格がまるっきり逆転してしまう、おそろしいキノコ。毒々

しい色をしている。

No.098 偽典　少年
「――かつて悩めた人よ、かつて憂いた人よ。我らは常しえにあなたのことを敬い続ける。我らはけして涙を零すことなく。我らはけして笑みを絶やすことなく。ただあなたの生きた証を辿り続けるだろう」

No.099 先行者　九品仏大志
中華人民共和国がその国力と技術の粋を集めて開発した未知なる超兵器。その股間部には中華キャノンと呼ばれる超兵器が装備されている。

No.100 アイテムリスト　長森瑞佳
今あなたがご覧になっているモノ。それが、このアイテムリスト。使い方によっては銃にも匹敵する武器。

支給されていない登場武器たち

志保ちゃんレーダー　長岡志保の個人所有品
某カプセルコーポレーション社製の探知機のような代物。周囲にいる参加者が番号で表示される。何故彼女がこのような物を持っていたのかは不明。

医療セット　霧島聖の個人所有品
医者である聖が個人的に所持していた物。救命用品に加え、多数のメスが含まれる。

毒短刀　岩切花枝の個人所有品
細身の短刀の刃に毒を仕込んだ物。

コンバットナイフ　公民館から藤田浩之が奪取
米陸軍に採用されている軍用ナイフ。グリップから、刃まで反射防止のために漆黒に塗られている。

コンバットナイフ　管理者から深山雪見が奪取
浩之が奪取したものと同じ物。このナイフは、戦闘用としてだけでなく、サバイバル用品としても極めて優秀。

電動釘打ち機　藤田浩之が資材置き場にて回収
本来は五寸釘を木材などに打ちつける道具だが、強い勢いで打ち出すことも機構から、目標に向けて釘を飛ばすといった使い方もできる。

Ingram　M11　公民館から藤田浩之が奪取
イングラムM10の改良型。小型化し連射速度が上がったが扱いづらい。
口径：.38ACP　装弾数：32+1

Glock26　公民館から藤田浩之が奪取
グロックシリーズ最小の小型拳銃。隠匿性が高く警察に人気がある。
口径：9mm×19　装弾数：9+1

New Nanbu M60(2" barrel)　マルチが公民館で手に入れた銃
日本の警察向けに開発されたおなじみの拳銃。
口径：.38spl　装填数：5

S&W M586　保科智子が公民館で手に入れた銃
傑作コルト・パイソンに対抗して作られた。射撃時の安定性に優れる。
口径：.357Mag　装弾数：6

Beretta M92FS　巳間晴香が公民館で手に入れた銃
M92Fで強装弾（通常より火薬量が多い弾丸）を使用した際に、スライドが破損して射手にあたる事件が起こった。スライドが飛び出さないようにハンマーピンを大型化した、現行M92のスタンダードモデル。
口径：9mm×19　装填数：15+1

Mauser Kar98k　姫川琴音が黒コートの男から渡された小銃
第二次世界大戦時のドイツ軍にて使われた小銃。優れた性能と高い生産性を誇る名銃。
口径：7.92mm　装填数：5

小説型鈍器　七瀬彰が民家の書架にて発見
彰が毛嫌いする作者の小説（新書版）。人を撲殺できるほど分厚い。

ジッポオイル入り水風船 & ドラゴン花火　深山雪見作成
水風船にジッポオイルを入れたもので、目標をオイルまみれにした後、花火でもって着火する。

ジッポライター　七瀬彰が洗面所の裏で発見
100円ライターとは違い、油（オイル）を入れて使用する。最大の特徴は、蓋を開けるときの独特の金属音としぐさの格好良さである。

New Nanbu M60(3" barrel)　高槻
ニューナンブの初期モデルには、一般用の３インチモデルと幹部用の２インチモデルがあった。後にすべて２インチモデルに統一された。これは、初期の３インチモデル。
口径：.38spl　装填数：5

Beretta M92G　高槻
M92FSのプロフェッショナル・モデルと呼ばれる。その特徴はセイフティレバーにあり、これを下げるとハンマーがデコッキングされ、元の位置に戻る。つまり手動セイフティをして機能しない機構を持つ。
口径：9mm×19　装填数：15+1

マスターモールド MC-1　高槻
多額の開発費と情熱が注がれた競技用ボウガン。

Steyr TMP　高槻
小型のサブマシンガン。フルオート射撃時の制動に難あり。TMPはTactical Machine Pistolの頭文字。
口径：9mm×19　装填数：30+1

Steyr AUG 9mm　高槻
奇抜な形からは想像出来ないほどの命中精度、汎用性を誇る突撃銃。
口径：9mm×19　装填数：30+1

FN M1935 High Power　施設の兵士から篠塚弥生が奪取
通称ブローニング・ハイパワー。英国軍制式拳銃。バランスがよい。
口径：9mm×19　装弾数：13+1

Glock17　施設の兵士から篠塚弥生が奪取
ポリマー素材を多用し軽くて頑丈な拳銃。丸みのあるシンプルな外見。
口径：9mm×19　装弾数：17+1

M60GPMG System23　HM-13所持
汎用機関銃M60の個人携帯用改造モデル。通称デスマシーン。
口径：7.62mm×51　装弾数：ベルト給弾

Makarov　HM-13所持
トカレフの後継モデル。パワーは下がったが小型化に成功した。
口径：9mm×18　装弾数：8+1

S&W M10　長瀬源五郎
通称ミリタリーポリス。軍・警察用に作られ大量に導入された。
口径：.38spl　装弾数：6

H&K G3A3　フランク長瀬
プラスチックを多用した突撃小銃。反動が少なく命中精度が高い。
口径：7.62mm×51　装弾数：20+1

Remington M700　フランク長瀬
ボルトアクション式の狙撃銃。1950年に初登場してから現在もなお第一線で使用され続けている。
口径：7.62mm×51　装填数：5

参考文献：
武器事典（市川定春/新紀元社）
武器屋（Trush in Fantasy編集部/新紀元社）
現代軍用ピストル図鑑（床井雅美/徳間文庫）
世界の一流道具大図鑑（東京書籍出版編集部/東京書籍）
図解雑学　機械のしくみ（大矢浩史/ナツメ社）

スペシャルサンクス：
104さん
（銃器詳細リスト『葉鍵ロワイアル銃器諸元早見表Ver.2.0』）

9784134193345

1923400155878

ISBN4-75813-812-7

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅱ

この写真の彼らは今を全力で生きていたのがよく分かる。
在りし日の……姿とでも言うのか。

孤島に集められたLeaf&Keyの作品の登場人物、100名。
彼らが強要されたゲーム、それは殺しあうこと——

現状を見せつけるだけの為に、突然の死を与えられた者。
いつもの場所に帰りつく為に、奪う側に回った者。
己の生き様を貫かんが為に、代償として命を失った者。
親しき者の死に復讐を誓い、死を振りまく者。

追う者。追われる者。探る者。嘲笑う者。
踏み躙る者。護る者。騙す者。信じる者。

それぞれの思いが舞台を巡り、物語を紡いでいく。
——殺し合いは、止まらない。